福井県文書館資料叢書17

福井藩士履歴 9

新番格以下2 ヲ～ヨ

1 「新番格以下」尾崎佐太郎　　松平文庫　福井県文書館保管

2 「新番格以下」大森藤吉（部分）　　松平文庫　福井県文書館保管

3 「新番格以下」脇谷（部分）　　松平文庫　福井県文書館保管

4 「新番格以下」小沢誠一（加藤春夫　部分）　　松平文庫　福井県文書館保管

凡　例

一、本巻は、福井県文書館資料叢書の第一七冊目であり、『福井藩士履歴』の第九冊目である。

一、本書の原本は、福井県文書館に保管されている「松平文庫」のなかの「新番格以下」「新番格以下増補雑輩」「雑輩之類剝札」である。「新番格以下」は一～七で構成されている。このうち本巻では、二と三の一部を翻刻した。

一、「新番格以下」に収載される藩士の家格は、卒に該当する。資料名は「新番格以下」となっているが、新番格（新番並）は士分に属するため本資料には含まれない。

一、本巻に掲載された藩士には既刊叢書と重複する人物もあるが、そのまま掲載した。

一、資料の利用に資するため、巻末に参考資料を付した。

一、編集にあたっては次のように取り扱った。

(1)各家は「新番格以下」の記載順とし、同姓が複数ある場合は、家名にアラビア数字を付した。なお、「新番格以下」に記載されている卒は士分と違い、家督相続という形での家の継承が行われず姓が変わることもあるため、厳密には個人として扱うべきだが、家として管理され書き継がれていたため、本書でも同様に取り扱っている。

(2)各家の名称は、原本の編集方針に沿って最後の人物の姓を採用した。

(3)原本の人名には貼紙・訂正・朱書などがあるが、次のように取り扱った。

・各家の最初に貼られているその家の最後の人名は省略した。

・最初に記載されている人名を見出しとして採用し、既刊の体裁に合わせて冒頭に配置した。ただし最初の人名のところに改名が記されている場合には、原則として改名後の名前を見出しの人名にした。

・改名は最初の人名に記されているもののみを、原則として古い順に並べて見出しの人名の下に記した。

・肩書など名前以外の記載については見出しの人名の下に記した。

(4)原本の巻末に記されている「書役」の名前は省略し、参考資料で紹介した。
(5)柱はそのページの最初の段落における家名を示した。

一、翻刻にあたっては、原本の体裁にそうよう努めたが、読みやすくするために、また検索の便宜を図るため、次のように取り扱った。

(1)使用字体は原則として常用漢字を用い、異体字は原則として正字に改めた。また変体仮名や合字は通常の仮名に改めたが、次に掲げるような仮名・俗字・慣用字句は残した。

躰（体）　斗（ばかり）　而已（のみ）　而（て）
江（え）　者（は）　与（と）　茂（も）

(2)全文にわたって読点をつけ、あわせて文意が通じないものには（マヽ）などの傍注を付した。また明らかな誤字・脱字は訂正したものもある。
(3)欠損・虫損等によって文字が判読できない場合には、□や□□で示した。
(4)原本の平出・闕字などはすべて省略した。
(5)追記・訂正など朱書はそのことを断らずに、適宜本文に反映した。

一、本書には、現在からみると基本的人権に関わる歴史的事象も含まれているが、地域の歴史的事実を正しく理解するために原文をそのまま翻刻することを原則とした。本書は人権尊重をめざし、史実にもとづく研究を進める立場から刊行するもので、この趣旨を理解し、利用していただきたい。

一、翻刻にあたっては田原健子氏（元福井県文書館運営懇話会委員）が筆耕した。校合・編集は当館職員が行った。

一、資料の所蔵者である越前松平家福井事務所、筆耕に多大なご協力をいただいた田原健子氏に深く感謝申しあげる。

福井藩士履歴９　新番格以下２　ヲ～ヨ　福井県文書館資料叢書17

目　次

口　絵
凡　例
一　新番格以下　ヲ……1
二　新番格以下　ワ……65
三　新番格以下　カ……91
四　新番格以下　ヨ……131
解説　神戸学院大学経営学部教授　松田裕之
参考資料

細目次

ヲ

大谷

大谷嘉順……2
大谷健助……2
大谷新助……2
大谷才一郎……3

大嶋

大嶋長春……4
大嶋新助……5
大嶋六蔵……5

尾崎1

尾崎庄兵衛……6
尾崎庄之助……6
尾崎剛太夫……7
尾崎佐太郎……7

尾崎2

直居周意……8
直居周悦……8
直江文佐……9
尾崎久左衛門……10
尾崎宗碩……10
尾崎平助……10
尾崎弥三郎……11
尾崎久左衛門……11
尾崎退介……11
尾崎允……12

尾崎4

尾崎茂左衛門……12
尾崎延次郎……12

小沢

小沢源五郎……13
小沢甚次郎……14
小沢浅之丞……14
小沢熊八……14
小沢十助……15

小川1

小川助右衛門……16
小川助次郎……16
小川要助……16
小川伝次郎……16
小川他十郎……17
小川猶次郎……17
小川孫市郎……17

小川2

小川文斎……18

岡

岡九十郎……19
岡長之助……19
岡金助……19
岡雄三郎……19

小倉1

南部円右衛門……20
南部円四郎……20
南部金蔵……20
南部勝右衛門……20
南部安五郎……21
南部仙吉……21

小倉2

吉村助右衛門……22
吉村捨作……23
吉村篤三郎……23

小倉3

小倉曾右衛門……24
小倉万吉……24
小倉竹次郎……25

岡本1

伊藤喜四郎……26
伊藤新八……27

岡本2

大嶋九郎右衛門……28
大嶋源七……28
大嶋文次郎……28
大嶋万助……28
青柳賢太郎……29
岡本金次郎……29
岡本石之助……29

大越

三浦春賀……30
三浦円八……30
三浦猪三郎……30
大越末太郎……31
大越十一郎……31
大越慎爾……31
大越静士……31

大森1

大森藤吉……32

大森2

長沢亀之進……33
長沢亀次郎……33
長沢米吉……33
大森豊佐……34

太田

坂口又五郎……35
坂口又次郎……35
坂口鉄五郎……36

岡田1

久世亭左衛門……36
久世八十八……37

岡田2

岡田三右衛門……38
岡田兼三郎……38
岡田兼三……39

大村1

大村第右衛門……39
大村祐一郎……40
大村雅太郎……40

大村2

中村安太夫……41
中村文太夫……41
中村円助……41
中村丈左衛門……42

中村定次郎……42
中村信蔵……42
大村3
岡田喜太郎……43
竹内吉郎……44
奥村
奥村新六……45
奥村新太郎……45
小嶋
小嶋道仙……46
小嶋文斎……47
小嶋専益……47
小嶋仙哲……47
大橋
大橋文栄……48
大橋文五右衛門……48
大橋文之丞……48
大橋悦五郎……49
大西
野坂三右衛門……50
山形忠四郎……50
山形孝太郎……51
山形元吉……51
大西忠太郎……51
大瀬
大瀬弥作……52
大久保
桜井嘉七……53
桜井清三郎……53
桜井恒次郎……53
小谷1
横山吉左衛門……54
横山次郎八……55
横山留吉……55
小谷2
小谷次兵衛……56
小谷小左衛門……56
小谷金兵衛……56
小谷平八……56
小谷安之助……56
小谷平八……56
小谷又次郎……57
岡倉
林五兵衛……57
林唯七……58
川合恒吉……59
吉田捨次郎……59
奥田
市川一郎左衛門……60
前田兵太夫……60
前田千太郎……61
前田竹松……61
前田平作……61
奥田竹松……61
岡井
岡井喜右衛門……61
岡井次郎作……62
岡井忠助……62
岡井周吉……63
ワ
渡辺1
渡辺鉄蔵……66
渡辺助太郎……66
渡辺小助……67
渡辺濯三……68
渡辺2
渡辺小兵衛……68
渡辺二蔵……69
渡辺小十郎……69
渡辺3
寺沢万助……70
寺沢万吉……70
寺沢弥助……71
渡辺4
福田金兵衛……72
福田政次郎……72
福田虎三郎……73
福田金之丞……73
福田弥太郎……73
渡辺弥三郎……73
渡辺音次郎……74
渡辺周平……74
渡辺5
坂下与左衛門……75
坂下弟右衛門……75
坂下清一郎……75
坂下惣次郎……76
渡辺孫三郎……76
鷲田1
鷲田小左衛門……76
鷲田2
鷲田五右衛門……77
鷲田五右衛門……77
鷲田五右衛門……78
鷲田五兵衛……78
鷲田万蔵……78
和田1
和田養弥……78
和田養弥……78
和田養弥……79
和田久務……79
和田友節……79
和田平太郎……80
和田祐介……80
和田2
和田春左衛門……81
和田幸之助……81
和田丈蔵……81
和田駒吉……82
和田3
和田丈助……82
和田忠太郎……83
脇谷
脇谷又太郎……83
脇谷左内……83
脇谷又太郎……84
脇谷又八郎……84
脇谷太郎兵衛……84
脇谷七右衛門……84

脇谷甚蔵……84
脇谷甚右衛門……84
脇谷又八……84
嶋崎平十郎……85
脇谷平十郎……85
脇谷竹次郎……86

若山

横山清右衛門……86
横山清兵衛……87
横山栄吉……87

若林

若林庄五郎……88
若林五郎作……88
若林藤右衛門……88
若林庄五郎……88
若林庄五郎……88
若林周四郎……88
若林忠左衛門……89
周四郎……89
若林庄五郎……89

カ

川崎1

川崎彦右衛門……92
川崎安次郎……92
川崎安次郎……93

川崎2

川崎半之助……94
川崎栄久……94
川崎伝節……94
川崎善節……95

川崎3

川崎善弥……96
川崎新次郎……96
川崎国三郎……97

甲斐

甲斐半太夫……98
甲斐伊三郎……98
菅沼万吉……98
甲斐文吉……98

金田

金田忠七……99
金田左市……100
金田鉄次郎……100
金田惣五郎……100
金田安四郎……100
金田半三郎……100
金田喜三次……101

河部

清水茂右衛門……102
清水文八……102
清水文蔵……103

川越1

川越久助……104
坂川小左衛門……104
坂川直七……105
坂川文次郎……105
坂川千助……105
坂川尚益……106

川越2

藤田和右衛門……107
藤田雄助……108
藤田岩太郎……108
川越実吉……110

河合

斎藤本左衛門……110
斎藤金五右衛門……110
松田良右衛門……110
松田専蔵……110
河合八五郎……111

川村

河村八太夫……112
河村善兵衛……112
河村頼太郎……113
河村左太夫……114

海崎

江口善左衛門……114
江口春古……114
江口文知……115
江口貞二……116
江口浅次郎……116

加藤1

小嶋庄太夫……116
加藤喜兵衛……116
加藤庄太郎……117

加藤2

加藤曾右衛門……118
加藤太兵衛……118
加藤亀太郎……119
加藤正吉……119
加藤亀三郎……119

加藤3

加藤文右衛門……120
加藤弁吉……120
加藤文右衛門……120
加藤元作……121
加藤熊太郎……121

加藤4

小沢次郎右衛門……122
小沢喜四郎……122
小沢兼吉……122
小沢誠一……123

加藤5

加藤久兵衛……124
加藤荒雄……124

片岡

片岡吉太夫……125
片岡吉蔵……125
片岡滝蔵……125
片岡吉五郎……126
片岡貞次郎……126

河田

江守仙兵衛……126
江守惣右衛門……127
江守熊三郎……127
三橋準之助……128

柿原

次田善朴……128
次田謙佐……129
次田貞佐……129

河村利伯……130

ヨ

吉村1
吉村喜三七……132
吉村武八郎……132
吉村伴次郎……132
吉村幸之助……132
吉村雄吉……133

吉村2
吉村万助……134
吉村万蔵……135
吉村孝一郎……135

吉村3
吉村栄吉……136
吉村友斎……136
吉村友節……138

吉村4
吉村伝右衛門……138
吉村鉄次郎……139

吉村5
福村嘉右衛門……140
福村仲三郎……140
福村金蔵……141
福村仁兵衛……141
吉村左内……142

吉川1
吉川喜斎……142
吉川吉左衛門……142
吉川彦十郎……142
吉川三太郎……143
吉川与十郎……143
吉川藤次郎……143
吉川又五郎……144

吉川2
好川七郎右衛門……144
好川唯右衛門……145
好川林蔵……145
吉川林右衛門……145
吉川幸次郎……145
吉川金次郎……145
吉川善五郎……145
吉川十蔵……146
吉川新之助……146
吉川善五郎……147

吉川3
吉川新右衛門……147
吉川友三……147
吉川文次郎……148

吉川4
吉川忠三郎……148
吉川忠斎……148
吉川忠益……148
吉川忠悦……149

吉江1
二木元四郎……150
吉江次兵衛……150
吉江啓之助……151
吉江専太郎……151

吉江2
吉江小左衛門……151
吉江定右衛門……152

吉田1
吉田喜右衛門……153
吉田円四郎……153
吉田甚蔵……153
吉田惣次郎……153
吉田七郎助……153
吉田栄太郎……154

吉田2
吉田弥左衛門……154
吉田平四郎……155

吉田3
吉田惣左衛門……156
吉田忠次……156
吉田豊次……157

吉田4
八杉七左衛門……157
八杉石太郎……158
八杉安五郎……158

吉田5
吉田文蔵……159

吉田6
岡倉弥八……160
岡倉仁助……161
岡倉恒吉……161
吉田祐之助……162
吉田雪江……162

吉田7
沢崎円助……162
沢崎玉吉……163
吉田喜代治……163

吉田8
吉田幸左衛門……163
吉田他市……164
吉田録蔵……165
吉田吉之助……165

吉田9
吉田鏻太郎……165

吉田10
吉川友三郎……166
吉川隆啓……166

横井
横井孫兵衛……167
横井門斎……167
横井多次郎……167
横井直作……167
横井鐇次郎……167
横井由太郎……168
横井佐十郎……168

横山1
安川庄太夫……169
安川金五郎……169
横山文助……170
横山鉄吉……171

横山2
横山才助……172
横山猶右衛門……172

横山3
横山忠太夫……173

横山岩太郎……174
横山 4
林俊蔵……174
林清次郎……175
吉山
戸川作右衛門……176
戸川勘左衛門……176
戸川勘助……176
戸川量平……177
戸川幸三郎……178
米沢
松田弥次右衛門……178
松田弥五八……179
松田猪三郎……179
池田万蔵……180

口　絵

1　「新番格以下」尾崎佐太郎

2　「新番格以下」大森藤吉（部分）

3　「新番格以下」脇谷（部分）

4　「新番格以下」小沢誠一（加藤春夫　部分）

福井藩士履歴９　新番格以下２　ヲ～ヨ

一　新番格以下　ヲ

大谷

大谷嘉順

一切米九石弐人扶持

寛政七卯十二月十九日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下

一切米拾石三人扶持

文化元子正月廿日出精相勤候ニ付切米壱石壱人扶持増、都合如斯被成下

同四卯正月十六日御坊主頭中村道嘉跡御道具役兼帯被仰付

一切米拾三石三人扶持

文化七午十一月十一日小役人被成下、御切米方御扶持方兼佐々木武太夫跡被仰付、切米三石増、都合如斯被成下

同日順右衛門与名替

同八未十一月廿日役筋不念之儀有之ニ付押込被仰付、同十二月九日押込被差免

文政元寅九月五日年寄候ニ付立替被仰付

大谷健助　健久事

一切米拾弐石三人扶持

右同日親順右衛門為跡目小算ニ被仰付、御充行如斯被下

文政六未八月十八日病気願之上御暇被下

大谷新助

一切米拾石弐人扶持

右同日養父健助願之上御暇被下、小算ニ被召出、御充行如斯被下置

同七申七月廿九日御趣意ニ付無役小算被仰付

同九戌十二月十八日小算勤役被仰付候

文政十亥十二月廿六日新左衛門と名替

天保三辰十一月十六日来巳年江戸御供詰被仰付候

同五午二月十一日火之御番ニ付、御挑灯蠟燭弁当渡之節吟味被仰付候

同七申年正月廿六日当年大坂御廻米御用御内用兼出坂被仰付候

同九戌五月十一日御札所御貸方指添被仰付候

一切米拾石三人扶持

天保十亥正月十六日出精相勤候ニ付御扶持方壱人扶持御増、都合如斯被成下

同十一子八月三日御趣意ニ付御札所御貸方差添被差免候

同十三寅二月粟ケ崎江御内用向ニ付、御勝手役差添出張被仰付

同十四卯正月十六日出精相勤候ニ付跡目小算ニ被成下、御充行弐石御増、都合

一切米拾弐石三人扶持

如斯被成下候、席伊藤左次右衛門次

弘化三午十一月十一日心得違之趣相聞候ニ付急度可被仰付処、格別之御憐愍を以押込、同十二月朔日押込被置候処被差免候

同月廿八日才右衛門与名替

同四未十二月五日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候

嘉永三戌年十二月十八日小役人ニ被成下、御勝手役河村左太夫跡被仰付、御充行三石御増、都合

一切米拾五石三人扶持

如斯被成下、役中御足充行三石被下置候

同四亥二月廿日御時節柄心得違之趣相聞候ニ付押込、同廿九日被指免
嘉永五子四月廿五日御住居御普請御用掛り出精ニ付、金百疋被下置候
同年江戸詰
同六丑年正月六日慎姫様御縁組ニ付御用懸り被仰付候
同年四月廿九日江戸表ゟ帰着
同年十二月五日今般十ケ年之間無類之御省略被仰出候ニ付、右取調掛り
被仰付候
同七寅四月五日山形新右衛門江戸詰中御借財仕分方受込役兼帯相勤候様
被仰付候
安政二卯正月十六日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格ニ被仰付候
同三辰四月廿九日御台所目付被仰付候
文久二戌九月廿日御泉水番末松覚兵衛跡被仰付候
同四子正月十六日出精相勤候ニ付、御足充行弐石被下置候
元治と改元、二月廿五日明里御蔵奉行喜多嶋熊蔵跡被仰付
同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当銀百匁被下
慶応二寅十一月十六日親才右衛門年寄候ニ付休息被仰付、御充行

大谷才一郎

一切米拾五石三人扶持
如此被下置、小役人ニ被仰付
無息中
文久二戌七月十一日当秋芝御陣屋詰被仰付、詰中四人扶持被下
置候、閏八月廿四日出立、同三亥九月廿四日帰
同四子正月十六日御徒ニ被召出、御定之通五人ふち被下置候
元治ト改元、三月四日上京、四月廿三日御供帰
同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀五拾匁被下置候
同三卯三月十六日御趣意ニ付小役人席其儘御徒組ニ被仰付
慶応三卯九月廿九日御勘定所勤被仰付候
同四辰六月五日御蔵奉行御切米方御扶持方兼被仰付
明治二巳十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免候事
同月廿五日右同断ニ付、更御充行米三拾五俵四斗五升被下
同年十二月十三日当分会計寮決算掛り申付候事
同三午三月五日会計寮附属申付候事
但検地掛り
一中級
同年閏十月十四日弟長貫一儀兼而遊蕩ニ耽り当務怠惰、其上養祖母江対
シ心得違之始末、不埒ニ付才一郎方江御返之上蟄居申渡候、且又父呉江
儀兼而異見可指加之処、取斗不参届心得違ニ付謹慎、但呉江十一月五日
指免候事
同日貫一御咎ニ付伺之上謹慎申付候事、同廿一日指免候事
但通路人ニ不及候事
閏十月廿日清兵衛町御門ゟ野中俊助屋敷前辺ニ而拝地願之通
十一月廿四日拝地被下候処柳御門ゟ北ノ方ニ而振替願之通
同年十二月十二日会計寮勤　検地方也
但准十六等
同四未五月七日神奈川県出仕申付候事
同年九月二日名替　　才一郎事

大谷新

大嶋

大嶋長春

一切米八石弐人扶持

寛政六寅十一月七日養父柳文病気願之上立替被仰付候、御充行並之通被下置、被召出

同十二月長二と名替

同七卯江戸詰

同九巳御供詰

一寛政十二申年隆徳院様御附不寝役被仰付、支度出来次第江戸詰被仰付

同十二申江戸詰

一享和二戌年於江戸表威徳院様御発駕前不寝役被仰付

文化元子五月廿一日不寝役ゟ奥御坊主被仰付

同二丑御供詰

同四卯同断

同六巳同断

同八未同断

同十酉同断罷越候処詰延ニ相成、失却多難渋之趣ニ付、格別之為御手当銀弐拾弐匁被下置候

同十二亥御供詰

同十四同断

文政二卯同断

同三辰六月廿四日御広敷書役被仰付候

同十一月十九日表御坊主被仰付

同五午閏正月十六日御右筆部屋定助被仰付

同六未御供詰

同二月四日御茶方早見門節跡被仰付

同八酉御供詰

同九戌三月三日威徳院様御坊主御茶方ゟ御茶方江

同年四月十八日同十亥迄詰越

同年十二月十六日年来出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候

同十二丑二月四日来寅年迄詰越被仰付候

同二月七日御道具役被仰付、御充行壱石増、都合九石弐人扶持被成下候、但当詰中是迄之通

同十二丑五月三日御着帯御誕生御用掛被仰付

同八月三日今般若殿様御誕生御祝儀被為済御満足思召、金百疋被下候

同十三寅五月十二日倅六蔵御坊主御人少ニ付御雇被仰付候

同年九月廿五日昨年新座振舞取扱不参届ニ付叱

同日松田文嘉押込中御坊主頭役兼帯被仰付候

天保三辰十月十五日御坊主頭松田文嘉跡被仰付、御道具役是迄之通兼帯、御充行壱石壱人扶持御増、都合

一切米拾石三人扶持

如斯被成下候

同十一月七日御家督御引移御用相勤候ニ付、銀弐拾匁被下置候

同五午十一月十一日来未年江戸御供詰被仰付候

天保八酉七月廿日小役人格ニ被成下、御広敷添役佐藤幸右衛門跡被仰付

同日長二事長右衛門と名替
同九戌三月十六日奥御納戸手伝被仰付候
同年八月廿七日支度出来次第江戸詰被仰付
一天保十二丑年八月昨子九月ゟ御国産物被為召候処、格別御用多骨折候ニ付御目録金百疋被下置候
同十四卯正月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如斯被成下候
同六月廿九日御小道具手伝和田春左衛門跡被仰付
同十四卯閏九月廿九日来辰年江戸詰被仰付
弘化二巳九月十一日当分奥御納戸手伝仮兼被仰付候
同三午十月十五日来未年江戸御供詰被仰付
同十二月十六日出精相勤候ニ付、御足充行三石被下置候
同四未二月五日御小道具寄荷物差添被仰付
嘉永元申年十二月十六日近年格別出精相勤候ニ付御足充行三石御増、都合
一切米拾五石三人扶持
如斯被成下候
嘉永三戌年四月十六日御取立被成、新御番格ニ被仰付候
同年九月十八日病死

大嶋新助

一切米拾五石三人扶持
嘉永三戌十月廿九日親長右衛門先達而令病死候ニ付小役人ニ被仰付、御充行如是被下置候
同五子十二月廿八日御番割御軍帳中掛り相勤候ニ付、銀拾匁被下置候
安政二卯三月十四日御軍制御改正御用掛り相勤候ニ付、金百疋被下置候
同年十一月廿五日親新助及大病立替相願、其後令病死候ニ付、無役跡目小算ニ被仰付、御充行並之通

大嶋六蔵

一切米拾弐石三人扶持
如此被下置候
安政三辰八月十日勤役被仰付候
文久元酉三月廿日今般横井平四郎儀立帰致出府候ニ付、附添罷越候様被仰付、廿四日出立、同年九月六日帰着
同二戌閏八月十七日支度出来次第出府被仰付候、廿六日出立
同年九月十四日御帳付手伝被仰付、中将様御用振退勤被仰付候
同年十月廿四日御帳付見習被仰付候
同年十二月廿三日来春中将様御船ニ而御上京被遊候ニ付、陸通り御先江出立
同三亥三月廿五日右御供ニ而着
文久四子正月廿三日学問所典籍方并書記方兼帯被仰付候
元治与改元、子四月五日出精相勤候ニ付、一統格被成下候
元治元子十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀百匁被下置候
同二丑正月廿日出精相勤候ニ付、勤中御足充行三石被下置候
慶応元丑五月廿七日句読師書記方兼被仰付、勤中弐人ふち被下置候
同年十二月廿八日左之通名替

六蔵事
大嶋貞介
貞介事
大嶋淳平

同二寅正月十二日同断
同四辰正月廿五日書記方被仰付、一統上席ニ被成下、早速上京被仰付、
同廿八日出立
但是迄勤中被下置候弐人扶持之儀ハ已後不被下候、且又役支配之儀ハ御附御側向頭取ニ被仰付
同年六月十二日帰
同年九月五日上京、巳正月十七日帰
同年十二月十四日御附書記方其儘明道館訓導被仰付、右勤中御足弐人扶持被下置候
但巳二月月給八俵被下、御足三石ハ其儘、御足弐人扶持ハ相止

尾崎[1]

尾崎庄兵衛

一切米拾石三人扶持
寛政七卯正月十六日仕出場下代ゟ小算被召出、御充行如此被成下
同十午江戸詰
文化五辰正月廿日出精相勤候ニ付、一統被成下
一切米拾三石三人扶持
文化六巳九月廿日小役人格被成下、御趣意銀御貸方末松覚兵衛跡被仰付、御充行三石増、都合如此被成下
同八未三月十一日小役人ニ被成下、御蔵奉行御切米方御扶持方兼平野文右衛門跡被仰付候
一切米拾五石三人扶持
文政元寅七月廿五日御勝手役土屋市左衛門跡被仰付、御充行弐石増、都合如此被成下、役中御足充行三石被下置
文政四巳江戸詰
同年七月六日此度浅姫君様常盤橋御屋敷へ可被為入旨被仰出候ニ付、御用掛り被仰付
同九月廿八日右御用掛り出精ニ付、御目録金百疋被下置
同五午閏正月廿八日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格被仰付
同七申七月十一日年寄候ニ付休息被仰付

尾崎庄之助

一切米拾五石三人扶持
同年同日御擬作如此被下置、小役人ニ被仰付
同十二月廿八日庄太夫与名替
文政十亥十二月五日御蔵奉行御切米方御扶持方兼関勇右衛門跡被仰付
天保五午八月廿九日雑用役坂井安太夫跡被仰付候
同六未閏七月廿二日大殿様御遺骸此表へ被為入候ニ付御用掛り
天保八酉七月廿日御蔵奉行坂井安太夫跡被仰付
同十亥七月五日御勝手役黒木藤兵衛跡被仰付、役中御足充行三石被下置候、但席坂井安太夫次
同年十一月十三日当年ゟ五ケ年之間格別之御省略被仰出候ニ付、右掛り

被仰付候
同十一子十二月十一日御札所御貸方黒木藤兵衛跡被仰付、但席其儘
同十五辰八月廿二日御趣意ニ付御勘定所勤被仰付候、是迄出精相勤候ニ付御褒メ被成候
同年十月十五日御趣意ニ付金津役所受込勤被仰付候、但席其儘
弘化三午十一月十一日役前不参届趣相聞候ニ付押込、同月廿五日押込被置候処被指免候
同四未三月十六日出精相勤候ニ付、役中御足充行弐石被下置候
弘化五申年二月廿五日炭薪奉行材木奉行兼被仰付、席其儘、御足充行弐石是迄之通被下置候
嘉永元申十月廿五日川除奉行安達次郎八跡被仰付、席其儘
同五子六月五日昨夏舟橋四ケ村立合川除普請被仰付候処、右場所へ日々出張厚致心配宜出来ニ付金弐百疋被下置候
同六丑四月廿日親庄太夫病気及大病立替相願、其後令病死候ニ付、無役跡目小算ニ被仰付、御充行並之通

尾崎剛太夫

一切米拾弐石三人扶持
如斯被下置候
嘉永六丑八月十六日御帳付見習被仰付候
安政二乙卯年十二月十三日出精相勤候ニ付御帳付本役被仰付、役中御足充行三石被下置候
安政四巳江戸詰
万延元申十月廿日身持不宜趣相聞候ニ付押込、十一月十日御免
同二酉正月十六日出精相勤候ニ付御足充行三石御増、都合
一切米拾五石三人扶持
如此被成下候
元治元子十月廿三日病身ニ付願之通御帳付被指免、一統格ニ被仰付
慶応元丑五月廿九日願之通御暇被下、養子佐太郎与申者小算ニ被召出、御充行拾石三人扶持可被下置処、親庄太夫勤功之訳柄も有之ニ付、別段御評議を以御充行

尾崎佐太郎　実江守幸佐弟也

一切米拾弐石三人扶持
如此被下置候
文久二戌閏八月廿四日御陣屋御雇詰出立
同三亥十二月廿二日内達之趣も有之、今度黒竜丸御船乗組之儀勝手次第被仰付、御陣屋詰之儀ハ被指免候
同月大坂江着帆、夫ゟ京都江罷出
同四子正月五日京都ニ而内達之趣も有之ニ付兵庫表へ罷越、勝麟太郎殿江相手寄航海術致修行候様被仰付
一慶応元丑八月十二日航海術修行被仰付候
一同年九月廿七日江戸表江出立、卯九月廿五日帰
一同四辰閏四月十六日算科局測量師被仰付
一同年七月廿四日大砲隊手伝被仰付候
但勤向之儀是迄之通
一明治卜改元、十月廿九日右手伝勤中席小十人組ニ被仰付
同年十二月十六日勤向其儘数学寮助教被仰付

一同二巳二月十八日数学寮教授方試補被仰付、勤中小十人組ニ被成下候、
但大砲隊手伝之義ハ被指免
同年三月七日御用有之早速出坂被仰付、同十二日出立
但右ハ二月晦日於兵庫軍務官至急御用有之、急速出頭有之候様御達ニ付如此也　大坂丸二等士官
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合
同三午十一月廿八日居住罷在候持地之内ニ而七十七坪拝地被下候、未六月廿日御取消

尾崎[2]

直居周意

一切米八石弐人扶持
寛政二戌三月十一日鉄弥方表御坊主方江被召出、御充行並之通如此被下置
享和元酉二月廿五日不寝役被仰付候
同月廿九日当酉年江戸詰被仰付候
文化元子年十一月五日来丑年江戸詰被仰付候
同三寅七月廿八日奥御坊主被仰付
同四卯四月十日御道中於木ノ本駅骨折候ニ付御褒被成下、銀四拾匁被下置候
同十酉年江戸御供詰被仰付罷越候処詰延ニ相成、失却多難渋之趣ニ付、格別之為御手当銀弐拾弐匁被下置候

直居周悦

一切米八石弐人扶持
文政五午七月廿一日親周意病気願之上立替被仰付、表御坊主被仰付、御充行並之通如斯被下置候
同十一子九月十日小坊主被仰付
同年十一月廿五日周意と名替
天保三辰十二月廿八日直江と改性
同五午年十一月十一日来未年江戸御供詰被仰付候
同七申年五月六日表御坊主被仰付候
同年十月五日奥御坊主不時助被仰付候
同年十一月十五日不寝役被仰付候
同八酉年七月五日奥御坊主石川玄久跡被仰付候
同七月十三日当秋江戸詰被仰付候
同九戌八月廿五日支度出来次第江戸詰被仰付候
同十亥三月廿八日御滞府中詰越被仰付候
同十四卯年閏九月廿九日来辰年江戸御供詰被仰付候
同十五辰年十一月三日来巳年江戸御供詰被仰付候
弘化三午年十月十六日来未年江戸御供詰被仰付候
嘉永元申年十月廿二日木村古泉跡御茶方被仰付候
同年十二月七日当夏急御出府被遊候節、御往来御供相勤太儀ニ候段御褒メ被下
同二酉年正月十六日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候
但嘉永三戌年十二月廿五日養子治郎吉と申者表御坊主ニ被召出、御扶持方三人扶持被下置候

嘉永四亥年江戸詰
同五子十二月廿一日御道具役被仰付、御充行壱石御増、都合
一切米九石弐人扶持
如此被成下候
同六丑三月廿二日御供出立
安政二卯六月廿九日病気内願ニ付御道具役被差免、表御坊主被仰付候
同年九月十一日病気願之上御暇被下、養子文平与申者御坊主ニ被召出、
御充行並之通

直江文佐　文平事
一切米八石弐人扶持
如是被下置、表御坊主被仰付候
同六未八月三日御右筆部屋御坊主森尾喜斎跡被仰付、御扶持方壱人扶持
御増、都合
一切米八石三人扶持
如此被成下候
同七申正月廿日江戸詰出立
文久二戌四月五日江戸詰出立
同三亥三月廿五日中将様御供ニ而京ゟ着
同年五月六日当亥御参府御供被仰付、八月十七日出立
同年十二月廿八日御帳付見習被仰付、役中御足充行弐石被下置候
同日左之通名替
文佐事
直江文左衛門

文久四子二月十四日京都ゟ帰
元治と改元、八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、同二丑二月朔日帰
同年十二月左之通改性
直江事
尾崎文左衛門
慶応元丑十月八日大坂表江出立、寅十月七日帰
一同三卯正月十六日出精相勤候ニ付、別段之訳を以御足充行弐石御増
一切米拾石三人扶持
如此被成下候
同四辰三月八日上京、六月十三日帰
明治ト改元、十月廿一日御趣意ニ付御帳付見習被指免、小算ニ被仰付
同二巳二月十七日行事局書役被仰付候
同月廿六日月給三俵被下
同年三月七日掌政局筆者被仰付
但掌政局書記支配之事
同年五月廿一日名替
文左衛門事
尾崎庄兵衛
同年六月十七日名替
庄兵衛事
尾崎文介
同七月十七日支度出来次第東京詰申付、詰中公務局筆者兼申付事、同月
廿六日出立、午正月二日帰
一同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾八俵三斗五升八合被下

同月廿九日掌政堂筆者指免候事
同三午正月十九日吉村伝八郎不慎中貨幣局一貫文銭札書方申付候事
同年三月五日右書方出精ニ付銀百匁被下候
同年六月十五日医学所病院筆者申付候事
但中級
同年閏十月十三日清兵衛町御堀橋際辺ニ而拝地願之通
同年十一月十三日右指免候事
同月晦日御家従表御門番へ
同五申五月
文介事
尾崎涼（スヾシ）
同年七月十九日第一区神楽町組副戸長

尾崎 3

尾崎久左衛門

一
天明七未年御切米方雇下代被仰付
寛政八辰年四月十六日俵数六俵被下置、御切米方仮下代被仰付候
同年十二月廿四日銀次郎事文助与名替
同九巳正月廿二日四俵御増、都合拾俵ニ被成下候
同十午十二月十六日岡田喜右衛門定雇下代被仰付
同十一未七月廿六日吉田平次左衛門定雇下代被仰付
文化二丑十二月十九日出精相勤候ニ付、御充行並之通
一切米八石弐人扶持
如此被成下
同三寅八月晦日御雑用方下代被召抱
同八未五月十三日御代官平井弥平太下代入替被仰付候
同年十二月七日御奉行月番預り仕出場下代被仰付
同九申七月三日荒川十右衛門御勝手掛り御免被成候ニ付、同人下代滅切ニ相成候、然ル処御奉行下代打込席故新役之儀ニ付、嶋崎伝右衛門仮預り浮下代被仰付候
同年八月十一日御代官吉田平次左衛門下代被仰付
同年十二月九日御代官坂本平左衛門下代勤へ
文政八酉二月十六日御代官田辺奥左衛門請込下代勤被仰付候
同十二丑年二月十四日病気願之上御暇被下

尾崎宗碩　茂吉
一切米六石弐人扶持
同年三月十九日御憐愍を以小坊主見習ニ被召出、御充行如是被下置
同日宗碩と名替
一切米八石弐人扶持
天保五午四月廿九日御充行並之通如此被成下候
同七申年六月六日小坊主ニ被仰付候

尾崎平助
一切米八石弐人扶持
天保十亥二月廿四日養父宗碩病気願之上御暇被下、養子平助与申者諸下

代ニ被召抱、御充行並之通如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り被仰付
同年六月五日御雑用方下代広部丈助跡へ

尾崎弥三郎

一切米八石弐人扶持
天保十一子五月廿九日養父平助義病気願之上御暇被下、養子弥三郎ト申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付候
同十三寅二月四日御切米御扶持方兼千田又左衛門下代へ

尾崎久左衛門

一切米八石弐人扶持
天保十四卯閏九月廿九日養父弥三郎病気願之上御暇被下置、養子久左衛門御充行如此被下置、嶋崎伝太夫仮預浮下代被仰付
同十一月九日御作事方下代へ
同月廿九日来辰年江戸詰被仰付
弘化二巳三月廿八日当秋迄詰延被仰付候
同十一月十七日御代官松尾伝蔵下代へ
嘉永二酉年七月廿五日荒所起返シ出精ニ付、米三俵被下置候
同七月廿六日金津領御代官肩下代江組替
同三戌年七月廿一日志比領御代官肩下代江組替
同五子六月廿四日今庄領御代官方肩下代へ組替
同年八月　金津領御代官方下代へ組替
同六丑二月廿五日志比領御代官方下代へ組替
同七寅十一月十六日芝原領御代官肩下代へ組替
安政四巳正月廿五日御趣意ニ付改而三国山岸領へ
安政六未八月五日殿下砂子坂領江組替
文久二戌閏八月廿三日今庄広瀬領御代官方受込下代へ
同三亥十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同四子正月廿五日殿下砂子坂領御代官受込下代へ
慶応四辰二月五日東郷粟田部領御代官請込下代江組替
同年八月廿五日東郷品ケ瀬領江組替
明治ト改元、十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同二巳二月十七日年寄ニ付御暇被下、倅退介与申者諸下代之内江被召抱、御充行八石月俸弐口

尾崎退介

一切米八石月俸弐口
如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付
無息中
一元治元子二月廿九日表御坊主ニ被召出、三人扶持被下置候
一同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当五拾匁被下置候
一慶応三卯三月十六日御趣意ニ付被召出候儀ハ相止候得共、御憐愍を以鳴物方被仰付、勤中一人半扶持被下置候
同日尚悦事成一ト改
同年十月成一事退介ト改
同年十一月五日喇叭役被仰付
同四辰六月廿五日会征出立、十一月十五日帰、巳二月廿二日出張ニ付十

両被下
〆
明治二巳三月廿一日鼓手被仰付
同年七月十二日名替
退介事
尾崎邁（ツトメ）
同年八月十六日学校筆者申付候事、年給弐俵被下候事
一同年十一月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同月廿七日御改革ニ付筆者指免候
同月晦日学校筆者申付候事
同三午二月七日中級申付候事
同年四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内金十両被下候
同年十月十八日上級ニ被成下候事
同年十二月十二日学校勤
但分科之儀ハ従前之通
一十六等ノ三等
同四未二月十四日是迄英学修行仕居候処、尚此上東京表江罷越一層修業
仕度ニ付、当役御免之上願之趣御聞届被成下候様願之通、同廿日出立
同年十月廿七日邁事二郎与名替
邁事
尾崎二郎
同年八月四日於東京病死ニ付

尾崎允 弟

一給禄廿弐俵壱斗八合

尾崎 4

尾崎茂左衛門 御目付海福猪兵衛組分役
一切米八石弐人扶持
嘉永七寅年正月十六日年来格別出精相勤候ニ付諸下代ニ被召出、御充行
如是被下置候
但銀六貫九百五拾匁上納被仰付、跡株被下置候事
附り同十七日銀五百匁包立為冥加致上納候ニ付、御奉行江相渡
同年二月晦日与内方下代江
同年閏七月十二日玉薬方下代江
安政元寅十二月十九日御預所御代官肩下代へ
同二卯十一月十四日砂子坂領御代官肩下代江組替
同四巳正月廿五日御預所御金方下代へ
安政五午二月九日浜坂浦口銭方下代へ
同年十一月左之通名替
茂左衛門事
尾崎皆右衛門
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用ニ付銀十弐匁被下
慶応元丑七月廿一日年寄候ニ付御暇被下、倅延次郎与申者諸下代之内江
被召抱、御充行並之通

尾崎延次郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、高嶋孫兵衛仮預り浮下代被仰付候
同年十一月廿一日御厩方下代へ
同二寅八月十三日御材木方炭薪方下代兼江
同年十一月廿五日御武具下代勤中御改正出精相勤候ニ付、銀弐拾匁被下置候
同三卯二月十五日左之通名替
延次郎事
尾崎友作
同四辰六月廿一日御時節柄心得違之趣有之ニ付頭存を以叱、伺之上慎
明治二巳三月七日左之通名替　月給壱俵
友作事
尾崎直介
同年四月廿日庶務方下代江
但造営材木炭薪方掛り兼
月給米是迄之通、但壱俵也
明治二巳六月廿一日名替
直介事
尾崎直
同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免候
同月十四日物価取調方附属申付候事
同月廿一日今般御改革ニ付役儀指免
同月廿二日民政局筆者申付候事
但下級
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午十一月三日十六等之二等
同年十二月十二日民政寮勤
但准十六等、年給九俵也
十二月十五日持地之内ニ而三十弐坪拝地被下候
同四未二月十二日藩庁一集相成候ニ付、御改正中不及出仕候事
同年三月廿五日印紙方申付候事
但算者兼筆者
一等級従前之通　九俵
同年六月朔日御改正ニ付免職
同廿七日藩庁附属申付候事
印紙方　等外ノ二級
同年七月廿八日印紙方被廃止候事
同年十二月廿四日改正ニ付免職
一同五申二月十八日足羽県下第六区副戸長
一同年五月廿四日依病気願副戸長差免候事

小沢

小沢源五郎

一
享保十六亥十一月廿日御徒相勤候親作右衛門江戸於御供先打倒果、倅翌子二月五日為代御徒ニ被召出、御擬作並之通被下置
寛保元酉十二月文左衛門与名替

延享四卯九月朔日御徒目付被仰付
宝暦二申十一月廿五日勤方不宜ニ付御徒へ御下ケ被成、御擬作並之通拾五石三人扶持ニ被成
明和五子小役人格ニ御取立、川除奉行山形市郎左衛門跡被仰付
同七寅十一月廿五日御広敷添役被仰付
安永元辰七月廿五日土居奉行熊谷十左衛門跡被仰付候

小沢甚次郎

一切米拾五石三人扶持
安永八亥三月六日親文左衛門大病ニ付立替被仰付、倅御徒被召出、御擬作並之通如是被下置
寛政十午十二月惣左衛門与名替
享和二戌十月朔日病気ニ付立替願之上被仰付

小沢浅之丞

一切米拾五石三人扶持
右同日親惣左衛門御徒相勤候処、病気ニ付願之上立替被仰付、御擬作如此並之通被下置、御徒被仰付
同年十二月文左衛門与名替
文化元子江戸詰
文化四卯四月廿五日御徒目付赤尾又右衛門跡被仰付、御擬作三石相増
一切米拾八石三人扶持
都合如是被成下
文化五辰江戸詰
同十二亥十一月五日御広敷添役矢村甚左衛門跡被仰付、支度出来次第江戸詰
文政五午十月廿五日炭薪奉行吉田弁右衛門跡被仰付
天保三辰正月廿五日雑用役兼勤被仰付候
同五午九月四日御趣意ニ付炭薪奉行振退勤被仰付候
同六未三月十六日小役人ニ被成下、御台所目付被仰付
天保八酉十二月五日小普請方関勇右衛門跡被仰付
天保十亥九月十六日諦観院様御霊屋御普請出来候処出精ニ付、為御酒代銀八拾六匁被下置候
同九月廿五日是迄御普請奉行支配ニ候処、以来身分之儀ハ御奉行支配ニ被仰付候
同十一子三月十六日新番格ニ御取立被成、綿麻奉行被仰付候
天保十二丑十一月廿日御泉水番嶋田九郎左衛門跡被仰付候
同十四卯閏九月廿五日御泉水元御住所此度御締切ニ相成候ニ付、右御住所之儀も御泉水同様相心得候様被仰付候
同十四卯十二月十六日年寄候ニ付休足被仰付

小沢熊八

一切米拾五石三人扶持
天保十四卯十二月十六日御充行如此被下置、小役人ニ被成下、御徒勤其儘被仰付候
但文政十二丑正月六日御徒被召出、御充行近年御定之通五人扶持被下置
天保二卯御供詰

同年貝心掛候ニ付御貝御預被成候
同六未御供詰
同年閏七月十五日御遣骸御国へ被為入候ニ付御供ニ而帰切
同九戌年支度出来次第江戸詰
同十二丑二月五日於御鷹場鳥殺生致し候趣相聞候ニ付押込
同十三寅年江戸詰、然ル処親跡式被仰付候ニ付、自分御充行上ル
弘化三午十二月廿八日作右衛門与名替
安政二卯年江戸御供詰被仰付、三月十九日出立
安政四巳六月廿日御貝役被仰付、右役中新御番格ニ被成下候
同年十月十五日御奉行見習林作右衛門へ名元指合候ニ付、左之通名替
作右衛門事
小沢文左衛門
文久三亥十二月朔日病死

小沢十助　小役人御徒勤　作右衛門養子

一五人扶持
嘉永二酉年八月五日御徒ニ被召出、御充行近年御定之通如斯被下置候
同三戌年十二月廿五日左之通名替
十助事
小沢甚次郎
同七寅十月来卯年御供詰被仰付
同年十一月廿九日筒井小太郎稽古所ゟ菅沼主水倅直衛病気為見廻主水宅江罷越候始末、酒狂与者乍申不宜致業ニ候へ共、先此度之儀者御沙汰ニ不被及候間、以来武辺ゟ事起候儀□□右様之不作法無之様移りを以被仰付候
安政五午年江戸詰被仰付、五月十六日出立
但右詰中十月廿二日晩立ニ而御吉事御飛脚御用相勤、同月廿九日此表江帰着、十一月六日御飛脚御用相勤出立
同年十二月廿八日左之通名替
甚次郎事
小沢甚平
文久三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立
同年十月十三日中将様御上京御供出立、然ル処十二月二日養父文左衛門病気ニ付願之上帰着
同四子正月十六日養父文左衛門令病死候処、年来御貝役相勤候ニ付御憐評を以小役人ニ被成下、御充行
一切米拾五石三人扶持
如此被下置、御徒勤ニ被仰付候
但身分之儀ハ御奉行支配、勤向之儀ハ御徒頭支配之事
一御徒仲ケ間座列之儀ハ御徒組頭之上席たるへき事
同年二月十一日小屋頭千田猪兵衛跡
元治ト改元、四月五日御徒勤被指免、御勘定所勤被仰付
同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀百匁被下置候
慶応二寅十一月十日小十人組ニ被仰付、砲術調練等致精励候様被仰付
同三卯三月十六日御趣意ニ付小役人席其儘御徒組ニ被仰付
同年十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付
同年五月廿九日御趣意ニ付御徒組後拒役被指免

同四辰六月五日御徒番所勤被仰付
同年九月十六日御預人宿所江相詰可申事
同月廿九日御藩制改革之処長々相勤ニ付、銀五貫匁被下候
同年十一月十日今般御改革ニ付御徒番所勤指免、御預人当番申付候事、
但軍政局可為支配事
同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米三拾五俵四斗五升
同三午三月八日下馬御門太鼓御門三ノ丸南御門当番申付候事
同年六月三日掌政堂当番申付候事
同年十一月廿八日居住罷在候百軒長屋ニ而拝地被下候

小川[1]

小川助右衛門

一切米拾壱石三人扶持
是迄三人扶持ニ候処
享保十一午二月十一日御充行如此被成下
延享四卯十二月五日切米弐石増、都合
一切米拾三石三人扶持
如此被成下
宝暦三酉二月九日御塩梅役被仰付
同八寅十二月十八日小役人格被仰付
同十三未九月助左衛門ト名替
明和二酉正月廿五日切米弐石御加増、都合
一切米拾五石三人扶持
如此被成下、新番組入御取立被成下
同三戌八月五日休息被仰付

小川助次郎

一切米拾五石三人扶持
右同日親助左衛門家督無相違如斯被下置、新番組へ被入、御料理方被仰付
明和八卯十二月朔日果ル

小川要助

一切米拾五石三人扶持
安永元辰正月廿日助次郎病中願之通養子被仰付、家督無相違如此被下置、新番組へ被入、御料理方被仰付
安永七戌十二月助左衛門ト名替
寛政十一未二月九日今般御膳領之鶴庖丁被仰付候ニ付、御目録弐百疋可被下置処、兼而内願も有之ニ付御紋御上下被下置候、但御紋御上下被下候義、以後之例ニ者不相成候事
寛政十一未十二月廿二日果ル

小川伝次郎

一切米拾五石三人扶持
同十二申二月十一日小川助右衛門病中願之通養子被仰付、家督無相違如此被下置、新番組へ被入、御料理方被仰付
文化元子八月廿九日御定之年数相満候ニ付、大御番組へ被入

同十二月伝次右衛門ト名替
同十二亥七月廿五日侍御削被成、並御料理方へ御下ケ蟄居被仰付候、但跡立替被仰付、跡目之者へ御充行拾一石三人扶持被下置候

小川他十郎

一切米拾壱石三人扶持
右同日如此被下置、前文之通押込被置候処、七月廿五日被差免
同十三子七月廿日不埒至極之義有之ニ付押込被仰付、同八月五日押込被指免候
文政元寅年十二月廿五日助右衛門ト改名
同八酉年御供詰
同十二丑七月十七日助左衛門ト改名
天保三辰十二月十六日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候
同四巳三月七日本番振退被仰付、且御膳所御省略ニ付御倹約懸り被仰付候
同六未十月廿八日支度出来次第江戸詰被仰付
同十二月廿八日助右衛門ト改名
天保九戌九月五日支度出来次第江戸詰被仰付
同十亥正月十五日出精相勤候ニ付、小役人格ニ被成下候
天保十二丑十一月六日来寅年江戸詰被仰付候
同十四卯六月十三日先般御家督為御礼惣出仕并御家督を始御祝事ニ付、御家中江御料理被下候、依之御用懸り被仰付候
同七月廿九日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾三石三人扶持
如此被成下候
同十四卯閏九月廿八日来辰年江戸御見送り被仰付候
嘉永二酉年正月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾五石三人扶持
如斯被成下候
嘉永三戌十月廿日来亥江戸詰被仰付候
安政六未十月廿五日

小川猶次郎

一切米拾五石三人扶持
養父助右衛門令病死候ニ付小役人ニ被成下、御充行拾五石三人扶持被下置、御料理方被仰付候
文久元酉十二月廿八日左之通名替
猶次郎事
小川助右衛門
同二戌七月十一日当時罷在候借地御徒目付役宅ニ被仰付、百坪余御用地ニ被仰付候
同年十二月十五日病死
同三亥正月廿五日

小川孫市郎

一切米拾壱石三人扶持
親助右衛門病気及大病立替相願、其後令病死候ニ付、御料理人ニ被仰付、御充行如此被下置候

慶応二寅十一月十日小十人組被仰付、砲発調練等致精励候様被仰付、依之御料理人ハ被指免候
同三卯三月十六日御趣意ニ付勤中席之儀ハ小十人組格ニ被成下候
同年十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付候
同四辰正月七日急々出張二ツ屋ニ罷在、同廿六日引取
同年三月二日御警衛詰上京、閏四月十六日帰
明治ト改元、十一月六日上京、巳二月七日帰
同二巳二月廿九日歩隊ニ被仰付、後整衛隊ト唱
同年七月二日今度御祝事ニ付御通御雇申付候処、彼是申立候ニ付隊長ゟ再三及説得候処、其令ニ戻り我意ニ募り候始末、心得違ニ付屹度御察当可有之処、御祝事之折柄ニ付押込、同月廿二日被免
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾俵四斗八合
同三午五月廿四日第二大隊一番小隊入申付候事
同年七月十日第二大隊十番小隊後絶
但第二也
同年十二月名替
孫一郎事
小川俊一
一同月十二日常備六番隊軍曹
一同四未十月十三日解隊

小川文斎　錠前番表御坊主御雇

文久元酉五月七日表御坊主被仰付候
同二戌四月五日御在国中御茶方奥御坊主助被仰付候
同三亥正月　中将様御上京被遊候ニ付御供
同年三月十八日京ゟ江戸江振りニ而出立
同年六月十三日今度御国表江引越被仰付、着
同年十月十三日中将様御供ニ而上京
元治元子九月廿三日奥御坊主被仰付
同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当十弐人被下
慶応元丑十二月十六日出精相勤候ニ付御充行壱石御増、都合一切米八石弐人扶持
如此被成下候
同二寅六月廿三日上京、十月六日帰
同三卯四月十二日御上京御供出立、八月九日帰
同年十一月二日同断出立
同四辰六月十二日帰
同年八月五日上京、十二月十四日帰
明治二巳二月五日上京、三月十二日帰
同年四月九日中納言様御供東京江出立、九月十日帰
同年九月廿日名替
文斎事
小川文三
同年十二月十日東京江出立
同年十一月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同四未三月朔日東京ヨリ帰

岡

岡九十郎

一切米拾五石三人扶持
安永三午六月廿九日十次兵衛御徒目付相勤ニ付御徒ニ被召出、御充行並之通被下置
一切米拾八石三人扶持
天明四辰十月廿一日切米三石増、都合如斯被成下、御徒目付役被仰付
寛政五丑八月廿日御広敷添役被仰付
文化七午十一月五日病身ニ付立替被仰付

岡長之助

一切米拾五石三人扶持
右同日倅長之助御徒ニ被仰付、御充行如斯被下置候
同九申十二月廿八日金五太夫与名替
文化十酉江戸詰
文政元寅九月十一日御徒目付被仰付、役中御足充行三石被下置
文政三辰江戸詰
同九戌六月廿八日今度御本城橋御掛替之処、格別出精相勤候ニ付御褒詞
文政十一子年正月七日果ル

岡金助

一切米拾五石三人扶持
文政十一子年二月十一日養父金五太夫及大病立替相願、其後令病死候ニ付、御徒ニ被仰付、御充行並之通如斯被下置候
同十二丑正月廿日当春江戸詰被仰付候、四月廿日御人繰合ニ而詰御免被成候
同十三寅年十月廿三日来卯年御供詰
天保七申年四月当秋江戸詰被仰付候
天保八酉八月廿五日今般御拝任ニ付、御国表江御使彦坂又兵衛為指添罷越候様被仰付候、但再出府ニ不及候事
天保十二丑十二月廿五日佐五右衛門与改名
同十三寅五月朔日東叡山火之御番被為蒙仰候ニ付、支度出来次第江戸詰被仰付候
弘化二巳二月廿七日御供筆頭被仰付、当江戸御供詰被仰付候
同三午十月十五日来未年江戸御供詰被仰付候
嘉永七寅九月廿九日小役人格ニ被成下、御広敷添役被仰付候
文久三亥六月五日御台所目付被仰付
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用ニ付御手当三拾三匁被下
慶応二寅二月五日病気ニ付願之通立替被仰付、倅雄三郎与申者跡目小算ニ被仰付、御充行

岡雄三郎

一切米拾弐石三人扶持
如此被下置候
無息中左之通
一元治元子三月十六日御徒御雇被仰付、為失却月々銀五拾匁被下

置候

一慶応元丑六月廿日月々銀五十匁被下置候処弐拾匁ツ、御増、都合七拾匁ツ、被下置候

慶応二寅十一月十日小十人組ニ被仰付、砲発調練等致精励候様被仰付

同三卯十月十八日御趣意ニ付席其ま、小筒組後拒役被仰付

同年十二月十四日上京、然ル処御模様ニ付途中ゟ引返帰

同四辰正月六日上方江急出張直ニ上京、閏四月十四日帰

同年五月廿九日御趣意ニ付後拒役被指免、跡目小算元席江被入候

明治二巳　　検地方手伝

同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免候事

同月廿五日右同断、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合

同三午正月十日生兵修行指出候

同年十一月晦日民政寮惣会所給仕

同月廿八日居住罷在候屋敷地拝地被下候

小倉[1]

南部円右衛門

一宝暦十一巳年御目付組物書へ被召出

一明和二酉年京都定居下代被仰付

一安永元辰年御武具下代へ

一寛政二戌年立替、都合三拾年相勤

南部円四郎

一寛政二戌年御切米方下代へ被仰付

一同四子年病身願之上立替、三年相勤

南部金蔵

一寛政四子年御切米方下代へ、夫ゟ御雑用下代へ被仰付

一同七卯年中領郡組へ被仰付

一同十二申年御札所札見下代被仰付

一享和三亥年立替、拾弐年相勤

南部勝右衛門

一切米八石弐人扶持

享和三亥十月廿六日養父武太夫病気願之上立替被仰付、御充行七石弐人扶持被下置、御札所札見下代被召抱

文化七午十月廿六日壱石増、諸下代並之通如此被成下

同九申十月十七日古物方嶋崎伝右衛門下代へ

同十酉十一月十七日御札所御貸方下代へ

文政元寅十二月十六日小寄合格被成下

同八酉正月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下

同年三月十一日御札所御貸方指添被仰付

同年八月五日御充行勤向其儘小算ニ被仰付候

同十一子三月六日出精相勤候ニ付跡目小算ニ被成下、御充行弐石御増、都合

一切米拾石弐人扶持

如此被成下候

天保三辰閏十一月廿五日御札所御貸方南部伝五右衛門跡被仰付候
同五午十二月十六日出精相勤候ニ付壱人扶持御増、都合拾石三人扶持被成下候
同八酉九月十六日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候
同十亥六月廿日産物方被仰付候
同十二丑五月廿四日産物方被指免
同十三寅九月十六日妻他行之節着服、心得違之趣相聞候ニ付押込被仰付、同廿五日押込被指免
弘化五申年二月廿五日元分銅印御講掛り被仰付候
嘉永元申年十二月十一日年来出精相勤候ニ付小役人格ニ被成下、御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如斯被成下候
同三戌年二月十一日小役人ニ被成下、御台所目付被仰付候

南部安五郎

一切米拾弐石三人扶持
嘉永四亥二月十一日親勝右衛門年寄候ニ付立替被仰付、無役跡目小算ニ被成下、御充行並之通如斯被下置候
同五子年四月三日御徒御入人被仰付、御趣意ニ付勤中御足充行三石被下置候
同七寅九月十一日痔痛有之歩行等難儀ニ付、御奉公難相勤ニ付御暇相願候、依之養子仙吉与申者無役小算ニ被召出、御充行

南部仙吉

一切米拾弐石三人扶持
如斯被下置候
安政三辰正月十九日小算勤役被仰付候
同年十二月廿八日左之通改姓名

南部仙吉事
小倉恒次郎

同四巳八月廿日江戸詰出立
同五午九月廿九日御蔵所加印相勤候節不念之儀有之ニ付押込、十月十三日被指免
文久二戌十二月廿六日京都江出立
同三亥三月廿五日中将様御供ニ而帰着
同年十月十三日中将様御供ニ而上京、子五月十九日帰
元治元子五月廿五日在京中不行状之趣相聞候ニ付押込、六月十日被指免
同年七月朔日上京、夫ゟ長征、帰掛ケ京都江立寄、丑二月廿八日帰
慶応元丑六月五日出精相勤候ニ付、別段之訳を以年々米弐俵ツ、被下置候
明治元辰十二月十一日御勝手役見習被仰付、一統格ニ被成下候
同二巳十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免
同日出納方申付候事
但格式月給是迄之通
同月廿一日司計局少属被仰付候事
同月廿五日今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合
同三午十二月十二日任権少属　未正月ゟ廿八俵

但会計寮勤仕　御藩地方
同年十一月廿八日居住罷在候持地拝地被下候
同四未六月朔日御改正ニ付免職
同十五日藩庁出仕
但地方掛り
同廿四日任福井藩少属　地方
同年十二月十日任福井県少属
正租雑税開墾培植祐倉方
同五申五月名替
恒次郎事
小倉豊（ユタカ）

小倉 2

吉村助右衛門　善兵衛事
一切米八石
文政十亥八月廿五日杉浦雄蔵組ゟ出役浮下代被仰付、御充行八石弐人扶持被下置、大谷武兵衛仮預り被仰付
同八月廿九日御雑用方下代へ
同十一子江戸詰被仰付
同年正月廿六日江戸詰御免被成
同年正月廿八日御金奉行横井宗右衛門下代へ
同年詰
同年七月廿日霊岸島御台所下代へ
同十二丑四月朔日霊岸島御屋敷御類焼後御不用ニ付御国へ御返被成
同十三寅三月十二日御預所御代官下代へ
天保六未十二月六日左之通改名
善兵衛事
吉村助右衛門
同九戌八月十二日岡田金左衛門下代へ
同十二丑正月七日御代官栗原作太夫受込下代へ
同十四卯十二月出精相勤候ニ付米弐俵被下
弘化二巳正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格被成下
嘉永二酉年五月廿七日左之通名替
助右衛門事
吉村助左衛門
同四亥年正月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同五子年閏二月十一日依願諸下代株ニ被成下候
但銀九貫匁上納可有之事
同年十二月十五日左之通名替
助左衛門事
吉村助右衛門
同六丑二月廿五日三国領御代官請込下代江
同七寅二月晦日御預所御金方下代江
同年三月三日左之通名替
助右衛門事
吉村助左衛門
安政四巳正月廿六日年寄候ニ付御暇被下、倅捨作与申者諸下代之内へ被

召抱、御充行

吉村捨作

一切米八石弐人扶持

如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候

安政四巳三月十二日病身ニ付願之上御暇被下、養子篤三郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

吉村篤三郎

一切米八石弐人扶持

如斯被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候

同年八月廿四日御材木方炭薪方下代兼被仰付候

安政五午九月廿九日弟御咎ニ付慎伺指出候処、同居ニ付御用外慎罷在候様被仰付候、十月四日被指免

同六未四月十日浜坂浦口銭方下代へ

同年十月十六日御雑用方下代へ

文久元酉二月十七日左之通名替

吉村事

小倉篤三郎

同年三月御供詰

同二戌四月十三日太田御陣屋御引払出精ニ付、銀拾五匁被下置候

同年五月十六日御供ニ而帰

同年閏八月九日御台所下代江

同三亥二月十日殿様御上京ニ付御供

同年八月十七日御参府御供ニ而出立、同十二月江戸ゟ御上京御供

同四子正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候

元治と改元、二月十三日御供帰

同年八月晦日東郷粟田部領御代官方下代江

同年十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下

同二丑二月九日中領郡方書役江

慶応四辰三月三日上領郡方下代江

同年六月廿二日中領郡方受込下代江　月給三俵

明治ト改元、十二月十六日年中格別御用多之処出精相勤候ニ付、当年限米壱俵被下置候

同二巳十一月廿一日今般御改革ニ付役儀指免

同月廿二日民政局権少属被仰付候事

同年同月廿五日今般御改革ニ付、更ニ御充行米弐拾弐俵壱斗八合

同三午十月十八日任少属

同年十二月十二日任准権少属　未正月ゟ廿壱俵

但民政寮勤仕

同四未正月十日御用有之東京江至急可罷越事

同日右御用中権少属御取扱

同十五日出立致候処中ノ河内ニ而由利殿ニ出逢候処、一旦引返可申儀ニ付帰着、但引返シ失却難渋ニ付三両被下候、伺也

同月廿七日御用有之早々東京江可罷越事

但翌廿八日昼立ニ而致出立候事、三月十六日帰

同年三月十八日印紙方被仰付候事

同年（マヽ）

同年六月朔日御改正ニ付免職
同十五日任戸長
同年十一月二日免職
同五申正月廿五日野田戸十郎与禄振替、廿石五口之適宜
一米四拾七俵壱斗弐升九合
同年四月四日堤防営繕方雇申付候事
一同年七月
篤三郎事
小倉篤（アツシ）
同年八月二日足羽県等外二等出仕
但租税課

小倉 3

小倉曾右衛門

一切米八石弐人扶持
寛政五丑年八月親及老年ニ付御立替被成下候様相願候処、願之通被仰付、
跡御代官方下代被召抱
同八辰年十月仕出場下代被仰付、切米壱石増、都合
一切米九石弐人扶持
如此被下置
享和三亥正月江戸詰被仰付罷越候処、御焼失後御普請ニ付御用多之上、
本之丞様御逝去被遊甚御用多相勤申候
同四子正月極方下代被仰付
文化五辰年十一月小算ニ被召出、御充行並之通
一切米拾石三人扶持
如此被成下
同六巳年四月於江戸表火之御番被為蒙仰候ニ付、来午年詰引揚支度次第
出立仕候様被仰付
同年六月中将様御逝去被遊候ニ付御用掛り被仰付候
同八未年二月若殿様御誕生御用掛り被仰付候
同年六月隆徳院様御三回御忌御法会於運正寺御執行在之ニ付、御用掛り
被仰付候
同十二亥年八月仕出場下代一統新役之者共ニ而御用相弁兼候ニ付、其段
御家老中江御達之上月番村田十太夫極方御雇被仰付候
同十三子年諸向一統御省略被仰出候ニ付、右御用掛り被仰付候

小倉万吉

一切米八石弐人扶持
文政四巳六月二日親曾右衛門及大病御暇相願候ニ付願之通御暇被下、跡
諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如斯被下置、御勝手役仮預り被仰付
同四日本多九太夫組へ割入被仰付
同五午正月御預所御金奉行下代勤へ
同五月朔日同所御代官方下代勤へ
同六未正月廿八日表御代官方下代勤へ
同十三寅二月七日御代官永田順右衛門下代へ
同年十二月四日御奉行川村文平下代被仰付、切米壱石増、都合
一切米九石弐人扶持

如此被成下
天保三辰年江戸詰被仰付候
同年二月廿二日御厳法御倹約御取調掛り被仰付候
同年十二月廿八日茂助与名替
同四巳四月廿九日勝手次第此表出立罷帰候様被仰付候
同四巳九月十六日大井長十郎書役下代江
同十二月六日御代官久野長右衛門下代へ入替被仰付候ニ付、切米壱石被
相減
一切米八石弐人扶持
如是被下置、但元席へ被入候
同七申七月四日井上茂右衛門受込下代江被仰付候
同九戌十二月十二日御作事方下代へ
同十亥六月廿日御札所御貸方下代へ
同十三寅七月五日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同十五辰八月廿二日御趣意ニ付浮下代被仰付候、是迄出精相勤候ニ付褒
メ可遣候
同年十一月十四日小川治兵衛下代へ
弘化二巳七月十八日京坂へ出張被仰付
同三午六月十一日粟田部領御代官受込下代へ
弘化五申年正月廿四日山干飯領御代官請込下代被仰付候
嘉永元申年十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同二酉年七月廿六日砂子坂領川崎仁右衛門受込下代江組替
同四亥五月十七日御腰物御拵方下代兼被仰付
同年九月十八日御勘定所勤被仰付候
同五子年五月四日綿麻方下代へ
同年十月廿九日御預所御代官肩下代へ
但受込下代次席
同七寅二月晦日元分銅印御講方下代江
安政四巳正月十六日出精相勤候ニ付、米三俵ツヽ、年々被下置候
同五午二月九日御札所御趣向方下代へ
同年九月廿九日倅恒次郎御咎ニ付伺之上慎被仰付、十月四日被指免候
但御用外慎之処、十月十三日被指免
同年十一月左之通名替
茂助事
小倉曾右衛門
万延元申六月廿一日御趣意方下代へ
同二酉二月十一日年寄候ニ付御暇被下、倅諸下代之内江被召抱、御充行
並之通

小倉竹次郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置候
但同月廿五日右養子竹次郎与申者被召抱、御勝手役仮預り浮下代
被仰付候
文久与改元、十月廿九日御預所御金方下代へ
文久二戌五月十一日御腰物方下代へ
元治元子二月廿九日御台所方下代被仰付、支度出来次第京都詰、三月七
日出立、夫ゟ長征、丑二月十日帰

慶応元丑八月十六日上京、寅四月九日帰
同二寅正月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
同年四月廿九日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金五百疋被下置候
同年六月十九日御金方下代江、但役席其儘
同年八月十九日出坂、十月十三日帰
同年十二月廿二日席其儘南居山干飯領下代江
同年十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格順席ニ被成下候
同四辰八月廿五日七領之処九領ニ相成、三国領江組替
明治二巳七月十九日惣会所引立勘定方江
但年給壱俵
同年十一月廿二日民政局筆者申付候事
但惣会所勤
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午十二月十二日民政寮勤　引立方
但准十六等　未正月ゟ九俵
同四未六月朔日免職
同五申五月十三日総会所雇申付候事

岡本[1]

伊藤喜四郎

一切米七石弐人扶持
文政七申閏八月四日榊原助左衛門組ゟ御充行其儘、出役浮下代勤大谷八十郎仮預り被仰付
一切米八石弐人扶持
同八酉二月四日大坂御蔵屋敷下代勤被仰付、御充行壱石御増、都合如斯被成下、支度出来次第出坂被仰付候、但御勝手役仮預り
同十亥六月十一日出精相勤候ニ付、小寄合格被成下候
同十一子三月十七日御雑用方下代江
天保元寅年十一月四日御納戸方下代江
同八酉二月十八日御預所御代官肩下代江
同九戌八月十四日御納戸方下代へ
同十亥十一月廿五日出精相勤候ニ付、小算格被成下候
天保十二丑十一月十二日来寅年江戸詰被仰付候
同十四卯三月二日当夏日光御参詣、夫ゟ御国江被為入候ニ付御供被仰付、御供小算差添兼被仰付候
同十五辰十月八日御献上鳥子紙道中引纏江戸立帰被仰付候
弘化二巳年十二月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾石弐人扶持
如斯被成下候
弘化五申年正月十六日鳥子紙御献上之節出精相勤候ニ付、為御酒代銀拾五匁被下置候
嘉永三戌年十二月十六日出精相勤候ニ付小算ニ被成下、御勘定所勤被仰付候
同五子年四月廿五日此度小算之者共以前へ被復壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持　伊藤喜四郎
如是被下置候
嘉永五子年江戸詰、八月八日出立、同六丑九月三日帰着

同六丑年正月六日慎姫様御縁組御用掛り被仰付候
同年九月廿三日依願諸下代株ニ被成下候
但銀九貫匁上納
同六丑十月廿日病気願之上御暇被下、養子新八与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

伊藤新八

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
同七寅二月晦日御切米方御扶持方籾蔵下代兼江
安政二卯六月十二日御作事方下代へ
同年九月廿九日長谷部甚平書役へ
同晦日左之通名替
新八事
伊藤新四郎
安政四巳六月廿九日御預所元締役高村藤兵衛極方江
同五午七月廿九日御用向繰合算学専致修行候様被仰付候
同年十一月十一日御奉行極方江
同六未三月廿六日左之通改姓
伊藤事
岡本新四郎
同七申三月晦日江戸詰出立
万延与改元、六月廿四日霊岸島御屋敷御建継御普請出精ニ付、銀拾匁被下置候
同年十一月十八日巣鴨御屋敷御普請出精ニ付、銀七匁被下置候
文久二戌十月六日京都表江出立
同三亥四月廿日右同所ゟ帰
文久三亥七月五日肥後薩摩表江出立、九月二日帰
同四子正月十六日出精相勤候ニ付小算ニ被召出、御充行
一切米拾石三人扶持
如此被下置候
同年二月廿七日上京、三月十七日親対面願帰、同月出立、同年九月十三日帰
元治元子十月　長征、同二丑二月朔日帰
慶応元丑十二月十六日下領郡方受込勤江
同二寅四月廿四日、一昨子京都堺町騒乱一件ニ付、公辺ゟ被下配当金六百疋被下置候
明治元辰十二月十六日年中格別御用多之処出精相勤候ニ付、当年限米壱俵被下置候
同二巳正月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
同年二月十四日上京、三月六日太政官駅逓司御用ニ而東京江罷越
同年四月廿五日於東京府出納方被申付候　大属
同年十一月廿五日今般御改革之処、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合
同三午四月三日東京江家内引越願之通被仰付、同十日出立
同年十一月廿八日居住罷在候持地拝地被下候
同四未正月廿九日右拝地被下候処、家作之分川崎善八郎へ以相対譲渡申

度、依之先般被下候拝地之儀ハ御猶予被成下候様願之通
同年八月十四日東京府出仕
同年　東京府典事

岡本[2]

大嶋九郎右衛門

一切米拾石三人扶持
寛政十二申年九月十四日仕出場下代ゟ小算ニ御取立被成下、御充行如斯被下置候
文化十一戌十二月七日御所務方頭取被仰付候

大嶋源七

一切米八石弐人扶持
文化十四丑年六月五日親九郎右衛門及大病御暇相願候処、願之通御暇被下、御充行如斯被下置、諸下代之内へ被入、御勝手役仮預り被仰付候
一切米拾石弐人扶持
文化十四丑年六月廿日親九郎右衛門年来相勤候功を以小算江被召出、御充行如斯被下置候
文政元寅年十二月廿八日左之通名替
源七事
清右衛門

大嶋文次郎

一切米八石弐人扶持
文政五午年八月十三日養父清右衛門病気ニ付、和順之上妻離縁致度旨願之通被仰付
同日清右衛門義及大病候ニ付願之上御暇被下、養子文次郎と申者諸下代之内江被入、御充行如斯被下置候、御勝手役仮預り被仰付
同六未年二月六日御雑用方下代被仰付
同年七月二日左之通名替
文次郎事
清右衛門
同八酉年江戸御供詰罷越
五月十九日於江戸表病気願之上下代勤被差免、養子万助と申者御趣意ニ付御先筒組之内江割入被仰付候

大嶋万助

一切米八石弐人扶持
文政八酉年八月廿日御先物頭吉岡庄右衛門組江被召抱
同十一子年十二月四日出役下代勤被仰付、御充行並之通如斯被下置
同十九日御台所下代被仰付候
同十二丑年江戸詰被仰付
同年四月八日霊岸島御屋敷御類焼ニ付御不用ニ相成候ニ付、御国江御返シ被成候
天保二卯年二月六日左之通改姓名
大嶋万助事
青柳六左衛門

同三辰年十一月廿八日椀奉行仮役被仰付候
同六未年二月十一日椀奉行仮御免被成
同年江戸詰
同閏七月御遣骸御国江被為入候ニ付、御供ニ而帰切被仰付、御道中御厩
方下代兼帯相勤
同十二月廿日御元服御用多之処出精相勤候ニ付、銀七匁五分被下置候
同七申年五月廿五日御代官高橋一太夫下代被仰付候
同十四卯年十二月十六日出精相勤候ニ付、米弐俵被下置候
弘化四未年三月御預所御年貢御廻米為御用出坂被仰付、六月罷帰ル
同年十二月五日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
嘉永二酉年六月廿六日御預所下坂田助右衛門肩下代へ組替
同四亥九月二日同所上御代官小堀伝右衛門肩下代へ組替
同五子十月廿九日綿麻方下代へ
同七寅五月十四日御預所御代官岡十次兵衛肩下代へ
但受込脇へ
同年閏七月廿一日御預所御代官請込下代江
安政二卯年正月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下
同三辰八月廿九日依願諸下代株ニ被成下候
但銀九貫匁上納可有之事
文久元酉十二月五日出精相勤候ニ付、米三俵ツヽ年々被下置候
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之拾弐匁被下
慶応三卯八月廿二日年寄候ニ付御暇被下、倅諸下代之内江被召抱、御充
行並之通
卯十二月廿二日勤中御代官方年来相勤候ニ付、当年限米弐俵被下置候

青柳賢太郎
一切米八石弐人扶持
十月二日右賢太郎被召抱、御勝手役仮預り浮下代被仰付候、但御小人目
付和田賢太郎也
同四辰正月七日御台所方下代江
同年三月三日御蔵所下代江
明治二巳十月十日改姓
青柳事
岡本賢太郎
同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免
同月四日御蔵方附属申付候事
但年給壱俵
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午六月十二日卒族故丹羽七郎之謀言ヲ信シ消手形ヲ以引替遣シ、且
又起米等取斗、其後不正之手形ト承知乍致其筋江不返出役前不相立、心
得違至極ニ付立替手形十四俵上納之上押込、七月三日指免候
同年七月十一日右跡式江被召抱

岡本金次郎　実子也　六歳
一米弐拾弐俵壱斗八合

岡本石之助　代勤　卒久世平与門弟也
同年八月十二日第三大隊二番小隊入申付候事

同年九月十三日右隊伍長申付候事
同月廿七日御用有之ニ付詰引揚、早速東京江出立可致事
但心得方之儀ハ監正寮江可承合事
同年十二月八日常備第七小隊入
同四未四月晦日従東京帰着
同年六月ゟ不及代勤

大越

三浦春賀
一切米九石弐人扶持
文化元子七月十八日年来出精相勤候ニ付、一統格被成下
同年江戸詰
同四卯江戸詰
一切米拾石三人扶持
同七午十一月十一日御坊主頭大谷加順跡被仰付、切米壱石壱人扶持増、
都合如此被成下
同十三子三月廿九日小役人格被成下、御広敷添役被仰付
同日嘉右衛門与名替

三浦円八
一切米拾石三人扶持
文政十亥十二月五日親嘉右衛門儀年寄候ニ付立替、跡目無役小算被仰付、
御充行如此被下置候
同十三寅閏三月廿日不宜趣相聞候ニ付押込、同四月五日押込被指置候処
被指免候
同七月廿五日勤役被仰付候

三浦猪三郎
一切米拾石弐人扶持
天保二卯六月十三日養父円八儀病気願之上御暇被下、無役小算被召出、
御充行如此被下置
同年十二月十九日勤役被仰付候
同八酉十一月十九日来戌年江戸詰被仰付候
一切米八石弐人扶持
天保九戌十二月十九日三国湊出役中不埒至極之趣相聞候ニ付、急度可被
仰付処、於御国表度々赦も被仰出候折柄ニ付、格別之御憐愍を以格式并
御充行之内弐石御取揚如此被下置、浮下代へ被下ケ押込被仰付候
同十二月廿九日押込被指免
天保十亥三月朔日三浦猪三郎事大越要左衛門与改性名
三浦猪三郎事
大越要左衛門
天保十一子八月廿六日御台所方下代へ
同十二月六日来丑春江戸詰被仰付
同十三寅七月十二日御納戸方下代へ
同十二月九日来卯年江戸詰被仰付候
同十四卯十二月廿八日出精相勤候ニ付小寄合格被成下候、席高嶋喜右衛
門次

弘化五申正月十六日鳥子紙御献上之節出精相勤候ニ付、為御酒代銀拾五
匁被下置候
嘉永元申十一月十一日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同五子十二月十六日出精相勤候ニ付御足充行弐石御増、都合
一切米拾石弐人扶持
如是被成下候
安政二卯年正月十六日出精相勤候ニ付小算ニ被成下、御充行並之通
一切米拾石三人扶持
如此被下置、御勘定所勤被仰付候
文久二戌七月五日御広敷勘定役書役兼被仰付候
同年閏八月十四日江戸詰出立
同三亥三月廿三日御前様御供ニ而帰
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用御手当三十三匁被下
元治二丑正月十六日出精相勤候ニ付、御充行弐石御増
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
慶応三卯正月十六日出精相勤候ニ付、小算上席ニ被成下候
明治二巳六月十七日名替
要左衛門事
大越要一郎
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合被下
同三午正月十三日今般御改革ニ付役儀指免候事
但軍務寮支配之事
同月廿八日右同断ニ付御金土蔵并御門番勤申付候事

同年七月十八日五十六歳已上ニ付諸勤御用捨被成候事
同年十一月七日病死
同年同月廿三日召抱
十一月廿八日居住罷在候持地拝地被下候

大越末太郎　午十三歳
一米三拾壱俵三斗六升九合

大越十一郎　代勤　卒野口十九五郎弟也　十七歳
但十一郎養子ニ罷越度ニ付

大越慎爾　廿
同四未正月十三日再願代勤
但南部理平倅也
同月十四日予備第四小隊江被入候
同四未四月七日右解隊被仰出候事
同年六月不及代勤

大越静士
同五申五月
末太郎事
大越静士（チカシ）

大森 1

大森藤吉　御出居番御金方手伝

一切米七石弐人扶持

天保二卯年中仕切組へ被召抱

同九戌年冥加金上納之上表御出居番被仰付候

同年非番之節御金方下代手伝被仰付候

天保十四卯十二月廿八日御充行其儘諸下代之内江被入、御金方下代手伝

御扶持方下代兼勤是迄之通被仰付候

同十四卯年御金方手伝振退勤被仰付候

同十五辰七月廿五日御留守居物書へ

弘化五申年正月十五日出精相勤候ニ付御充行壱石御増、都合

一切米八石弐人扶持

如斯被成下候

嘉永二酉年十二月十五日今般御前様御引移御婚姻前後無御滞被為済御満

足思召候、右御用掛り出精ニ付銀拾五匁被下置候

嘉永五子十一月廿九日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候

同六丑九月廿五日荒子与右衛門英次郎与申者御門所入之儀ニ付、取斗方

心得違之趣相聞候ニ付急度叱り、右ニ付伺之上慎、十月三日被指免

安政四巳十二月左之通改名

藤吉事

大森藤輔

安政四巳十二月廿三日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候

同六未四月五日御門所入之儀ニ付、心得違至極之趣相聞急度も被仰付候

処、御憐愍を以書役差免押込

同七申正月廿七日御台所下代椀奉行御道具預り兼へ

文久三亥六月十三日今度御国表へ引越被仰付、着

同年八月十三日当秋芝御陣屋御雇詰被仰付、九月二日出立

同年十二月朔日御都合も有之ニ付芝御陣屋詰被指免、当分御聞番物書仮

相勤候様被仰付

同四子正月十五日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合

一切米拾石弐人扶持

如此被成下候

同年十月十八日江戸表ゟ帰

元治元子十二月賊徒一件、御留守御用相勤候ニ付拾弐匁被下

慶応元丑十二月廿一日倅留次郎先達而出奔之節、達方不都合之廉も有之

ニ付御奉行存を以押込、同廿六日被指免

同二寅二月十六日江戸表江出立、同年十二月廿一日帰

同三卯正月廿一日御勘定所勤江

同四辰七月廿七日御台所方下代江

慶応四辰八月十日上京、巳五月十二日帰

明治ト改元、十二月十六日出精相勤候ニ付小算ニ被成下、御扶持方壱人

扶持御増、都合

一切米拾石三人扶持

如此被成下候

明治二巳　　戸籍方手伝

同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾九俵五升六合

同三午三月五日先達而ゟ銭札書方出精ニ付、銀百匁被下候

同年七月廿三日洋人居住所見張番申付候事
同年十一月晦日右同断、改而申付候事
同四未正月十二日右見張番指免候事
同月廿四日民政寮泊番申付候事

大森 2

長沢亀之進　亀次郎　江戸定
享和二戌年表御坊主定御雇被仰付
文化二丑年表御坊主被仰付
一金壱両壱人扶持
被下置、御能御相手被仰付
同六巳年寺井勘兵衛方江思召を以寄宿笛修行被仰付
同七午年御国表江詰被仰付罷越、御能并毎夜御太鼓御伺御相手被仰付、
御国表江八詰被仰付罷越
同十三子年
一切米八石弐人扶持
如此被成下
文政九戌年楷五郎様御附奥御坊主代り被仰付
同十二丑年表御出居番被仰付
天保四巳年小寄合格ニ被成下
同六未年五月七日御住居御徒代り勤中小算格被成下
同八酉年小算格被成下、御三代様御能笛御相手被仰付

長沢亀次郎　伝次郎
一切米八石弐人扶持
天保八酉年七月親亀之進大病ニ付立替被仰付、御充行如此被下置
同八月廿二日御住居御書使御薬取振向勤被仰付
同十亥四月廿三日御勘定所留付被仰付
同七月廿六日御金方手伝被仰付
同十一子四月十六日御留主居物書被仰付
同十四卯閏九月廿九日亀次郎与名替
同十五辰年正月御趣意有之物書御免、当分御勝手役仮預り
同月表御出居番被仰付
弘化二巳年四月十八日御広敷御出居番并御住居御薬取兼被仰付
同四未正月廿二日不埒至極之趣相聞候ニ付立替之上押込、二月朔日押込
被指免

長沢米吉
一切米八石弐人扶持
弘化四、二月十七日養父亀次郎立替被仰付、跡諸下代之内へ被召抱、御
充行並之通如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付
同五月十九日御台所方下代へ
同年七月九日当八月中公方様神田橋御住居へ御立寄御沙汰ニ付、御用懸
り被仰付
同九月十二日右御用掛り出精ニ付、銀五匁被下
嘉永元申年八月十日砂村御抱屋敷奉行下役御庭預り兼被仰付候
左之通改姓

大森米吉

嘉永二酉六月十六日先達而遠方御成先江罷越致止宿候始末、被頼候とハ
乍申心得違之趣相聞候ニ付立替之上押込、同七月六日被指免候
同年七月廿二日養子豊太郎与申者被召出被下置候様相願候処、幼年ニ付
御扶持方壱人半ふち被下置、表御坊主被仰付候

大森豊佐

一壱人半扶持
如此被下置候
同日左之通名替

豊太郎事
大森豊佐

嘉永三戌十二月七日幼年ニ付御扶持方右之通被下、勤向之儀者仲ケ間共
指除置候趣ニ候得共、已後相応之勤方被仰付、為御手当一ケ年金五両ヲ
盆暮弐両弐歩宛被下置候
嘉永四亥正月廿九日小坊主被仰付候
安政三辰三月十二日年頃ニ罷成候ニ付、御充行並之通
一切米八石弐人扶持
如此御直シ被下置候
安政三辰五月廿五日表御坊主へ、但席永山忠意次
小坊主被仰付
同五午十月廿八日御時計役兼帯介被仰付候
同七申正月十八日不寝役定介被仰付候
文久二戌二月十八日御附奥御坊主被仰付候
同三亥正月中将様御上京被遊候ニ付御供
同年三月十八日京ゟ振りニ而江戸へ出立
同年四月廿七日御国江引越、着
同年十月十三日中将様御供ニ而上京
元治元子九月廿一日左之通名替

豊佐事
大森要佐

同年十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
同二丑四月六日御茶方被仰付候
慶応二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日帰
慶応三卯四月十二日御上京御供出立、八月九日帰
同年十一月二日宰相様御上京御供出立、辰閏四月十三日帰
同四辰六月五日上京、十月十三日帰
明治卜改元、十二月四日上京、巳三月東京江出立候処草津ゟ御呼返ニ付、
三月五日御国江帰
同二巳八月十四日東京江出立
同年九月廿一日名替

要佐事
大森豊治

同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午二月二日東京ゟ帰
同年四月十一日詰中中級之御取扱ニ被成下候
同四未二月五日東京江出立
同五申　　帰

同年八月晦日御書下ケニ而免職、多年精勤ニ付年給半高并金五両被下候
事

太田

坂口又五郎

一切米八石弐人扶持

文政六未二月廿一日出役下代勤被仰付、大谷八十郎仮預り浮下代勤被仰
付候

同年九月十五日御腰物方下代へ

同七申二月廿二日御材木方下代へ

同八酉正月十六日御雑用方下代被仰付、来戌年江戸詰被仰付候

同九戌五月廿六日此度公方様霊岸島御住居御通抜之御沙汰被仰出候ニ付、
御用掛り被仰付

同十亥八月廿九日御厩方下代

同十一子十二月十九日来丑年江戸詰被仰付候

同十三寅四月九日不慎心得違之趣相聞候ニ付浮下代申付押込、但当分御
勝手仮預り、同月廿日押込被差免

同五月廿六日平瀬五左衛門仮預り被仰付候

同年六月七日御城表火之番不寝役被仰付

同九日御勝手役仮預り被仰付候

天保三辰二月廿六日産物方下代御勝手役仮預り被仰付候

同年十二月廿四日御材木方村山嘉助下代被仰付候

同四巳年二月廿五日御代官方跡部又八下代へ

同六未閏七月十七日御代官栗原作太夫下代へ組替

同九戌八月二日御代官跡部又八下代へ組替

同年十二月十二日御代官井上茂右衛門下代へ組替

天保十二丑八月二日東郷領御代官吉田平次左衛門肩下代へ組替

弘化二巳八月九日坂本平兵衛下代へ組替

弘化五申年正月廿四日山岸領御代官請込下代被仰付候

嘉永元申年十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候

同二酉年七月廿六日今庄領御代官請込下代江組替

同三戌年十二月廿五日左之通名替

又五郎事
坂口藤兵衛

同五子正月十九日御武具方下代江

同年三月廿一日玉薬方下代へ

同七寅閏七月十二日志比領御代官受込下代江

御札所奉行下代へ

安政三辰六月廿四日御預所御代官肩下代へ

同年同月廿八日左之通名替

藤兵衛事
坂口又五郎

安政五午二月九日年寄候ニ付御暇被下、倅又次郎と申者諸下代之内へ被
召抱、御充行並之通

坂口又次郎

一切米八石弐人扶持

如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
安政五午二月廿日親又五郎出役之者ニ付諸組之内へ可割入処、依願諸下代株ニ被成下候
但銀七貫匁上納有之事
同六未六月十日病気願之上御暇被下、養子鉄五郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

坂口鉄五郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
右鉄五郎町組太田藤左衛門与申者倅ニ而内証仕切也
万延二酉正月廿六日左之通改姓
坂口事
太田鉄五郎
文久与改元、十一月十六日御武具方下代へ
同三亥七月十七日古物方下代江
元治元子八月晦日御金方下代江
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用ニ付十弐匁被下
慶応元丑十月十六日江戸表江出立、寅十一月廿四日帰
同三卯正月廿一日仕出場書役江
同四辰二月十八日上京、巳三月廿九日帰
同年三月十六日当辰春詰被仰付候
明治卜改元、十二月十六日年中格別御用多之処出精相勤候ニ付、当年限米弐俵被下置候
同二巳十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免
同月二日出納方附属申付候事
同月廿五日今般御改革ニ付、御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三年閏十月九日玉村寿家屋敷以相対譲受候ニ付、右地所抱地ニ仕度旨願之通
同三午十二月十二日会計寮勤　出納受払掛り
但十六等ノ二等　未正月ゟ十六俵
同四未六月朔日御改正ニ付
同廿四日任庁掌
但出納方　十六等ノ一等
同年十二月十日任福井県史生
本受方
同五申五月名替
鉄五郎事
太田正（タヅシ）

岡田[1]

久世亭左衛門　竹内貞蔵　貞左衛門

一切米八石
文化九申三月十日養父病気願之上立替被仰付、跡浮下代嶋崎伝右衛門仮預り被仰付、七石弐人扶持被下置
同年四月六日仕出場留付被仰付
同年九月十七日御札所札見下代被仰付

同十二亥十月五日壱石増、都合八石弐人扶持被成下、浮下代嶋崎伝右衛門仮預り被仰付
同七日御台所服部弥右衛門下代被仰付
同十三子十一月十九日炭薪方下代へ
同十四丑五月廿日御雑用方下代へ
同十五寅二月十六日御代官川村五左衛門下代へ
文政三辰七月廿六日御雑用方高嶋孫兵衛下代へ
同四巳正月廿六日御預所御代官松原次郎左衛門下代へ
同五午八月八日表御代官竹沢五郎右衛門下代へ
同十三寅二月廿八日安本佐次兵衛受込下代へ
同三月十五日栗原作太夫受込下代へ
天保三辰七月廿四日跡部又八受込下代へ
同十二月十六日蒲生浦開田之儀出精ニ付、為御酒代銀三拾匁被下置
同四巳二月廿五日広瀬領受込下代へ組替
同五午二月四日御代官木内甚兵衛受込下代へ組替
同六未正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下
同七申五月十七日志比領十二ケ村開田被仰付候ニ付、御用掛被仰付
同年十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下
天保八酉四月九日御広敷書役被仰付
同十一月廿五日来戌年江戸詰被仰付、詰中勘定役兼被仰付
同九戌十二月廿八日
竹内事
久世亨左衛門
右改性

同十亥二月七日来子年迄詰越被仰付
同五月廿日諦観院様御一周忌ニ付御比丘尼御国表へ立帰罷越候ニ付、道中為引纏立帰被仰付
同十二月廿日出精相勤候ニ付、年々米三俵ツ、被下置
天保十二丑閏正月十三日貞照院様当春江戸表へ御出府ニ付、御道中切御供被仰付
同年十一月廿九日山方下代へ、出精相勤候ニ付弐石御増、都合一切米拾石
如此被下、年々米三俵ハ以後不被下
弘化二巳二月二日産物方懸り
嘉永元申年六月廿日御趣意方下代江被仰付候
同三戌年二月十四日御勘定所勤被仰付候
同年十二月四日病身ニ付願之上御暇被下、養子八十八と申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

久世八十八

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、御勝手役仮預り被仰付候
同四亥年正月廿六日御作事方下代江
同五子年江戸詰、三月五日出立、同六丑四月廿二日帰着
同六丑六月二日御預所御代官方下代江
同七寅二月晦日三国領御代官肩下代へ組替
安政二卯九月廿六日元分銅印御講方下代江
安政三辰九月十四日広瀬領御代官肩下代へ組替

同四巳正月廿五日御趣意ニ付今庄広瀬領へ
同六未十一月十六日御納戸方下代へ
万延元申十二月廿九日左之通改姓
久世事
岡田八十八
文久元酉三月晦日江戸詰出立
同二戌三月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同年五月三日帰着
同年閏八月廿三日御代官下代江
元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
慶応三卯八月二日御納戸方下代江
同四辰二月五日御広敷書役江
明治二巳二月十八日京都表江罷越、夫ゟ江戸詰被仰付、詰中添役勤向も相心得候様被仰付出立、然ル処三月十二日御模様ニ付女中引纏御国江帰着
同年四月十日東京江出立、十月十八日帰
同年十一月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月十三日今般御改革ニ付役儀指免候事
但軍務寮支配之事
同日御家従附属申付候事
但御裏勘定役勤
同年二月十八日御改革ニ付役儀指免候事
同月廿九日下馬御門太鼓御門三ノ丸南御門当番申付候事
同年七月十八日下馬御門所当番更申付候事
同月廿五日民政寮会計寮泊番申付候事
同年八月十四日病院附属申付候事　但下級
同年十一月十三日右指免候事
同月晦日瓦御門番へ

岡田 2

岡田三右衛門

一　天保二卯五月病気願之上御暇被下

岡田兼三郎　江戸定

一　同年　親三右衛門跡錠前番被召抱
一切米七石弐人扶持
天保十五辰年正月廿一日御広敷御出居番并御住居御薬取兼被仰付候
弘化四未年二月七日御充行其儘御預所下代勤江、当分仮被仰付候
同年十二月六日御充行其儘諸下代之内江被入、御預所下代本役被仰付候
嘉永二酉年三月十六日御納戸方下代被仰付候
同年六月七日当冬御入輿ニ付御用掛り同様被仰付候
同年十二月十五日今般御入輿前後無御滞被為済御満足思召候、右御用掛り出精ニ付、銀拾五匁外ニ拾五匁被下置候
嘉永三戌年八月五日御充行壱石御増、都合
一切米八石弐人扶持

如斯ニ被成下、御預所下代被仰付
　但役席清川慎之助上
同六丑十二月廿五日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
安政六未七月廿九日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
文久三亥正月十五日出精相勤候ニ付、米三俵ツヽ、年々被下置候
元治元子十月廿五日病気願之上御暇被下、倅兼三与申者幼年ニ候得共兼三郎勤功も有之ニ付、格別之御憐愍を以

岡田兼三

一御扶持方三人扶持
如此被下置、御勘定所勤被仰付候
　但御勝手役仮預り
慶応元丑十二月十三日御出居番勤被仰付候
同二寅四月朔日右被指免、当分表御坊主御雇被仰付、但被下金之義ハ是迄之通ニ候事
同四辰正月十五日年頃ニ相成候ニ付、御充行
一切米八石弐人扶持
如斯御直シ被下置候
同月御国表江引越被仰付、二月廿七日着
明治二巳十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月十日生兵修行指出候
同月十三日当分民政寮銭札裏判押方申付候事
同年三月五日右ニ付銀三拾匁被下候
同年七月廿三日歩兵修行指出候也
同年十月十二日第二大隊七番小隊入申付候事
同年十二月八日常備第九小隊入
同四未十二月廿八日分営常備

大村[1]

大村第右衛門

天明四辰九月廿二日御趣意方定雇下代被仰付、壱ケ年銀九拾匁ツヽ、被下置候
寛政四子七月ゟ戌亥両年御貨銀御札所へ御引渡之義ニ付、同八辰六月迄御札所江出勤被仰付
同七月ゟ御趣意方へ罷帰相勤、右子年迄俵数弐俵ツヽ、被下置
同七卯年三俵被下置候
同八辰四月十一日壱ケ年俵数拾俵被下置候
同九巳八月十一日御代官伊黒弥三右衛門定雇下代被召抱
文化二丑正月十六日御擬作並之通
一切米八石弐人扶持
如此被成下
同年九月十五日御腰物方下代被仰付候
同七午七月晦日御代官野村四郎左衛門下代被仰付
文政六未二月六日御代官柳下勘七受込下代被仰付
同十亥十二月十六日年来出精相勤候ニ付、小寄合格被成下
同十三寅閏三月廿一日年寄候ニ付御暇被下

大村祐一郎

一切米八石弐人扶持

右同日諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、平瀬五左衛門仮預り被仰付候

同年五月十八日御腰物方下代へ

同年十一月四日御雑用方下代江

同月廿一日来卯年江戸御供詰被仰付候

天保三辰五月廿六日御雑用方下代其儘炭薪方下代兼被仰付

同五午九月四日御雑用方下代振退勤被仰付候

同六未六月晦日御代官酒井金五左衛門下代へ

同年閏七月十七日御代官跡部又八下代へ組替

同九戌八月二日御代官多部三左衛門下代へ組替

同十一子六月十九日芝原領松尾伝蔵下代へ組替

同十二丑二月廿九日広瀬領松村久右衛門肩下代へ組替

同十四卯十二月廿二日第右衛門与名替

弘化二巳八月九日荒川三郎太夫肩下代へ組替

嘉永二酉年五月十四日殿下領御代官請込下代江

同年七月廿六日殿下領滝沢元右衛門受込下代江組替

同四亥三月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候

安政二卯六月六日御代官受込役被指免、浮下代被仰付候

同三辰六月十六日小算格大村又右衛門御趣意方勤中不届之儀有之ニ付、御扶持被召放入牢被仰付候ニ付、右又右衛門儀弟ニ付伺之上慎、同廿一日被指免候

同年同月廿五日右又右衛門同趣之処、今廿五日於場所打首被仰付候ニ付、伺之上慎、七月二日差免候

同年八月五日玉薬方下代へ

安政四巳三月廿五日今庄広瀬領御代官方下代へ、但肩下代嫡へ

同五午二月九日御預所御代官川地権内下代へ

同六未八月十六日東郷粟田部領御代官受込下代へ

同七申正月三日病気願之上御暇被下、倅雅太郎与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

大村雅太郎

一切米八石弐人扶持

如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候

万延元申五月廿九日御武具方下代へ

同二酉正月廿日御台所下代へ

文久二戌三月廿九日江戸詰出立

同三亥三月廿三日御前様御供ニ而帰着

文久三亥七月十七日制産方下代江

元治元子七月廿四日御模様ニ付早速上京被仰付、在京中御台所下代兼相勤候様被仰付、同廿五日出立、夫ゟ長征、丑四月廿日帰

慶応元丑六月五日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候

同年七月廿一日席其儘仕出場書役江

但役席本庄多三次次

同三卯三月八日上京、八月廿日帰

明治元辰十二月十六日年中格別御用多之処出精相勤候ニ付、当年限米弐俵被下置候

同二巳二月八日上京、三月六日中納言様御供帰
同年同月廿二日奥羽越御人数出張中格別勤方ニ付、御国札壱貫匁被下、
月給米四俵、役義ニ付御足ハ被廃
同年四月九日中納言様御供東京江出立
同年九月晦日帰藩申付
同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免
同月二日東京ゟ帰
同月四日出納方附属申付候事
但筆者可相勤事
一月給米四俵当分是迄之通被下候事
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午十二月十二日会計寮勤　給禄年給方
但十六等ノ三等　未正月ゟ十三俵
同四未六月朔日御改正ニ付免職
同廿七日藩庁附属申付候事
但出納方　十六等ノ二等
同五申正月廿五日足羽県等外四等出仕
給禄方
同年五月名替
雅太郎事
大村素農衛
同年六月五日給禄渡方更ニ申付候事
同年十月十八日免出仕、同日出納課雇

大村 2

中村安太夫

一切米拾石三人扶持
寛延元辰五月十一日金津奉行平本但見下代小算格被仰付、御充行如此被
下置候
宝暦六子五月廿九日金津下代被指除、切米拾石御取揚三人扶持被下、格
式其儘ニ而御勘定所へ罷出候様被仰付候
宝暦十三未十二月晦日切米拾石三人扶持被成下、小算本役被仰付
安永三午三月廿四日果ル、倅文太夫諸下代之内へ被入

中村文太夫

一切米拾石三人扶持
寛政元酉十月廿九日仕出場下代ゟ小算ニ被召出、御充行並之通被下置候
文化二丑六月廿九日病気ニ付御奉公難相勤候ニ付、養子円助与申者へ立
替願之通被仰付、御充行八石弐人扶持被下置、諸下代之内へ被入

中村円助

一切米拾石三人扶持
文化二丑八月五日御勝手役仮預り下代ゟ小算被召出、御充行並之通如此
被下置
同三寅十二月廿五日文五右衛門与名替
同十二戌（マヽ）十二月廿五日文太夫与名替
文政四巳正月廿九日及大病御暇相願、養子丈左衛門諸下代之内へ被入

中村丈左衛門

一切米八石弐人扶持

文政四巳二月六日養父文太夫病気願之上御暇被下、養子諸下代之内へ被入候ニ付増割入被仰付

同十月九日御奉行桑山十蔵下代勤被仰付、御充行並之通被下置

同五午三月十八日宮北長左衛門下代勤書役へ、当分仮

同六未二月十七日御預所御奉行下代勤へ

同五月廿六日御奉行今村伝兵衛書役下代勤へ

同十月十二日御預所郡奉行下代勤へ

文政十亥十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格被成下候

天保八酉九月十六日出精相勤候ニ付跡目小算ニ被成下候、但勤向是迄之通

一切米拾石弐人扶持

天保九戌七月十一日御充行弐石御増、都合如此被成下、御勘定所勤被仰付候

同十四卯四月廿五日親丈左衛門病身ニ付願之上御暇被下置

中村定次郎

一切米拾石弐人扶持

天保十四卯四月廿五日親丈左衛門病身ニ付願之上御暇被下、無役小算被召出、御充行如此被下置候

同十五辰正月十九日勤役被仰付候

嘉永二酉年六月十日御右筆部屋為御用江戸表へ立帰り被仰付、同廿九日出立

同年十二月廿八日左之通名替

定次郎事

中村安太夫

同三戌年八月十九日御帳付見習被仰付

但席南部新平上江被入

同四亥四月九日今般公方様右大将様神田橋御住居江御立寄無御滞被為済、右御用掛り出精ニ付、銀拾匁被下置候

同年九月三日出精相勤候ニ付御扶持方壱人扶持御増、都合

一切米拾石三人扶持

如此被成下候

同五子六月廿三日於江戸表内願之趣も有之ニ付御帳付見習被差免、小算元席へ被入、御充行是迄之通被下置候

但嘉永二ゟ江戸長詰也

嘉永五子七月廿一日帰着

中村信蔵

一切米八石弐人扶持

安政二卯五月三日養父安太夫病身ニ付願之上御暇被下、御充行如斯被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候

同年十月六日追廻方下代江被仰付候

安政四巳三月廿七日三国口銭方下代へ、但家内引越

同年十二月左之通改姓

中村事

大村信蔵

文久二戌正月廿五日出精相勤候ニ付、別段之訳を以役席小寄合格ニ被成下候

元治二丑正月廿日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候

同年二月六日御広敷書役江

慶応三卯正月廿九日御代官方下代江

同年二月十七日左之通名替

信蔵事

大村淳助

同四辰八月廿五日粟田部領江組替

明治二巳七月十九日司計局下代勤

但租税御所務方手伝江

同月廿五日総会所引立勘定方江　月給壱俵

同年十一月廿二日民政局筆者申付候事

但惣会所勤

同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下

同三午二月廿四日民政寮算者指免候事

同月廿九日下馬御門太鼓御門三ノ丸南御門当番申付候事

同年七月八日当分戸籍方申付候事

同月

淳助事

大村雄助

同年十月十九日会計寮附属

但御蔵方

一下級

同年十二月十二日会計寮勤　明り御蔵方

但年給五俵

同五申正月廿五日今般改正ニ付御蔵方指免候事

同年七月四日貨幣種類取調中雇申付候事

同廿九日取調相済候ニ付差免候事

同年九月十五日当壬申坂井港納米中雇申付候事

大村 3

岡田喜太郎

一切米九石弐人扶持

文化十四丑年八月六日御先乗頭堀平太夫組岡田金太夫与申者跡へ被召抱、

翌七日御奉行今村伝兵衛組明跡江御入人ニ被仰付、御充行

一切米七石弐人扶持　竹内喜太郎

如此被下置候

文政八酉十月朔日出役浮下代勤被仰付、御充行並之通

一切米八石弐人扶持　竹内喜太郎

如此被成下、大谷武兵衛仮預り被仰付候

同九戌三月十二日市村惣右衛門下代勤へ

同年十二月廿八日左之通名替

喜太郎事

甚兵衛

天保元寅二月十一日橋本順助元方下代へ

同九月十七日河村三太夫下代へ
同月十九日左之通名替
甚兵衛事
順兵衛
天保二卯二月十六日御趣意ニ付浮下代嶋崎伝太夫仮預り被仰付
同三辰五月六日若殿様奥御納戸方当分助勤被仰付
同月廿六日若殿様奥御納戸手伝当分助被指免
同六月廿四日御納戸方下代被仰付
同五午六月五日支度次第江戸詰、渡辺敬助与交代
同六未十一月四日酒井金五左衛門肩下代へ
同十二月廿日御元服御用多之処出精相勤候ニ付、銀七匁被下
同十二丑八月二日荒川三郎太夫肩下代へ
同十五辰七月廿四日同受込下代被仰付候
弘化四未正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下
嘉永二酉年七月廿五日荒所起返し出精ニ付、為御酒代銀七拾匁被下置候
同年七月廿六日南居領御代官請込下代江組替
同五子十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
安政三辰年九月十一日依願諸下代株ニ被成下候
但銀五貫匁上納被仰付候事
安政四巳正月廿五日元分銅印御講方下代被仰付
同年二月廿九日出精相勤候ニ付、米三俵ツ、年々被下置候
同五午四月六日妻着服心得違之義有之ニ付、伺之上御奉行存を以慎、同
九日差免
万延元申六月廿一日三国山岸領御代官方受込下代へ
文久二戌閏八月廿三日石場畑方支配被仰付、役米拾弐俵ツ、被下、御用
宅へ引越
元治二丑正月十六日出精相勤候ニ付別段之訳を以小算ニ被仰付、御充行
弐石壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
如此被成下候
但是迄被下置候米三俵之儀ハ以後不被下候
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之拾弐匁被下
慶応元丑七月廿一日年寄候ニ付御暇被下、倅諸下代之内江被召抱、御充
行並之通
但数年来出精相勤候ニ付、米三俵被下置候

竹内吉郎　順兵衛養子
一切米八石弐人扶持
同月廿四日諸下代之内江被召抱候ニ付、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
同三卯七月二日左之通改姓
竹内事
大村吉郎
同年八月二日御切米方御扶持方下代兼江　月給壱俵
明治二巳十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免候事
同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同年十二月九日会計寮附属申付候事
同三午六月十二日役所不締り之儀有之役前不参届ニ付押込、同十七日謹
慎中ニ候得共御用之儀ハ可相勤事、同廿二日被指免候

同年十二月十二日会計寮附属指免候事

奥村

奥村新六

一切米八石弐人扶持

文政八酉五月廿六日出役古物方下代勤被仰付、御充行並之通如此被下置

同九月四日御金方下代勤へ

同十一子年七月廿日横井宗右衛門下代被仰付、丑年迄詰越被仰付候

同十二丑七月十八日椀奉行御道具預り御台所下代勤兼帯被仰付候、但席

市川一郎左衛門次

同年九月廿五日謙五郎様御道中御供御雑用方下代勤兼被仰付候

同十三寅年五月三日先年江戸詰中不慎心得違之趣有之ニ付、浮下代被申

付押込、同月廿日押込被指免候、但平瀬五左衛門仮預り

同六月七日御城表火之番不寝役被仰付候

同九日御勝手役仮預り被仰付候

同年十二月四日御武具方下代被仰付

同年十二月九日友作与名替

天保八酉三月九日御作事方下代被仰付

同九戌正月廿四日御厩方下代江入替被仰付候

同六月廿五日御武具方下代へ

同十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候

同十一子十一月廿六日山方下代へ

同十三寅九月廿六日御納戸方下代へ

同十四卯閏九月廿五日郡方肩下代へ

嘉永元申年十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候

同二酉年四月五日年来相勤候ニ付諸下代株ニ被成下、銀六貫匁上納被仰付候

同四亥年四月十一日御広敷出役勘定役兼へ

同年八月十二日病気願之上御暇被下

奥村新太郎　養子

一切米八石弐人扶持

右諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候

嘉永四亥年十一月十六日炭薪方御材木方下代兼へ

同年十一月廿九日養父友作与申者、郡方下代勤中丸岡領樋爪為安両村と十郷用水路論、并同領川崎村等泥原新保浦地論一件等出精相勤候ニ付、銀拾四匁被下置候

同六丑十二月廿八日左之通名替

新太郎事

奥村友作

安政二卯八月十二日志比品ケ瀬御代官方江

安政四巳正月廿五日御趣意ニ付改而志比品ケ瀬領へ

文久二戌十二月十六日年来骨折相勤候ニ付、当年限米三俵被下置候

左之通名替

友作事

奥村真一郎

同三亥十二月十六日出精相勤候ニ付、別段之訳を以米弐俵ツ、年々被下置候
元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三十五匁被下
慶応二寅十二月十六日出精相勤候ニ付、別段之訳を以役席小寄合格ニ被成下候
同四辰二月五日殿下砂子坂領御代官受込下代江　月給三俵
同年四月廿一日御預所御代官受込下代江
明治二巳七月十九日御領御預所上領収納方受込　月給三俵
同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀指免
　但附送り之儀ハ追而御指図相待可申事
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月廿三日民政寮附属申付候事
　但算者勤　収納方
同年四月十九日引立方附属申付候事
同年五月九日収納方算者申付候事
同年十二月十二日民政寮勤　収納方算者
　但十六等ノ二等　未正月ゟ十六俵
明治四未六月朔日御改正ニ付免職
同廿四日任庁掌
　但地方　十六等ノ一等
同年十二月朔日任福井県権少属
同五申五月名替
　真一郎事
奥村真一（シンイチ）

同年八月五日地券掛り申付候事
同年十月十八日地券掛り専務

小嶋

小嶋道仙

一切米八石弐人扶持
文化十二亥八月廿九日養父専蔵病身ニ付立替被仰付、跡表小坊主ニ被仰付、御充行並之通被下置候
文政二卯秋江戸詰
同三辰十月廿四日表御坊主被仰付
同六未江戸詰
同八酉年江戸詰被仰付
同九戌四月十八日来亥年迄詰越被仰付
同十一子江戸御供詰被仰付
同十二丑二月四日牧田林益与交代被仰付
同年十月六日謙五郎様御附奥御坊主被仰付候
同年御迎立帰被仰付候
同十三寅閏三月廿日不宜趣相聞候ニ付押込、同四月五日押込被指免
天保三辰二月十四日御趣意ニ付表御坊主被仰付候
同年八月十六日謙五郎様御附御坊主被仰付候
同六未十一月廿九日当春不慎之趣相聞候ニ付押込、同十二月廿五日押込被指免候
同十四卯閏九月廿五日巍光院様御逝去ニ付表御坊主被仰付

同十一月九日来辰年江戸御供立帰御道中御幕被仰付候
同十五辰正月廿九日御見送罷越候処、御人少ニ付御指留被成、打込勤被仰付候
同年四月十五日年来相勤候ニ付一統格被成下候、席永井良琢共
同五月十七日御時計役兼帯勤被仰付候
同年十一月廿四日当春江戸御参勤御道中御供立帰罷越候処御指留ニ相成、御帰国御供ニ而罷帰候ニ付、詰ニ御立被下候
嘉永五子七月廿日年来相勤候ニ付、米三俵ツヽ年々被下置候
安政二卯六月廿九日御道具役被仰付、御充行一石御増、都合
一切米九石弐人扶持
如此被成下候
但是迄年々被下米三俵之儀者以後不被下候事
同三辰八月朔日病気願之上御暇被下、養子表御坊主ニ被仰付、御充行並之通被下置候

小嶋文斎　道仙養子
一三人扶持
嘉永五子二月十六日表御坊主ニ被召出、御扶持方如此被下置候
同七寅二月十四日病身ニ付願之上御暇被下候

小嶋専益　寅彦事　道仙養子
一三人扶持
嘉永七寅十一月廿五日表御坊主ニ被召出、御扶持方如斯被下置候
安政三辰八月朔日養父道仙病気願之上御暇被下、御充行並之通
一切米八石弐人扶持
如是被下置、表御坊主ニ被仰付候
安政四巳正月廿六日不寝役定助被仰付候
同五午九月十四日病身ニ付願之通御暇被下、養子留之助与申者表御坊主ニ被召出、御充行並之通

小嶋仙哲　同日左之通名替
一切米八石弐人扶持
万延元申閏三月廿五日奥御坊主被仰付候
文久元酉三月御供詰
同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立
同年八月十七日御参府御供ニ而出立
元治元子八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、丑三月帰
慶応三卯三月十日御上京御供出立、四月四日帰
同四辰正月廿八日小寄合格ニ被成下、御小道具方御召料方下代兼被仰付、左之通名替
仙哲事　小嶋専右衛門
明治卜改元、十二月十二日上京
同二巳六月廿日名替
専右衛門事　小嶋専八
同年十一月七日今般御改革ニ付役儀被免候事
同月廿五日右同断、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下

同三午正月十日生兵修行指出候
同年十月十九日会計寮附属
但戸籍方
一下級
同年十二月十二日右附属指免候事
同四未正月廿四日川口御門番申付候事

大橋

大橋文栄　立合組小頭大橋文右衛門倅
一
天明四辰七月十四日御勘定所坊主被召出、御充行並之通被下置候
寛政四子十二月廿八日御札所御貸方水野新助下代被仰付、御充行並之通
一切米八石弐人扶持
如此被成下
同日文八与名替
同五丑九月八日御代官古石百右衛門下代被仰付

大橋文五右衛門
一切米八石弐人扶持
文化元子十一月廿五日養父文八病気願之上御暇被下、跡御代官古石百右
衛門下代へ被召抱、御充行並之通如斯被下置
文政二卯十一月四日御代官川村五左衛門下代へ
同五午年四月廿日御代官雪吹牛兵衛請込下代被仰付候
同九戌十二月十六日年来出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同十三寅五月十日浮下代平瀬五左衛門仮預り被仰付候
同年七月廿六日御台所方下代被仰付
天保二卯十二月廿一日御代官跡部又八請込下代江
同五午年十二月十六日年来出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候

大橋文之丞
一切米八石弐人扶持
天保八酉四月九日養父文五右衛門年寄候ニ付御暇被下、諸下代之内へ被
召抱、御充行並之通如此被下置、御勝手役仮預り仰付候
一切米九石弐人扶持
天保九戌十一月廿日御奉行川村文平書役下代被仰付、御充行壱石御増、
都合如此被成下
同十二月六日文太夫与名替
同十亥二月朔日市村久太郎書役下代へ
同十一月九日東郷仁右衛門書役下代へ組替、来子年江戸詰被仰付候
同十一子四月廿五日瓦方下代不快中江戸廻り諸瓦取扱方仮下代被仰付、
三国并所々瓦焼竈元江も度々罷越、格別心配相勤候ニ付御褒メ被成下
同十二丑六月二日御預所仕出場書役下代へ
天保十二丑十二月二日御預所仕出場極方下代へ
同十三寅七月十一日東郷仁右衛門極方下代被仰付
同十四卯四月廿五日月番御奉行仮預り被仰付
同年八月廿一日岡田金左衛門極方下代へ
同十月六日西尾源太左衛門極方下代へ被仰付、来辰年江戸詰

同十五辰三月四日御献上御馬壱疋西尾源太左衛門江戸詰ニ付、引纏被仰付候ニ付道中御厩仮下代被仰付候
弘化二巳六月四日市村勘右衛門極方下代へ
同十一月廿日佐々木小左衛門極方下代へ
同十二月廿六日文五右衛門与名替
同三午三月十六日市村勘右衛門極方下代へ
同四未正月十二日当時月番御奉行仮預り
同十三日雨森儀右衛門極方下代へ
同年同月十六日小算ニ被召出、御充行並之通被下置候
一切米拾石弐人扶持
同正月十七日当未年江戸詰被仰付
弘化四未年十月五日御出入町人馬喰町御貸付金御拝借之義相進メ候節、断候与ハ乍申不束至極之趣有之ニ付、小算格江御下ケ押込、同月廿五日押込被差免御国表江被相返候旨被仰付候
嘉永四亥年正月廿五日小算ニ被成下、海岸台場掛り振退月勘定方定頭取助兼被仰付候
同五子年四月廿五日此度小算之者共以前へ被復壱人扶持御増、都合一切米拾石三人扶持
如是被下置候
嘉永七寅年十月十三日大小銃并弾薬御製造掛り被仰付候
安政元寅十二月五日今般大橋御修覆出来ニ付、為御褒美銀弐拾匁被下置候、同日右同断之処格別出精ニ付、銀拾匁被下置候
安政二卯九月七日為立帰出府、同年十一月廿日帰着
同年十月十一日立帰出府之処御指留被成、月勘定方定頭取助被仰付
同三辰四月廿日今度黄門様御遠忌ニ付、於運正寺御廟御造営被仰出候処、宜出来ニ付銀五匁被下置候
安政四巳正月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
同年四月五日御奉行ゟ届、先達而御趣意ニ付御製造方掛り被指免候
同五午正月廿日御広敷勘定役書役兼へ
文久二戌十二月廿二日役儀被指免
文久三亥十月十五日京都表江出立、子六月十五日帰
元治元子九月廿九日京都岡崎御屋敷御普請中格別心配相勤候ニ付、銀百匁被下置候
同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当三十三匁被下
慶応二寅八月十六日上京、同月廿九日帰
同年十二月十六日出精相勤候ニ付、小算上席ニ被成下候
明治二巳六月十七日名替
文五右衛門事
大橋文平
同年八月五日病身願之上御暇被下、養子悦五郎小算ニ被召出、御充行

大橋悦五郎

一切米十石三口
如此被下置候
同年九月　御預所租税方不時手伝
同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免

同月七日司計局出納方附属申付候事、筆者取次兼
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾九俵五升六合被下
同三午二月七日下級ニ申付候事
同年六月三日民政寮附属申付候事
但勘定方算者
一下級
同月十二日故丹羽七郎御咎被仰付、先役中不念之段奉恐入候、伺之上慎
被仰付、同十九日被指免
同年十二月十二日民政寮勤　勘定方算者
但准十六等　未正月ゟ九俵
同四未二月十五日藩制一集相成候ニ付、御改正中不及出仕候事
同年三月四日ゟ御領地方江手伝出仕事、但伺ニ而
同年十二月十八日入間県ゟ呼出ニ付出立
同五申　史生

大西

野坂三右衛門　万兵衛
一切米七石
文政元寅六月十七日三国御趣法方下代勤へ出役
同三辰六月四日与内方下代勤被仰付、御充行並之通
一切米八石
如此被下置
同七申六月廿一日御代官方下代勤へ
文政十亥十一月五日川地権内下代勤へ
同十三寅二月廿八日津田藤左衛門受込下代へ
天保五午正月廿二日
野坂三右衛門
右名替
同十一子二月廿日御預所御金方下代江
同年十二月六日年寄候ニ付御暇被下、養子忠四郎与申者諸下代之内へ被
召抱、御充行並之通

山形忠四郎　野坂忠四郎
一切米八石
如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付
同十二月廿六日
野坂事
山形忠四郎
右改性
同十三寅七月十九日炭薪方御材木方兼下代へ
同十四卯正月廿日御蔵所下代へ
同二月二日牧野加兵衛下代へ組替
弘化二巳二月五日役前不参届趣相聞候ニ付押込
同四未正月十七日仕出場書役下代へ被仰付、月番御奉行仮預り当時御預
所仕出場書役下代へ
同三月七日岡田金左衛門書役下代へ
嘉永元申十一月廿一日川村文平書役下代被仰付、来酉年江戸詰被仰付

嘉永元申年十二月廿四日左之通名替

忠四郎事

山形五左衛門

同二酉年六月十七日当冬御入輿ニ付御用掛り被仰付

同年十二月十五日今般御前様御引移御婚姻前後無御滞被為済御満足思召候、右御用掛り出精ニ付銀拾五匁被下置候

同三戌年五月七日御預所仕出場書役下代へ

同四亥年正月十六日御預所仕出場極方下代江

同年十二月廿三日原平左衛門極方下代へ組替

同七寅年三月廿二日勝木十蔵極方下代江

同年三月八日江戸詰出立

同年十一月廿八日御門所入之義不埒至極之趣相聞候ニ付立替被仰付、右跡諸下代江被召抱、御充行並之通

山形孝太郎

一切米八石弐人扶持

安政二卯二月十五日養父五左衛門儀先達而立替被仰付候跡諸下代之内江被召抱、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候

山形元吉

一切米八石弐人扶持

安政五午七月廿五日養父孝太郎病身ニ付願之上御暇被下、諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候

万延元申十一月五日御切米方御扶持方下代兼へ

文久二戌四月廿九日古物方下代へ

同年十二月十三日左之通改姓名

山形元吉事

大西忠次郎

同三亥七月十七日御作事方下代江

元治元子十月　長征、同二丑二月朔日帰

慶応元丑九月七日病気ニ付願之通御暇被下、養子忠太郎与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

大西忠太郎

一切米八石弐人扶持

如此被下置、高嶋孫兵衛仮預り浮下代被仰付

同二寅八月十一日御切米方御扶持方下代兼江

同四辰三月三日御金方下代江

明治卜改元、十月廿一日奥州若松表へ出張被仰付、同廿九日出立、巳三月十七日帰

同二巳十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免　年給壱俵

同月四日御金方附属申付候事

但年給壱俵被下候事

同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下

同三午二月七日今般御改革ニ付御金方被廃候、依之勤向指免候事

同日貨幣局算者申付候事　下級

但東京詰交代之事、二月十三日出立、未正月廿一日帰

同年十二月十五日民政寮勤　貨幣局算者也

但准十六等
同四未二月十四日東京詰中失却も有之ニ付金廿両被下候事
同四未四月廿八日洋学修行東京行願之通
同日他国修行ニ付職務指免候事
同年五月二日東京江出立

大瀬

大瀬弥作　出淵伝之丞組物書

安政五午正月十五日年来出精相勤候ニ付諸下代之内へ被召出、御充行並之通、但於江戸表
一切米八石弐人扶持
如此被下置候
但跡株御定之銀高半分上納ニ而被下置候
同日当分勤向之儀者出淵伝之丞詰罷在候内是迄之通
安政五午五月廿一日江戸表ゟ帰着
同廿二日西村源左衛門仮預り江
同六未二月廿九日御切米方御扶持方下代兼へ
同年七月五日御腰物方下代へ
文久元酉六月廿日御厩方下代へ
同二戌閏八月九日御預所御金方下代へ
文久三亥三月十日役其儘芝御陣屋詰引揚出立
元治元子三月廿五日御都合も有之ニ付、当秋迄詰延被仰付候
同年六月廿四日昨秋詰中御目付御記録書継被仰付、格別出精相勤候ニ付小寄合格ニ被成下、金五百疋被下置候
同年七月十六日江戸ゟ帰
元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
一同二丑正月左之通名替
弥作事
大瀬忠左衛門
慶応元丑八月四日南居山干飯領御代官方下代へ
同四辰八月廿五日東郷品ケ瀬領江組替
明治二巳六月廿九日名替
忠左衛門事
大瀬弥五平
同年七月十九日司計局下代勤申付候事
但租税御所務方手伝江
同年十一月十九日御預所租税方当分書記申付候事
同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午三月晦日御家従附属申付候事
但中奥勘定役
但支度出来次第東京詰申付候
同年四月三日右同断被免候事、但内願也
同月五日山里御門御金土蔵当番申付候事
同年六月廿三日病院庶務方附属申付候事
但下級
同年八月十四日病院附属指免候事
同月十九日五十六歳以上ニ付諸勤御用捨被成候事

同年十一月晦日三ケ所当番江

大久保

桜井嘉七

一切米八石弐人扶持

天保六未閏七月十七日出精相勤候ニ付、御作事組下代ゟ其身一代御充行

如此被下置、御作事方下代被仰付

同年閏七月廿四日此度大殿様御遺骸此表へ被為入候ニ付、御用懸り被仰付候

同七申八月五日今度天梁院様御霊屋御普請御出来之処、出精相勤候段御褒詞被成下、御目録銀拾五匁被下置、別段銀五匁被下

天保九戌五月十二日江戸御屋形御普請於此表切組被仰付候ニ付、右懸り被仰付候

同七月十一日御普請御用ニ付江戸詰被仰付

同七月廿四日御屋形切組御用懸り并江戸詰等被仰付置候処被差免候

天保十亥九月十六日諦観院様御霊屋御普請出来之処出精ニ付、為御酒代銀拾五匁、別段五匁被下置候候

天保十一子三月廿日出精相勤候ニ付、格別之趣を以諸下代之内へ被入、其儘御作事方下代へ被差置候

同十二月六日来丑春江戸詰被仰付

同十三寅六月十二日荒川三郎太夫下代へ被仰付

弘化二巳八月九日小堀伝右衛門肩下代へ組替

同四未七月晦日三国領御代官下代組替

同八月二日砂子坂領御代官肩下代へ組替

嘉永元申八月二日山干飯領御代官肩下代へ組替

同二酉年七月廿六日殿下領江右同断組替

同三戌年二月廿四日広瀬領御代官肩下代へ組替

同五子正月廿一日芝原領御代官方肩下代へ組替

同年八月四日南居領江組替

安政四巳正月廿五日御趣意ニ付改而南居山干飯領へ

同六未二月廿九日御武具方下代へ

同年七月五日椀奉行御道具預り御台所方下代兼へ

同年十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候

元治元子八月三日役前不束之趣有之ニ付押込、同十七日差免

同年九月十八日年寄候ニ付御暇被下、倅諸下代之内江被召抱

同年十月十八日先達而年寄候ニ付御暇被下、跡養子清三郎与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

桜井清三郎

一切米八石弐人扶持

如此被下置、池村半兵衛仮預り浮下代被仰付候

同年十二月賊徒一件、御留守御用相勤候ニ付十弐匁被下

慶応元丑閏五月四日病身ニ付願之上御暇被下、養子恒次郎卜申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

桜井恒次郎

一切米八石弐人扶持

如此被下置、高嶋孫兵衛仮預り浮下代被仰付
同三卯五月十六日御切米方御扶持方下代兼江
同四辰四月廿一日御蔵所下代江　年給壱俵
明治二巳十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免候事
同月四日御蔵方附属申付候事
　但年給壱俵被下候事
同三午十二月十二日会計寮勤　明里御蔵方
　但年給五俵
同四未正月十四日大久保利平株相対替願之通、右ニ付利平拝地之儀も其
儘譲受度旨願之通
米弐拾九俵五升六合
同年六月廿八日藩庁附属申付候事
　但明り御蔵方　等外ノ二級
同年七月左之通名替
　桜井事
　大久保恒次郎
同年十二月廿四日改姓ニ付免職
同五申五月名替
　恒次郎事
　大久保恒（ヒサシ）

小谷[1]

横山吉左衛門　勇蔵事
一切米八石
寛政七卯年十一月十二日御先筒組へ被召抱
同九巳年御作事方渡
同十午年下領郡方渡
文化十三子二月晦日諸下代之内へ被入、浮下代嶋崎伝右衛門仮預被仰付
同年六月四日御雑用方青木理兵衛下代へ
同十四丑六月十六日御切米方下代へ
文政二卯二月廿五日御蔵奉行坂井安太夫下代へ
文政三辰十二月十九日御趣意方下代へ
同五午八月六日御作事方下代へ
同六未二月五日御代官竹内五郎兵衛下代へ
文政十三寅三月十二日川地権内下代へ
天保三辰四月九日厚治丈左衛門下代へ
同六未六月晦日御広敷書役へ
同七申年六月九日吉左衛門事千左衛門与名替
同年六月廿五日年来相勤候ニ付小寄合格ニ被成下、同日御預所御金方下
代へ被仰付
同八酉七月晦日御勘定奉行生駒五左衛門下代へ
同十亥十一月八日楷五郎様御附御広敷書役奥御坊主勤兼被仰付
同十一子八月廿六日玉薬方下代被仰付
同十五辰十二月十六日年来出精相勤候ニ付、小算格被成下
弘化四未正月十六日数年相勤候ニ付、米三俵ツヽ年々被下置候旨被仰付
嘉永元申年十月二日五拾年来相勤候ニ付、諸下代之内江被入候
　但惣年数当申年迄五拾四年、内出役勤三拾三年目也

但銀七貫匁上納被仰付候
同年同月九日病気願之上御暇被下、養子次郎八与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

横山次郎八

一八石弐人扶持
如斯被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
同廿四日表御坊主御雇被仰付
嘉永二酉年二月十七日御腰物方下代被仰付候
同三戌年七月十一日病身ニ付願之上御暇被下、養子留吉与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

横山留吉

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、勝田与右衛門仮預り被仰付候
嘉永四亥年正月廿六日御扶持方下代江
同年十二月廿四日左之通改姓名致候
横山留吉事
小谷伊右衛門
同五子六月十五日御雑用方下代へ
同年十月廿九日御厩方下代へ
同六丑十二月廿八日左之通名替
伊右衛門事
小谷尚平
同七寅二月廿日御蔵奉行長文五右衛門下代へ
但松田専蔵罷在候御役宅へ引越
安政元寅十二月十一日仕出場書役被仰付、月番御奉行仮預り当時御預所仕出場書役仮江
同二卯正月廿六日長谷部甚平書役江
安政二卯九月廿六日御預所御代官肩下代へ
同四巳正月廿五日御金方下代江
同五午二月九日追廻方下代江
万延元申四月五日御広敷方書役へ、当秋江戸詰
文久二戌八月五日年来困窮相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同年九月十七日江戸表ゟ帰着
同年十一月七日金津芝原領御代官方下代江
元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
慶応四辰六月十二日三国山岸領御代官方請込へ
同年八月廿五日七領之処九領ニ相成、三国領江
明治二巳七月十九日三国領収納方受込　年給三俵
同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀被免
但附送り之儀ハ追而御指図相待可申事
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月廿三日民政寮附属申付候事
但算者勤　収納方
同年四月十九日引立方附属申付候事
同年七月十日引立方算者指免候事
同月廿三日歩兵修行指出候也

同年九月十七日会計寮附属申付候事
地方掛り筆者也
同年十月十九日下級ニ被成下候
同年十二月十二日会計寮勤　地方筆者
但年給五俵
同四未二月十五日藩制一集相成候ニ付、御改正中不及出仕候事
同年三月四日ゟ御藩地方江手伝出仕之事、但伺ニ而、六月朔日被免
同年七月廿九日県庁附属申付候事
但桜馬場御蔵方　等外ノ二級
同五申正月廿五日今般改正ニ付御蔵方指免候事
同年七月四日貨幣種類取調中雇申付候事
同廿九日取調相済候ニ付差免候事
同年八月七日新潟県へ採用ニ付早々可致出頭事

小谷 2

小谷次兵衛

一　享和二戌年迄錠前番相勤候処
同年九月病気ニ付願之上立代り被仰付候

小谷小左衛門

一　同年九月養父次兵衛跡錠前番江被召抱
文化五辰二月病気願之上立代り被仰付

小谷金兵衛

同年二月養父小左衛門跡錠前番江被召抱
同六巳隆徳院様御逝去後御人減ニ付浮人ニ被仰付、其後再錠前番被仰付
文政七申五月病気願之上立替被仰付

小谷平八

文政二卯九月御住居小坊主定御雇被仰付
同七申五月実父金兵衛跡錠前番江被召抱
同十亥三月表御出居番勤被仰付、同年五月御免被成
天保五午九月病気願之上立代り被仰付

小谷安之助

同年九月兄平八跡錠前番へ被召抱
同十三寅九月病気願之上立替被仰付

小谷平八　定御広敷錠前番

同年弟安之助跡再錠前番江被召抱
同十四卯七月霊岸島御住所御用部屋書役勤被仰付、同年八月御免被成
弘化四未二月非番之節御勘定所留付被仰付
嘉永元申三月廿六日当分御武具方下代御雇兼被仰付
同二酉年三月十六日御武具方下代御雇被指免
安政三辰六月十七日病死

小谷又次郎　御広敷錠前番仕出場留付

一切米七石弐人扶持

安政三辰年六月十八日平八明跡江被召抱候

文久元酉八月八日当分御預所下代江

文久三亥正月十五日出精相勤候ニ付、諸下代之内江被入候

一亥六月九日御作事方下代へ

一同年七月大砲打方被仰付

元治元子十月廿七日御預所下代江

慶応元丑五月十五日天徳寺御霊屋御普請出精ニ付、銀三拾匁被下

但先役中

同二寅正月十五日出精相勤ニ付壱石御増、都合

一切米八石弐人扶持

如此被成下候

同年二月九日左之通名替

又次郎事

小谷雄蔵

同年十一月廿三日御台所方下代兼江

同三卯九月廿七日御台所下代兼之儀ハ被指免候

同四辰正月御国表へ引越被仰付、然ル処直ニ詰

同年三月六日御趣意ニ付支度出来次第御国表へ罷帰候様被仰付、四月廿六日着

同年閏四月九日御預所下領御代官方下代江

同月廿五日今般江戸御屋敷引払諸向跡仕廻等致心配候ニ付、金七百疋被下置候

明治二巳七月十九日御領御預所下領収納方下代　月給壱俵

同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀指免

但附送り之儀ハ追而御指図相待可申事

同月廿五日右同断ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下

正月廿五日歩兵修行指出候

同三午二月廿三日民政寮附属申付候事

但引立方筆者

一下級

同年七月十日引立方算者指免候事

同年八月十四日病院附属申付候事　但下級

同年十一月十三日右指免候事

同月晦日川口御門番江

同四未正月廿日洋人居留所番申付候事

同年　非役

同五申五月

雄蔵事

小谷石雄（イワオ）

同年九月十五日租税課雇申付候事

岡倉

林五兵衛

一切米八石弐人扶持

文化二丑二月四日養父福岡甚右衛門病気願之上立替被仰付、跡御代官方
柳下勘七下代被召抱
同年十二月廿八日林与改姓
文政七申四月廿八日御代官方受込被仰付
同十三寅三月十五日安本佐次兵衛受込下代へ
天保二卯年正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格被成下候
同三辰七月廿四日笹倉郡左衛門受込下代へ
同五午十二月十六日年来出精相勤候ニ付、小算格被成下
天保八酉四月九日木内甚兵衛受込下代へ組替
同九戌二月廿九日年来相勤候ニ付、米弐俵ツヽ年々被下置候
同年三月十三日松尾伝蔵受込下代へ組替被仰付

林唯七

一切米八石弐人扶持
天保十亥九月十七日養父五兵衛年寄候ニ付内願之通御暇被下、諸下代之
内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、御勝手役仮預り被仰付候
但五兵衛義年来出精相勤候ニ付、御目録銀拾匁被下置候
同十一子二月廿日御金方下代へ
同年四月廿四日茂右衛門与名替
同十四卯十月廿日仕出場書役下代被仰付候、月番御奉行仮預り当時御預
り所仕出場書役下代へ
一切米九石弐人扶持
如此被成下
天保十五辰四月十五日横田作太夫書役下代へ
弘化二巳三月五日当分秋田三五左衛門書役仮下代へ
同十一日岡田金左衛門書役下代へ
同十一月廿日市村勘右衛門書役下代被仰付、来午年江戸詰被仰付
同十二月廿八日改姓、林事川合茂右衛門
同三午三月十六日原平左衛門書役下代へ
同閏五月廿八日継飛脚送り状之節不参届義在之ニ付押込、同六月六日押
込被差免
同六月廿日孫兵衛与名替
同四未五月十日秋田三五左衛門極方下代へ
弘化五申年二月五日御奉行原平左衛門極方下代江
嘉永二酉年十月十二日来戌年江戸詰被仰付候
同日中根新左衛門極方下代へ
同四亥四月九日今般公方様右大将様神田橋御住居江御立寄無御滞被為済、
右御用掛り出精ニ付銀七匁五分被下置候
同年五月七日御奉行原平左衛門極方下代へ
同年十二月廿三日小算ニ被召出、御充行並之通
一切米拾石弐人扶持
如斯被下置候
同五子四月廿五日此度小算之者共以前へ被復壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
如此被下置候
嘉永六丑三月十六日江戸詰出立、同七寅四月廿日帰着
同七寅四月廿三日御殿山出張ニ付金壱朱被下置候
安政元寅十二月廿三日病気ニ付願之上御暇被下、養子恒吉与申者諸下代

之内江被召抱、御充行並之通

川合恒吉

一切米八石弐人扶持

如是被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候

安政三辰十二月五日御切米方御扶持方兼下代へ

同年十二月廿八日左之通改姓

川合事

吉田恒吉

安政六未二月廿日古物方下代江

同年九月十二日御材木方炭薪方下代兼へ

万延二酉二月十一日御札所奉行下代へ

文久与改元、十一月十三日病気願之上御暇被下、養子捨次郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行

吉田捨次郎

一切米八石弐人扶持

如此被下置、野村治右衛門仮預り浮下代被仰付候

同二戌三月廿九日御趣意ニ付表御坊主へ

同日左之通名替

捨次郎事

吉田清弥

同四月五日小坊主へ

同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立、三月帰

同年六月三日表御坊主江

同年十二月十二日困窮相勤候ニ付、為御手当金弐百疋被下置候

但此時御右筆部や不時助也

元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下

慶応元丑十二月八日左之通改姓

吉田事

岡倉清弥

同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日帰

同三卯十月十五日左之通名替

清弥事

岡倉樑斎

明治元辰十二月十三日殿様御上京御供出立、巳二月六日帰

同二巳九月廿日名替

樑斎事

岡倉竜蔵

同年十一月十七日今般御改革ニ付奥給仕指免候事

但表給仕勤

同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下

同年十二月廿三日表給仕指免候事

但軍務寮支配之事

同三午正月十日生兵修行指出候

同年九月十五日第一大隊九番小隊入申付候事

同年十月朔日東京詰出立

同年十二月名替

竜蔵事
岡倉竜次郎

同月八日常備第七小隊入
同四未二月廿三日東京府出仕申付候事
但町会所掛り可相勤事
同年八月十四日東京府出仕
同年　東京府少属

奥田

市川一郎左衛門　政七事　御旗

一切米八石
文政五午閏正月十二日小算市川一郎左衛門義及大病御暇相願候ニ付、願之通御暇被下、倅政七与申者諸下代之内へ被入、御充行八石弐人扶持被下置、御勝手役仮預り被仰付
同十六日跡部主計組へ増割入被仰付
同八月六日御厩方下代勤へ
同十亥八月廿九日椀奉行御道具預り御台所下代兼へ
同十三寅十月十四日御台所御膳所向御倹約懸り
同年十二月十五日来卯江戸御供詰被仰付
天保二卯二月廿日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下
同三月十七日御台所向御省略格別出精相勤候ニ付、御褒詞被成下
同三辰九月廿五日江戸詰中不届之趣相聞候ニ付立替

前田兵太夫　市川事

一切米八石
天保三辰十月十四日養父一郎左衛門立替被仰付、跡諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下、嶋崎伝太夫仮預り被仰付
同五午六月五日古物方下代へ
同年十一月廿六日仕出場書役下代月番御奉行仮預当時大井長十郎書役下代へ
同十二月廿四日苗字市川事前田与改
同六未年御奉行月番預り書役下代被仰付
同九月四日市村久太郎書役下代へ
同七申十月廿四日来酉年江戸詰被仰付
同八酉十月四日謹姫様御入輿御調御用懸り被仰付
同九戌閏四月廿八日蜷川林左衛門書役下代へ
同十二月七日栗原作太夫下代へ
同十二丑八月二日吉田平次右衛門肩下代へ組替
弘化二巳八月九日砂子坂領江組替
嘉永元申年十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同二酉年七月廿六日広瀬領御代官肩下代江
同五子六月廿四日今庄領御代官受込下代江
同七寅二月晦日御預所御金方下代江
安政六未七月五日御武具方下代へ
同年九月二日病気願之上御暇被下、倅千太郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行

前田千太郎

一切米八石弐人扶持

如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候

文久二戌三月十一日表御坊主江

同日左之通名替

千太郎事

前田良節

元治元子九月廿日上京、十一月十三日帰着

同年十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下

慶応元丑四月十一日御書物方并御時計役兼帯介へ

同年閏五月朔日不寝役不時助江

同月四日不寝役御坊主江

同三卯三月十日御上京御供出立、四月四日帰

同四辰正月廿九日奥御坊主被仰付

明治卜改元、十二月十三日殿様御上京御供出立、巳二月六日帰

同二巳五月十九日支度出来次第東京詰被仰付出立、十一月廿四日帰

同年九月廿一日名替

良節事

前田兵介

同年十一月廿五日御改革ニ付、更ニ御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下

同年十二月廿三日表給仕指免候事

但軍務寮支配之事

同三午正月十日生兵修行指出候、但勝手向之儀ニ付内証仕切也

同年七月三日（マヽ）

前田竹松　十六歳

一米弐拾弐俵壱斗八合

前田平作　但代勤　出生卒族大瀬藤十郎弟　廿一歳

同月四日第二大隊九番小隊申付候事

但年給弐俵

同年七月十七日名替

前田事

奥田平作

一同年十二月十八日武二郎卜改

同四未正月十三日竹松儀使部見習昨冬ゟ申付置候処、御用弁ニ相成候間

見習中代勤被免

奥田竹松

岡井

岡井喜右衛門

一切米八石弐人扶持

享和三亥九月河合太郎太夫組へ被召抱、江戸詰四詰罷越外立帰壱度右詰之内

同十三子年（文化）表御納戸下代勤兼帯被仰付

同年御台所下代勤兼帯被仰付

文政二卯十一月ゟ孝顕寺書院御再建御用掛り被仰付
同三辰八月八日出役下代勤被仰付
同十日御預所御代官雇下代被仰付
同十一月二日御金方生駒弥五右衛門下代勤被仰付
同六未二月六日御作事下代勤へ
同七申八月九日産物方下代江
同九戌十月十五日永田順右衛門下代勤へ
天保六未十一月九日炭薪方御材木方兼下代江
同七申四月十七日志比領拾弐ケ村開田被仰付候ニ付、開田中木内甚兵衛
仮下代被仰付候
天保八酉四月九日志比領御代官木内甚兵衛下代被仰付、元席江被入
同九戌八月二日御代官厚治丈左衛門下代へ組替
同十亥九月十七日南居領御代官渥美助左衛門受込下代被仰付
天保十二丑八月二日山岸領御代官松尾伝蔵受込下代へ組替
同十五辰七月廿四日与内方下代へ
同年十二月十六日年来出精相勤候ニ付小寄合格ニ被成下候、席佐野円左
衛門次
弘化五申年正月廿四日南居領御代官肩下代被仰付、御代官方惣列本庄作
左衛門次江
嘉永二酉年七月廿六日山岸領御代官肩下代江組替
同四亥二月廿日願ニ依而諸下代株ニ被成下候
但銀五貫匁上納

岡井次郎作

一切米八石弐人扶持
嘉永五子年三月廿一日親喜右衛門年寄候ニ付御暇被下、諸下代之内へ被
召抱、御充行如此被下置、西村源左衛門仮預り被仰付候
同年六月十五日御金方下代被仰付当秋江戸詰、同廿五日出立、同六丑六
月十二日帰着
同七寅二月晦日今庄領御代官肩下代江
安政元寅十二月廿五日左之通名替

次郎作事
岡井喜右衛門

安政三辰三月五日金津領御代官肩下代へ組替
同四巳正月廿五日御趣意ニ付改而東郷粟田部領へ
同六未八月五日殿下砂子坂領江組替
元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三十五匁被下
慶応二寅十二月四日病気ニ付内願之通役儀被指免、渡辺藤太夫仮預り浮
下代江
同月廿四日病気ニ付願之通御暇被下、養子忠助与申者諸下代之内江被召
抱、御充行

岡井忠助

一切米八石弐人扶持
如此被下置、池村半兵衛仮預り浮下代被仰付候
同三卯正月廿一日御金方下代江
同年四月十五日京都詰出立、辰四月廿日帰
同四辰五月十六日産物会所下代江

同年八月晦日会所下代被指免、会所仮預り小荷駄方附属被仰付、早速越後表出立被仰付、九月六日出立、巳三月十七日帰、但右出張ニ付御手当三両被下候

明治二巳四月七日三国運上会所下代江

同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下

同月　御改革ニ付当役指免候　軍政局支配

但附送り之儀ハ追而御指図

同月廿七日民政寮附属申付候事

同三午十二月十二日民政寮勤　浜坂運上方

但十六等心得　未正月ゟ九俵

同四未　御改革ニ付附属指免候事

同年十二月廿日八石弐口之給禄高橋新造倅栄江譲り、藤本仙衛ゟ八石三口之給禄譲受

一米弐拾五俵弐斗六升四合

同月左之通改姓

岡井事

松浦忠助

同五申二月十日今般御改正ニ付浜坂口銭方指免候事

此忠助ハ岡井仮養子ニ而又高橋新造倅高橋栄も同人跡仮養子ニ相成、忠助ハ藤本仙衛株譲受、仙衛ハ忠助持株松浦林助跡譲受候事、依之忠助之勤書ハ是切ニ而書継不申

一右高橋栄儀実家之姓を以岡井之仮養子ニ相成候ハ間違也、戸籍寮ゟ御沙汰も有之ニ付左之通相改

高橋栄事

岡井周吉

同五申七月廿五日岡井実子周吉ト立替

岡井次郎作

二　新番格以下　ワ

渡辺 1

渡辺鉄蔵

一切米拾五石三人扶持

安永二巳十一月二日甚太郎弟御徒被召出、御充行並之通被下置

同八亥江戸詰

安永九子十二月只三郎与名替

天明三卯十月江戸詰、同五巳迄詰越

同八申江戸詰

寛政四子江戸詰

同六寅十二月助左衛門与名替

同七卯江戸詰

同十午十二月助右衛門与名替

一切米拾七石三人扶持

寛政十一未九月十一日小役人格ニ被成下、御徒組頭野田善右衛門跡被仰付、御充行弐石増、都合如此被成下

文化十三子七月十一日小役人ニ被成下、荒子頭福田三平跡被仰付

文政三辰十二月十六日助左衛門与名替

文政十亥年十二月十六日年来出精相勤候ニ付御取立被成下、新番格ニ被仰付候

同十二丑十二月廿日年寄候ニ付休息被仰付候

渡辺助太郎

一切米拾五石三人扶持

文政十二丑十一月廿日親助左衛門儀年寄候ニ付休息被仰付、御充行如此被下、小役人ニ被仰付候

但文政五午十二月五日御徒ニ被召出、御充行近年御定之通五人扶持被下置相勤候処、右親跡被仰付候ニ付自分御充行揚ル

同十三寅年十一月廿五日小役人席其儘御徒勤被仰付候

但身分之儀ハ是迄之通御奉行支配、勤向之儀ハ御徒頭支配之事、御徒仲ケ間座列之儀ハ組頭之上席たるへき事

天保三辰十月廿九日来巳年江戸御供詰被仰付候

同五午八月廿九日御蔵奉行御切米方御扶持方兼尾崎庄太夫跡被仰付候

同年十二月廿五日助左衛門与名替

同八酉七月廿日雑用役尾崎庄太夫跡被仰付

同九戌八月廿六日此度殿様御尊骸運正寺へ御納被成候ニ付、御用掛り被仰付

嘉永二酉年正月十六日小普請方勝田与右衛門跡被仰付

同年閏四月廿日当年下江戸町上水樋入替御修覆之儀ニ付、不参届義有之ニ付慎罷在度旨相伺候処、御用之外慎被仰付候

同四亥二月十一月席其儘川除奉行被仰付候

同五子六月五日昨夏舟橋四ケ村立合川除普請被仰付候処、右場所へ日々出張厚致心配宜出来ニ付金弐百疋被下置候

嘉永五子十二月十六日出精相勤候ニ付、御足充行弐石被下置候

安政二卯十一月十三日川合春近用水口及大破当夏御普請之処、格別致心配候ニ付金百疋被下置候

同三辰四月廿九日年寄候ニ付立替、倅無役跡目小算被仰付、御充行

渡辺小助

一切米拾弐石三人扶持
如此被下置候
安政四巳年三月廿五日御徒御入人被仰付、御趣意ニ付右勤中御足充行三石被下置候
同年四月三日左之通名替
小助事
渡辺載次郎
同年四月十四日鎗術出精之段御沙汰ニ候
文久元酉三月御供詰
同年六月十一日江戸留守中之処、兼而勝手向不如意罷在当時極々難渋ニ付、同姓兄渡辺甚太夫世話等致遣候得共迚も行足り不申、乍併当十一月御切米之節迄御手当被成下候得者、跡々之儀者取続難渋為相凌可申旨、御徒頭内達も有之ニ付、格別之御憐評を以米八俵被下置候
同三亥八月御参府増御供被仰付候、八月十七日出立
同十二月江戸ゟ御上京御供
同年十二月廿四日当年者御徒目付他国御用多人少ニ付、別段困窮ニ付為御手当銀三拾匁被下置候
元治元子二月十三日御供ニ而京ゟ着
同年十月廿三日上京、十二月早駆ニ而帰、折返し同断出立、丑二月十三日帰
慶応元丑四月十一日出精相勤候ニ付御足充行三石御増、都合一拾五石三人扶持
如斯被成下候、但昨暮御取扱之廉々被成下候事
同年八月十二日御徒目付見習被仰付候
同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月三日帰
同年十一月十六日御徒目付本役被仰付、役中御足充行三石被下置候
同三卯四月十二日宰相様御上京御供出立、八月九日帰
同四辰三月十二日京都御警衛詰被仰付出立、九月廿二日帰
同年十一月朔日会津表江出張、巳三月四日帰着
十二月廿六日軍事方并城内倉庫取扱軍務官断獄方兼可被相勤候事
越前藩
渡辺載次郎
(明治)同二巳二月廿七日軍政局江附属被仰付、月給十俵被下、御足三石被廃
同年七月二日養子五助心得違之儀有之ニ付御咎被仰付、恐入慎伺之上指扣、同五日被免
同年十一月廿七日刑法寮権少属被仰付候
同月　今般御改革、更御充行米三拾五俵四斗五升被下
同三午三月五日御簾中様御道中御家従勤東京詰被仰付、同廿四日御供出立
同年十月三日来未ノ春迄詰越候事
十一月廿八日居住罷在候屋敷地拝地被下候
同年十二月十二日任准権少属
但監正寮勤仕
同日在京中任権少属
同四未二月十三日東京詰中失却も有之ニ付、金十両被下候事
同年三月十日帰藩被仰付候事
但右ニ付飛脚御用ニ而同月廿九日帰

同年六月朔日御改正ニ付免職
同十五日任戸長

渡辺濯三　載次郎養子

文久二戌六月五日御徒ニ被召出、御充行近年御定之通被下置候
同三亥十月十三日中将様御上京御供出立
元治元子四月廿三日右御供ニ而帰
同年八月御上京御供、夫ゟ長征、丑二月四日帰
慶応元丑八月二日上水之内御法通相背候段相聞候、依之過料銀拾五匁被仰付候
同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日帰
同三卯三月十六日御趣意ニ付御徒被召出被相止、御憐愍を以御雇被仰付、是迄之半高被下置候
同年十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付候
同四辰正月七日急々出立、二ツ屋ニ罷在、同廿六日引取
同年三月二日御警衛詰上京、閏四月十六日帰
明治卜改元、十一月六日上京、巳二月七日帰
同月廿三日堺町御門当番之節不念之儀有之ニ付伺之上指扣、同廿五日御免
明治二巳二月廿九日歩隊御雇被仰付、後整衛隊卜唱
　但席是迄之通
同年七月二日今度御祝事ニ付御通御雇申付候処、隊中申合彼是不当之事共申立候節隊長ゟ再三及説得候処、其令ニ戻り我意ニ募り心得違ニ付屹度御察当可有之処、更ニ悔悟御用欠ニハ不相成、且御祝事之折柄ニ付伍長被免押込、七月廿二日被免
同三午五月廿四日第一大隊九番小隊入申付候事
同日給禄米更ニ八俵被下候事
同年十二月八日常備第五小隊伍長　年給九俵
同日常備兵隊ニ付左之通
米拾弐俵高
同四未四月三日東京詰増出立
同年七月十七日五助事濯三与改名
同年十月十三日解隊之処東京府御用残
同五申三月十五日開拓志願ニ付東京府取締組小頭辞職相願、箱館表江罷越

渡辺 2

渡辺小兵衛

一切米八石弐人扶持
文化六巳十月十五日佐々木周助病気願之上立替被仰付、跡古物方仮預り浮下代被召抱、仕出場留附被仰付
同七午八月廿七日御切米方御扶持兼帯下代被仰付
同八未十二月十日御雑用方下代へ入替被仰付
同十二亥十二月廿四日御預所御代官下代へ入替被仰付候
文政四巳七月廿日御預所御代官受込下代勤被仰付候
同十亥二月十六日心得違之趣在之ニ付押込、同廿五日押込被差免
天保三辰十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格被成下候

同八酉二月廿一日河村三太夫受込下代へ組替
天保十亥三月廿五日出精相勤候ニ付、米三俵ツヽ年々被下置候
同年七月五日御預所御代官栗原作太夫受込下代へ組替
同十二丑正月十七日中領郡奉行中村八太夫受込下代へ
一切米拾石弐人扶持
天保十二丑四月十三日御充行二石御増、都合如此被成下、材木方炭薪方
兼下代被仰付候、但是迄被下候米三俵以後不被下候事

渡辺二蔵

一切米八石弐人扶持
天保十三寅十月十六日病気願之上御暇被下置、倅二蔵与申者諸下代之内
へ被召出、御充行並之通被下置、御勝手仮預浮下代ニ被仰付
弘化二巳五月九日籾蔵下代へ
同四未四月十一日瓦方下代へ
嘉永元申年八月廿五日役所向締り方不参届趣相聞候ニ付押込被仰付、九
月十六日被指免
同三戌年二月廿四日広瀬領御代官肩下代へ

渡辺小十郎

一切米八石弐人扶持
嘉永三戌年七月廿八日養父二蔵病気願之上御暇被下、養子小十郎与申者
諸下代之内江被召抱、御充行如斯被下置、勝田与右衛門仮預り浮下代被
仰付候
嘉永四亥年十一月十六日御台所方下代江
同五子八月廿五日御道具預り仮兼帯
同七寅年四月十七日御札所奉行下代江
安政三辰十月廿五日仕出場書役被仰付、月番御奉行仮預り当時御預所仕
出場書役仮へ
同四巳六月廿九日御奉行本多十郎兵衛書役へ
同五午十二月十六日御預所元締役土屋十郎右衛門書役へ
文久二戌九月廿二日月番御奉行仮預り仕出場極方へ
同年十二月十五日左之通名替

小十郎事
渡辺小兵衛

同三亥三月十三日江戸詰引揚出立
元治元子四月廿日江戸表ゟ帰着
同年十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
同二丑正月廿日出精相勤候ニ付小算ニ被召出、御充行並之通
一切米拾石三人扶持
如此被下置候
慶応卜改元、九月二日江戸詰出立
同二寅二月廿日家内不締之趣相聞候ニ付押込
但右御用書ハ於御国表被仰付、小兵衛在江戸ニ付三月十六日より
為慎置候旨、四月廿六日押込被置候処、御用之儀ハ今日ゟ相勤
候様
一四月六日押込被指免
同三卯十月十三日、一昨丑年九月ゟ江戸詰之処帰
同年十二月廿八日左之通名替

小兵衛事
渡辺与三平

明治元辰六月廿九日上京出立詰越、巳三月朔日東京江罷越
同二巳五月廿五日出精相勤ニ付弐石御増、都合
一切米十弐石三口
如此被下候事
同年七月廿八日先般東京御屋敷御普請出精相勤ニ付、金弐両被下候
同年八月廿六日東京表ゟ帰着
同年十一月朔日出納方附属申付候事
同月廿七日会計寮権少属被仰付候事
同月　今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合
同三午七月十七日名替
与三平事
渡辺尚介（ナヲ）
同年十二月十二日会計寮勤
但十六等ノ二等
同月廿日任准史生　未正月ゟ十六俵
但会計寮勤仕　給禄年給肝煎
同四未四月十五日七十七坪拝地被下候事
但右地所之儀ハ与力町栗間権平家屋敷相対を以譲受候地所抱地ニ
仕度願、正月廿九日願之通被仰付候事
同年六月朔日御改正ニ付免職
同廿七日藩庁附属申付候事
但出納方　十六等ノ二等

同五申正月廿五日足羽県等外三等出仕　給禄方
同年五月名替
尚介事
渡辺尚志（ナヲシ）
同年六月五日足羽県十五等出仕
給禄方兼明里御蔵米方
同年十月十八日免出仕、同日出納課雇

渡辺[3]

寺沢万助

一切米八石弐人扶持
寛政十二申十二月十日養父次田武兵衛病気願之上立替被仰付、跡古物方
堀吉兵衛下代江被召抱、御充行並之通如此被下置候
享和元酉年正月廿一日御切米方下代へ
同十二月廿五日次田事寺沢与改姓
同三亥正月廿五日御雑用方下代へ
文化二丑九月十五日御代官方下代へ
文政九戌三月七日御代官竹沢五郎右衛門受込下代へ
文政十亥十一月三日病気ニ付出役勤被指免、跡御目付野中健蔵組へ御入
人被仰付候

寺沢万吉

一切米八石弐人扶持

右同日御目付組へ被召抱
天保七申年四月廿六日諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、
嶋崎伝太夫仮預り浮下代へ被仰付候
同八酉七月六日古物方下代へ
同九戌閏四月四日御腰物方下代へ
同八月十九日当戌年江戸詰被仰付
同十二月廿三日万助与名替
同十亥二月五日来子年迄詰越被仰付
同十一子六月十九日金津領御代官多部三左衛門下代へ
一切米九石弐人扶持
天保十一子十二月十七日仕出場書役下代被仰付、月番御奉行仮預り、当
時御預所書役下代仮へ
同十二丑六月二日西尾源太左衛門書役下代へ
同十二丑八月晦日東郷仁右衛門書役下代へ組替
同十四卯四月廿五日月番御奉行仮預り被仰付
同年八月廿一日岡田金左衛門書役下代へ
同十月六日西尾源太左衛門書役下代被仰付候、来辰年江戸詰
弘化二巳六月四日秋田三五左衛門書役下代へ
同三午正月十六日秋田三五左衛門極方下代へ
同十二月九日御厩方下代へ
同四未四月十六日出精相勤候ニ付小寄合格ニ被成候、但席斎川伊助次
同日御借財仕分方懸り下代へ
嘉永三戌年五月九日志比領御代官方肩下代被仰付候
同五子年三月晦日山岸領御代官肩下代へ組替
但御代官方肩下代惣列村野幾右衛門次へ
同年八月　今庄領御代官方下代へ組替
同六丑二月廿五日金津領御代官方下代へ組替
同七寅十一月十六日病身ニ付浮下代江

寺沢弥助

一切米八石弐人扶持
安政二卯年二月二日養父万助病身願之上御暇被下、諸下代之内江被召抱、
御充行並之通如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
安政三辰二月十七日御切米方御扶持方籾蔵兼下代へ
同年十二月廿八日左之通名替
弥助事
寺沢作次郎
安政五午年十二月十六日御蔵所下代江
文久二戌正月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
同年十二月廿八日左之通名替
作次郎事
寺沢次郎三郎
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用御手当十弐匁被下
元治二丑二月廿九日役席其儘御台所下代江、支度出来次第江戸詰被仰付
元治二丑三月十三日江戸詰出立、寅三月廿三日帰
慶応元丑十二月十九日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日帰
同年十二月廿八日左之通改姓

寺沢次郎三郎事
渡辺朔二郎

同三卯四月十六日御預所御代官方下代江
同年八月二日東郷粟田部領御代官方下代江
同四辰三月十一日当分三岡八郎へ附属被仰付、同月廿二日上京、八月三日帰、然ル処同月廿二日折返シ上京、巳七月十七日帰
同年五月十一日会計官判事筆生被仰付
明治二巳十一月廿二日民政局筆者申付候事
　但惣会所勤
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午八月九日民政寮主帳申付候事
　但上級
同年十二月十二日民政寮勤　定式方
　但十六等ノ二等　未正月ゟ十六俵
同四未四月十五日居住罷在候御用地之内ニ而三十弐坪拝地被下候事
同年六月朔日御改正ニ付免職
同十四日任福井藩権少属
　但総会所商法取締
同年十二月廿日任福井県権少属
　戸籍方諸職業取調掛り
同五申三月十三日総会所勤
　但出納課へ可相属事
同年五月名替
渡辺質（マコト）

渡辺 4

福田金兵衛

一切米八石弐人扶持
明和元申年御目付今村段右衛門組へ被召抱
天明五巳年二月養父山田喜兵衛御代官松原藤右衛門受込下代相勤候処、病気願之上立替被仰付、跡直様同人肩下代江被召抱、然ル処養父喜兵衛義御咎ニ付、同年五月十三日御扶持被召放候処、同年十一月八日御預所御金方市橋新之丞雇下代江被仰付
同六午十二月廿九日御広敷書役被仰付
同八申八月五日御代官青山弥五右衛門下代被仰付
享和二戌八月廿日請込役被仰付、当時同所佐野内半右衛門受込下代
文化十一戌年十二月十六日小寄合格ニ被成下
文政四巳年十一月廿七日出役勤被指免候

福田政次郎

一切米八石弐人扶持
文政四巳年十一月廿九日出役勤被仰付、御充行並之通如此被下置、大谷八十郎仮預り
同十二月十四日御住居御台所下代勤へ、来午年江戸詰被仰付候
同六未十二月廿八日金五兵衛与名替
同七申八月十日病気願之上出役勤御免被成

福田虎三郎

一切米七石弐人扶持

天保二卯十一月廿六日御充行其儘ニ而諸下代之内へ被召抱、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付候

同三辰六月廿一日当分表御坊主御雇被仰付候

同年八月七日御雇御免

同年八月廿九日心得違之趣相聞候ニ付押込、九月廿日被指免候

同年十月六日御城表火之番不寝役被仰付

同年十二月廿四日河野口銭役所下代被仰付、嶋崎伝太夫仮預り被仰付候

同五午二月廿四日病気願之上御暇被下

福田金之丞

一切米七石弐人扶持

右同日養父虎三郎病気願之上御暇被下、諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り被仰付候

同年五月九日御城表火之番不寝役被仰付、役中御勝手役仮預り被仰付候

同六月三日表御坊主御雇

同六未閏七月十九日御城表火之番へ

同十二月十七日籾蔵下代被仰付候

同七申十二月六日御充行壱石御増

一切米八石弐人扶持

都合如此被成下

同十二月廿二日一左衛門与名替

同八酉四月九日御台所方下代江

同年四月十三日金五兵衛与名替

同九戌四月十六日不埒至極之趣相聞候ニ付立替之上押込、同閏四月五日押込被指免

福田弥太郎

一切米八石弐人扶持

天保九戌閏四月廿五日先達而立替被仰付候跡養子弥太郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り被仰付

同十一子二月十二日御扶持方千田又左衛門下代へ

同年十二月十九日福田事渡辺与改性

渡辺弥太郎

同十三寅正月廿五日御腰物方下代へ

渡辺弥三郎

一切米八石弐人扶持

天保十四卯九月十八日養父弥太郎病気願之上御暇被下、養子弥三郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付候

弘化三午二月四日瓦方下代へ

同五申年二月九日御台所下代江

嘉永元申八月廿五日瓦方下代勤中役所向締り方不参届趣相聞候ニ付、押込被仰付、九月十六日被指免

同年十一月六日御雑用方下代江

同三戌年江戸詰被仰付、三月十五日出立

同四亥四月九日今般神田橋御住居江両御丸様御立寄御用懸り出精ニ付、
銀七匁五分被下置候

渡辺音次郎

一切米八石弐人扶持
嘉永五子二月廿六日養父弥三郎病気願之上御暇被下、養子音次郎与申者
諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、勝田与右衛門仮預り被仰付候
同六丑六月二日古物方下代江
安政二卯十一月十四日御腰物方下代江
安政四巳十二月左之通名替
音次郎事
渡辺献之介
同六未正月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
文久二戌四月廿九日役席其儘御広敷書役へ
同年七月十九日病気ニ付内願之趣も有之、野村治右衛門仮預り浮下代江

渡辺周平

一切米八石弐人扶持
文久二戌八月廿八日養父献之介病気願之上御暇被下、養子周平与申者諸
下代之内江被召抱、御充行並之通八石弐人扶持被下置、野村次右衛門仮
預り浮下代被仰付
同年十二月廿八日左之通名替
周平事
渡辺弥兵衛
同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立
同年六月三日農兵弾薬方下代江
同年十月廿五日与内方下代江
元治元子五月廿二日御雑用方下代へ
同年八月廿八日御上京御供ニ而出立、夫ゟ長征、丑四月帰
慶応元丑十一月廿三日大坂表江出立、寅十月十四日帰
同二寅十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同三卯正月廿一日御蔵所下代江
同四辰四月廿一日御預所御代官方下代江　月給壱俵
明治二巳六月廿九日名替
弥兵衛事
渡辺徳治
明治二巳七月十九日御領御預所上領収納方下代へ　年給壱俵
同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀指免
但附送り之儀ハ追而御指図相待可申事
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月廿三日民政寮附属申付候事
但算者勤
同年十二月十二日民政寮勤　収納方算者
但准十六等　未正月ゟ九俵
同四未六月朔日御改正ニ付免職
同廿四日任庁掌
但地方　十六等ノ一等
同年十二月十日任福井県史生　収納方

同五申五月名替

徳治事
渡辺義知（ヨシトモ）

渡辺 5

坂下与左衛門

一切米七石弐人扶持
文政十一子十一月廿八日御充行其儘出役平瀬五左衛門仮預り浮下代被仰付候、但御趣意有之候ニ付当分是迄之通山方役所相勤候事
同十三寅二月廿八日御充行壱石増
一切米八石弐人扶持
如此被成下、高橋久助下代へ
同十二月五日炭薪方下代江
天保三辰五月廿六日炭薪方下代其儘御雑用方下代被仰付候
同閏十一月六日来巳年江戸御供詰被仰付
同五午二月十一日火之御番御人数被指出候節、御挑灯支配末々之者火事装束繰出候吟味役御勝手へ指添相勤候様被仰付候
同年九月四日御雑用方振退勤被仰付候
同六未三月十七日御材木方下代兼勤被仰付候
同年十一月九日御代官方下代へ
弘化二巳八月九日松尾伝蔵肩下代へ被仰付
同三午十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
嘉永二酉年七月廿五日荒所起返し出精ニ付、米三俵被下置候
同月廿六日東郷領高村三右衛門肩下代江組替
同四亥年四月十六日御納戸方下代へ
同五子六月十九日病気ニ付立替願指出候処、右与左衛門出役勤之者ニ付、昨年御先物頭加藤茂右衛門組斎藤徳三郎与申者、御扶持被召放候明跡先達而羅株ニ而御払被仰出候処、未夕望人も無之ニ付右羅株被相止、此度与左衛門養子弟右衛門与申者御入人ニ被仰付候ニ付揚ル

坂下弟右衛門

一切米八石弐人扶持
嘉永七寅三月十六日養父与左衛門与申者年来出役勤功も有之ニ付、御憐愍を以諸下代ニ被召出、御充行如斯被下置候、但同日西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
　但銀拾弐貫匁上納被仰付跡株之儀者不被下候事
同年四月晦日病身ニ付願之上御暇被下、養子清一郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

坂下清一郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
嘉永七寅閏七月十二日瓦方下代江
安政二卯五月十一日御腰物方下代江
同三辰六月十六日小算格高橋勝五郎御趣意方勤中不届之儀有之ニ付、御扶持被召放入牢被仰付、右勝五郎実父ニ付伺之上慎、同廿三日被指免候
同年同月廿五日右勝五郎同趣之処、今廿五日於場所打首被仰付候ニ付、

右同様伺之上慎、七月五日被指免候
同年七月廿五日病身ニ付願之上御暇被下、養子惣次郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

坂下惣次郎

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
安政三辰十二月十九日御切米御扶持方兼下代江
同四巳正月廿五日御趣意ニ付浮下代西村源左衛門仮預り
同年四月廿日御製造方下代へ
同年十二月左之通名替

惣次郎事
坂下真太郎

同六未七月廿日制産方御用ニ而長州下ノ関へ出立
文久元酉八月廿九日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
文久元酉九月八日産物会所下代へ
同二戌十二月廿八日左之通改性名

坂下真太郎事
渡辺次郎一郎

元治元子十月　長征、同二丑二月朔日帰
同二丑二月廿六日京都表江出立、夫ゟ雲州江罷越、四月十三日帰
慶応二寅正月十六日出精相勤候ニ付、別段之訳を以小算格ニ被成下候
同年三月十一日長崎表江出立、十一月廿四日帰
同三卯十二月廿八日左之通名替

次郎一郎事
渡辺浩三

同四辰六月　越後表へ出立
同年八月晦日先達而越後表へ罷越候節、柏崎於民政局権判司事被仰付候処、御国表江不相伺卒爾ニ及御請候始末、心得違至極ニ付押込、九月廿日被指免
但越後表へ罷越候義ハ御断ニ相成候ニ付罷出不及候事
明治卜改元、十月廿五日製造方下代江
同二巳正月晦日病気願之上御暇被下、養子孫三郎与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

渡辺孫三郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月十日生兵修行指出候
同四未五月十三日与力町ニ而松本高地四拾坪譲受候ニ付拝地願之通
但坪数ハ監正掛りへ

鷲田[1]

鷲田小左衛門　海福猪兵衛組　御目付物書出役勤
一天保四巳年御目付鈴木忠太夫組江被召抱
一弘化四未年物書役被仰付

一切米八石弐人扶持
文久三亥正月十六日困窮相勤候ニ付諸下代ニ被召出、御充行如此被下置候
但跡株被下之儀ニ付上納銀御用捨被成下候事
同日野村治右衛門仮預り浮下代被仰付候事
但右小左衛門
天保四巳年被召抱
弘化四未年十月十九日江戸詰之処御呼返し、浅井八百里物書役被仰付
安政五午正月廿五日御目付井上弥一郎転役ニ付、右御趣意ニ而御側物頭中村八太夫組与組替被仰付候処、拾二ケ年相勤勤功も有之ニ付、村田巳三郎物書江出役勤被仰付候
同二月十日御目付物書手伝へ
同十月七日御目付御記録書継方下代江
元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
慶応二寅十月廿六日御小人目付勤被仰付候
但御記録方是迄之通
同三卯正月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
明治二巳正月廿日評定局御記録方下代兼被仰付候
同年三月七日掌政局筆者被仰付　月給三俵
但席是迄之通
一掌政局書記支配之事
同年六月十二日左之通改
小左衛門事

鷲田直四郎
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同年十二月廿七日御張出　上級　五俵
同三午十月十八日記録方兼筆者
同年閏十月廿五日任史生候事
但年給六俵
十一月廿八日鵜部屋跡拝地被下候
同年十二月十二日任史生兼庁掌
但掌政堂勤仕
同四未六月朔日今般御改正ニ付免職
同年七月廿三日戸籍方附属申付候事
但年給九俵被下候事
同年八月廿三日県庁附属申付候事
但戸籍方　等外ノ二級
同年十二月廿四日福井県庁附属
但戸籍方　等外ノ二級
同五申五月直四郎事直（タヽシ）

鷲田 2

鷲田五右衛門　錠前番
御抱勤向年月相知不申候

鷲田五右衛門　五右衛門養子

寛政三亥九月養父五右衛門跡江被召抱、御広式錠前番相勤候

鷲田五右衛門　五右衛門養子

文政七申年十一月養父五右衛門跡江被召抱、御広式錠前番相勤候

鷲田五兵衛　五右衛門養子

天保二卯八月養父五右衛門跡へ被召抱、御広式錠前番相勤候

嘉永六丑八月廿三日御広式御出居番并御住居御薬取兼被仰付候

安政四巳九月十四日表御出居番江

元治元子年七月三日御広敷御書使被仰付候

元治元子九月廿五日御広敷御書使被仰付置候処被指免候

慶応元丑十一月十三日年来出精相勤候ニ付小寄合格ニ被成下候、巣鴨御屋敷奉行下役被仰付候

同三卯六月十八日病気ニ付御暇被下、跡諸下代之内江被召抱、御充行

鷲田万蔵

一切米七石弐人扶持

如此被下置候

但七月十七日被召抱、御勝手役仮預り浮下代被仰付

同年十月九日当分巣鴨御屋鋪奉行下役江

同四辰正月御国表江引越被仰付、然処直詰被仰付

同年三月御趣意ニ付御国表へ罷帰候様被仰付、四月五日着

同年四月十六日表御坊主被仰付、左之通名替

万蔵事　鷲田清嘉

明治二巳二月廿六日上京、三月六日御供帰

同年四月九日中納言様御供東京江出立

同年九月廿一日名替

清嘉事　鷲田五平

同年十月朔日正二位様御供方申付、役席小寄合格同様申付候事

同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾俵弐斗九升壱合被下

同三午二月二日東京ヨリ帰

同年八月七日東京江出立

同月廿五日帰藩申付候事、十月七日帰

同年九月廿三日今般御趣意ニ付御家従附属指免候事

同年十一月晦日歩兵所門番使部兼へ

同年十二月十五日持地之内ニ而弐拾四坪拝地被下候、未六月廿日御取消

和田[1]

和田養弥

一切米八石弐人扶持

元禄十丑年被召出、御充行如此被下置

正徳元卯年御泉水附一統御暇被下

同三巳年七月十六日帰参被召出

和田養弥

一切米八石弐人扶持
元文二巳二月十八日親養弥病気願之上立替被仰付、御充行並之通如此被下置、表御坊主江被召出

和田養弥

一切米八石弐人扶持
安永六酉五月三日親養弥病気願之上立替被仰付、御充行並之通被下置、表御坊主被召出、養弥ト名替
天明八申十二月閑盛と名替
寛政十二申四月六日御道具役並十徳着御免被成、三浦春加次

和田久務

一切米八石弐人扶持
享和三亥四月廿五日養父閑盛病気願之上立替被仰付、御充行並之通被下置、表御坊主被仰付候
文化元子十一月五日来丑年江戸詰被仰付候
同十二亥十二月廿日御右筆部屋定助被仰付候
文政二卯三月十一日御右筆部屋御坊主和田友悦跡被仰付、御扶持方壱人扶持御増、都合
一切米八石弐人扶持
如此被成下候
同三辰年四月江戸御留守詰被仰付候
同年十月廿五日此度公方様霊岸島御住居御通抜被遊候ニ付御用懸り相勤、右ニ付銀七匁五分被下置
同九戌年四月三日御袖留御着帯御誕生御用懸り被仰付候

和田友節

一切米八石弐人扶持
文政九戌七月八日実父久務病気ニ付願之上御暇被下、表御坊主江被召出、御充行並之通如此被下置
同十一子江戸御供詰被仰付、来寅年迄詰越被仰付候
同十二丑年三月廿五日今般御類焼ニ付、火之御番御免被成候ニ付詰帰被仰付候
同十三寅五月二日御右筆部屋御坊主不時助被仰付候
同年九月七日御右筆部屋不時助被指免
天保三辰五月十八日奥御坊主被仰付候
同十一月七日来巳年江戸御供詰被仰付候
同五午十一月十二日来未年江戸御供詰被仰付
同六未年閏七月十三日御遺骸御国へ被為入候ニ付、御道中御供ニ而立帰被仰付候
同七申二月廿三日来酉年迄詰越被仰付候
同年十月十七日来々戌年迄詰越被仰付候
同九戌八月廿五日支度出来次第江戸詰被仰付
同十亥三月廿八日御滞府中詰越被仰付
同十四卯九月廿九日来辰年江戸御供詰被仰付
同十五辰十一月三日来巳年江戸御供詰被仰付候
弘化二巳十月十二日小算格ニ御取立、御充行弐石御増、都合
一切米拾石弐人扶持

如此被成下、奥御納戸方手伝被仰付候
同日支度出来次第出立罷帰候様被仰付候
同日友助与名替
同三午十月十五日来未年江戸詰被仰付候
同四未二月四日御道中御往来并江戸詰中とも御腰物方下代兼勤被仰付
同六月廿九日於御国弟元御材木炭薪方下代林他之助与申者不埒至極之趣
相聞候処、是迄異見等不参届趣相聞候ニ付押込
同七月十三日押込今日ゟ被差免候
嘉永二酉年正月十六日出精相勤候ニ付、跡目小算ニ被成下候
同四亥年三月十二日江戸詰出立
同年十一月廿二日於江戸表出精相勤候ニ付、江戸詰中御扶持方壱人扶持
御増、都合拾石三人扶持ニ被成下候
同五子四月廿五日此度小算之者共以前へ被復壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
如此被下置候
同六丑年正月十六日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候
安政二卯三月十三日江戸表江出立
同四巳二月廿九日出精相勤候ニ付、小役人格ニ被成下候
出立事、同七申三月七日帰着
文久元酉七月八日病死
同年八月十六日病気及大病立替相願、其後令病死候ニ付、跡目小算ニ被
仰付、御充行

和田平太郎

一切米拾石三人扶持
如此被下置候
文久三、六月五日病身ニ付願之通御暇被下、養子祐介小算ニ被召出、御
充行並之通

和田祐介

一切米拾石三人扶持
如此被下置候
同年八月十三日当秋芝御陣屋御雇詰被仰付、九月三日出立、翌子九月九
日帰着
元治元子十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀百匁被下置候
慶応二寅十二月十一日席其儘小十人組ニ被仰付
同三卯十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付候
同年十二月十四日上京、御模様ニ付途中ゟ引返帰
同四辰正月六日急出張上京、同年閏四月十三日帰
明治卜改元、十月廿三日病気内願ニ付後拒役被指免、小算元席江御返被
成候
同二巳十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾九俵五升六合被下
同三午正月廿三日当分検地方手伝
同年三月五日会計寮附属申付候事
但検地掛り
一中級
十二月五日柳御門ゟ北ノ方ニ而埋立拝地願之通
同年十二月十二日会計寮勤

但准十六等　九俵
同四未正月十七日十六等ノ三等　十三俵
同年六月朔日御改正ニ付免職

和田 2

和田春左衛門
一切米拾石三人扶持
寛政元酉年親門右衛門病気願之上表御坊主被召出
文政五午十二月十六日一統格被成下
同十亥十月廿九日御小道具手伝被仰付、御充行弐石壱人扶持御増、都合
如斯被下置候
同十一子江戸御供詰被仰付
同十二丑二月四日来寅年迄詰越被仰付候
同年五月三日御着帯御誕生御用掛り被仰付
同六月廿一日御勝手向御難渋御差支ニ付格別御省略被仰出候、仍之御用
掛り被仰付
同八月三日今般浅姫君様御安産若殿様御誕生御祝儀無御滞被為済御満足
思召、金百疋被下置候
天保元寅三月十二日御道中御小道具荷物預り被仰付候
同年四月十一日出精相勤候ニ付、小役人格ニ被成下
同三辰十二月六日来巳年江戸御供詰被仰付候
同十二月十六日年来相勤候ニ付、御足充行三石被下置候
天保四巳二月十三日御小道具荷物指添被仰付候
同六未年十二月廿八日来申年江戸詰被仰付候
一切米拾三石三人扶持
天保九戌正月廿五日出精相勤候ニ付是迄被下置候御足充行三石御増、都
合拾三石三人扶持被成下、御足充行弐石被下置候
同年八月廿七日支度出来次第江戸詰被仰付候
同十一子正月廿六日当秋江戸詰被仰付候
同十二丑九月三日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格ニ被仰付候
同十四卯六月十六日病死

和田幸之助
一切米拾三石三人扶持
天保十四卯七月廿九日親春左衛門令病死候ニ付小役人被仰付、御充行如
斯被下置候
弘化三午十二月廿八日左之通名替
幸之助事
和田俊助
文久三亥四月廿五日痛所有之ニ付願之通立替被仰付、倅丈蔵与申者跡目
小算ニ被仰付、御充行

和田丈蔵
一切米拾弐石三人扶持
如此被下置候
昨戌八月廿五日御陣屋御雇詰出立也
但丈蔵芝御陣屋詰之儀ハ其儘被仰付候事

同年十月三日芝御陣屋ゟ帰着
元治元子三月十六日御徒御入人被仰付、右勤中御足充行三石被下置候
同年八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、丑二月三日帰
慶応二寅十一月十六日実母いと不届之致業有之ニ付蟄居、丈蔵儀も締り
方不参届趣相聞候ニ付押込、十二月六日被指免
但親俊助儀も押込、十二月十六日被指免
同三卯九月十一日不届至極之致業有之候処、先年奇特之訳も有之ニ付、
格別之御厚評を以御扶持被召放、御城下ニ罷在候義ハ被指免候

和田駒吉　和田丈蔵弟也　坪川孝太郎弟　元定府也　坪川家江養子ニ罷越
慶応三卯五月廿日鳴物方御雇被仰付、勤中月々銀百五拾匁ツ、被下置候
一同年十二月廿二日御慈評を以太鼓役御雇被仰付、月々銀百五拾匁ツ、被
下置候
一同四辰閏四月十一日鳴物方勤中壱人半扶持被下置候、但是迄被下候銀之
儀ハ已後不被下候
一同年六月廿五日会征出立、十一月十三日帰
一明治二巳二月廿二日長々出張ニ付五両被下
一同年七月十一日今般之大赦ニ付格別之御憐愍を以被召出、月俸壱口半御
増、都合
一三口
如此被下、無格下代ニ被成下、楽手其儘被仰付候
明治二巳十一月廿五日今般御改革、更御充行米十壱俵四斗壱合
同三午四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内金十両被下
同年六月十日以雇楽手申付候事
但三口是迄之通
一年給無之事
同年十二月十七日喇叭為修業鯖江藩江被遣候事
但正月十日ゟ罷越
同月十五日一等楽手申付候事
但年給六俵
同四未三月廿二日東京詰申付、四月三日出立
同年十月十三日解隊之処御用残　区兵
同五申七月
駒吉事
和田春孝（ハルタカ）

和田 3

和田丈助　本所十間川御門番
文久三亥正月十日表御坊主定御雇被仰付候
丈助事
和田長佐
同年六月十二日今度御国表江引越被仰付、着
同年七月廿一日表御坊主ニ被召出、御充行是迄之通
一切米七石弐人扶持
如此被下置候
一元治元子十二月賊徒一件、御留守御用御手当十弐匁被下
元治二丑三月十一日不寝役定介之処被指免

慶応三卯十二月廿二日出精相勤候ニ付御充行壱石御増、都合
一切米八石弐人扶持
如此被成下候
同四辰六月十七日上京、九月五日帰
明治卜改元、十月廿八日上京、巳二月帰
同二巳四月十四日年寄候ニ付願之通御暇被下、倅忠太郎与申者御充行

和田忠太郎

一切米八石弐口
如此被下置、表給仕被申付候、然ル処同日諸下代ニ被召抱、楽手被申付
無息中
一文久元酉十二月十二日当分表御坊主定御雇被仰付、丈太郎事盛悦卜改
一同三亥六月十二日御国表へ引越被仰付、着
一同月廿九日表御坊主被召出、三人ふち被下候
一同年八月五日小坊主江
一元治元子十二月賊徒一件、御留守御用相勤ニ付十六匁被下
一慶応三卯正月廿日表御坊主江
一同年三月十六日御趣意ニ付被召出之義ハ被相止候得共、御憐愍を以鳴物
方被仰付、勤中一人半扶持被下候
同日名替、盛悦事清太郎
一同年十月清太郎事忠太郎
一同年十一月二日宰相様御上京御供出立、辰三月十八日帰
一同四辰六月廿二日越後高田へ会征出立、十一月十二日帰
一明治二巳二月廿二日出張ニ付為御賞金五百疋被下、外十両
〆
明治二巳十月二日東京詰出立、午四月廿四日帰
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内四石三ケ年被
下候事
同年六月十日楽手申付候事
但年給弐俵
同十二月十五日一等楽手申付候事
但年給六俵
同年十二月十七日喇叭為修業鯖江藩江被遣候事
但正月十日ゟ罷越
同四未十月十三日解隊被仰出候ニ付免職
同廿九日喇叭手申付候事

脇谷

脇谷又太郎

一切米
慶長七寅八月三日御作事方手代書役へ仕
寛永元子七月二日病気願之上立替被仰付

脇谷左内

一切米
右跡手代書役へ

承応二巳年松岡へ御分地之節引越被仰付
寛文二丑(マヽ)年八月十六日病気願之上立替

脇谷又太郎

一切米
右跡手代書役へ
宝永元申年於江戸表御玄冠前二重御櫓并武者溜り石垣二ノ御丸銅御門并御多門、同所大御番所張番所冠木御門、同所腰懸潮見坂高石垣、同上張番所并御多門二重御櫓上梅林坂御門二重御櫓并御多門、右御普請御本家へ御手伝へ被為蒙仰候節、一ツ橋御作事会所番渋谷与五左衛門雨森儀右衛門手附御用掛り被仰付候
正徳四午十二月廿五日病気願之上立替被仰付

脇谷又八郎

一切米
右跡手代書役へ
享保六丑十二月松岡ゟ御一統之後、上領郡組へ割入被仰付
同十一午十一月四日病気願之上御暇被下置

脇谷太郎兵衛

一切米七石弐人扶持
右跡上領郡組へ被召抱
元文二巳閏十一月廿日病気願之上御暇被下置

脇谷七右衛門

一切米七石弐人扶持
右跡上領郡組へ被召抱
寛延四未三月六日病気願之上御暇被下置

脇谷甚蔵

一切米七石弐人扶持
右跡上領郡組へ被召抱
天明七未十月十六日牢番へ御指し被下

脇谷甚右衛門

一切米七石弐人扶持
右同年十一月朔日上領郡奉行村田十太夫組へ被召抱
寛政七卯十一月廿四日郡役所手伝物書被仰付
文化十五寅四月廿日年来出精相勤候ニ付、下領郡奉行桑山十蔵受込下代被仰付、御充行壱石御増、都合
一切米八石弐人扶持
如此被成下
文政三辰十二月十六日小算格被成下
同五午十二月廿五日新右衛門与名替
同七申七月十六日病気願之上立替被仰付

脇谷又八

一切米八石弐人扶持

文政二卯四月五日下領郡役所手伝見習被仰付
同七申七月十六日養父新右衛門立替被仰付、御勝手役仮預り浮下代被仰付
同廿六日御金方雇下代被仰付
同八酉正月十六日古物方大谷武兵衛下代被仰付
同五月廿八日御金奉行香西太郎右衛門下代被仰付
同九戌二月十七日右同所定年番役被仰付
天保二卯年十一月十一日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下
同四巳八月十六日斎藤門太夫下代へ組替、支度出来次第江戸詰被仰付
同五午九月十四日御貯方定懸り被仰付
同七申年正月廿五日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下
一切米拾石弐人扶持
天保十亥年二月五日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合如此被成下候

嶋崎平十郎　又八養子
一切米八石弐人扶持
天保十亥年十二月五日親弥三次先年再御扶持人ニ相成候義御免被成候処、訳合も有之ニ付諸下代之内江被召出、御充行如斯被下置候、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付候
一同十一子年十月十六日御台所下代被仰付候
一同十二丑年四月十七日当秋江戸詰被仰付候
一同十四卯年四月五日病身ニ付願之上御暇被下候

脇谷平十郎
一切米八石弐人扶持
天保十四卯年五月八日養父又八病気願之上御暇被下、養子平十郎と申者諸下代之内江被召抱、御充行如斯被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付
同年五月十二日御台所方下代被仰付
同十月九日来辰年江戸詰被仰付、正月十三日御供ニ而出立
同十五辰二月七日近々公方様神田橋江御立寄可被遊との御沙汰ニ付、右御用掛り被仰付候
同十五辰年四月十五日出精相勤候ニ付小寄合格ニ被成下、席近藤順右衛門次
弘化二巳年五月九日御代官蓮川仁兵衛肩下代被仰付
同年八月九日同松尾伝蔵肩下代江組替
同十一月十七日同蓮川仁兵衛肩下代江組替
同三午年十二月廿八日左之通名替
平十郎事
脇谷又八
同四未年八月二日三国領御代官肩下代江組替
同年九月十二日御札所御趣向方下代増被仰付候
嘉永三戌年十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
安政四巳正月十六日出精相勤候ニ付、米三俵ツ、年々被下置候
同年三月廿五日御貯方下代定年番江
万延元申十二月十六日出精相勤候ニ付、御充行弐石御増
一切米拾石弐人扶持
如此被成下候、但是迄年々被下候米三俵ツ、以後不被下候
文久元酉五月廿二日左之通名替

又八事
脇谷甚右衛門

同三亥正月十六日出精相勤候ニ付小算ニ被成下、御扶持方壱人扶持御増、
都合
一切米拾石三人扶持
如此被成下候
慶応元丑十二月十六日出精相勤候ニ付、一統格末席ニ被成下候
同三卯十二月廿六日東条兵次郎重御咎被仰付候処、実倅ニ付伺之上慎、
廿九日被指免候
明治元辰十二月十一日出精相勤候ニ付一統格順席ニ被成下、御充行弐石
御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如是被成下候
明治二巳六月十七日名替
甚右衛門事
脇谷又八
同年十一月朔日今般御改革ニ付役義被免
同月四日御金方附属申付候事
但月給米一年分四俵被下候事
同月廿七日会計寮権少属被仰付候事
同月　今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合被下
同三午二月七日今般御改革ニ付御金方被廃候、依之権少属被免候事
同月　病死
同月十四日病死之処、実子竹次郎江御充行

脇谷竹次郎　廿歳
一米三拾壱俵三斗六升九合
如此被下候
但翌十五日歩兵修行ニ指出候
同年七月廿二日第三大隊二番小隊入申付候事
同年十二月八日常備第十小隊入
同月　高田波門前御堀埋立拝地願之通
同五申五月名替
竹次郎事
脇谷扶義

若山

横山清右衛門　清次郎　重兵衛　次郎七
一切米八石弐人扶持
文政二卯十月十二日出役被仰付、大谷八十郎仮預り被仰付、御預所肩下
代へ
同三辰六月十日御切米御扶持方下代へ被仰付
同六未正月十七日御蔵奉行下代勤へ
文政十亥十一月十五日御代官横山善太夫下代勤へ
同十三寅五月十日沢田助左衛門下代へ組替
天保六未年閏七月六日御腰物方下代へ
同十二月晦日来申年江戸詰被仰付

同八酉七月十九日御代官厚治丈左衛門下代へ
同年十月六日以前相勤候元席ニ被成下
同九戌八月二日伊黒源五右衛門下代へ
同十一子八月三日井上茂右衛門受込下代へ
同十二丑八月二日吉田平次左衛門受込下代へ
同十三寅五月十一日御納戸方下代へ
同年七月十二日与内方下代へ
同十五辰七月御代官肩下代へ
弘化五申年正月廿四日志比領御代官請込下代被仰付候
嘉永元申年十二月廿一日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同二酉年七月廿六日品ケ瀬領御代官請込下代江組替
同六丑二月廿五日御武具方下代江
安政三辰十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同五午三月五日役儀被差免、西村源左衛門仮預りへ
万延元申六月廿一日与内方下代へ
同二酉二月十一日御札所御趣向方下代へ
文久二戌三月五日年寄候ニ付御暇被下、倅諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

横山清兵衛

一切米八石弐人扶持
文久二戌六月十六日養子清兵衛与申者被召抱、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
同年九月朔日病気願之上御暇被下、養子栄吉与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

横山栄吉

一切米八石弐人扶持
如此被下置、野村治右衛門仮預り浮下代被仰付候
文久三亥五月晦日眼病ニ付願之上御暇被下置候
同年十月七日先達而眼病ニ付相願御暇被下候処、当節追々全快ニ付再諸下代之内へ御召抱被下置候様相願候処、訳合も有之ニ付御憐評を以願之通諸下代之内へ被召抱、御充行並之通八石弐人扶持被下置、野村治右衛門仮預り浮下代被仰付候
同四子正月廿五日御切米方御扶持方下代兼へ
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用相勤候ニ付拾弐匁被下
慶応二寅九月六日御雑用方下代江
同三卯十一月二日宰相様御上京御供出立、辰八月廿二日帰
明治二巳二月廿一日東京詰出立
同年六月栄吉事左之通改

栄吉事
横山洗治

同年九月晦日帰藩申付、十一月二日帰
同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免候事、但決算
同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下候
同年十二月名替

横山洗治事
若山栄

同三午三月廿九日御用済ニ付決算掛指免候事
同年四月五日歩兵修行指出候也
同年七月廿日御蔵方附属申付候事
但下級
同年十二月十二日会計寮勤　明り御蔵方
但年給五俵
同月十五日是迄居住百軒長屋拝地ニ被下候事
同四、六月廿八日藩庁附属申付候事
但明り御蔵方　等外ノ二級
同年十二月廿四日改正ニ付免職
同五申九月十五日桜馬場納米中雇

若林

若林庄五郎　鉄砲屋
一切米弐拾五石五人扶持
貞享三寅年改而被下
元文元辰十二月十九日果

若林五郎作　同
一切米弐拾五石五人扶持
同二巳正月廿五日親庄五郎跡目無相違被下、名字之事相伺親之通付ル
同年二月庄五郎与名替
明和二酉十一月十一日倅藤右衛門へ立替被成下

若林藤右衛門　同
一切米弐拾五石五人扶持
明和二酉十一月十一日親庄五郎及老年候ニ付願之上御立替被成下、庄五郎与名替

若林庄五郎　同
一切米弐拾五石五人扶持
明和八卯六月十二日親藤右衛門病気ニ付立替被仰付、親之通御充行被下、
寛政十午四月廿九日願之上帯刀御免被成
享和二戌三月十七日病気ニ付願之上立替被仰付

若林庄五郎　同
一切米弐拾五石五人扶持
右同日親庄五郎立替被仰付、御擬作御用向親之通被仰付
文化元子十二月廿八日庄五郎ト名替

若林周四郎　同
一切米弐拾五石五人扶持
文政四巳七月十一日親庄五郎病身ニ罷成候ニ付願之通立替被仰付、是迄之通御用被仰付、御充行如是被下置候
同十二丑九月廿三日同人屋敷之内呉服町通東西八間南北弐拾壱間、町屋地名子ニ致置候分、此度御茶薗地ニ被成下候様相願候処、願之通被仰付候

天保四巳九月廿五日不埒至極之義有之、其上家職等閑之趣相聞候ニ付、
御充行之内弐石壱人扶持被相減押込被仰付候、十月十六日押込被置候処
被差免候

若林忠左衛門　鉄砲師

一切米弐拾三石四人扶持

天保八酉八月五日養父周四郎近年病身ニ罷成候ニ付、立替願之通御充行
被下置、是迄之通御用被仰付候

弘化二巳十月廿二日府中引接寺塔頭遍照院元住職無宿泰禅与申者、贋札
を拵候段相顕レ令出奔候節、跡取隠し之手伝等致候始末、不届至極ニ付
御国十三里四方追放被仰付候ニ付滅

周四郎　元職人

一切米拾石弐人扶持

弘化四未八月十六日兼而歎願も有之処、当時鉄砲職専ら相励候趣相聞候
ニ付、格別之御憐愍を以再被召抱、若林家之家名御立被下、如此御充行
被下置、鉄砲師御職人ニ被仰付候

嘉永元申年十二月十五日細筒為御用大坂并堺表ニ而鉄類相求メ、并下職
之者為召抱罷越候ニ付、右序を以堺表ゟ妻子等も同道致度旨ニ付、先達
而日数出入廿日相願罷越候処、右日限相切レ延着ニ罷成候ニ付、伺之上
慎被仰付候

一嘉永元申年四月五日、昨年再被召抱若林家之家名御立、御充行
被下置鉄砲師御職人ニ被仰付候ニ付、元屋敷地之内坪数六拾坪
被下置、家作之義も被成下候旨右之通被仰付候処、其後願之上
左之通被仰付候

一同二酉年三月廿日、一昨年再被召抱元御職人ニ被仰付、昨年元
拝地之内ニ而六拾坪被下置家作之義も可被成下旨被仰付候得共、
地面手狭ニ而職業差支之処同所ニ抱地有之ニ付、右抱地之分御
茶園地ニ被成下、昨年被下置候地面と御振替被下、同所拝地残
三拾坪此度御茶園地ニ相願、振替地共周四郎支配ニ被仰付被下
置候ハヽ、自分ニ家作致度旨相願候、依之願之通被仰付候

嘉永四亥十二月廿七日病気願之上立替被仰付、養子庄五郎与申者へ御用
向是迄之通被仰付、御充行

若林庄五郎

一切米拾石弐人扶持

如斯被下置、但養父周四郎儀他国へ罷出候儀ハ御指留被成候事

嘉永五子年六月

一右養父周四郎儀他国出御指留之処、泉州表へ出奔同様罷越候ニ
付、六月十六日御召捕ニ相成、此表へ到着入牢

一六月廿五日左之通被仰付

鉄砲師
若林庄五郎養父
周四郎

昨年病気ニ付願之上立替被仰付候節、他国へ罷出候義ハ指留被
置候処、泉州堺表へ罷越候始末、不届至極ニ付改而五十日入牢、
且又子細有之他国出指留候処最早不及指留者ニ付、御国十三里
四方追放

一同廿七日於牢内病死、然ル処庄五郎依願死後御咎御免
〆
同六丑二月五日江戸表鉄砲御修覆御用有之ニ付致出府候様被仰付候、同七年五月帰着
但御扶持方持参馬銀雑用之儀ハ被下置候事
同年七月五日此度御固御人数被指出候節出精相働候ニ付、為御酒代銀壱匁五分被下置候
同年十一月六日鉄砲御修復御用被仰付置候処相済、骨折相勤候趣太儀之事ニ候、尚又御指留被成西洋流伝来之筒打方習候様被仰付、右逗留中壱人扶持被下置候
同七寅四月廿五日出精相勤候ニ付桐御紋御上下被下置、其身一代着用御免被成候
安政三辰十二月十六日先年江戸表江被遣致出精候ニ付、銀五百匁被下置候
同四巳五月廿九日鉄砲職世話役被仰付
同六未十一月五日家業出精其上世話役出精ニ付、出格之訳合ヲ以世話役勤中製産方於役所御職人上席被仰付、役中御足弐人扶持被下置候
文久二戌十二月十六日御用向出精相勤候ニ付、米弐俵当年限被下置候
元治元子五月朔日内願之趣無拠次第ニ相聞候ニ付、当分世話役被指免
但世話役勤中被下候弐人扶持之儀ハ已後不被下候
慶応三卯十月廿一日名替
庄五郎事
若林四郎左衛門
明治二巳二月十八日家業之儘小十人組格ニ被仰付
但製造局支配之事
同年六月廿一日名替
四郎左衛門事
若林四郎
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾五俵壱斗四升七合被下
同三午正月廿八日御門番勤申付候事
同年三月十日軍務寮附属申付候事
但製作場勤
一年給壱俵
同年十月十九日年給壱俵相増、都合弐俵被下候事
同年十二月十二日軍務寮勤
但年給四俵
同四未六月朔日御改正ニ付右被免

三　新番格以下　カ

川崎 1

川崎彦右衛門　御広式勘定役

一切米八石弐人扶持

寛政四子正月十八日勘定役被仰付、小算格ニ被成下、安兵衛与替名、御擬作代り金二両ツ、被下

寛政九巳正月十六日切米二石壱人扶持増被下

一切米拾石三人扶持

都合如是被下

文化二丑五月廿七日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下

文化五辰二月廿八日先達而御誕生御用相勤候ニ付、銀三匁被下

同九月十四日小役人格被成下、切米弐石相増

一切米拾弐石三人扶持

都合如是被成下、御前様御附御広敷添役矢崎与助跡被仰付

同六巳二月廿九日相果ル、為跡目倅安次郎御擬作拾弐石三人扶持被下置、小算ニ被仰付候

川崎安次郎

一切米拾二石三人扶持

如是被下置

同年十二月廿八日彦助与名替

一切米拾五石三人扶持

文化九申七月四日御徒近藤市十郎跡被仰付、御充行三石被相増、都合拾五石三人扶持被成下候

弟栄吉、文政二卯九月十三日霊岸島御屋形表御徒御雇、壱ケ月銀弐拾五匁ツ、被下置

文政二卯十二月廿八日安兵衛与改名

同四巳二月五日小役人ニ被成下、浅姫君様御附御台所目付坂井安太夫跡被仰付

同四月廿日御能御相手被仰付

同七月廿三日浅姫君様御附御台所頭仮兼帯被仰付

同九月八日弟栄吉御住居御徒定御雇被仰付

同九戌四月三日御袖留并御着帯御誕生御用懸り

同年五月廿六日来月下旬公方様浜御庭へ御成之節、霊岸島御住居御通抜之御沙汰ニ付御用懸り被仰付候

同八月廿三日御安産御用懸りニ付金百疋被下之

文政十亥閏六月二日御祝御用懸り被仰付

同十一月十一日彦右衛門与名替

同十二丑四月十六日御台所目付同頭兼帯被仰付

同年五月三日御住居兼勤御着帯御誕生御用懸り被仰付

同年六月廿一日御勝手向御難渋御指支ニ付、格別之御省略被仰出候、依之御用懸り被仰付候

同年八月三日今般若殿様御誕生御祝儀被為済御満足思召、金百疋被下之

同十二丑年十二月廿八日安兵衛与名替

天保二卯三月十日此度格別之御厳法御倹約御取調ニ付、掛り被仰付候

天保四巳年九月二日、来ル十一月若殿様御袴着御祝義御用懸り同様被仰付候

同六未閏七月三日殿様御容躰ニ付御用懸り被仰付候

同八月五日今般御家督并御引移御用懸り被仰付候
同十一月七日今般御家督御引移前後無御滞被為済御満足思召候、右御用懸り出精相勤候ニ付、金弐百疋下置候
同日右御用懸り出精相勤候ニ付、別段金百五拾疋被下置候
同十二月廿日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格被仰付候
同日御元服御用懸り出精相勤候ニ付、銀拾匁被下置
天保八酉十月六日謹姫君様御入輿御用懸り被仰付
同十月十九日、去月十六日御台所ゟ出火々元之儀、兼而厳重被仰付も有之候処締り方参り不届儀不調法之事ニ候、依之遠慮被仰付、同十月廿九日遠慮御免被成、今日ゟ致出勤候様被仰付候
天保九戌三月十三日謹姫君様御婚姻無御滞被為済御満足思召候、右御用懸り出精相勤候ニ付、為御目録金弐百疋被下置候
同六月九日御家督を始御祝事ニ付、御家中江御料理被下候御用懸り被仰付
同年十月五日今般御家督并御引移御用懸り被仰付
同十二月廿八日今般御家督御引移前後無御滞被為済御満足思召候、右御用懸り出精相勤候ニ付、金弐百疋被下置
天保十亥四月四日役前不正之取斗方有之趣相聞不調法之事ニ候、依之役義御免被成遠慮被仰付、同月廿三日遠慮御免
同十一子正月廿三日松栄院様御附御広敷添役被仰付候
同十四卯二月朔日当分御広敷勘定掛り仮兼帯被仰付、貞照院様之方相勤候様被仰付候
同三月廿九日御上屋鋪御焼失之夜当番等閑之趣相聞不調法之事ニ候、依之役義御取揚小役人格へ御下ケ、押込被仰付候、同四月十二日押込御免被成候
同十五辰二月十二日御台所目付同頭兼帯被仰付候
弘化三午四月廿三日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格被仰付候
同四未七月九日当八月中公方様御成之節、神田橋御住居へ御立寄可被遊との御沙汰ニ付御用懸り被仰付候
同九月十二日御立寄無御滞被為済、右御用懸り出精之段達御聴太儀ニ思召候、此段申聞候様被仰出候
嘉永二酉年四月九日果ル

川崎安次郎

一切米拾五石三人扶持
嘉永二酉年閏四月九日親安兵衛令病死候ニ付小役人ニ被仰付、御充行如此被下置候
同年五月三日小役人席其儘御徒勤被仰付候
同年十二月廿八日左之通名替

安次郎事
川崎安兵衛

嘉永三戌九月十三日御広敷添役柳本一平跡被仰付候
同四亥三月十三日御徒目付乙部祐八跡被仰付、役中御足充行三石被下置候
安政六未六月晦日太田御陣屋詰被仰付候
同七申三月朔日御広敷添役被仰付、是迄被下置候御足充行三石其儘被下置候
万延与改元、七月四日先役中御本丸炎上之節御人数罷出候ニ付、金百疋

被下置候
同年八月　安姫様御誕生ニ付、安兵衛事彦助与名替
文久元酉十二月廿八日左之通名替
彦助事
川崎彦右衛門
同三亥三月廿三日御前様御供ニ而御国表江着、同廿六日折返シ江戸表江
出立
同年六月十三日今度御国表江引越被仰付、着
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之三拾三匁被下置候
慶応元丑十二月廿八日左之通名替
彦右衛門事
川崎安兵衛
同二寅正月十六日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格ニ被仰付候

川崎 2

川崎半之助

一切米八石弐人扶持
文化十三子年十一月廿九日養父宇左衛門病気願之上御暇被下、御充行並
之通如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
同年十二月廿二日表御坊主被仰付候
同日宗節と名替

川崎栄久

一切米八石弐人扶持
文政二卯七月廿五日養父宗節病気願之上立替被仰付、御充行並之通如此
被下置、表御坊主ニ被仰付候

川崎伝節

一切米八石弐人扶持
文政三辰七月十九日栄久病身ニ付願之上御暇被下、養弟鉄太郎与申者表
御坊主被召出、御充行並之通如此被下置、鉄太郎事伝節と名替
天保四巳六月七日御在府中御時計兼帯被仰付候
同九戌正月廿日当戌年御入部被遊候ニ付、御道中御幕立帰御供被仰付候
同十一子十二月廿八日善弥与名替
同十三寅七月十二日年来相勤候ニ付、奥御坊主格被仰付
同年十二月廿八日奥御坊主被仰付、御国表江引越被仰付候
同十四卯閏九月廿九日来辰年江戸御供詰被仰付
弘化二巳正月廿五日当巳年江戸御供詰被仰付候
同三午十月十六日来未年江戸御供詰被仰付候
嘉永元申年十二月七日当夏急御出府被遊候節御跡立、且御帰国御供相勤
太儀ニ候段御褒メ被下候
同二酉年正月十六日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候
同四亥年江戸詰
同六丑三月廿二日御供出立
安政元寅十二月十九日御道具役被仰付、御充行壱石御増、都合
一切米九石弐人扶持
如是被成下候

安政四巳年正月廿五日御坊主頭御道具役兼被仰付、御充行壱石壱人扶持
御増、都合
一切米拾石三人扶持
如此被成下候
安政四巳江戸御供詰
同六未八月十一日御充行其儘小役人格被成下、中将様御小道具方御召料
方兼勤被仰付候
同日左之通名替
善弥事
川崎善兵衛
文久二戌十二月廿三日出精相勤候ニ付三石御増、都合
一切米拾三石三人扶持
如此被成下候
同廿四日来春中将様御船ニ而御上京被仰出候ニ付、陸通り御先江出立、
且又京都ゟ一旦江戸表江罷越、亥四月廿日江戸表ゟ着
元治元子七月廿九日病死

川崎善節　善太郎事　善弥倅

一三人扶持
嘉永七寅十一月廿五日表御坊主ニ被召出、御扶持方如此被下置候
安政六未十一月九日小坊主江
文久二戌八月廿二日表御坊主江
同三亥十月十三日中将様御供ニ而上京
同四子正月十九日不寝役被仰付
元治と改元、九月五日親善兵衛病気及大病立替相願、其後令病死候ニ付、
跡目小算被仰付、御充行
一切米拾弐石三人扶持
川崎善八郎
如此被下置候、但同日善節事善八郎と名替
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之三拾三匁被下
慶応三卯三月十六日御趣意ニ付小十人組ニ被仰付
同年十月十八日御趣意ニ付席其まゝ小筒組後拒役被仰付
同四辰四月朔日上京、七月十九日帰
明治二巳二月廿九日歩隊ニ被仰付、後整衛隊ト唱
同年七月十一日整衛隊被免、小算元席江申付候事
但席伊藤左太郎次
同年　明里御蔵所加印納米掛り兼
同年十一月四日御蔵方附属申付候事
同年同月廿五日今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合
同三午六月十二日故丹羽七郎消手形引替之儀ニ付、夫々御咎被仰付、奉
恐入候、依之伺之上慎被仰付、同十九日被指免
同年九月八日中級ニ申付候事
同年十二月十二日会計寮勤　明里御蔵方
但准十六等　未正月ゟ九俵
同四未正月廿九日於御小人町拝地被下、然ル処先達而御達申上候通岡本
新四郎持家以相対譲受候ニ付、地所振替拝地被下候様、是迄之建物ハ若
山弥次郎へ以相対譲渡申度旨願之通
同年六月廿四日任庁掌
但御蔵方

同五申正月廿五日今般改正ニ付免職

川崎 3

※清水文蔵の後にあり

川崎善弥　後改善太夫　江戸定

天明六午年十二月御部屋住附表御坊主定御雇、五両壱人扶持被下置候

寛政三亥年十二月同御附奥御坊主御右筆部屋御坊主定助兼帯、御充行八石弐人扶持ニ被成下候

一切米拾石三人扶持

享和元酉五月廿八日小算格被成下、御擬作弐石壱人扶持御増、都合如此被成下、御帳付見習本役同様被仰付

同日善太夫と名替

文化元子正月廿九日出精相勤候ニ付一統格被成下、御切米弐石御増

一切米拾弐石三人扶持

都合如此被成下

一切米拾五石三人扶持

文化七午三月十五日御帳付本役被仰付、御擬作如此被下置候

同十一戌年十一月廿一日御法度之細工物取扱不埒之事ニ候、依之御充行之内三石御取揚無役小算格ニ御下ケ、押込被指置候、十二月十六日押込被指免候

同十二亥七月同勘定并雑用方仮役被仰付

同十二亥八月廿八日御帳付定助被仰付候、但席加藤新右衛門上

同十三子九月廿三日雑用役中不締之趣相聞候ニ付、御擬作之内弐石御取揚、押込

同十四丑三月二日浅姫君様御引移御用掛り被仰付候

文政二卯十二月廿八日浅姫様御引移御用無御滞被為済候、依之御目録金弐百疋被下置候

同日今般之御用向格別出精ニ付、別段金三百疋被下置候

同三辰八月十三日此度公方様霊岸島御住居御通抜之御沙汰被仰出候ニ付、御用掛り被仰付

同十月廿五日右御用掛り相勤候ニ付、銀拾五匁被下

同十一月朔日此度右御通抜無御滞被為済候ニ付、御目録銀浅姫君様ゟ被下之

同四巳七月六日此度浅姫君様常盤橋御屋鋪江可被為入旨被仰出候ニ付、御用掛り被仰付候

同九月廿八日出精相勤候ニ付一統格ニ被成下、弐石御増、都合拾弐石三人扶持被成下候

同日浅姫君様常盤橋御屋敷へ被為入諸事無御滞相済、右御用掛り出精之段達御聴太儀ニ思召候、依之銀拾匁被下置候

文政六未五月廿九日御帳付勤方年来呑込居候ニ付本役被仰付、御充行三石被相増

一切米拾五石三人扶持

都合如此被成下

同七月九日当冬若殿様御登城御願御内調有之ニ付、御用掛り被仰付

同十二月廿八日右御用掛り相勤候ニ付、金百疋被下之

同七申九月十七日病気願之上御暇被下

川崎新次郎

一切米拾石弐人扶持
同年同日小算被召出、御充行並之通如此被下置、但席高木茂兵衛次
天保二卯五月二日心得違之趣相聞候ニ付押込、同年五月十日押込今日ゟ
被指免候
同年九月廿日御住居御附之方書役勤へ
同三辰九月廿八日御書使御薬取被仰付
天保六未年七月五日御勘定所勤被仰付候
同十二月廿日御元服御用多之処出精相勤候ニ付、銀拾匁被下置候
同七申年七月四日御台所方手伝被仰付候
同年十一月九日御扶持方勤兼帯被仰付候
天保八酉十一月廿九日御武具方手伝勤兼帯被仰付候
但御扶持方手伝之儀者御免被成候
天保九戌六月九日御家督を初御祝事ニ付、御家中江御料理被下候御用掛
り被仰付
同十亥四月四日役前心得違之儀有之趣相聞候ニ付押込、同月廿三日押込
被指免
一切米拾石三人扶持
天保十一子三月五日一統格ニ被成下、御徒定御雇被仰付、御充行壱人扶
持御増、都合如此被成下候、但御雇中為失却年々金弐両ツ、被下置候
弘化二巳六月四日心得違之趣相聞候ニ付押込被仰付候
同六月十三日押込被指免候
同三午年正月十五日御徒へ御入人被仰付、御充行並之通
一切米拾五石三人扶持
如此被下置候、但年々被下候失却金以後不被下候事
安政二卯三月廿三日御判物差添ニ而江戸表ゟ立帰罷越
同三辰八月五日親新次郎病気及大病御暇相願、其後令病死候ニ付、小算
ニ被仰付、御充行

川崎国三郎

一切米拾弐石三人扶持
如是被下置候
同六未七月廿九日一統格ニ被成下、御徒定御雇被仰付候
万延元申七月廿八日先達而横浜表江臨時出張ニ付御褒詞
同年十二月廿六日御徒御入人被仰付、勤中御足充行三石被下置候
元治元子九月十四日御飛脚御用ニ而江戸ゟ京江
同年十月京ゟ江戸江帰
慶応二寅四月朔日此度被仰出候御趣意ニ付、当分之処御徒当番被相止候
へ共、諸勤向是迄之通被仰付候
同三卯正月十五日出精相勤候ニ付御足充行三石御増、都合
一切米拾五石三人扶持
如此被成下候
同年四月四日御趣意ニ付御徒之義ハ被指免、席其儘、勤向之儀ハ是迄之
通相心得候様被仰付
同四辰正月御国表江引越被仰付、然ル処直詰被仰付候
同年三月六日御趣意ニ付支度出来次第御国表へ罷帰候様被仰付、四月十
一日着
同年閏四月十六日御徒組江被入、予備小隊後拒役被仰付候
明治卜改元、十月廿日奥州会津表江早速出張被仰付、右出張中本多興之

輔方手二小隊之弾薬預り小銃取扱方兼被仰付出立、巳三月四日帰
但十二月十九日出張先ニ而当分大砲隊手伝被仰付
同二巳三月朔日歩隊被仰付候、但席是迄之通
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾五俵四斗五升
同三午五月廿四日第一大隊九番小隊入申付候事
十月六日東京詰出立
同年十二月名替
国三郎事
川崎数衛
同年十二月八日常備第七小隊
同四未四月廿八日従東京帰着

甲斐

甲斐半太夫
一切米拾五石三人扶持
寛保三亥八月廿一日利作弟御徒被召出、御擬作如是並之通被下置

甲斐伊三郎
一切米拾五石三人扶持
安永元辰十二月廿九日親半太夫病気願之上御取替被下、御擬作並之通被下置
天明三卯九月文左衛門与名替
同八申十二月菅沼与苗字替
寛政十一未十一月十一日病気願之上立替被仰付

菅沼万吉
一切米拾五石三人扶持
右同日親文左衛門立替御徒被召出、御擬作並之通被下置
寛政十二申十二月菅沼万吉事甲斐万左衛門与名替
享和元酉江戸詰
文化六巳江戸詰
文政二卯江戸詰
同年十二月廿八日半太夫与改名
文政六未二月五日一統上席ニ被成下、御泉水番山田栄十郎跡被仰付
文政十亥十二月十六日年来出精相勤候ニ付、小役人格被成下候
同十一子七月廿日材木奉行菱川善左衛門跡被仰付候
同十三寅三月十四日御本丸御普請御用掛り被仰付候
天保二卯二月廿五日小役人ニ被成下、御蔵奉行橋本順助跡被仰付候
天保三辰十二月十一日役所締り方不参届趣相聞候ニ付押込
同十二月廿七日押込被指免候
同四巳正月廿九日御広式添役菅沼作平跡被仰付候、但席其儘
同六未三月十六日炭薪奉行材木奉行兼帯被仰付
天保八酉六月廿二日果ル

甲斐文吉
一切米拾弐石三人扶持
天保八酉七月廿九日養父半太夫及大病立替相願、其後令病死候ニ付、跡

目無役小算被仰付、御充行如此被下置候
一切米拾五石三人扶持
天保八酉九月十一日御徒御入人被仰付、御充行並之通如斯被下置
同九戌九月四日支度出来次第江戸詰被仰付
天保十二丑十二月廿五日庄兵衛与改名
同十五辰十一月三日来巳年江戸御供詰被仰付候
弘化三午十二月廿二日来未年江戸御供詰被仰付候
同月廿八日御供筆頭鈴木庄八跡被仰付候
嘉永二酉年正月晦日左之通改名
庄兵衛事
甲斐半太夫
同六丑年三月廿二日御供ニ而江戸表へ出立
同七寅九月廿九日小役人格ニ被成下、御広敷添役被仰付候
安政三辰年九月十六日堀土居奉行林金太夫跡被仰付候
文久元酉十二月十一日出精相勤候ニ付、役中米弐俵ツヽ年々被下置候
同四子正月十六日御徒目付被仰付、右勤中御足充行三石被下置候、但是
迄被下置候米弐俵之儀ハ以後不被下候事
元治と改元、七月朔日上京、夫ゟ長征、丑二月九日帰
同二丑二月廿七日堀土居奉行真木文左衛門跡被仰付、是迄被下候御足充
行三石其儘被下置候
慶応二寅四月廿四日、一昨子京都堺町騒乱一件ニ付、公辺ゟ被下配当金
七百疋被下置候
月俸三俵也
明治二巳六月五日出精相勤候ニ付、御足充行之内弐石其儘被下候

同年六月十七日名替
半太夫事
甲斐庄兵衛
同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免候事
同月廿五日今般御改革、更御充行米三拾五俵四斗五升被下
同年十二月二日監正寮附属申付候事
但御堀土居上水道方勤
同三午十二月十二日監正寮勤　但同断
但准十六等　未正月ゟ九俵
同年十一月廿八日居住罷在候借地拝地被下候
同四未六月朔日御改正ニ付免職
同年八月廿日戸長被仰付候事　第一区

金田

金田忠七

一切米拾八石三人扶持
元文二巳七月十八日御役者被召出、橋本喜平次代り被仰付
同四未十二月五日切米弐石壱人扶持増、都合弐拾石四人扶持被下
延享二丑正月十六日御小道具手伝被仰付、岸田右平之通相勤候様被仰渡
宝暦七丑四月五日御小道具手伝ゟ御泉水預屋鋪番被仰付
同八寅十二月弥左衛門与改
明和三戌二月五日御泉水預ゟ福地孫兵衛跡会所預被仰付

金田左市

一切米拾三石三人扶持
明和五子六月十一日親弥左衛門致病死
同七月廿九日為跡目如此被下、小役人格被仰付
同子十一月十六日小役人格無役ゟ水野藤右衛門跡御荒子頭被仰付
安永元辰七月廿七日果ル

金田鉄次郎

一切米拾弐石三人扶持
安永元辰八月十日養父左市為跡目如此被下、小算被仰付
同三午十二月弥左衛門与改
安永九、八月四日小算ゟ御徒被仰付、御擬作並之通拾五石三人扶持被成下
寛政六寅八月四日病気願之上立替被仰付

金田惣五郎

一切米拾五石三人扶持
寛政六寅八月四日養父弥左衛門病気願之上立替被仰付、為跡目御徒被仰付、御擬作並之通被下置
同七卯年江戸詰
同十午江戸詰
文化元子江戸詰
文化三寅十二月弥左衛門ト名替
文化六巳江戸詰
一切米拾八石三人扶持
文化六巳十一月八日御徒目付村尾新五兵衛跡被仰付、如此被下置候
文化八未迄詰越
文政二卯二月廿五日御広式添役高橋与左衛門跡被仰付候
同六未五月十八日果ル

金田安四郎

一切米拾弐石三人扶持
同六未七月五日養父為跡目如是被下、小算被仰付
同七申七月廿九日御趣意ニ付無役被仰付
一切米拾五石三人扶持
同年閏八月廿五日御徒被仰付、御充行並之通如此
同八酉年江戸御供詰
文政十一子年三月五日不宜趣在之ニ付御暇被下置

金田半三郎

一切米拾弐石三人扶持
文政十一子年三月廿日先達而御用書を以被仰渡候処、養子願之上被仰付、但当時無役小算
同十三寅七月廿五日勤役被仰付候
同十三寅年十二月廿八日太郎左衛門与改名
一切米拾五石三人扶持
天保五午七月廿日御徒へ御入人被仰付、御充行並之通如此被下置候
同年十月廿二日来未年江戸御供詰被仰付候

同六未閏七月十五日御遺骸御国江被為入候ニ付、御供ニ而帰切被仰付
同十一月廿九日当春不慎之趣相聞候ニ付押込被仰付候
一切米拾弐石三人扶持
天保九戌七月廿九日御徒被指免一統格ニ被指置、御充行如此被下置、御
勘定所勤被仰付候
同十三寅十一月十七日心得違之趣相聞候ニ付押込被仰付、同十二月五日
押込被指免候
弘化四未七月五日家内締り方不参届趣相聞候ニ付押込、同月廿五日押込
被置候処今日ゟ被指免候
一弘化五申年三月七日御預所去未御年貢之内、大坂御廻米并御借財仕訳方
ゟ三国御蔵納米之内、同所同断江為御用出坂被仰付候
安政元寅十二月十六日出精相勤候ニ付、小役人格ニ被成下候
万延二酉正月十六日出精相勤候ニ付御充行三石御増、都合
一切米拾五石三人扶持
如此被成下候
文久二戌八月廿五日炭薪奉行材木奉行兼野坂清兵衛跡被仰付候
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之三拾三匁被下
慶応元丑四月十一日席其儘御広敷添役被仰付候
同年七月十一日先役中三ノ丸御座所御普請中格別出精相勤候ニ付、金百
疋被下置候
同三卯十二月十二日御広敷勘定役兼被仰付候
同四辰三月十二日今度御広敷女中京詰被仰付候ニ付詰被仰付、詰中勘定
役書役兼勤被仰付
同年四月十日上京、九月廿三日帰
明治卜改元、九月廿九日御広敷勘定役兼御免被成候
同二巳六月十七日左之通名替
太郎左衛門事
金田本造
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾五俵四斗五升被下
同三午正月十三日今般御改革ニ付役儀指免候事
但軍務寮支配之事
同年二月十三日及老年候ニ付願之上立替被仰付、御充行

金田喜三次　本造次男　十五歳

一米三拾五俵四斗五升
如此被下、但本造六十歳也
無息中
一慶応三卯十一月廿五日鳴物方太鼓役御雇被仰付、月々銀百匁被下置候
一明治二巳四月廿六日是迄百匁ツ、被下候処、已来弐百匁ツ、被下候
一同年十月五日業前相進候ニ付百匁御増、都合月々三百匁ツ、被下候
〆
同午六月十日楽手手伝申付候事
但年給壱俵半
同年十二月名替
喜三次事
金田寛十郎
同月十五日二等楽手申付候事
但年給弐俵

同年十一月廿八日居住罷在候持地拝地被下候
同四未正月廿九日松本高地之内四十一坪七分九厘持高之旨御達申置候処、右之分拝地ニ被成下、然ル処同高地と続ニ明地御座候内、旧来ゟ廿五坪程借受年々年貢横山鉄吉支配ニ付彼者江相渡来候ニ付、右受地之分も拝地ニ被成下候様、願之通
但未六月廿日右受地之分ハ拝地之名目御取消ニ相成
同四未十月十三日解隊

河部

清水茂右衛門

一切米八石弐人扶持
天明八申四月五日御切米方雇下代被仰付
寛政三亥三月六日表御金方雇下代被仰付
同七卯十月十一日養父佐々木郷助立替被仰付、御充行如此被下置、御切米方御扶持方兼帯早見兵右衛門下代被召抱
同九巳春佐々木事清水与改性
同十午八月十九日御代官伊黒弥三右衛門下代江入替被仰付
同十二申十一月十四日表御金方金子六右衛門下代被仰付
享和元酉五月十九日御奉行織田半左衛門下代被仰付、御充行壱石増、都合九石弐人扶持被成下
文化三寅十二月廿日鈴木新八郎極方下代被仰付
同六巳八月廿八日御代官吉田平次左衛門下代被仰付、御充行八石弐人扶持被下置候
同九申八月十一日小川次兵衛下代被仰付、御充行壱石増、都合九石弐人扶持被成下
同十一戌五月四日御預所元締役浅見忠右衛門下代江組替被仰付
同年七月三日御預所元締役荒川十右衛門下代へ組替被仰付候
同十二亥九月四日是迄中根新左衛門組出役荒川十右衛門下代勤ニ候処、梶川半兵衛極方下代勤被仰付
同十三子六月晦日宮北長左衛門極方下代被仰付
文化十四丑正月十六日小宮山伝七極方下代江
一切米拾石弐人扶持
文政元寅二月廿三日仕出場下代ゟ小算被召出、御擬作並之通如此被成下、浅姫君様御引移御普請掛り被仰付、直ニ来卯年迄江戸詰被仰付候、但席横山才助次
同二卯十二月廿四日御普請御用掛り出精ニ付、御目録銀三拾匁被下置候
同十三寅年十月十七日三国口銭方定役被仰付候
天保三辰八月三日三国口銭方定役御免被成、御預所掛り被仰付候
同五午十二月十六日出精相勤候ニ付壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
如是被成下候
同八酉年正月十六日出精相勤候ニ付、跡目小算ニ被成下候
天保十一子三月廿日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候

清水文八

一切米拾石弐人扶持
天保十一子十月十六日親茂右衛門病気願之上御暇被下、無役小算ニ被召

出、御充行如是被下置候
天保十一子十一月七日親茂右衛門勤中年来相勤候ニ付、為御酒代銀三拾
匁被下置候
同十二月六日小算勤役被仰付候
同十二丑十二月廿五日茂右衛門与改名
同十四卯十月十五日来辰年江戸詰被仰付
弘化四未四月廿八日御本城橋御破損ニ付、御繕御用掛り被仰付候
嘉永元申年江戸詰被仰付、九月三日出立
同二酉年六月十七日当冬御入輿ニ付御用掛り被仰付
同年十月廿八日今度御普請中出精相勤候ニ付、御扶持方壱人扶持御増、
都合
一切米拾石三人扶持
如斯被成下候
同年十月十九日御上屋敷大奥向御普請御用掛り并表御建継御普請等ニ付、
出精之段達御聴太儀ニ思召候、依之御目録金壱両被下置候、但振退相勤
候ニ付如斯被下
同年十二月六日今般御前様御引移御婚姻前後無御滞被為済、御満足思召
候、右御用掛り出精ニ付金百疋被下置候
安政元寅十二月五日今般大橋御修覆出来ニ付、為御褒美銀弐拾匁被下置
候、同日右同断之処格別出精ニ付、別段銀拾匁被下置候
同年同月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如是被成下候
安政三辰四月廿日今度黄門様御遠忌ニ付、於運正寺御廟御造営被仰出候
処宜出来、右掛り出精ニ付銀弐拾匁被下置候
同四巳出精相勤候ニ付、前後之例ニ不拘一統格末席ニ被成下候
同五午正月廿日御札所掛り被仰付候
同年七月八日病身ニ付願之通御暇被下、養子無役小算ニ被召出、御充行
並之通

清水文蔵　吉江定右衛門倅ニ而

一切米拾石三人扶持
如是被下置候
無息中
一安政四巳十月廿日明道館算科局乗除師被仰付候
一同五午正月廿三日開方師被仰付候
但明道館算科局開法師之儀ハ是迄之通被仰付候間、御用透之節罷
出可然研究事
同月廿九日御勘定所勤被指免、算術尚以厚致研究候様被仰付候
文久元酉三月廿日算術之儀ニ付算科引請ゟ内達も有之ニ付、江戸表江罷
越算学厚致修行候様被仰付、廿四日出立
同年十二月廿八日左之通姓替
清水事
吉江文蔵
同二戌四月廿日帰着
同年六月五日算術為修行江戸表江罷越候処格別骨折候ニ付、桐御紋御上
下一具被下置候
同三亥三月廿七日今度蒸気船御出来ニ付、為運用長崎表江罷越候様被仰

付、四月三日出帆、五月廿七日帰着
同年六月五日測量方被仰付、七月　肥後薩摩表江出立、九月三日帰
元治元子六月七日着服心得違ニ付伺之上慎、同九日被指免
同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀百匁被下置候
慶応元丑十一月廿九日左之通名替
吉江事
河部文蔵
同月晦日大坂表江出張、寅十月十四日帰
同四辰七月十九日会征御用越後江出立、十一月五日新潟ゟ帰
明治卜改元、十二月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
明治二巳二月廿二日昨年会征出張ニ付十両被下候
明治二巳五月二日検地方被申付、月給米四俵被下
同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免候事
同月五日検地并絵図方兼申付候事
但月給米四俵当分是迄之通被下候事
同月廿七日会計寮権少属被仰付候事
同月　今般御改革ニ付、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合
同三午五月九日数学佐教被仰付候事
同年　戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内金十両被下候事
同年十二月十二日任准二等教授　四十五俵
但数学掛り
同年十一月廿八日居住罷在候持地拝地被下候
同四未六月九日先般依頼松本道具屋卯平与申者、裏手ニ而地所拝借申付
候処、更ニ御用ニ相成候事
同四未十二月十六日任三等教授
数学
同五申二月十九日任二等教授
同年五月名替
文蔵事
河部円（マトカ）

川越[1]

川越久助

一
右松岡表ニ而御代官下代へ被召抱年来相勤候処、其後御一統被為成、此
表ニ而も御代官下代相勤候処
享保十五戌年病気願之上御立替被成下

坂川小左衛門

一切米八石弐人扶持
右同年親久助病気願之上立替被仰付、御充行如此被下置、御代官方下代
被仰付
延享四卯年御代官受込下代被仰付
宝暦五亥六月晦日坂川与改姓
安永元辰年ゟ以後俵数三俵ツ、被下置候段被仰渡

同六酉三月十六日年来実躰相勤別而出精ニ付小寄合格被成下、御扶持方
壱人扶持御増、都合
一切米八石三人扶持
如是被成下候、但是迄被下置候俵数三俵以後不被下候事
同九子三月廿九日石場畑方支配菱川幾右衛門跡被仰付候
天明四辰年十月廿四日病気願之上御暇被下

坂川直七

一切米八石弐人扶持
右同日親小左衛門願之上御暇被下、跡諸下代之内へ被召抱、御充行並之
通如此被下置、小野弥八郎仮預り浮下代被仰付
同五巳年八月十一日御代官井上弥太夫下代被仰付
同年十二月小左衛門与名替
寛政十午十二月八日御代官中村惣兵衛受込下代被仰付候

坂川文次郎

一切米八石弐人扶持
寛政九巳年閏七月五日仕出場留付被仰付
文化元子八月御札所御貸方雇下代被仰付
同三寅八月十二日養父小左衛門病気願之上立替被仰付、御充行並之通如
此被下置、御代官三上孫右衛門下代被召抱
同五辰六月七日御代官佐野内半右衛門下代入替被仰付、彦太夫与名替
同六巳八月廿九日御充行壱石御増、都合
一切米九石弐人扶持
如是被成下、御奉行上坂与三右衛門下代被仰付
同七午十月晦日小川次兵衛下代へ組替被仰付候
同九申八月十一日極方下代被仰付
同十一戌年十二月三日小宮山伝七極方下代入替被仰付
同十二亥年七月廿日先年江戸詰中於役所不埒至極之儀共相聞候ニ付、御
扶持被召放

坂川千助

一切米八石弐人扶持
文政五午十月四日御先筒組御定之株金上納之上諸組之内江被召抱、御鷹
方下代勤へ出役被仰付、御充行並之通如是被下置、本多修理組へ増割入
被仰付
但文化九申年十月仕出場留付被仰付
同十亥年御預所留付兼帯被仰付
同年八月明里御蔵所雇下代被仰付、冬三ケ月八石弐人扶持之割
合を以被下置候
文政四巳年十一月廿五日年来出精相勤候ニ付、下地割合米被下
之外年々米弐俵ツヽ被下置候
同五午年十月四日御鷹方下代へ被召抱候ニ付、是迄被下置候割
合米外弐俵とも揚ル
同六未二月十五日小左衛門与名替
同九戌二月五日大谷武兵衛仮預り浮下代被仰付
同月十七日御金方下代被仰付
同十二丑正月廿五日御代官嶋津右太夫下代勤へ

同年七月廿八日御代官鈴木弥左衛門下代へ
天保二卯二月十六日御趣意ニ付浮下代嶋崎伝太夫仮預り被仰付候
同年八月十日御代官酒井金五左衛門下代被仰付
同五午七月廿二日御代官津田藤左衛門下代へ
同六未閏七月十七日沢田助左衛門下代江組替
同八酉四月九日今庄領御代官井上茂右衛門下代へ
同九戌八月二日御代官渥美助左衛門下代江組替
同十一子二月廿日松尾伝蔵肩下代へ組替
同年六月十九日松村久右衛門下代へ組替
同十二丑二月廿九日御代官井上弥太夫請込下代江
天保十二丑十月六日芝原領御代官蓮川小伝太請込下代へ組替
同十四卯九月廿二日御厩方下代へ
同十五辰四月廿六日又左衛門与名替
同九月廿九日兼而被仰出も有之候処、役所向取締不参届趣相聞候ニ付御叱り被成候
弘化三午十月廿四日来未年江戸詰被仰付候
同十二月十六日出精相勤候ニ付小寄合格被成下、但席吉川忠三郎次
同四未三月十二日当年江戸詰被仰付置候処、病気ニ付願之上被指免候

坂川尚益

一切米八石弐人扶持
同年三月廿九日病気願之上御暇被下、倅尚八郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、御趣意ニ付表御坊主被仰付候
同日尚益与名替、但席五嶋栄琢次
同七月廿三日小坊主へ、但席森久斎次
嘉永二酉年三月十四日表御坊主ニ被仰付候
嘉永六丑三月十六日御右筆部屋御坊主山田清益跡被仰付、御扶持方壱人扶持御増、都合八石三人扶持被成下候
安政二卯年江戸御供詰被仰付、三月十九日出立
同四巳正月廿五日御帳付見習被仰付、御趣意ニ付役中御足充行弐石被下置候
同日左之通名替

尚益事
坂川小左衛門

安政四巳四月廿五日御右筆部屋御坊主助ニ而致御供立帰出府、閏五月四日帰着
同年四月江戸御見送
文久元酉三月十六日出精相勤候ニ付、是迄被下候御足充行弐石御増、都合
一切米拾石三人扶持
如此被成下候
文久二戌五月廿四日江戸表江出立
同年八月十三日立帰出府被仰付候処、出精相勤候ニ付金三百疋被下置候
同年十月廿五日当夏出府被仰付候処、臨時過分之失費も有之趣ニ付金弐両弐歩被下置候
同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立
同年五月六日当亥御参府御供被仰付
同年七月三日出精相勤候ニ付別段之訳合を以、御足充行弐石被下置候

同年八月十七日御参府御供ニ而出立
同十二月江戸ゟ御上京御供
同年十二月八日出精相勤候ニ付、金五百疋被下置候
元治元子二月十三日御供ニ而京ゟ帰
同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀百匁被下置候
慶応二寅正月十六日出精相勤候ニ付御帳付本役被仰付、御足充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如斯被成下、御足充行三石被下置候
慶応二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日帰
同三卯十一月二日宰相様御上京御供出立、辰三月十六日帰
同四辰六月十四日越後高田表江出立
明治卜改元、十月廿一日御趣意ニ付御帳付被指免、席其儘
但御足充行已後不被下候
同月廿三日公務局書役被仰付、後行事書役卜改
但役中御足充行三石被下置候
同年十二月廿八日左之通名替
坂川小左衛門事
川越沿之介
同月十三日殿様御上京御供出立
同二巳二月廿六日月給三俵被下、御足三石ハ被廃
同年三月七日掌政局筆者被仰付
但掌政局書記支配之事
同年七月十七日支度出来次第東京詰申付、詰中公務局筆者兼申付候事、
同月廿六日出立
一同年十一月廿五日今般格禄御改革、三拾壱俵三斗六升九合
同月廿八日掌政堂少書記被仰付
同三午正月十日職名権少目卜被改候事
同年六月廿七日公用人試補勤向も相心得候様被仰付、来未春迄詰延被仰付候事
十一月廿八日居住罷在候借地拝地被下候事
同年十二月十九日今般藩制御改正ニ付職務被免候事、未正月十七日帰
同四未二月十八日当分戸籍方勤手伝、但伺也
但昨十七日御家従御門番天谷二平跡卜被仰付候処、今十八日如此
手伝江
六月朔日御改正ニ付被免
同年八月廿日戸長被仰付候事　第八区
同五申正月廿七日右同断
同年七月十九日右同断

川越 2

藤田和右衛門

一切米八石弐人扶持
文化元子二月十九日養父豊田佐右衛門病気願之上立替被仰付、諸下代之内へ被召抱、御勝手役仮預り被仰付候
同月廿六日御武具方下代被仰付
同三寅十一月七日御代官中山太郎左衛門下代入替被仰付

同十五寅二月十六日表御納戸方下代増被仰付
文政二卯四月八日御腰物方下代勤被仰付候、江戸詰中表御納戸方下代勤
仮兼帯被仰付
同三辰六月十六日御預所御金方下代へ
同年八月十一日当夏御腰物引纏罷帰候節、御荷物を始道中取扱方不埒至
極之儀共有之、且江戸留守中家内不締り之趣相聞候ニ付、格式御取揚押
込被仰付候、同廿五日押込被指免
同五午三月十八日御代官柳下勘七下代へ
同十亥正月十九日当分大谷武兵衛仮預り浮下代勤
同年正月廿八日伊東三次郎下代勤へ
同十三寅五月十日御代官方下代へ
同年四月晦日友八事和右衛門与名替
天保三辰七月廿四日沢田助左衛門下代ゟ木内甚兵衛下代へ
同五午十二月十六日年来相勤候ニ付米弐俵被下置候
同六未閏七月十一日服部弥右衛門受込下代へ
同七申年二月九日年来出精相勤候ニ付、小寄合格被成下候

藤田雄助

一切米八石弐人扶持
天保七申年七月三日養父和右衛門病気願之上御暇被下、諸下代之内へ被
召抱、御充行並之通如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付候
同八酉七月晦日御扶持方佐藤幸右衛門下代へ
同九戌正月廿六日御金奉行小嶋逸八下代へ
同月廿八日和右衛門与名替
同十一子二月廿日御代官酒井金五左衛門肩下代へ
天保十二丑年二月廿二日与内方下代へ
同十二丑八月二日砂子坂領御代官井上弥太夫肩下代江
同十三寅七月十二日御作事方下代へ
同年十二月廿四日音右衛門与名替
同十五辰七月廿四日御代官松尾伝蔵肩下代へ
弘化二巳二月廿四日御厩方下代へ

藤田岩太郎

一切米八石弐人扶持
弘化二巳九月十日養父音右衛門与申者病身ニ付願之上御暇被下、養子岩
太郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、中野文左衛門仮預
り浮下代被仰付候
同十二月七日改性
坂川岩太郎
嘉永二酉年五月十四日御蔵奉行牧野勘兵衛下代被仰付候
同四亥年十一月廿五日広部三右衛門下代へ組替
同六丑年三月十一日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
同七寅年正月廿九日、昨年江上村四郎右衛門倅一平布施田村弥助与申者
共へ御蔵米渡方不参届儀在之、取返シニハ相成候得共不念ニ付叱り
但右ニ付慎伺指出候得共不及其儀旨
同年二月廿日仕出場書役被仰付、月番御奉行仮預り当時御預り所仕出場
書役仮江
同年四月十四日原平左衛門書役江

同十一月十二日長谷部甚平書役へ組替
安政二卯正月廿六日本多十郎兵衛書役江組替
同二卯四月廿一日江戸詰出立
同三辰十月廿五日高村藤兵衛極方下代へ
同四巳三月廿五日御奉行本多十郎兵衛極方江
同五午年江戸詰被仰付、三月廿一日出立
同年十二月廿四日霊岸島御屋敷御建継御普請出精ニ付、銀拾匁被下置候
同年十一月九日此度玉村琢蔵霊岸島御屋敷へ引越被仰付候処、御上屋敷江通勤之儀ニ付、指掛り候書役取扱向兼勤被仰付候
安政六未十一月十一日帰着
同七申正月十六日御陣屋御普請出精相勤候ニ付、米弐俵ツ、年々被下置候
同年三月十一日右同断ニ付、銀三拾匁被下置候
文久二戌三月廿日江戸詰出立
同年十二月廿四日来春中将様御船ニ而御上京被仰出候ニ付、陸通り御先出立
同三亥正月十九日出精相勤候ニ付小算ニ被召出、御充行並之通
一切米拾石三人扶持
如此被下置候、但京都ニ而、是迄被下候米弐俵之儀も其儘被下置候事
同年二月廿一日京都ゟ江戸表江出立、五月廿五日御国へ帰着
元治元子八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、丑二月十七日帰着
慶応元丑七月十一日三ノ丸御座所御普請中格別出精相勤候ニ付、銀百五拾匁被下置候
同年十二月廿八日左之通名替

岩太郎事
坂川久右衛門

同四辰六月　会征出張、十一月帰
但巳二月廿二日長之出張ニ付十両被下候
明治元辰十二月廿八日左之通改姓名
坂川久右衛門事
川越久
明治二巳正月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下
但是迄被下置候米弐俵之儀ハ已後不被下候
同年三月七日御用有之早速上京被仰付、同十二日出立、八月四日笠松県ゟ帰
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合被下
同年十二月九日当分民政寮収納方申付候事
但同月廿日病気ニ付右被指免
同三午正月十日生兵修行指出候
同年四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内金十両被下候事
同年八月九日会計寮附属申付候事
但検地掛り
一下級
同年十二月十二日会計寮勤　検地方
但十六等ノ心得　未正月ゟ六俵
同年十一月廿八日居住罷在候持地拝地被下候

未六月廿日御取消
同四未六月朔日御改正ニ付免職
同年七月廿三日病死ニ付跡式

川越実吉　河合唯一甥也　未五歳
一米三拾壱俵三斗六升九合

河合

斎藤本左衛門　茂左衛門事　中領郡
一切米八石
文政四巳二月六日同所肩下代勤へ出役被仰付
同八酉十月五日中領受込下代勤被仰付
同十亥九月廿五日御扶持方坂井権兵衛下代被仰付、茂左衛門事本左衛門与名替
同十一子十二月十六日石場畑方下代へ
同十二丑四月十八日本左衛門事茂左衛門与名替

斎藤金五右衛門　捨作事
一切米八石
天保二卯三月八日親茂左衛門病気願之上御暇被下、諸下代之内江被召抱、御充行如此度被下置、嶋崎伝太夫仮預り被仰付
天保二卯十一月廿八日尾崎庄太夫下代勤へ
同三辰七月廿四日松永次郎左衛門下代へ
同四巳八月五日右為詰罷越候処、着後病気罷在爾今爾々不致出勤之程も難斗ニ付、御評儀之上御国へ御返し被成
同年十月九日御勝手預り瓦方下代へ
同六未十月二日御材木村山嘉助下代へ
同十一月廿九日当春不慎之趣相聞候ニ付押込被仰付、同十二月十一日押込被指免
同十二月十七日御切米方下代へ

松田良右衛門　斎藤事
一切米八石
天保七申三月廿日養父金五右衛門病気願之上御暇被下、諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付
同十二月廿日斎藤事松田与改姓
同八酉年四月十四日御切米方下代へ
同十亥三月六日御材木方炭薪方兼下代へ
同十二丑正月十七日跡部又八肩下代へ
同十五辰十二月出精相勤候ニ付、銀五匁被下
弘化四未十一月六日病身ニ付役儀被差免、中野文左衛門仮預り浮下代へ

松田専蔵
一切米八石弐人扶持
嘉永元申年九月廿六日養父良右衛門病身ニ付願之上御暇被下、諸下代之内江被召抱、御充行並之通如斯被下置、中野文左衛門仮預り浮下代被仰付候

嘉永二酉年正月廿一日表御坊主御雇被仰付候
同年五月十四日御腰物方下代被仰付候
同四亥五月十七日御蔵所下代江
同年十一月廿五日御蔵奉行長文五右衛門下代へ
同五子六月十五日御蔵奉行広部三右衛門下代江組替
但御用宅江引越
同六丑六月廿六日御蔵奉行長文五右衛門下代へ組替
同七寅年正月廿九日、昨年江上村四郎右衛門倅一平布施田村弥助与申者江御蔵米渡方不参届儀有之、取返シニハ相成候得共不念ニ付叱り
但右ニ付慎伺指出候得共不及其儀旨
安政元寅十二月廿五日左之通改姓名
松田専蔵事
河合甚兵衛
同二卯二月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
同四巳三月廿五日南居山干飯領御代官下代へ
同五午六月廿五日御蔵所下代勤中不念之儀有之ニ付押込、七月十一日被指免
同年九月八日御広敷書役江
同年十月十一日江戸詰出立
安政六未正月九日病気之処次第指重り最早御奉公難相勤体ニ罷成、然処実子無之ニ付、於御国表算筆等致相応候者養子ニ致度旨ニ而御暇相願候ニ付、願之通御暇被下置候

河合八五郎

一切米八石弐人扶持
同年六月十八日先達而養父甚兵衛於江戸表病気願之上御暇被下候跡諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
文久二戌五月十一日御預所御金方下代へ
元治元子二月廿九日弾薬方下代へ
同年七月朔日上京、八月十七日帰
一子九月八日御武具方下代兼勤被仰付
同年十月長征、丑二月六日帰
慶応元丑閏五月十五日追廻方下代江
同年九月四日製造方下代江
同二寅四月廿五日堺町戦争一件ニ付、公辺ゟ被下配当金五百疋被下置候
明治元辰十二月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
同二巳二月廿二日奥羽越御人数出張中格別勤方ニ付、御国札五百匁被下候
同年六月廿一日名替
八五郎事
河合淡造
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同月廿七日御改革ニ付製造局被廃候、依之役義指免候
同三午正月十日生兵修行指出候
同年五月十七日民政寮附属申付候事
同年十二月十二日民政寮勤　附属
但十六等心得　六俵

同四未六月朔日御改正ニ付被免

川村

河村八太夫

一切米八石弐人扶持

文化十四丑二月廿九日去冬三国御蔵納米出役之節、締方不埒之趣相聞候ニ付、小算并御充行之内弐石壱人扶持御取揚、諸組之内へ被入、浮下代門野藤十郎仮預り被仰付、堀平太夫組へ増割入被仰付候

同八月二日与内方下代勤被仰付

文政三辰六月十日霊岸島御台所下代勤被仰付、支度出来次第江戸詰被仰付候

同八月十三日此度公方様霊岸島御住居御通抜之御沙汰被仰出候ニ付、御用掛り被仰付

同十月廿六日右御用掛相勤候ニ付、銀拾匁被下

同十一月朔日御目録銀浅姫君様ゟ被下之

文政四巳二月廿三日病気願之上出役下代勤被指免候

河村善兵衛

一切米八石弐人扶持

文政四巳五月廿日出役被仰付、浮下代ニ被指置、大谷八十郎仮預り被仰付

同九月廿六日御台所下代勤へ

同六未江戸御供詰

同七申年有馬御入湯御供被仰付候

同八酉三月十四日御奉行書役下代勤へ

同十一江戸詰被仰付、御参勤御道中御厩方下代仮被仰付

同十三寅正月十六日御奉行月番預り下代被仰付候

同年正月廿一日大井長十郎書役下代勤へ

天保二卯十二月十六日川村文平極方下代江来辰年江戸詰被仰付候

同三辰三月廿二日御厳法御倹約御取調掛り被仰付候

天保三辰十二月十一日御住居御普請宜出来御用掛り出精相勤候ニ付、御目録銀七匁五分被下置候

同四巳四月廿九日勝手次第此表出立罷帰候様被仰付候

同五午二月廿日心得違之趣相聞候ニ付押込

同年十一月廿六日今立五郎太夫極方下代ニ

同六未九月廿日小算ニ被召出、御充行

一切米拾石弐人扶持

如此被下置候

同年十一月廿日十郎右衛門与名替

同十二月九日来申年江戸詰被仰付候

同七申十二月廿六日左太夫与名替

天保八酉四月四日詰中格別出精相勤候ニ付、為御褒美金三百疋被下置候

同八酉九月廿七日此度江戸御上屋敷御焼失ニ付増詰、支度出来次第出立被仰付候

天保九戌五月十二日去秋御焼失ニ付俄詰被仰付罷越候処、此節追々御用薄ニも相成候ニ付、勝手次第出立罷帰候様被仰付候

一切米拾石三人扶持

天保十亥正月十六日出精相勤候ニ付御扶持方壱人扶持御増、都合如此被成下

同年九月十六日諦観院様御霊屋御普請掛り同様相勤候ニ付、御褒メ被成下

同年十一月十四日御省略御用掛り被仰付候

同十三寅三月廿六日元御座所御住居御内定被仰出候ニ付、御普請御用掛り被仰付候

同十三寅十二月十六日出精相勤候ニ付跡目小算被成下候、但席田嶋与三右衛門次

同十四卯閏九月十三日今度御座所御普請御用掛出精相勤候ニ付、御褒詞被成下候

同十五辰六月廿五日一統格被成下候、御勝手役見習被仰付、御充行弐石御増、都合

一切米拾弐石三人扶持

如此被成下候、席小嶋道仙次

同七月九日御簡略御用掛被仰付候

弘化二巳三月八日伺之上御用之外慎被置候処被指免候

同年七月十八日御借財仕訳方受込兼被仰付、且又御内用向有之京坂へ罷出候様被仰付候

同三午三月十一日御内用有之、小川治兵衛江指添出坂被仰付候

同十一月十六日御質手形一件取斗心得違之趣相聞候ニ付、急度可被仰付処、格別之御憐愍を以押込、同十二月廿一日押込被置候処被指免候

同四未正月廿日当未年江戸詰被仰付候、詰中御足充行三石被下置候

但詰中本役同様相勤可申事

一同七月九日当八月中公方様御成之節、神田橋御住居へ御立寄可被遊との御沙汰ニ付御用掛り被仰付候

同九月十二日御立寄無御滞被為済、右御用掛出精之段達御聴太儀ニ思召候、且又小役人已下掛り并掛り同様相勤候者共へ銀七匁被下置候

弘化四未年十一月十日於江戸表小役人ニ被成下、御勝手本役被仰付、御充行三石御増、都合拾五石三人扶持ニ被成下、役中御足充行三石被下置候、但御借財仕訳方受込役兼帯之義ハ是迄之通

嘉永三戌年十二月十一日病死

同四亥年正月廿日親左太夫病気及大病立替相願、其後令病死候ニ付、無役跡目小算ニ被仰付、御充行並之通

河村頼太郎

一切米拾弐石三人扶持

如斯被下置候

安政元寅十二月廿八日左之通名替

頼太郎事

河村喜十郎

同三辰四月廿九日昨年町人共理不尽之及致業候節、心得方不行届之趣相聞候ニ付押込、五月廿八日押込被指免候

同年十二月廿八日左之通名替

喜十郎事

河村権右衛門

同七申正月五日江戸詰出立

万延与改元、六月廿四日霊岸島御屋敷御建継御普請出精ニ付、銀三拾匁

被下置候
同年十一月十八日巣鴨御屋敷御普請出精ニ付、銀拾五匁被下置候
文久三亥十一月五日弟河村貞作御咎被仰付候ニ付、伺之上慎被仰付、同九日被指免
同四子二月十二日身持不宜趣ニ付御奉行存を以押込、同三月八日指免
元治と改元、七月四日上京、夫ゟ長征、丑四月廿四日帰
同年十月左之通名替
権右衛門事　河村民之介
慶応二寅四月廿五日堺町戦争一件ニ付、公辺ゟ被下配当金六百疋被下置候
慶応三卯正月七日病身ニ付願之上御暇被下、養子左太夫小算ニ被召出、御充行並之通

河村左太夫

一切米拾石三人扶持
如是被下置候
同年三月十六日御趣意ニ付小十人組ニ被入候
同年十月十八日御趣意ニ付席其まゝ小筒組後拒役被仰付
同四辰四月朔日上京、七月十七日帰
明治二巳二月廿九日歩隊ニ被仰付、後整衛隊ト唱
同年六月廿日名替
左太夫事　河村左衛太
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾九俵五升六合
同三午六月廿九日第一大隊九番小隊入申付候事
十月六日東京詰出立
同年十二月改姓
河村事　川村左衛太
同月八日常備第七小隊
同四未四月廿八日従東京帰着
同五申　大坂へ修行
同年七月七日大坂府邏卒
同月名替
左衛太事　川村貞則

海崎

江口善左衛門

一切米八石弐人扶持
寛政四子十二月廿六日平瀬五左衛門仮預り浮下代ゟ表御坊主被召出
同日春益与名替
同五丑年正月廿六日当春江戸詰被仰付候

江口春古

一切米八石弐人扶持

享和元酉六月廿七日養父春益病気願之上立替被仰付、表御坊主へ被召出、
御充行並之通如此被下置候
同三亥年江戸御供詰
文化四卯正月廿四日不寝役葛俊節跡被仰付候
同六巳年江戸詰
同八未年同断
同十酉年江戸御供詰罷越候処詰延ニ相成、失却多難渋之趣ニ付、格別之
為御手当銀弐拾弐匁被下置候
同十四丑年江戸詰
文政二卯年江戸御供詰
同六未年同断
同八酉同断
同九戌二月廿五日威徳院様御逝去ニ付、表御坊主被仰付候
同十亥年五月廿五日不寝役被仰付候
同十一子江戸御供詰被仰付
同十二丑年二月四日来寅年迄詰越被仰付候
同十三寅正月七日不寝役其儘御茶方格被仰付候、但席山口三益次
天保三辰十一月七日来巳年江戸御供詰被仰付候
同十二月十六日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候
同七申年内願ニ付不寝役被指免、奥向ニ被指置

江口文知

一切米八石弐人扶持
弘化四未四月廿七日養父春古病気願之上御暇被下、養子文知と申者御坊
主ニ被召出、御充行並之通被下置、奥御坊主江戸詰被仰付候、席其儘
嘉永五子六月十二日御茶方御坊主被仰付
安政五午十二月廿八日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候
同六未九月廿五日御道具役被仰付、御充行壱石御増、都合
一切米九石弐人扶持
如此被成下候
文久二戌二月廿日御坊主頭御道具役兼帯被仰付、御充行壱石壱人扶持御
増、都合
一切米拾石三人扶持
如是被成下候
文久三亥九月五日此度家屋敷御用ニ付差上候ニ付、同苗文節儀ハ別家ニ
被成下候
同年十月十三日中将様御供ニ而上京
同四子正月十六日出精相勤候ニ付、無役小役人格ニ被成下候
同日左之通名替

文知事
江口文右衛門

元治与改元、五月十一日御広敷添役被仰付候
同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当三十三匁被下
明治二巳正月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
同年六月十七日名替

文右衛門事

江口文八郎

同年十一月廿五日今般御改革ニ付、更ニ御充行米三拾壱俵三斗六升九合
被下
同三午正月十三日今般御改革ニ付役儀指免候事
但軍務寮支配之事
同年二月二日及老年候ニ付願之上立替被仰付、御充行
但文八郎六十三歳也

江口貞二　廿八歳

一米三拾壱俵三斗六升九合
但文八郎実子浅次郎幼年ニ付、卒族石田半助倅ニ而右貞二儀八代
勤也
同月四日歩兵修行指出候
同三午六月廿二日第二大隊九番小隊入申付候事
同年九月十三日右隊之伍長申付候事
但其隊之上席
十一月廿八日居住罷在候屋敷地之内ニ而七十七坪拝地被下候
同四未正月十三日浅次郎儀使部見習昨冬ゟ申付置候処、御用弁ニ相成候
間使部見習中代勤被指免、但民政寮総会所給仕勤ル

江口浅次郎　十五歳

同年八月十七日給仕勤中月々金百疋ツ、被下候事
同年九月十五日右給禄江口文吾江譲渡、海崎英之助給禄左之通譲受度願
之通
一米弐拾九俵五升六合
海崎卜改

加藤 1

小嶋庄太夫

一切米八石弐人扶持
天明四辰八月八日養父庄太夫病気願之上立替被仰付、跡御代官方下代被
仰付
寛政三亥二月廿五日御広敷書役被仰付
享和二戌十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格被成下
文化五辰七月廿五日為御充行代銀百弐拾匁ツ、年々被下置、勘定役兼帯
被仰付
同十一戌三月十三日格式御充行其儘浮下代被仰付
同十三子七月廿二日病気願之上書役勤被指免

加藤喜兵衛

一切米八石弐人扶持
同年七月廿五日出役下代勤被仰付、御充行並之通如斯被下置、御勝手役
仮預り被仰付候
同八月廿八日仕出場留附被仰付候
同十四丑六月十二日古物方下代被仰付
文政三辰十二月九日御蔵奉行徳山茂左衛門下代被仰付
同八酉五月廿六日御代官方下代被仰付

同十亥十二月廿八日庄太夫与名替
天保三辰七月廿四日御代官笹倉郡左衛門下代へ
同六未年十一月廿九日当春不慎之趣相聞候ニ付押込被仰付
同十二月十一日押込御免
同月十七日御台所下代江
同八酉四月九日金津領御代官方下代被仰付、元席へ被入
同九戌三月十三日木内甚兵衛請込下代被仰付候
同年八月二日御代官栗原作太夫受込下代へ組替
同年十二月七日、一昨申年志比領奉公人米代滞上納之儀ニ付、心配不行届之事ニ候、依之急度御呵
同十亥七月十八日庄太夫事庄右衛門与名替
同十二丑八月二日金津領御代官酒井金五左衛門受込下代へ組替
同十三寅年十二月十六日出精相勤候ニ付小寄合格被成下候、席持田八郎右衛門次
弘化二巳八月九日蓮川仁兵衛受込下代へ組替
嘉永二酉年正月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
嘉永二酉年七月廿六日粟田部領御代官請込下代江組替
同五子正月十六日左之通改名
庄右衛門事
加藤庄太夫
同年同月十九日御納戸方下代江
同五子六月廿四日追廻方下代江
同七寅閏七月廿二日御預所御代官肩下代へ
但受込脇へ
同年八月十一日山方下代江
安政四巳正月十六日出精相勤候ニ付、米三俵ツヽ年々被下置候
同年五月廿六日御厩方下代江
同六未十月廿四日病気ニ付願之上御暇被下、養子庄太郎与諸下代之内へ被召抱、御充行

加藤庄太郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
同七申三月廿日御蔵所下代へ
文久四子正月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
同廿五日仕出場書役へ
元治と改元、九月十五日明里御蔵所下代江
但役席小寄合格元席江割入候事
同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当拾弐匁被下
慶応元丑十月廿六日役前心得方不宜趣有之ニ付、御蔵奉行存を以急度叱り
慶応三卯正月廿一日役席其儘御納戸方下代江
但当春江戸詰早速出立候様
同月廿九日江戸詰出立、辰二月四日飛脚相勤帰
同四辰二月五日出精相勤候ニ付、小寄合格順席ニ被成下候
同年六月十二日今庄広瀬領御代官方下代へ
明治二巳七月十九日今庄広瀬領収納方下代
同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀指免候

但附送り之儀ハ追而御指図相待可申事
同月廿五日御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
正月廿五日歩兵修行指出候（明治三）
同三午二月四日病院庶務方附属申付候事
但算者下級
同年六月十五日病院出納掛り薬品出納掛り附属兼申付候事
但中級
同年十二月十二日学校勤
但分科之儀ハ従前之通
一准十六等
同四未六月朔日御改正ニ付被免
同五申七月十九日第六区秋葉町組副戸長
同年九月廿三日桜馬場納米中雇申付候事
但副戸長其儘

加藤 2

加藤曾右衛門

一切米八石弐人扶持
文化五辰八月十八日養父仁兵衛病気願之上立替被仰付、跡諸下代之内へ
被召抱、仕出場留付被仰付
同年十月朔日玉薬方雇下代被仰付
同年十一月廿日明里御蔵所早見兵右衛門下代被仰付
同八未十二月七日御代官方平井弥平太下代入替被仰付、当時山田伝右衛
門雇下代勤
同十四丑八月四日御代官吉倉茂右衛門下代入替被仰付
文政二卯十二月廿一日他左衛門与名替
同六未七月晦日御代官竹内五兵衛下代へ
同八酉五月病気願之上出役勤被差免候

加藤太兵衛

一切米七石弐人扶持
天保三辰七月廿六日御充行如此ニ而諸下代之内へ被召出、嶋崎伝太夫仮
預り浮下代被仰付
同年八月七日表御坊主御雇被仰付候
同五午五月廿二日御充行壱石御増、都合
一切米八石弐人扶持
如此被成下、御切米方高橋久助下代へ
同六未七月四日御作事方下代被仰付、但西尾源太左衛門下代へ
同年十一月廿六日来申年江戸詰被仰付候
天保九戌二月二日御本丸御普請御用懸り被仰付候
同年十二月七日御代官羽中田丹右衛門下代被仰付
同十二丑八月二日殿下領御代官井上茂右衛門肩下代江組替
同十五辰四月十六日出精相勤候ニ付、為代御酒代銀弐拾匁被下置候
弘化二巳八月九日多部三左衛門肩下代へ組替
同十二月十二日席伊藤六之助跡へ
嘉永二酉年七月廿六日今庄領江組替
嘉永四亥八月十二日芝原領御代官請込下代被仰付

同六丑正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
安政四巳正月廿五日御趣意ニ付改而殿下砂子坂領へ
同六未正月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同年八月十三日病気願之上御暇被下、養子亀太郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行

加藤亀太郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
万延元申六月廿一日浜坂口銭方下代へ
文久元酉六月廿日御金方下代へ
同二戌六月廿五日病身ニ付願之上御暇被下、養子正吉与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

加藤正吉

一切米八石弐人扶持
如是被下置、野村治右衛門仮預り浮下代被仰付候
文久三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立
同年四月七日御切米方御扶持方下代兼江
元治元子十一月十八日病気願之上御暇被下、養子亀三郎与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

加藤亀三郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、池村半兵衛仮預り浮下代被仰付
同二丑三月六日左之通名替

亀三郎事
加藤慎一

元治元子十二月賊徒一件、御留守御用ニ付銀拾弐匁被下
慶応元丑閏五月十五日御切米御扶持方下代兼江
同二寅八月十一日御金方下代江
同三卯十一月十日江戸詰出立、辰四月廿六日帰
同四辰閏四月廿五日今般江戸御屋敷引払諸向跡仕廻等致心配候ニ付、金弐百疋被下置候
同年七月十七日志比品ケ瀬領御代官方下代江
同年八月廿五日粟田部領江組替
明治二巳七月十九日粟田部領収納方下代
同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀指免
但附送り之儀ハ追而御指図相待可申事
同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月廿三日民政寮附属申付候事
但算者勤　収納方
同年四月十九日引立方附属申付候事
同年十二月十二日民政寮勤　引立方
但准十六等　未正月ゟ九俵
同四未六月朔日御改正ニ付被免
同五申五月十四日総会所雇申付候事

加藤 3

加藤文右衛門

一切米八石弐人扶持

寛政三亥年十月廿五日立替、諸下代之内へ被召抱、平瀬五左衛門仮預り浮下代被仰付

同十二月十四日御広敷書役被仰付

文化五辰年七月廿五日小算格被成下、御広敷勘定役兼帯被仰付

同十一戌十二月十六日御充行弐石御増

一切米拾石弐人扶持

都合如此被成下

同十四丑年正月十六日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下

文政二卯十一月廿五日病気願之上立替

加藤弁吉

一切米拾石弐人扶持

右同日養父文右衛門立替被仰付、御充行如此被下置、小算被召出候

文政三辰十二月廿五日文右衛門与名替

同六未十一月十一日及大病御暇相願候ニ付、願之通御暇被下

加藤文右衛門

一切米八石弐人扶持

右同日養父文右衛門病気願之通御暇被下、跡諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、御勝手役仮預り被仰付、小宮山伝七組江増割入被仰付

同七申七月十七日御雑用方下代勤へ

同八酉二月廿二日御金方下代勤へ

同十亥四月廿一日御代官横山吉太夫下代勤へ

同年十一月十一日御札所受込下代へ

同十三寅年五月十日伊藤安右衛門下代へ

同年七月廿六日御厩方下代勤へ

天保三辰四月五日御札所御貸方下代江

同五午年十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格被成下

同九戌正月廿四日御札所御趣向方下代被仰付

同十一子八月三日御趣意ニ付浮下代嶋崎伝太夫仮預り被仰付

同八月廿八日産物方下代へ

同十三寅年十二月十六日出精相勤候ニ付小算格ニ被成下候、席林俊蔵次

同十五辰六月十四日産物掛り被仰付候

弘化三午十一月十六日心得違之趣相聞候ニ付押込、同月廿五日押込被置候処被指免候

嘉永元申年十二月十六日出精相勤候ニ付弐石御増、都合

一切米拾石弐人扶持

如斯被成下候

同二酉年正月廿日産物御趣法被相止候ニ付、御勘定所勤被仰付候

同年四月廿七日産物方御用之義ニ付岐阜表江被差越、翌月廿一日罷帰ル

同年八月廿五日岐阜表江罷越掛合之始末、宜趣相聞候ニ付小算ニ被成下候

同四亥五月十一日上水之儀者御法通も有之候処、心得違之趣相聞候ニ付

押込、同廿五日被指免
同年九月六日病気願之上御暇被下、倅元作与申者諸下代之内江被召抱、
御充行並之通

加藤元作

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、御勝手役仮預り被仰付候
嘉永四亥年十一月六日瓦方下代へ
同六丑年六月三日御雑用方下代へ
同七寅二月晦日御広敷書役江
安政元寅十二月十五日左之通名替

元作事
加藤文右衛門

同二卯三月十三日江戸表江出立
安政五午八月十三日殿下砂子坂領御代官方下代江
同六未三月廿四日病気内願之趣も有之、西村源左衛門仮預り浮下代被仰
付候
同年六月廿三日病気願之上御暇被下、養子熊太郎与申者

加藤熊太郎

一切米八石弐人扶持
諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如是被下置、西村源左衛門仮預り浮
下代被仰付候
文久元酉十一月十六日御厩方下代へ
同二戌十二月廿二日御材木方炭薪方下代兼江
同三亥十月廿九日弾薬方下代江
元治元子三月三日京都江出立、八月廿五日帰
同年九月八日御武具方下代兼勤被仰付
同年十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
慶応元丑十一月廿四日上京、寅十月朔日帰
同年十二月廿八日近来御用多之処出精相勤候ニ付、為御酒代銀百匁被下
置候
同二寅四月廿五日堺町戦争一件ニ付、公辺ゟ被下配当金五百疋被下置候
同年十一月十一日御武具御改正中出精相勤候ニ付、銀弐拾匁被下置候
同年十二月十六日於御武具役所不慮之致怪我可為難儀ニ付、為御手当銀
弐百匁被下置候
慶応三卯正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下
同月廿一日御納戸方下代江、但当春京都詰被仰付、三月廿二日出立、辰
四月廿二日帰
同四辰七月十七日御預所上領御代官方下代江
明治二巳七月十九日惣会所引立勘定方江

一年給壱俵ツ、被下候事

同年十一月十六日総会所附属指免候事
同月廿一日民政局収納方当分手伝
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午二月五日歩兵修行被仰付候
同月廿七日当分御預所納米為御用出役申付候事
同年六月廿三日病院庶務方附属申付候事

但下級
同年十二月十二日学校勤
但分科之儀ハ従前之通
一十六等心得
同四未六月朔日御改正ニ付被免
同年七月十二日病院附属申付候事
但等外一級ノ官禄被下候事
同年十二月四日廃院ニ付差免候事
同五申九月十三日当壬申検見村々成箇取調中雇申付候事

加藤 4

小沢次郎右衛門
一切米八石弐人扶持
文化九申九月七日御目付中根新左衛門組江被召抱
天保六未二月廿九日年来相勤候ニ付諸下代之内江被召出、御充行並之通
如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付
但跡株之儀ハ被下置候事
同八酉四月九日御切米方下代江
同六月廿四日御台所方下代へ
同九戌正月廿四日御切米御扶持方兼千田又左衛門下代江入替被仰付候
同十亥九月廿一日玉薬方下代増被仰付
同十一子八月廿六日御代官松村久右衛門肩下代江増
弘化二巳八月九日小堀伝右衛門肩下代江組替
嘉永二酉年七月廿六日志比領雪吹牛兵衛肩下代江組替

小沢喜四郎
一切米八石弐人扶持
嘉永三戌年七月廿日親次郎右衛門病気願之上御暇被下、諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、勝田与右衛門仮預り被仰付候
同年八月廿四日勧農方下代へ
同四亥二月十二日勧農方別役所被相止候ニ付、勝田与右衛門仮預り浮下代被仰付候
同年五月廿四日御腰物方下代へ
同六丑年江戸詰、三月十二日出立
同年十月十二日御趣意ニ付江戸詰被相止候ニ付、勝手次第出立罷帰候様被仰付、十一月三日帰着
同七寅閏七月十二日山干飯領御代官肩下代へ
安政四巳正月廿五日御趣意ニ付改而三国山岸領へ
同年三月廿五日殿下砂子坂領江組替
同五午七月十一日林作右衛門書役江
同年十一月十一日月番御奉行仮預り当時御預所仕出場書役仮へ
同年十二月十六日御奉行長谷部甚平書役へ
同六未二月廿九日志比品ケ瀬領御代官方下代へ
万延元申九月廿日病気願之上御暇被下、養子兼吉与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

小沢兼吉

一切米八石弐人扶持
如是被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
文久二戌三月廿五日御武具方下代へ
同年閏八月九日御厩方下代へ
同二戌十月四日病気願之上御暇被下、養子誠一と申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

小沢誠一

一切米八石弐人扶持
如此被下置、野村治右衛門仮預り浮下代被仰付候
同三亥七月十七日御武具方下代江
元治元子四月十四日弾薬方下代兼江
同年八月廿日京都へ出立、夫ゟ長征、丑二月九日帰
慶応元丑十二月廿八日近来御用多之処出精相勤候ニ付、為御酒代銀百匁被下置候
同二寅正月廿一日仕出場書役へ
同年十一月二日左之通改姓

小沢事
谷口誠一

同年十一月廿五日御武具下代勤中御改正、出精相勤候ニ付銀弐拾匁被下置候
同三卯十月五日左之通名替

誠一事
谷口三郎

同年十月十八日上京
同四辰三月五日会計三岡八郎附ニ而御国江罷越候処、帰切
同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、巳二月廿二日出張ニ付三千疋、外ニ十両
明治卜改元、十二月十六日年中格別御用多之処出精相勤候ニ付、当年限米弐俵被下置候
明治二巳六月六日

谷口事
加藤三郎

同年十一月廿二日民政局筆者申付候事
但惣会所勤　出納方
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午四月廿五日戊辰北越ニ出張、各所戦争抜群尽力ニ付御賞典之内永世六石被下候事
同年十月八日御用有之ニ付団野権少参事江附添横浜江可罷越事、同十二日出立、未正月廿三日帰
同年十二月十二日民政寮勤
但十六等ノ二等
同四未正月廿五日大蔵省ゟ御呼出ニ付東京江可罷越事
同月晦日御用有之ニ付下山少参事同道可罷越事、二月四日出立
同年二月十九日大蔵省監督権大佑ニ任ス
同年三月八日右奉命ニ付職務指免候事
同月十四日家族東京江引越、願之通
同年七月廿八日監督司被廃候ニ付本官被免

同　　任史生
同年十月十七日任東京府権少属
　　但出納掛り可相勤事
同五申正月十八日少属
同年　　権大属
同年五月名替
　　三郎事
　　加藤春夫
同年七月九日任教部省権中録

加藤 5

加藤久兵衛　御作事方組下代
一切米七石弐人扶持
嘉永五子十二月十六日出精相勤候ニ付、御充行勤向其儘諸下代被成下候
　　但御作事方組下代ゟ諸下代ニ被成下候儀ハ一昨年被相止候得ハ、
　　久兵衛之外向後相願不申旨、達通りも有之ニ付本文之通被仰付
　　候、尤以後之例ニハ不相成候、且又是迄年々被下候米三俵以後
　　不被下候事
同七寅正月十六日江戸為詰出立
安政元寅十二月廿五日出精相勤候ニ付御充行壱石御増、都合
一切米八石弐人扶持
如是被成下候
安政二卯六月十二日粟田部領御代官肩下代へ
同四巳正月廿五日御趣意ニ付改而東郷粟田部領江
同年三月廿五日金津芝原領江組替
同五午六月廿五日役前不念之儀有之ニ付御叱、依之伺之上慎、同廿八日
御免
同年八月廿二日金津芝原領御代官方下代へ組替
同六未八月五日南居山干飯領江組替
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用ニ付拾弐人被下
慶応三卯八月二日三国山岸領御代官方下代江組替
同四辰八月七日東郷粟田部領御代官方下代江組替
同年同月廿五日金津芝原領江組替
明治二巳六月廿九日名替
　　久兵衛事
　　加藤武平
同年七月十九日金津芝原領収納方下代
同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀指免
　　但附送り之儀ハ追而御指図相待可申事
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月廿八日御金土蔵并御門番勤申付候事
同年七月十八日五十六歳以上ニ付諸勤御用捨被成候事
同年十一月晦日三ケ所当番江
同四未正月廿三日老年ニ付立替

加藤荒雄　養子　廿
米弐拾弐俵壱斗八合

菅野忠衛倅
一小林留太郎代勤中常備第八小隊
同月廿四日常備第八小隊従前之通申付候事

片岡

片岡吉太夫

一切米八石弐人扶持
天明七未十一月八日養父村中九左衛門病気願之上立替被仰付、跡御代官方下代被召抱
同年十二月廿八日村中事片岡与改性
同八申八月十九日御台所下代入替被仰付
寛政五丑八月廿一日御代官方下代入替被仰付
同七卯二月廿日御金方下代入替被仰付
享和三亥六月廿日小寄合格被成下候
文化七午八月廿九日出精相勤候ニ付小算格ニ被成下候、御勘定所小算勤被仰付候
同十四丑二月廿九日小算ニ被召出、御充行弐石御増、都合
一切米拾石弐人扶持
如是被成下
文政九戌十二月十六日年来出精相勤候ニ付、跡目小算ニ被仰付候

片岡吉蔵

一切米拾石弐人扶持
文政十亥年六月廿二日養父吉太夫病気願之上御暇被下、無役小算ニ被仰付、御充行並之通如此被下置候
同十二月廿六日十兵衛与名替
同十一子十一月晦日小算勤役被仰付候
同十二丑十一月十日来寅年江戸詰被仰付候
同十三寅四月十七日御向屋敷追々御普請被仰付候ニ付、右御用掛り被仰付候
天保五午十月廿日妻不埒之趣相聞候ニ付蟄居被仰付、且又十兵衛家内不締不宜趣相聞ニ付押込
同月廿九日十兵衛養父吉太夫押込被置候処被指免
同十一月廿日十兵衛義押込被置候処被指免候
同六未七月十一日十兵衛妻昨年不埒之儀在之離縁其上蟄居之処、此度御咎御免被成下候様十兵衛一家共相願候、仍之十兵衛方へ引取於家内一家対面御免被成候
天保七申八月五日此度天梁院様御霊屋御普請出来之処、出精相勤候ニ付御褒メ被成下候
同年九月五日病気願之上御暇被下

片岡滝蔵

一切米八石弐人扶持
右同日養父十兵衛跡諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如是被下置、御勝手役仮預り被仰付候
同九戌正月廿六日御切米御扶持方兼佐藤幸右衛門下代江
同十亥二月十七日御雑用方下代江

同年十二月四日来子年江戸詰被仰付候
天保十二丑五月廿一日芝原領御代官松尾伝蔵肩下代江
天保十二丑八月二日芝原領御代官蓮川小伝太肩下代江組替
同十三寅四月廿四日吉太夫与名替
片岡吉太夫
弘化二巳八月九日松尾伝蔵肩下代へ組替
嘉永二酉年七月廿五日荒所起返シ出精ニ付、米三俵被下置候
同七月廿六日金津領御代官下代江組替
同四亥八月十二日品ケ瀬領御代官方下代へ組替
安政三辰三月五日志比領御代官受込下代へ
同四巳正月廿五日御趣意ニ付改而志比品ケ瀬領江
同五午正月十六日出精相勤候ニ付、為御酒代銀三拾匁被下置候
同年十二月十一日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同六未八月五日今庄広瀬領へ組替
文久四子正月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
慶応二寅十一月廿二日病身ニ付内願之通役儀被指免
同年十二月七日病気願之上御暇被下、倅吉五郎与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

片岡吉五郎
一切米八石弐人扶持
如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付
慶応三卯八月廿七日病気願之上御暇被下、養子貞次郎与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

片岡貞次郎
一切米八石弐人扶持
如此被下置、会所仮預り浮下代被仰付候
同四辰五月廿五日御納戸方下代江
明治卜改元、十二月七日御雑用方古物方下代兼江
但殿様御上京御供御台所下代兼
同月十三日殿様御上京御供出立、巳三月廿九日帰
同二巳四月二日製造局下代江
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同月廿七日右同断ニ付製造局被廃候、依之役義指免候
同三午正月十日生兵修行指出候
同年八月九日会計寮附属申付候事
但検地掛り
一下級
同年十二月十二日会計寮勤　検地方
但年給五俵
同四未六月朔日被免

河田

江守仙兵衛
一切米七石弐人扶持
文化十五寅二月十六日御充行其儘ニ而河野口銭役所下代へ出役被仰付

文政二卯八月廿一日瓦方下代勤被仰付、御勝手役仮預り
同三辰七月十七日御充行壱石御増
一切米八石弐人扶持
都合如此被成下、御切米方近藤四郎右衛門下代勤被仰付候
同五午十一月十日病気ニ付出役勤被指免、倅忠太郎与申者御目付高村新五兵衛組へ割入被仰付候

江守惣右衛門

一切米八石弐人扶持
文政六未年六月養父忠太郎跡御目付組へ被召抱
同十二丑正月廿五日諸下代之内へ被召出、御充行並之通如是被下置、平瀬五左衛門仮預り被仰付候
同月廿八日御台所下代勤被仰付
同十三寅三月四日御腰物方下代へ
天保元寅年十二月二日来卯年江戸詰被仰付候
同六未閏七月六日御代官方下代へ
天保十二丑七月廿六日門右衛門与名替
同日品ケ瀬領御代官中村惣右衛門肩下代へ組替
同十五辰四月廿五日他行之節着服心得違之趣相聞ニ付押込、同五月三日明日ゟ押込被御免候
弘化二巳八月九日雪吹八郎左衛門下代へ組替
嘉永二酉年七月廿六日志比領御代官肩下代へ組替
同三戌年二月廿四日右同領受込下代へ
同五子十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
安政四巳年正月廿五日御趣意ニ付改而今庄広瀬領江
同年十月十八日病身ニ付内達之趣も有之ニ付役儀被指免、西村源左衛門仮預り浮下代江
同六未十二月二日病気ニ付願之上御暇被下、養子熊三郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

江守熊三郎

一切米八石弐人扶持
如是被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
文久元酉六月廿六日左之通改姓
江守事
八杉熊三郎
同二戌四月廿九日御切米方御扶持方下代兼へ
同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立、四月十一日帰京
同年九月五日御蔵所下代江
元治元子三月十六日不慎之儀有之ニ付、支配頭存を以慎
同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当十弐夕被下
慶応元丑十月廿六日役前心得方不宜趣有之ニ付、御蔵奉行存を以急度叱
同年十二月十四日左之通改姓名
八杉熊三郎事
三橋貫右衛門
同三卯正月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候　月給壱俵
明治二巳六月廿一日名替
貫右衛門事

三橋貫七

同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免
同月二日御蔵方附属申付候事
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同年十二月廿八日病気願之上御暇被下、養子準之助被召抱

三橋準之助

一給米弐拾弐俵壱斗八合
如此被下候事
同三午正月十日生兵修行指出候
同年七月十七日改姓名

三橋準之助事
河田半十郎

同年十一月晦日会計寮飛脚
同四未正月十九日右飛脚勤指免、三月十七日東京ゟ飛脚御用ニ而帰

柿原

次田善朴　牧田善朴

一切米八石弐人扶持
文化五辰七月十四日養父浮下代牧田与三兵衛立替被仰付、跡表御坊主被仰付
同六巳十一月廿日牧田事次田ト改苗
同七午六月廿一日小坊主被仰付
同八未十一月七日来申年江戸御供詰被仰付
同十二亥年表御坊主被仰付
文政四巳三月十七日御右筆部屋御坊主定助被仰付
同年江戸御供詰被仰付
同年八月十四日於江戸表不寝役被仰付、席石川玄久次
同五午年有馬御入湯御供被仰付
同八酉年御代替ニ付表御坊主被仰付
同十亥十一月廿日御右筆部屋御坊主定助被仰付
同十一子三月朔日支度出来次第江戸詰被仰付、本役同様詰中壱人扶持御増被下
文政十三寅三月十六日御右筆部屋御坊主本役被仰付、御扶持方壱人扶持御増、都合
一切米八石三人扶持
如此被成下、支度出来次第江戸詰被仰付
天保二卯年若殿様大奥御登城御用掛り被仰付
同三辰年江戸詰被仰付
同四巳十月十六日来午年御留守詰被仰付
同五午十月十五日来未年江戸御供詰被仰付
同年御養子被仰出候ニ付御用掛り被仰付、其後御家督御引移御用掛り被仰付、御元服被仰出候ニ付御用掛り同様被仰付
同六未十一月五日順朴与名替
同七申十月十七日御滞府被仰出候ニ付、来々戌年迄詰越被仰付
同年十二月廿五日出精相勤候ニ付、一統格被成下
同年十二月廿六日文悦ト改名

同八酉二月十九日当酉年詰替被仰付
同年十月廿二日来戌年御入部被遊候ニ付御迎立帰被仰付
同九戌七月晦日支度出来次第江戸詰被仰付
同年九月四日御養子被仰出候ニ付御用掛り被仰付
同年十月五日今般御家督并御引移御用掛り被仰付
同年十一月廿七日来々子年迄詰越被仰付
同年十二月五日今般殿様御元服被仰出候ニ付御用掛り被仰付
同月廿四日今般御養子被仰出候ニ付、右御用掛り出精相勤候旨被仰出候
天保九戌十二月廿八日今般御家督御引移前後無御滞被為済、右御用掛出精相勤候ニ付金弐百疋被下置候
同十一子十月十五日来丑年江戸詰被仰付

次田謙佐

一切米八石弐人扶持
天保十一子十月廿日親文悦病気ニ付御暇相願候、依之願之通御暇被下、表御坊主ニ被召出、御充行並之通如是被下置候
同日謙佐ト名替
同十五辰七月廿三日小坊主江
嘉永元申年八月十七日表御坊主被仰付
同年十月十一日心得方不宜趣相聞候ニ付押込、十一月十一日被指免
同三戌年八月四日御時計役被仰付候
同年十二月廿五日左之通名替
謙佐事
次田善悦

同五子十二月廿二日不寝役御坊主被仰付候
同七寅九月五日不慎之趣相聞候ニ付押込、同廿五日被指免候
安政二卯七月廿三日昨年も御咎被仰候ニ付、亦復於御国表不慎之趣相聞候ニ付押込、八月廿三日被差免候
安政三辰二月五日不寝役其儘奥順席被仰付候
同年六月十六日酒狂与ハ乍申、心得違之趣相聞候ニ付不寝役被指免、表御坊主ニ被仰付、押込、七月十一日被指免候
但席江守幸佐上
同五午九月十四日病身ニ付願之通御暇被下、養子清太郎与申者表御坊主被召出、御充行並之通

次田貞佐　同日左之通名替

一切米八石弐人扶持
如此被下置候
万延元申十二月廿八日左之通改姓
次田事
河村貞佐
文久二戌閏八月廿三日心得違之趣有之、親類共異見をも不取用趣ニ付御奉行存を以叱り之処伺之上慎、廿八日免
同三亥十一月五日兼而不行状異見等も不取用心得違ニ付立替之上押込、十二月五日被指免
同年十二月廿一日先達而立替被仰付候処、養子虎作与申者表御坊主ニ被召出、御充行並之通

河村利伯

一切米八石弐人扶持
如此被下置候
同日如此名替
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用御手当十弐匁被下
元治二丑正月左之通改性
河村事
柿原利伯
同年三月十一日御在国中不寝役定介
慶応ト改元、閏五月四日不寝役御坊主江
同三卯三月十日御上京御供出立、四月四日帰
明治元辰十二月十三日殿様御上京御供出立
年給壱俵半
同二巳九月十九日名替
利伯事
柿原利介
同年十一月七日今般御改革ニ付奥給仕指免候事
但表給仕勤
同日御家従附属申付候事
但奥給仕勤
一年給是迄之通
同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同四未正月廿九日居住拝借地ト奥町元御持筒組東ノ方持地三十坪斗、右
拝地ト御振替願之通被仰付候、未六月廿日御取消
同四未二月十六日御東京御供出立、五月廿三日御供ニ而帰
同年五月七日今般御改革ニ付役儀指免候事
但御帰藩迄ハ是迄之通心得候様
同五申正月廿五日給禄方雇
同年六月廿九日右差免候事
同年十月廿二日給禄仕出方雇

四　新番格以下　ヨ

吉村 1

吉村喜三七　江戸定

一切米八石弐人扶持

明和六丑五月廿五日御広敷書役ゟ小算格御取立被成下

安永六酉十二月武右衛門与改名

同七戌七月十六日御充行弐石壱人扶持御増被下、年始一統御礼格被成下、御広敷添役本役被仰付候

天明六午正月九日小役人ニ御取立被成、御充行五石増被下、役儀其儘被仰付

寛政二戌三月六日御広敷添役ゟ植木伝兵衛跡御台所頭被仰付候

同七卯七月十二日年寄候ニ付倅武八郎御徒其儘立替被仰付候

吉村武八郎

一切米拾五石三人扶持

寛政七卯七月十二日親武右衛門御台所頭相勤候処、年寄候ニ付立替被仰付、御徒被仰付、御充行並之通被下置候

但武八郎儀是迄別段御徒被召出相勤候御充行上ル

一三人扶持　江戸渡り

新御定

一米拾七俵　御国渡り

吉村伴次郎

一切米拾五石三人扶持

寛政九巳二月廿六日親武八郎大病ニ付御暇被下置、倅伴次郎御徒被仰付、御充行並之通被下置

享和元酉十二月常八与改名

同二戌六月十二日去ル朔日御献上物附相勤候処、御品物間違之儀在之不念之事ニ付、依之押込被仰付候、同十四日押込御免被成候

文化八未十二月武右衛門与改名

文政二卯十二月十六日倅幸助霊岸島御住居御徒定御雇被仰付、一ケ月銀弐拾五匁ツ、被下置候

文政三辰年五月七日小役人被成下、浅姫君様御附御広敷添役被仰付候

同三辰十月廿七日果ル

吉村幸之助

一切米拾弐石三人扶持

文政三辰十二月四日養父武兵衛及大病立替相願、其後相果ル、依之跡目小算被仰付、御充行如此被下置候

同四巳十一月八日御住居御附之方書役勤被仰付候

同七申四月五日出精相勤候ニ付、一統格被成下

同十亥年四月廿八日出精相勤候ニ付、金壱両年々被下置候

同十一子六月二日御徒不足ニ付御入人被仰付候

同十二丑年七月廿日浅姫君様御着帯被為在次第御用多ニ付、御誕生過迄御住居御附之方書方勤被仰付候

天保二卯六月四日先達而御住居御附方認物有之趣ニ付、右書役勤被仰付置候処被指免候

同年七月三日一統上席被成下、御住居御附方書役勤被仰付候

同三辰四月廿日御住居向御省略筋出精相勤候ニ付、金百疋被下置候
同六未閏七月廿一日御遺骸御国江被為入候ニ付、為御見送立帰被仰付候
同十二月廿日出精相勤候ニ付、小役人格被成下候
天保九戌八月三日御住居御普請御用掛り被仰付
同十亥四月十二日御住居御普請宜出来、右御用掛り出精ニ付金三百疋被下置候
天保十二丑十二月廿五日武右衛門与名改
同十四卯三月廿五日昨年従公辺御住居御入用巨細相調指出候様被仰付候処、右御用掛同様出精相勤候ニ付金百疋被下置候
同五月四日松栄院様御附御広敷添役兼勤被仰付候、但吉川利平次高橋武次郎申談三人ニ而壱人分相勤可申事
同十五辰正月十四日昨年神田橋御住居御模様替御普請等ニ而御用多之処、出精相勤候ニ付金百疋被下置候
同年二月七日近々公方様御成之節、神田橋御住居江御立寄可被遊との御沙汰被仰出候ニ付、御用掛被仰付候
弘化四未正月十五日出精相勤候ニ付、御足充行弐石被下置
同九月十二日此度公方様神田橋御住居江御立寄無御滞被為済、右御用掛り出精之段達御聴太儀ニ思召候、且又小役人以下掛り并掛り同様相勤候者共出精骨折候向へ銀七匁被下置候
嘉永四亥四月九日今般公方様右大将様神田橋御住居江御立寄無御滞被為済、右御用掛り出精ニ付銀拾匁被下置候
同五子正月十八日御住居御普請懸り被仰付候
同年四月廿五日右御用掛り出精ニ付、金三百疋被下置候
安政二卯年十二月廿三日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格ニ被仰付、書物役当分其儘可相勤候
同四巳九月十四日松栄院様御逝去ニ付、御住居御附御用人手附書物役御免被成候、且又出精之段御褒詞
同年十一月六日巣鴨御屋敷奉行仮被仰付候
同六未十二月廿五日役中為失却当年ゟ銀三枚ツヽ年々被下置候
同七申三月朔日御作事方改役被仰付、右ニ付御役扶持一人半扶持被下置候
万延卜改元、六月廿四日霊岸島御屋鋪御建継御普請出精ニ付金三百疋、別段五十疋被下置候
同年十一月十八日巣鴨御屋鋪御普請出精ニ付金弐百疋、別段五十疋被下置候
文久二戌四月七日先達而御持場替一件御用掛出精之段、御褒詞之上金三百疋、別段五拾疋被下置候
同三亥三月六日渡辺利右衛門御前様御供留守中巣鴨御屋敷奉行仮被仰付
同年六月十二日今度御国表へ引越、着
同年八月十九日今度三ノ丸御普請御用掛り被仰付候
同四子二月十六日役前不参届儀有之伺之上遠慮、廿五日御免
元治与改元、十二月賊徒一件、御留守御用御手当銀百匁被下
慶応元丑七月十一日三ノ丸御座所御普請御用掛り出精ニ付、御目録桐御紋御上下一具銀壱枚被下置候
同二寅六月廿日年寄候ニ付休息被仰付、養子雄吉江御充行
同年七月十一日勤中年来実躰相勤候ニ付、金五百疋被下置候

吉村雄吉　実新番組藤井文五郎弟也

一切米拾五石三人扶持
如此被下置、小役人ニ被仰付
無息中左之通
万延元申十一月十一日御趣意通も有之ニ付、来酉年太田御陣屋詰御番士
御雇詰被仰付、御扶持方五人ふち被下置候
一同二酉二月廿一日御都合も有之ニ付支度出来次第出立被仰付、廿九日出
立
一文久二戌四月廿四日帰
一同年同月太田御陣屋詰中横浜表へ出張ニ付、御褒詞之上銀壱枚被下置候
一同三亥十月十三日中将様御供ニ而上京、子四月帰
一元治元子六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、依之
御酒被下置候
一同年十月十六日京都詰出立、十二月帰
一同年十二月賊徒一件出張、御手当弐百匁被下
一同二丑正月廿五日上京、五月七日帰
一慶応二寅五月十六日吉村武右衛門養子願之通被仰付
〆
慶応二寅十一月十日小十人組ニ被仰付、砲発調練等致精励候様被仰付
同三卯三月十六日御趣意ニ付小役人席其儘御徒組ニ被仰付
同年十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付
慶応三卯十二月十四日上京、御模様ニ付途中ゟ引返帰
同四辰正月六日急出張板取ニ罷在、同廿六日引取
同年三月二日御警衛詰上京、同年閏四月十三日帰
明治ト改元、十一月朔日奥州若松表へ出立、巳三月十二日帰
但帰候節糸魚川様へ御用残ニ付延引也
同二巳二月廿九日歩隊被仰付、後整衛隊ト唱
同年六月廿日名替
雄吉事
吉村耕造
同年八月二日御徒目付申付候事　月給十俵
但可為監察局附属事
同月廿一日、昨廿日御参詣之節御供調方不念ニ付伺之上慎被仰付、同廿
六日被免
同年十一月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米三拾五俵四斗五升
同三午正月九日生兵修行指出候
同年五月八日御家従附属申付候事
但雑務方
同年十一月廿八日居住罷在候百軒長屋拝地被下候
同四未四月五日年給九俵弐斗七升三合六勺　十五級ノ一也　在三俵
同年五月八日今般御改革ニ付役儀指免候事

吉村 2

吉村万助

一切米拾石三人扶持
寛政十一未九月廿九日仕出場下代ゟ小算被召出、御充行如此被下置
同十二申江戸詰
文化二丑閏八月八日御札所受込指添山口十兵衛跡被仰付

同三寅七月廿日今度於御札所格別之御用向被仰付候処、出精ニ付金百疋
被下置
同年十二月廿五日義兵衛与改名
同七午六月十日出精相勤候ニ付、一統格被成下
同九申十二月十六日新札引替之節出精ニ付、可被褒越候
一切米拾三石三人扶持
同十三子十月廿九日小役人格被成下、御切米三石増、都合如此被成下、
御広式添役林五右衛門跡被仰付
同十四丑正月廿五日御台所目付門野栄十郎跡被仰付
文政二卯二月十六日御札所受込笹木七左衛門跡被仰付、席其儘
同六未四月四日果ル

吉村万蔵

一切米拾弐石三人扶持
同六未五月十一日養父義兵衛為跡目小算被仰付、御充行如是被下置
同七申七月廿九日御趣意ニ付無役小算被仰付
同九戌年八月廿四日小算勤役被仰付
文政十亥十二月廿六日万助与改名
天保二卯六月二日御勘定所御普請御用掛り被仰付候
一切米拾五石三人扶持
天保五午九月廿五日御徒御入人被仰付、御充行並之通被下置候
同七申年四月十二日当秋江戸詰被仰付候
同九戌四月五日養母儀不埒至極之趣相聞候ニ付蟄居、且万助義も兼而取
扱方も可有之処、等閑之趣相聞候ニ付押込被仰付候、同閏四月五日押込
御免
同十一子三月十八日当夏江戸詰被仰付罷越ス
同十三寅十二月廿日来卯年御入部御迎被仰付候
弘化三午二月十六日当午御帰国御道中御供迎被仰付候
嘉永六丑年三月廿二日御供ニ而江戸表江出立
同年十二月廿九日左之通名替

万助事
吉村義兵衛

文久二戌閏八月廿日年来相勤候ニ付小役人格ニ被成下、御勘定所勤被仰
付候
文久三亥六月五日御広敷添役被仰付
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之銀三拾三匁被下置候
慶応二寅十二月十六日御趣意ニ付役儀被指免、御勘定所勤被仰付
同三卯三月十六日御趣意ニ付当分御徒番所勤被仰付、但地廻諸勤共
明治二巳六月廿一日名替

義兵衛事
吉村義兵

同年九月廿九日御改革之処長々相勤候ニ付、銀五貫匁被下置候
同年十一月九日今般御改革ニ付御徒番所勤指免候事
但軍政局支配たるへく候事
同月廿五日今般御改革、更御充行米三拾五俵四斗五升
同三午正月廿三日及老年ニ付願之通倅与四郎ト立替

吉村孝一郎　御徒義兵衛倅

一五人扶持
安政五午七月廿五日御徒被召出、御充行御定之通被下置候
同年五月廿二日御参勤御供増被仰付候、八月十七日出立、同十二月江戸
ゟ御上京御供、子二月十三日御供ニ而帰
元治元子十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀五拾匁被下置候
慶応元丑五月廿六日賊徒一件ニ付別段骨折候ニ付、為御賞金弐百疋被下
置候
同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日帰
同年十二月廿八日左之通名替
孝一郎事
吉村荘助
慶応三卯三月十六日御趣意ニ付御徒被召出被相止、御憐愍を以御雇被仰
付、御扶持方是迄之半高被下置候
一弐人半扶持
慶応三卯十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付
同四辰正月七日急出張、同廿六日板取ゟ帰
同年三月二日上京、閏四月十七日帰
明治ト改元、十一月七日上京、巳三月帰
同二巳二月廿九日歩隊御雇被仰付、後整衛隊ト唱
但席是迄之通
同月左之通名替
荘助事
吉村与四郎
同三午正月廿三日父義兵及老年候ニ付願之通立替、御充行
一米三拾五俵四斗五升
如此被下、翌廿四日生兵修行指出候
同年五月廿四日第一大隊十番小隊入申付候事
同年十二月八日常備第九小隊伍長
同年十一月廿八日居住罷在候屋敷地拝地被下候
同四未四月廿三日兵隊指免候事
同五申五月名替
与四郎事
吉村廉夫（キヨフ）
同年八月九日小道具町組副戸長申付候事

吉村 3

吉村栄吉 笠原平八下代勤 市郎兵衛倅
一切米八石弐人扶持
文政七申年十一月七日訳合有之御坊主ニ被召出、御充行並之通如此被下
置候、但為冥加金八拾両上納被仰付候
同日栄吉事伝栄と名替
同十亥三月十二日小坊主被仰付
同十一子年六月廿九日病気願之上御暇被下

吉村友斎
一切米八石弐人扶持
右同日養父伝栄御暇被下候跡表御坊主江被召出、御充行並之通如此被下

置
同十二月廿日小坊主ニ被仰付候
天保三辰十一月五日来巳年江戸御供詰被仰付候
同五午五月廿七日小坊主江
同六未年三月八日御右筆部屋御坊主不時助被仰付候
同年四月廿八日御祐筆部屋不時助御免被成
同八酉年四月四日御右筆部屋御坊主不時助被仰付候
同五月廿五日不時助御免被成
同十亥六月十三日御時計役久留嶋長嘉跡被仰付、支度出来次第江戸詰被仰付
同十三寅七月三日不寝役玉村左伝跡被仰付候、但当秋交代之節迄勤向是迄之通
同十四卯閏九月廿九日来辰年江戸御供詰被仰付
弘化三午十月十六日来未年江戸御供詰被仰付候
同四未三月六日奥御坊主藤井門悦跡被仰付候
安政三辰八月九日御茶方被仰付、席福田金弥次
同四巳二月廿九日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下候
同四巳年四月御供ニ而江戸詰
同五午九月廿九日養子友益御咎ニ付伺之上慎被仰付候、十月八日被指免
同六未正月廿日御道具役被仰付、御充行壱石御増、都合
一切米九石弐人扶持
如此被成下候
同七申閏三月十一日中将様御小道具方手伝御召料方兼被仰付、御充行壱石壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
如是被成下候
同日左之通名替

友斎事
吉村友右衛門

江戸詰
文久二戌四月五日御在国中御小道具奥御納戸方兼被仰付候
同年九月九日帰着
同三亥正月三日今般中将様御上京被遊候ニ付京都へ出立、三月廿六日帰
同年十月十一日右御同趣ニ付上京出立
同四子正月十六日出精相勤候ニ付、小役人格ニ被成下候
元治と改元、子四月廿四日京都ゟ帰
同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤ニ付、銀五匁被下置候
同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀百匁被下置候
慶応三卯四月十二日宰相様御上京御供出立、八月十二日帰
同四辰三月廿日上京、七月七日帰
明治ト改元、十月五日上京
同二巳正月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
同年六月廿日名替

友右衛門事
吉村友作

同年八月十四日東京江出立

同年九月廿四日従二位様内務局庶務取扱補助被仰付候事
同年十一月廿五日今般御改革、更ニ御充行米三拾壱俵三斗六升九合
同三午五月十日東京ヨリ帰着
同年十一月廿八日居住罷在候持地之内ニ而七十七坪拝地被下候、未六月
廿日御取消
同四未四月五日年給十六俵　十五級ノ一也
同六年九月二日令病死候ニ付倅鎬太郎へ家督

吉村友節　友吉事　友作倅
一三人扶持
安政七申二月廿日表御坊主ニ被召出、御扶持方三人扶持被下置候
万延元申五月十六日小坊主へ
文久三亥八月五日表御坊主江
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用相勤候ニ付十六匁被下
慶応元丑閏五月四日御在国中御時計役兼帯定助江
同三卯三月十六日御趣意ニ付被召出候儀ハ被相止候得共、御憐愍を以鳴
物方被仰付、勤中
一壱人半扶持
如此被下置候
同日左之通名替
友節事
吉村鎬太郎
慶応三卯五月廿日小十人組御雇被仰付、但御扶持方其儘
同年十月十八日御趣意ニ付小十人組御雇被指免、鳴物方御雇被仰付
同年十二月十二日急々上京被仰付、十四日出立之処御模様ニ付途中ゟ引
返シ帰
同四辰正月　又々急々上京、閏四月十四日帰
明治ト改元、九月十九日上京、巳二月六日帰
同二巳四月廿六日年給壱俵ツ、
同三午六月十日御雇楽手申付、役中給禄米六俵被下候事、但年給弐俵
同年十二月十五日御雇二等楽手申付、雇中米六俵被下候事
但年給弐俵
同四未九月廿五日楽手被免候事
同六年九月五日家督

吉村 4

吉村伝右衛門　猪助事　市郎兵衛
一切米八石
文化二丑閏八月十日養父平野庄左衛門病気願之上立替被仰付、跡諸下代
之内へ被召抱
同日御切米方下代被仰付
同十二月廿八日平野事吉村与相改
同七午二月廿八日御台所方服部弥右衛門下代へ
同年七月十日御雑用方下代へ
同十二亥八月廿五日御代官松原次郎左衛門下代へ
文政十二丑五月廿日御代官受込下代勤へ
同十三寅二月廿八日御札所御貸方下代へ

天保二卯十二月廿八日伝右衛門与名替
同三辰八月廿五日御代官厚治丈左衛門受込下代へ
同九月七日元席へ被入
同六未二月十一日小寄合格ニ被成下、椀奉行御道具預兼被仰付
同八酉六月廿四日御預所御代官高橋一太夫受込下代へ
同十亥年七月五日御広敷書役被仰付
同十二丑五月廿四日御預所御金方下代へ

吉村鉄次郎

一切米八石
天保十五辰四月親立替如此被下、浮下代被仰付
弘化二巳二月五日御蔵下代雇相勤候処、役前不参届趣相聞候ニ付押込
同三月五日御蔵奉行大橋半蔵下代被仰付
同四未正月十九日広部三右衛門下代へ組替
嘉永二酉年三月十一日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
同年五月十四日御蔵奉行牧野勘兵衛下代江組替被仰付候
同三戌年二月九日仕出場書役下代被仰付、月番御奉行仮預り当時御預所仕出場書役下代仮へ
同年五月七日御奉行川村文平書役下代へ
同年八月十五日御奉行長谷部甚平書役下代へ
嘉永四亥十月廿九日御奉行原平左衛門書役下代へ組替
同年十二月廿六日左之通名替

鉄次郎事
吉村伝八郎

同六丑年江戸詰、三月十六日出立
同年四月朔日長谷部甚平書役下代へ
同七寅四月十四日雨森儀右衛門書役下代へ
同年三月廿三日御殿山出張ニ付金壱朱被下置候
同年十月十五日中根新左衛門書役へ
安政元寅十二月十一日御奉行原平左衛門極方へ
同二卯正月廿六日長谷部甚平極方江
同四巳六月廿九日御充行九石弐人扶持其儘元分銅印御講方下代江
同五午正月十六日訳合も有之ニ付小算格ニ被成下候
万延二酉正月廿四日御勘定所勤当秋太田御陣屋詰被仰付候
文久与改元、同二戌四月三日横浜出張中出精ニ付、金百疋被下置候
同十三日太田御陣屋御引払出精ニ付金百疋被下置候
同年八月五日年来困窮相勤候ニ付小算ニ被成下、御充行並之通
一切米拾石三人扶持
如此被成下
閏八月廿五日帰着
同年十二月廿六日京都江出立
文久三亥四月廿日京都ゟ帰
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之三拾三匁被下置候
慶応元丑七月廿一日石場畑方支配江
但役米八俵ツヽ年々被下置候
一巳二月右八俵被廃、月給三俵被下
明治二巳十一月廿一日今般御改革ニ付更役儀指免候事
但付送り之儀ハ追而御指図相待可申事

同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾九俵五升六合被下
同三午二月廿九日下馬御門太鼓御門三ノ丸南御門当番申付候事
同年三月四日当分検地懸り申付候事
同月五日会計寮附属申付候事
但検地掛り
一中級
同年九月十八日学校附属申付候事
但病院出納掛り
一中級
同年閏十月　坂下半跡病院管務局出納掛り
但十六等之二等、伺ニ而如此
同年十二月十二日学校勤
但分科之儀ハ従前之通
一准十六等
同四未六月朔日御改正ニ付被免
同年十月十八日病院附属　等外ノ二級
一同年十二月四日病院被廃候ニ付差免候事
一同月　名替
伝八郎事
吉村伝八

吉村 5

※ヨ末にあり

福村嘉右衛門

一切米八石弐人扶持
享和元酉十月十九日御作事方下代江被召抱候
同二戌七月廿五日御武具方下代江組替被仰付候
同三亥三月十五日御広敷方書役江入替被仰付候
文化六巳八月浮下代被仰付、御勘定所留付罷出
同年十一月御作事方下代被仰付候
同八未閏二月五日浮下代被仰付、御勘定所留付へ罷出、其後御薬取相勤申候
同十一戌七月十九日御広敷書役被仰付候
文政二卯十月十四日金助与改名
文政四巳七月十一日浅姫君様常盤橋御屋敷へ被為入候ニ付、御用懸り被仰付
同年九月廿八日右御用掛り無御滞相済出精之段達御聴太儀ニ思召候、依之銀七匁五分被下置候
同五午正月十五日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同六未十二月十六日御台所下代へ
同日覚蔵与名替
同八酉七月十二日御広敷書役江
同十一子十二月十九日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同十二丑七月廿三日御安産被為在御用多ニ付御住居勤助被仰付候
同年八月晦日御住居御広敷書役勘定懸り被仰付候

福村仲三郎

一切米八石弐人扶持

天保三辰五月十日親覚蔵病気願之上御暇被下、跡諸下代江被召抱、御充行如是被下置、御勝手役仮預り被仰付
同四巳三月廿七日御台所下代へ
同六未十二月廿日御元服ニ付御用多ニ付出精相勤候ニ付、銀七匁五分被下置候
同七申七月四日表御納戸方下代被仰付候
同八酉四月七日役前不念之趣有之ニ付押込、同廿七日被指免
同十月四日謹姫様御入輿御調御用掛り被仰付候
同十亥正月十七日御武具方下代へ
同十一子十月三日御預所下代江
同十四卯七月廿九日年来出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
弘化三午三月廿六日御台所方下代江
同四未五月十六日御広敷御書使并御献上御品附被仰付候
但役中肩衣代金弐歩三匁七分五厘、外ニ為失却金三歩ツ、年々被下置候
同五正月五日親仲三郎病身ニ付願之上御暇被下、倅金蔵与申者諸下代之内江被召抱、御充行

福村金蔵

一切米八石弐人扶持
如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
嘉永元申三月廿七日当分御出居番仮被仰付候
同五子四月十日養父金蔵病身ニ付願之上御暇被下、養子仁兵衛与申者諸下代之内へ被召抱、御充行

福村仁兵衛

一切米八石弐人扶持
如是被下置、御勝手役仮預り被仰付候
同年四月十二日当分御出居番仮被仰付、非常之節ハ仕出場留付被仰付候
同年八月十二日御出居番勤御免被成、御金方手伝被仰付候
同年十二月廿八日左之通改姓
福村事
石田仁兵衛
同六丑七月廿一日御台所下代被仰付候
同七寅三月廿三日御殿山江出張ニ付、金壱歩弐朱を四人合ニ被下置候
安政四巳三月朔日椀奉行御道具預り御台所下代兼
同年七月廿一日御趣意ニ付御国引越被仰付候、九月七日出立
同五午九月八日南居山干飯領御代官方下代へ
同六未八月五日金津芝原領江組替
文久三亥十月七日左之通
仁兵衛事
石田二兵衛
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之拾弐匁被下
慶応元丑十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同四辰八月七日今庄広瀬領御代官方下代江組替
同年八月廿五日粟田部領御代官方受込江
明治二巳六月廿九日名替
二兵衛事

石田二平

同年七月十九日御趣意ニ付役儀被指免、司計局勤申付候事
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午三月八日御金土蔵元切手御門口山里御門当番申付候事
同年七月十日民政寮附属申付候事
但勘定方
一下級
同年十月十八日右附属指免候事
同月廿五日五十六歳以上ニ付諸勤御用捨被成候事
同年十一月晦日三ケ所当番江
同四未十二月十五日五十嵐捨太倅左内へ給禄譲渡

吉村左内　五十嵐左内
一米弐拾弐俵壱斗八合
同五申七月五十嵐事吉村ト改姓

吉川 1

吉川喜斎
一切米九石弐人扶持
享保十五戌七月廿五日御坊主相勤候処切米壱石増被下、小頭役被仰付候
同十七子三月十五日切米四石壱人扶持増、都合拾三石三人扶持被成下、
森専斎跡御坊主頭被仰付候
宝暦五亥十一月廿五日御坊主頭喜斎切米弐石増、都合拾五石三人扶持被成下、御材木頭大橋六左衛門跡被仰付
同日吉左衛門与改名
同十一巳六月廿五日年寄候ニ付休足被仰付候

吉川吉左衛門
一切米拾弐石三人扶持
宝暦十一巳六月廿五日親吉左衛門御材木奉行相勤候処、年寄候ニ付休息
被仰付、倅怡春
延享四卯九月晦日御部屋附御坊主被召出相勤候処、為跡目如此被下
明和五子二月廿日小算ゟ御徒被仰付、御充行並之通被下
天明四辰十二月久兵衛与改名
寛政八辰八月五日御徒より小役人格被成下、御泉水屋鋪番竹中伝太夫跡
被仰付
享和元酉正月十六日年来出精相勤候ニ付桐御紋御上下被下置
同二戌五月十日果ル

吉川彦十郎
一切米拾五石三人扶持
同年六月十六日親久兵衛為跡目養子御徒被仰付、御充行如此被下置
同午十二月久兵衛与改名
一切米拾八石三人扶持
文化七午六月十一日御徒目付伴五郎左衛門跡被仰付候、御切米三石増、
都合如此被成下
同十三子六月廿九日病身ニ付立替被仰付候

吉川三太郎

一切米拾五石三人扶持

右同日親久兵衛為跡目御徒被仰付、御充行如此被下置

同十二月廿六日佐十郎与改名

文政四巳年江戸御供詰

同七申江戸御留守詰

同九戌年江戸増詰

同十亥十月廿日御徒目付村山嘉助跡被仰付、役中御足充行三石被下置候

同十一子江戸御供詰被仰付候

同十三寅七月廿五日先達而塩硝蔵現物改之節、不参届之趣相聞候ニ付押込、八月五日御免

吉川与十郎

一切米拾五石三人扶持

文政十三年七月十一日養父佐十郎及大病立替相願、其後令病死候ニ付、御徒へ被仰付、御充行拾五石三人扶持被下置

天保三辰年十月廿九日来巳年江戸御供詰被仰付候

同八酉三月五日ゟ当酉秋江戸詰被仰付候

同五月八日今般上野火之御番被仰蒙候ニ付、当秋江戸詰之内支度出来次第出立被仰付

天保十一子九月十六日当春不慎之趣相聞候ニ付押込被仰付、同年十月五日押込被指免

同十三寅十二月廿日来卯年御入部御迎被仰付候

同十四卯閏九月廿八日来辰年江戸御供詰被仰付

弘化三午二月十二日当御帰国御道中御供迎被仰付候

同十二月廿八日佐左衛門与名替

同四未八月十六日先年も御咎被仰付候処、亦復不慎之趣相聞候ニ付押込被仰付候、同九月十一日押込御免

嘉永元申年十二月七日当夏急御出府被遊候節、御往来御供相勤太儀ニ候段御褒メ被下

同年十二月廿一日水野清太夫跡小屋頭被仰付候

安政六未三月廿二日江戸詰出立

同七申二月廿四日於江戸表病死

吉川藤次郎　佐左衛門倅

嘉永七寅九月廿九日御徒ニ被召出、御充行近年御定之通被下置候

安政四巳九月十六日明道館外塾師手伝被仰付候

同六未三月廿二日江戸詰出立、同七申三月十五日御供ニ而帰着

同七申三月廿九日親佐左衛門病気及大病御暇相願、其後令病死候ニ付其儘御徒ニ被仰付、御充行並之通

一切米拾五石三人扶持

如此被下置候

万延与改元、七月廿五日内達之趣も有之ニ付、明道館外塾師手伝御免被成候

文久三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立

同年五月七日当亥御参府御供被仰付候、然ル処同廿二日病気ニ付御免

元治元子十一月廿日御用之名目を申立御国境迄罷越候始末、不届ニ付急

度も可被仰付処、兼而病気之訳合も有之ニ付御憐愍を以長々押込、同年
十二月六日今般非常之義ニ付長々押込被指免

吉川又五郎　藤次郎養子

一五人扶持
文久二戌九月廿日御徒ニ被召出、御充行御定之通如是被下置候
同三亥十月十三日中将様御上京御供被仰付出立
元治元子四月廿三日右御供ニ而帰
同年十月廿三日養父藤次郎病気ニ付願之通御暇被下、其儘御徒ニ被仰付、
御充行
一切米拾五石三人扶持
如此被下置候
同年十一月廿日養父藤次郎御用之名目を申立御国境迄罷越候儀、兼而病
気之訳合も有之事ニ候へハ取締りも可致置之処不束ニ付押込、同月晦日
被指免候
元治元子十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀百匁被下置候
慶応二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日帰
同三卯十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付
同年十一月廿五日第一級ニ相進候ニ付合薬三斤被下置候
同四辰正月七日急々出張、板取ニ罷在、同廿六日引取
同年三月二日御警衛詰上京、閏四月十七日帰
明治ト改元、十一月七日上京
同二巳二月廿九日歩隊ニ被仰付、後整衛隊ト唱
同年七月二日今度御祝事ニ付御通御雇申付候処、彼是申立候ニ付隊長ゟ
再三及説得候処、其令ニ戻り我意ニ募り候始末、心得違ニ付屹度御察当
可有之処、御祝事之折柄ニ付押込、同廿二日被免
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾五俵四斗五升
同三午五月廿五日第一大隊九番小隊入申付候事
但後拒
同年六月十九日郷学授読手伝申付候事、然ル処翌廿日指免候事
同日第二大隊三番小隊後拒申付候事
同年七月十日第二大隊八番小隊後拒
但第一後拒也
同年十一月廿八日居住罷在候屋敷地之内ニ而九十六坪拝地被下候
同年十二月十二日常備六番隊軍曹
同四未二月十二日四等教授手伝
但第九塾掛り
一十六等ノ三等
同年九月二日御改革ニ付免職
同五申五月又五郎事素行
又五郎事
吉川素行（モトユキ）

吉川 2

好川七郎右衛門

万治年中御奉公人ニ被召抱候由、申伝ニ御座候
但御充行并何役を相勤候哉、相分り不申候

好川唯右衛門

好川林蔵

吉川林右衛門　好之文字改替

但右文字改替仕候儀相分り不申候

万治年中より明和七年之頃迄御充行并御奉公何役相勤申候哉、相分り不申候

吉川幸次郎　林右衛門嫡子

明和七庚寅年五月十九日被召抱、御小人相勤申候、御充行并御扶持方等相分り不申候

安永三甲午年七月十五日御守殿御台所下代役相勤申候

同年十一月十五日幸次郎事幸八与改名仕候

吉川金次郎　林右衛門二男

安永二癸巳年閏三月廿三日中仕切組之内江被召抱、此時金次郎事林蔵与改名仕候

天明五乙巳年十一月三日御台所下代江被召抱

同八戊申年正月十日御広敷御用部屋書役被仰付

同年十月朔日御同所勘定役被仰付、小算格ニ御取立被成下、御充行代り一ケ年金弐両ツ、年々被下置

寛政四壬子年閏二月十五日病気ニ付養子仕候

吉川善五郎　林蔵養子

一切米八石弐人扶持

寛政四壬子年閏二月十五日立替被仰付、御広敷書役被仰付、御充行如此被下置

寛政六寅十二月左之通名替

善五郎事

吉川利平次

文化二丑五月廿七日出精相勤候ニ付小算格ニ被成下、以後為御充行代り年々金弐両ツ、被下置

一切米拾石三人扶持

江戸定

吉川利平次

同五辰二月廿八日先達而御誕生御用相勤候ニ付銀拾五匁被下

同九月十四日出精相勤候ニ付弐石壱人扶持被相増、都合如此被成下、御広敷勘定役川崎安兵衛跡被仰付

文化八未五月廿八日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下

同十酉十二月十九日出精相勤候ニ付、小役人格ニ被成

同十四丑五月十四日於寿満方諸事用向掛り被仰付候、依之締方第一ニ申談相勤、且又分量金等篤相調可申達事ニ候、但部屋出来始末是又厚可申談候

文政二卯閏四月五日病身ニ罷成ニ付御広敷勘定役被指免候、年来出精相勤候故当分無役ニ被指置候

吉川十蔵　利平次倅

一三人扶持

文化十三子八月廿三日御扶持方如此被下、小算ニ被召出候

文政二卯年八月十一日儀平与改名

同三辰六月九日霊岸島御住居御雑用役改御広敷書役兼帯被仰付候

同六月廿日痛所有之願之上霊岸島御屋形雑用役御免被成

同七月廿二日御住居御広式書役勤勘定掛り兼被仰付

文政四巳七月廿三日親利平次長病ニ付立替

一切米拾石三人扶持　　吉川儀平

文政四巳七月廿三日跡目小算ニ可被仰付候処、親勤功も有之候ニ付、格別之趣を以小役人被成下、浅姫君様御附御台所目付被仰付、御充行如此被下置候

但是迄被下候三人扶持以後不被下候

文政七申年四月五日席其儘御広敷添役被仰付候

同十亥八月晦日果ル

吉川新之助

一切米拾石三人扶持

文政十亥十月六日養父儀平及大病立替相願、其後相果ル、仍而跡目小算被仰付、御充行如此被下置候

天保二卯九月廿日御徒不足ニ付御雇被成、御供之儀ハ相除其余諸事本役同様相勤候様被仰付候

同四巳六月廿九日御住居御広敷御書使御薬取被仰付候

同年七月三日御住居御徒兼勤被仰付候

十二月廿八日新之助事吉川利平次与改名

同六未三月十五日御住居御附御用人手附書物役見習被仰付、一統格ニ被成下、但為失却金弐両ツヽ年々被下置候

同九戌十二月廿八日御住居御附御用人手附書物役本役被仰付

同五月四日松栄院様御広敷添役兼勤被仰付候、但吉村武右衛門高橋武次郎申談三人ニ而壱人分相勤可申事

同七月三日当分常盤橋御広敷添役介被仰付候、但是迄年々被下候失却金其儘被下置候

同八月十五日一統上席ニ被成下、御広敷添役并勘定掛り書役兼貞照院様之方振退勤被仰付候、但是迄被下候失却金弐両其儘被下候

弘化三午正月廿五日砂村御屋敷へ引越被仰付候

弘化四未年十二月廿日出精相勤候ニ付、小役人格ニ被成下候

嘉永三戌年正月廿九日松栄院様御附御広敷添役被仰付、御充行弐石御増、都合

一切米拾弐石三人扶持　　吉川利平次

如是被下置、但是迄被下置候失却金弐両以後不被下候

安政四巳九月十四日松栄院様御逝去ニ付役儀被指免候

同五午十一月二日御広敷添役被仰付候

万延元申十一月廿五日本所十間川御屋敷奉行仮被仰付、御充行三石御増、都合

一切米拾五石三人扶持

如此被成下候、但引越ニ付失却金三両被下置候

文久元酉十二月十日失却も有之趣ニ付、金三百疋ツヽ年々被下置候

慶応元丑十二月十九日出精相勤候ニ付、御足充行弐石被下置候

同三卯七月十三日役儀被指免、御勘定所勤被仰付
同年十二月廿八日年寄候ニ付立替被仰付、養子善五郎与申者跡目小算ニ
被仰付、御充行

吉川善五郎

一切米拾弐石三人扶持
如此被下置、御徒番所勤被仰付候
但年来相勤候ニ付金三百疋被下置候
同四辰正月御国表へ引越被仰付、二月廿六日着
同年三月十六日小十人組江被入、二番予備小隊之後拒役被仰付候
明治二巳二月廿九日歩隊ニ被仰付、後整衛隊
同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合
同三午六月廿九日第二大隊二番小隊入申付候事
同年十一月廿三日兵隊指免候事
同月晦日御家従御台所脇木戸御門番江
同年十二月十五日持地之内ニ而七十七坪拝地被下候事、田原町也、未六
月廿日御取消

吉川 3

吉川新右衛門

一切米七石弐人扶持
文政元寅年十月養父新右衛門病気ニ付願之上立替被仰付、錠前番江被召
抱、其後御広敷御出居番助度々被仰付相勤ル
同十二丑年三月霊岸島御屋敷御類焼後、貞照院様本庄御屋敷江御引移被
遊候ニ付、同所江引越被仰付、御出居番代相勤候
天保六未年二月表御出居番被仰付
嘉永元申三月廿七日御広敷御書使御献上附被仰付
同二酉十月九日小寄合格ニ被成下、御広敷御出居番被仰付
同三戌十二月表御出居番被仰付
同七寅三月廿三日御殿山出張ニ付、金壱歩弐朱ヲ四人合ニ被下

吉川友三　右同人倅　御住居小坊主御茶方兼御雇

嘉永三戌年十一月八日御右筆部屋御帳認手伝御雇被仰付、一ケ月金三歩
ツ、被下置候
但是迄被下置候一ケ月金壱歩弐朱ツ、并盆暮金三歩ツ、ハ以後不
被下候
右名替、友三事
吉川友三郎
安政五午正月十五日出精相勤候ニ付、米弐俵ツ、年々被下置候
安政七申正月十八日出精相勤候ニ付御充行壱石御増、都合
一切米八石弐人扶持
如此被成下候、但是迄被下置候米弐俵以後不被下候
万延与改元、七月十四日当分御書使江
文久二戌三月十六日年来出精相勤候ニ付、役中小算格ニ被成下候
同三亥六月七日今度御国表江引越被仰付、着
同年十二月十六日年来出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、拾弐匁被下

同二丑四月五日年寄候ニ付御暇被下、養子文次郎与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

吉川文次郎

一切米八石弐人扶持

如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候

文久三亥八月十三日当秋芝御陣屋詰御雇被仰付

慶応卜改元、五月二日御預所御金方下代江

明治元辰十二月二日表御金方下代江

同二巳五月十二日御勝手役仮預浮下代江

同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下

同三午二月五日歩兵修行被仰付候

同年十一月晦日御家従表御門番へ

吉川 4

吉川忠三郎 御駕小頭

一切米九石

弘化三午四月廿三日困窮相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下

嘉永二酉年九月七日渡り御駕之者部屋締り方不参届趣相聞候ニ付、急度呵り

同年十二月廿一日御供之節着服心得違之趣相聞候ニ付押込、同廿八日被差免候

同五子二月五日江戸表ニ罷在候内御駕之者共不慎之始末、不存与者乍申兼而締り方不参届趣相聞候ニ付押込、同八日被指免

吉川忠斎

一切米八石弐人扶持

嘉永五子年八月七日養父忠三郎病気願之上御暇被下、養子亀吉与申者表御坊主ニ被召出、御充行如此被下置

同日亀吉事忠斎与名替

嘉永七寅九月六日御時計役御坊主被仰付候、但席五本次斎次

安政二卯九月九日寝す役被仰付候、席次田善悦次

同四巳江戸詰、同五午五月十五日帰着

同五午八月朔日江戸詰出立

同年十月廿八日奥御坊主被仰付候

文久元酉三月御供詰

同二戌三月朔日御茶方被仰付、詰中勤向是迄之通

吉川忠益 忠斎養子

一三人扶持

万延元申十月廿六日表御坊主ニ被召出、御扶持方三人扶持被下置候

同二酉正月廿三日御時計役被仰付候

文久与改元、三月御供詰

同年十月二日御附不寝役被仰付候

同二戌二月十八日御附奥御坊主被仰付候

同三亥三月廿五日中将様御供ニ而京ゟ着

同年十月十三日中将様御供ニ而上京

元治元子三月廿日養父忠斎病気ニ付願之通御暇被下、忠益儀表御坊主ニ被仰付、御充行並之通
一切米八石弐人扶持
如此被下置候
元治元子四月五日御附奥御坊主江
同年同月廿三日御供ニ而帰着
同年五月廿日着服心得違之義有之伺之上慎、同廿二日被差免候
同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当三拾匁被下置候
慶応二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月四日帰
同三卯三月朔日御趣意ニ付席其儘御時計役被仰付
同年五月廿日小十人組江被入、右勤中席之儀ハ小十人組格ニ被成下候、
右ニ付左之通名替

忠益事
吉川賞三郎

同年十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付
同年十二月廿二日小御充行難渋之訳も有之ニ付、御憐評を以勤中御足充行拾石三人扶持高ニ被成下候
同四辰六月廿五日会征出立、十一月十五日帰、巳二月廿二日長々出張十弐両、出張ニ付千五百疋
明治二巳二月廿九日歩隊ニ被仰付候、後整衛隊ト唱

但御足其儘被下候事

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米弐拾九俵五升六合被下、内弐石壱口御足
同三午正月廿日御家従附属申付候事

但筆者勤

同年四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励ニ付、御賞典之内四石廿ケ年被下候事
同年八月三日東京詰高木集ト致交代候様申付候事、然ル処同十九日御繰合有之ニ付指免候事
同年十二月四日掌政堂筆者、支度出来次第東京詰申付候事、同十三日出立

但年給四俵被下候事

同年十二月十二日准十六等
同四未六月朔日御改正ニ付免職、在京中是迄之通
同年七月十三日帰藩申付候事、然処修業願之上其儘在京

但立帰願飛脚ニ而罷越候事

同廿一日失却も有之ニ付金七両弐歩被下事
同年十二月名替

賞三郎事
吉川忠彦

同　浜松県十五等出仕

吉川忠悦　源吉事　奥御坊主忠益養子
一三人扶持
元治元子九月五日表御坊主ニ被召出、御扶持方如此被下置候
慶応二寅八月十七日小坊主江
同三卯三月十六日御趣意ニ付被召出之儀ハ被相止候へ共、御憐愍を以小坊主御雇被仰付、勤中

一弐人扶持
如此被下置候、但席其儘
明治二巳九月十九日名替

忠悦事
吉川雅太郎

同年十一月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米七俵四斗壱升九合
同年十二月廿四日為歳暮銀壱貫五百匁被下候事
同四未十二月廿九日給仕雇差免候事

吉江[1]

二木元四郎

一切米拾五石三人扶持
寛延二巳九月五日二木小助養子御徒被召出、御充行如此並之通被下置
宝暦二申十二月吉江重助与改性名
同十一巳十二月次兵衛与改名
明和五子九月十一日御徒ゟ小役人御取立、札所御貸方水野弥八郎跡被仰付候
同七寅十二月次郎左衛門与改名
安永三午七月五日役義御取揚、御徒被仰付
同七戌十二月伊左衛門与改名
天明三卯九月仁左衛門卜改名
同四辰十一月朔日御徒ゟ小役人格御取立、御茶園預り、比野丈太夫跡被仰付候
寛政十午十二月九日桐御紋御上下被下置候
享和二戌十二月十六日年来出精相勤候ニ付、御切米弐石御増
一切米拾七石三人扶持
都合如此被成下
文化元子十一月五日年寄候ニ付内願も在之立替被仰付、倅次兵衛御徒被仰付、御充行並之通被下置
但仁右衛門義年来相勤候ニ付、金百疋被下置候

吉江次兵衛

一切米拾五石三人扶持
右同日親仁右衛門為跡目御充行如此被下置、御徒被仰付候
文化二丑江戸詰
同十二月廿八日仁右衛門与名替
同八未江戸詰
同年二月廿三日次郎左衛門与改名
同八月病気ニ付罷帰
同十一戌十二月廿五日次右衛門与改名
同十二亥江戸詰
文政四巳江戸詰
同七申七月十一日小役人格ニ被成下、御広敷添役三村九内跡被仰付
同七月十七日二左衛門与改名
同十二月廿八日仁左衛門与改名
同九戌三月廿九日女中引纏江戸立帰被仰付置候処、御免被成候
同年五月三日二ノ丸御花壇預り中村忠太夫跡被仰付候

吉江啓之助

一切米拾五石三人扶持

天保二卯三月五日養父仁左衛門年寄候ニ付立替御徒被仰付、御充行並之通被下置候

同五午二月十九日江戸俄詰被仰付候、但山岡友右衛門代り詰

同八酉九月廿一日支度出来次第江戸詰被仰付候

同九月廿七日支度出来次第江戸詰被仰付置候処、火之御番御免被仰出候ニ付詰御免被成候

同九戌三月廿日当年御入部御迎被仰付

同年九月四日支度出来次第江戸詰被仰付

同十二丑十二月廿五日仁左衛門与改名

弘化三午十月十五日来未年江戸御供詰被仰付候

嘉永四亥年江戸御供詰

同七寅七月十九日御判物差添ニ而江戸表へ出立、十月六日同断ニ而帰着

同七寅年十月廿一日御判物御朱印先達而江戸表へ被指出候節、道中指添罷越候ニ付銀拾五匁被下置候

安政七申三月十七日病死

〆

吉江専太郎　仁左衛門倅

一五人扶持

天保十四卯十一月十一日御徒ニ被召出、近年御定之通被下置候

嘉永元申十二月七日当夏急御出府被遊候節、御往来御供相勤候ニ付御褒詞

同二酉九月廿日貝心掛候ニ付御貝御預ケ被成候、但江戸ニ而

同四亥年江戸詰

安政三辰十二月廿八日左之通名替

専太郎事

吉江重四郎

同七申二月十日太田御陣屋詰出立

万延与改元、四月十三日親仁左衛門及大病立替相願、其後令病死候、依之其儘御徒ニ被仰付、御充行並之通

一切米拾五石三人扶持

如是被下置候、但是迄之通御貝御預ケ被成候事

右之通御陣屋ニ而被仰付

文久元酉年直ニ江戸表江詰越

同年四月廿九日太田御陣屋詰中横浜表江長々致出張候処、出精相勤候ニ付金弐百疋、別段百疋被下置候

元治元子八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、丑正月御国江帰

同年十月八日於京都御貝役被仰付、右役中新番格ニ被仰付候

同二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、二月帰

明治三午　掌政堂当番勤

吉江 2

吉江小左衛門

一切米八石

天明二寅年家名御立被下、御坊主江被召出
同四辰年奥小坊主江被仰付
寛政三亥年御部屋附奥御坊主ニ被仰付候
文化十二亥年御道具役格御茶方被仰付候
文政元寅六月十六日小算格ニ被成下、表御納戸下代勤被仰付
同十一子年正月十六日年来出精相勤候ニ付、年々米弐俵ツヽ被下置
同十三寅年十二月十六日年来相勤候ニ付御充行弐石御増、都合拾石弐人扶持、跡目小算ニ被成下、表御納戸手伝被仰付候ニ付別帳へ出ス

吉江定右衛門　小一郎事

一切米八石
天保四巳五月朔日養父小十郎病気ニ付願之上御暇被下候、跡諸下代之内へ被召抱、御充行並之通八石弐人扶持被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付
同六未二月二日古物方下代へ
同十二月十七日御腰物方下代へ
同七申十一月廿日来酉年江戸詰被仰付
同十亥五月廿一日木内甚兵衛下代へ
同十二丑八月二日酒井金五左衛門肩下代へ
同十二月左之通改名、小一郎事定右衛門
嘉永二酉年七月廿六日殿下領御代官肩下代江組替
同六丑二月廿五日粟田部領御代官受込下代江
安政二卯年正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同四巳正月廿五日御趣意ニ付改而金津芝原領へ
同六未八月五日三国山岸領江組替
万延元申六月廿一日元分銅印御講方下代へ
文久元酉四月十八日御趣意方下代へ
同三亥正月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
元治元子十二月賊徒一件、御留守御用ニ付十弐匁被下
慶応二寅正月十二日左之通名替

定右衛門事
吉江小左衛門

明治二巳正月十六日出精相勤候ニ付、年々米三俵ツヽ被下置候
同年六月十七日名替

小左衛門事
吉江小重（コヂウ）

同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免候事

決算掛り　月給壱俵被下

同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午三月廿九日決算掛り指免候
同年四月五日山里御門御金土蔵当番申付候事
同年七月十八日御金蔵口山里御門両所当番更ニ申付候事
同年九月八日御蔵方附属　但下級
同年十月十九日依病気願附属指免候事
同年十一月晦日三ケ所当番江

吉田[1]

吉田喜右衛門

一切米拾弐石三人扶持

享保十七子十一月廿八日松岡御蔵役中野弥一兵衛跡被仰付候

同十九寅八月六日松岡御蔵役小畑金兵衛跡被仰付候

寛保元酉十月廿七日果ル

吉田円四郎

一切米拾石三人扶持

同酉十二月十七日親喜右衛門為跡目小算被召出、御充行如此被下置

同二戌十二月喜右衛門与改名

宝暦三酉六月十六日小算ゟ御徒被仰付

同十二午六月廿八日庄左衛門与改名

明和三戌五月晦日於江戸果ル

吉田甚蔵

一切米拾五石三人扶持

同七月十二日親庄左衛門病中願ニ付御立替被下、御徒被召出、御充行如此被下置

同十二月磯右衛門与改名

安永三午六月廿九日不調法之儀有之ニ付、立替被仰付候

吉田惣次郎

一切米拾五石三人扶持

同年七月十九日養父為跡目御徒被仰付、御充行如此被下置候

天明六午十二月庄左衛門与改名

同八申江戸詰

寛政三亥江戸詰

同八辰十二月弁右衛門与改名

同十一未江戸詰

文化十三子八月廿日小役人格被成下、炭薪奉行木村与太夫跡被仰付

文政五午十月廿五日小役人被成下、綿麻奉行斎藤多兵衛跡被仰付

同七申七月十一日年寄候ニ付立替被仰付候

吉田七郎助

一切米拾弐石三人扶持

同年同日御充行如此被下置、跡目小算被仰付

同年七月廿九日御趣意ニ付無役小算被仰付

同八酉正月廿五日御徒不足ニ付御入人ニ被仰付、御充行並之通

一切米拾五石三人扶持

如此被下置

文政九戌江戸御留守詰被仰付

同年十二月廿八日喜右衛門与改名

同十一子十二月十六日来丑年江戸詰被仰付

同十二丑年四月廿日御人繰合ニ而詰御免被成候

同十三寅十月廿三日来卯江戸御供詰被仰付候

天保五午十二月廿八日弁左衛門与改名

同七申年四月十二日当秋江戸詰被仰付候

同八酉三月十五日詰高御減被成候ニ付罷帰り候様被仰付

同九戌三月廿日当年御入部御迎被仰付候
同十三寅五月朔日今度東叡山火之御番被為蒙仰候ニ付、支度出来次第江戸詰被仰付候
弘化三午十月十五日来未年江戸御供詰被仰付候
嘉永四亥八月廿七日病死

吉田栄太郎

一切米拾五石三人扶持
嘉永四亥十月五日養父弁左衛門病気及大病御暇相願、其後令病死候ニ付、御徒被仰付、御充行如是被下置候
安政四巳四月御供ニ而江戸詰出立
文久元酉年江戸御供詰
同年十二月廿八日左之通名替

栄太郎事
吉田喜右衛門

同二戌九月五日御供筆頭荒井栄蔵跡
同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立
同年五月七日当亥御参府御供被仰付、八月十七日出立
同年十二月江戸ゟ御上京御供、子二月十三日御供ニ而帰
元治元子八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、丑三月帰
慶応二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日帰
同年十月十八日御趣意ニ付席其儘小筒組後拒役被仰付
同三卯十二月朔日宰相様御滞京中為御備上京出立、辰四月十一日帰
同四辰七月七日上京可致処不快ニ付延引
明治卜改元、十一月九日病気ニ付後拒役被指免、御徒番所勤被仰付候
明治二巳正月廿五日先般後拒役被指免、御徒番所勤被仰付候ニ付、元御徒席ニ被仰付候、元御徒之者役席江被入
同年三月廿六日東京詰被仰付、詰中御直書御使并御徒目付介被仰付、四月七日出立、十月廿二日帰
同年六月左之通名替

喜右衛門事
吉田喜内

同年十一月九日御家従附属御住所当番申付候事
　但昼夜一人ツヽ勤番之事　十弐人也　後雑務方勤
同月廿五日今般御改革、更御充行米三拾五俵四斗五合
午十一月廿八日居住罷在候屋敷地拝地被下候
同四未二月十六日御東京御供出立、五月廿三日御供ニ而帰
同年四月五日年給九俵弐斗七升三合六勺　十五級ノ一　在三俵也
同年五月五日居屋敷地之内東ノ方御用地相成候事
同年十月廿日御家従附属指免候事

吉田 2

吉田弥左衛門

一切米八石弐人扶持
文化五辰年明里御蔵所見習相勤居候処、山方手伝被仰付
同十一戌正月十三日親平右衛門病気願之上立替被仰付、跡同月廿二日御籏奉行前田彦次郎組被召抱

同年二月朔日川除方書役被仰付
同七月六日明里御蔵所ハ御雇出役被仰付、嶋崎伝右衛門仮預り被仰付、
右出役中御擬作八石弐人扶持被成下候
同十二亥四月二日御切米方尾崎庄兵衛下代勤被仰付
同年八月四日御蔵奉行佐藤常右衛門下代勤へ
文政二卯十月五日御奉行森田伝右衛門下代勤被仰付
同五午八月朔日小宮山伝七書役下代勤へ
同六未二月十七日右同人極方下代勤へ
同八酉江戸詰
文政十亥七月廿九日小算ニ被召出、御充行並之通
一切米拾石弐人扶持
如此被下置
同年十一月十九日来子年江戸詰被仰付候
同十二丑正月十五日当秋迄詰延被仰付候
同年六月廿一日御勝手向御難渋御指支ニ付格別之御省略被仰出候、仍之
御用掛り被仰付候
同年八月十八日来寅春迄詰越被仰付候
同十三寅四月十一日詰越罷在格別出精相勤候ニ付、金五百疋被下置
天保四巳三月十六日出精相勤候ニ付、跡目小算被成下候
同九戌十二月四日支度出来次第江戸詰被仰付
同十二月廿八日御本殿御普請御用掛り被仰付
同十亥八月三日来子年迄詰越被仰付候
同年十二月十一日御屋形御普請宜出来御用掛り出精ニ付、金弐百疋被下
置候

一切米拾弐石三人扶持
天保十一子正月十六日出精相勤候ニ付弐石壱人扶持御増、都合如此被成
下候
同十三寅十二月十六日出精相勤候ニ付一統格ニ被成下候、席徳山安兵衛
次
同十五辰四月十日御内用ニ付上京被仰付候
弘化二巳六月五日御勝手役近藤才兵衛跡被仰付、御充行三石御増、都合
一切米拾五石三人扶持
如此被成下、役中御足充行三石被下置候、但席安達次郎八次
同三午十一月十六日御貸手形取斗方不参届趣相聞候ニ付押込、同十二月
五日押込被置候処被指免候
同四未三月十七日果ル

吉田平四郎

一切米拾石三人扶持
弘化四未四月廿五日親弥左衛門及大病其後令病死候ニ付、無役跡目小算
ニ被仰付、御充行如是被下置候、但席石川弥右衛門次
安政三辰正月十九日小算勤役被仰付候
同五午正月十六日幼年ニ付御充行拾石三人扶持被下置候処、当節ニ而ハ
御間ニ合候ニ付弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
同年七月廿九日御用向繰合算術専致修行候様被仰付候
文久二戌三月廿日江戸詰出立、同三亥五月廿五日帰着

元治元子七月廿七日京都へ出立、　　帰
同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀百匁被下置候
慶応元丑九月廿八日出坂、十月十六日帰
同年十月七日心得違之趣有之ニ付御奉行存を以押込、翌八日指免候
同年十一月晦日大坂表江出張、寅二月廿六日御返シ被成、帰
同二寅三月十一日大坂出張先ニおゐて外宿致し我儘之趣相聞、不届ニ付
小算江被下ケ、御充行弐石御取揚押込、四月朔日被指免
一切米拾石三人扶持
同三卯四月十二日宰相様御上京御供出立、八月九日帰
慶応三卯十一月二日宰相様御上京御供出立
同四辰二月晦日出精相勤候ニ付小算上席ニ被成下、御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
五月廿八日北陸道鎮撫使附会計方御用取扱被仰付
同年五月晦日御内飛脚ニ而京都ゟ着
同年七月十一日今度会征御用ニ付越後表へ出立、其後東京江罷越朝廷御用相勤、午八月五十日之御暇相願、九月三日飛脚御用相勤従東京帰、十月十二日飛脚ニ而亦々東京江出立
明治二巳十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合
東京府
同年十二月二日任権大主典　開拓使
同三午十一月廿八日居屋敷地之内ニ而七十七坪拝地被下候

吉田 3

吉田惣左衛門　喜作事
一切米八石
文化七午八月十二日養父林蔵病気願之上立替被仰付、跡古物方嶋崎伝右衛門仮預り浮下代被召抱、仕出場留附相勤候内追廻方手伝被仰付、夫ゟ玉薬方仮下代被仰付
同八未三月表御金方手伝被仰付
同十二月十日御切米方下代被仰付
同十二亥二月八日御材木方下代被仰付
同十四丑八月廿六日御代官下代入替被仰付
天保二卯八月十日酒井金五左衛門受込下代へ
同八酉正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下
天保九戌年浮下代嶋崎伝太夫仮預り被仰付
同十亥年六月五日瓦方下代へ
同十一子年十月廿六日井上弥太夫肩下代へ
同十二丑八月二日吉倉茂右衛門肩下代へ
嘉永二己酉年六月十二日年寄候ニ付御暇被下、養子忠次与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

吉田忠次
一切米八石弐人扶持
如此被下置、勝田与右衛門仮預り被仰付候
嘉永三戌年三月十二日炭薪方御材木方下代兼被仰付候

同四亥五月十七日御材木方炭薪方下代兼江
同年十二月廿二日左之通名替
忠次事
吉田忠左衛門
同五子正月廿一日三国領御代官方肩下代江
同七寅十一月十六日広瀬領御代官肩下代江組替
安政元寅十二月廿五日左之通名替
忠左衛門事
吉田理平
同四巳正月廿五日御趣意ニ付浮下代西村源左衛門仮預り被仰付候
同五月廿六日追廻方下代へ
同年八月廿四日御材木方炭薪方下代兼江
安政六未九月十二日役宅へ引越
万延元申十二月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下
元治元子四月廿二日御預所御代官方下代江、但席其儘
同年十二月賊徒一件、御留守御用ニ付十弐匁被下
慶応元丑七月十一日元勤中三ノ丸御座所御普請中格別出精相勤候ニ付、
銀七拾匁被下置候
同年十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格順席被成下候
同三卯正月廿九日御台所方下代江
同年三月十日御上京御供出立、辰四月廿日帰
同四辰八月廿五日殿下砂子坂領御代官方下代江
但役席山元運八郎次
明治二巳七月十九日殿下砂子坂領収納方下代
同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀指免候事
但附送り之儀ハ追而御指図相待可申事
同月廿五日右同断ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月廿八日御門番勤申付候事
同年七月十八日下馬御門所当番更申付候事
同年八月廿日会計寮附属申付候事
但造営方
一下級
同年十二月十二日右附属指免候事
同四未正月廿四日大橋下見張番申付候事
明治六年四月廿六日病死ニ付、三男豊次へ家督

吉田豊次
一

吉田 4

八杉七左衛門　平兵衛
一切米八石
文化十四丑七月十九日養父七左衛門出役被指免、跡七月廿三日諸下代之
内へ出役被仰付、御勝手役仮預り被指置候
同八月廿六日瓦方下代へ入替被仰付
文政元寅九月七日御材木方下代勤へ
同五午四月廿一日御代官下代勤へ

同八酉十月五日中領肩下代勤被仰付
同十三寅二月五日浮下代江、平瀬五左衛門仮預り
同月廿八日宮塚甚左衛門下代へ
文政十三寅六月廿八日追廻方下代へ
同十三寅十月十八日平本次太夫下代へ
天保二卯八月十日鈴木忠太夫下代へ
同五午五月八日上領郡方受込下代へ
同十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下
同七申十二月五日此度郡役所普請出来之節致心配候趣相聞候ニ付、銀三拾匁為御酒代被下置
同十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下
同九戌十二月五日出精相勤候ニ付、為御酒代銀三拾匁被下置
同十一子二月廿日御広敷書役勘定役兼被仰付
同十二丑九月五日当秋支度出来次第江戸詰被仰付
同十四卯三月廿五日昨年従公辺御住居御入用巨細相調指出候様被仰出候処、取調懸り同様相勤候ニ付金壱歩被下置
同十二月山方下代へ
弘化三午十二月十六日出精相勤候ニ付、米三俵ツヽ当年ゟ年々被下置旨被仰付
嘉永五子正月十九日御趣意方下代江
安政元寅十二月五日今般大橋御修覆出来ニ付、為御褒美銀七匁五分被下置候
同年同月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾石弐人扶持
如此被成下候、但是迄被下置候米三俵ハ以後不被下候事
安政二卯正月廿八日御用之外急度慎罷在候様被仰付候
同年五月廿五日役儀被指免、是迄之通慎罷在候様被仰付候
安政三辰六月十六日御趣意方勤中等閑之趣、且又仕来役徳与心得候与者乍申配当銀等申受候始末、不届ニ付小寄合格江被下ケ押込、七月六日御免
但不正之筋ニ相当り候銀子四貫弐百匁御趣意方江上納可致事
同年九月七日老年ニ相成候ニ付願之上御暇被下、養子石太郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行

八杉石太郎

一切米八石弐人扶持
如是被下置、西村源右衛門仮預り浮下代被仰付候
安政六未七月五日御切米方御扶持方兼下代へ
万延元申五月廿五日病身ニ付願之上御暇被下、養子安五郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行

八杉安五郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
同年九月十九日左之通名替
安五郎事
八杉進五郎
万延二酉正月廿日御預所御金方下代へ

文久与改元、六月廿五日御雑用方下代へ
同二戌三月十七日左之通改姓
八杉事
吉田進五郎
同年四月廿日御材木方炭薪方下代へ
同年十二月廿二日仕出場書役被仰付、月番御奉行仮預り当時御預所仕出場書役仮へ
元治元子十月長征、丑二月帰
慶応元丑九月十四日上京、寅十月帰
同四辰六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、巳二月廿二日出張ニ付十両被下
明治与改元、十二月十六日年中格別御用多之処出精相勤候ニ付、当年限米弐俵被下置候
同二巳十一月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同月　御改革ニ付役儀被免
同月廿六日決算掛り
同三午三月廿九日御用済ニ付右懸り被免
同年四月五日歩兵修行指出候
同月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内十両被下候事
同年八月三日第三大隊弐番小隊後拒申付候事
但第四也
同年十二月十二日予備四番隊押伍
同四未四月七日右解隊被仰出候事
同月十日常備第九小隊江被入候　年給六俵
同年　解隊
同五申七月十日新潟県へ採用ニ付早々出頭可致事

吉田 5

吉田文蔵　札見下代
一切米七石弐人扶持
嘉永元申年十二月十六日出精相勤候ニ付諸下代之内江被入、勤向是迄之通被仰付候
同四亥年十一月廿日出精相勤候ニ付御充行壱石御増、都合一切米八石弐人扶持
吉田文蔵
如是被下置、御札所御趣向方下代ニ被成下、当分札見下代被仰付
同日御勝手役仮預り被仰付候
安政三辰十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
同四巳正月廿五日御切米方御扶持方兼下代へ
同年五月廿六日御金方下代江
同六未八月朔日江戸詰出立
万延元申十月十九日御札所御趣向方下代へ
文久二戌十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
元治元子八月七日御札所奉行下代江、但御趣向方名目被相止候ニ付
同年十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之拾弐匁被下
慶応三卯七月廿日御札所不締之儀有之、夫々御咎被仰付候ニ付伺之上慎、
同廿四日被指免
慶応四辰二月五日出精相勤候ニ付、年々米三俵ツヽ、被下置候

同年三月廿二日太政官金札御用上京、巳九月四日御用済ニ付帰着
明治二巳十月廿七日役所不締之儀有之役前不参届ニ付押込、同十九日御用之外慎申付、十一月十八日慎指免候事
同年十一月十九日楮幣局受込申付、役中一統格、御足弐石壱口被下候事
但米三俵之儀ハ自今不被下候事
一月給米一年分四俵被下候事
〆
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾九俵五升六合、内弐石壱口御足也
同三午三月朔日ゟ弐石一口之内一口不被下候、会計ゟ伺也
一米弐拾五俵壱斗四升七合、内弐石御足也
同年八月廿四日銭札出来中并百匁札吟味中格別困窮相勤候ニ付、金五百疋被下候事
同年十二月十二日民政寮勤　貨幣局
但十六等ノ二等　年給十六俵
明治四未六月朔日御改正ニ付免職
同廿七日藩庁附属申付候事
但貨幣局　十六等ノ三等
同年十二月廿四日福井県庁附属
戸籍方　等外ノ三級
同五申五月名替
文蔵事
吉田敦（アツシ）

吉田 6

岡倉弥八

一切米七石弐人扶持
文化十四丑十一月廿六日出役下代勤被仰付、御趣意方多部久左衛門下代へ
文政二卯正月廿五日御趣意方役所向心得違之義有之ニ付押込、同廿八日被指免候
同七申十二月十六日出精相勤候ニ付御充行壱石増、都合
一切米八石弐人扶持
如此被成下
同九戌八月十四日御趣意方受込役下代勤へ被仰付候
但已後右受込役明跡有之節順席被仰付候儀ニ而ハ無之、其時之御人撰御評議を以可被仰付事ニ候
文政十亥十二月十六日年来出精相勤候ニ付、小寄合格被成下
同十二丑三月廿九日於役所心得違之趣有之ニ付、御趣意銀御貸方下代勤被指免、浮下代被仰付候
同年十月廿二日御金方宮塚甚左衛門下代被仰付候
同年十二月十三日金津奉行請込下代河合林右衛門跡被仰付候
天保二卯年正月十六日出精相勤候ニ付、小算格被成下
同四巳二月十九日勤向心得違之趣有之ニ付、小寄合格ニ被下ケ浮下代被仰付押込、同三月五日押込被指免候
同五午二月十九日御広敷書役勘定役兼江
同九戌二月廿六日此度女中江戸表へ御返し被成候ニ付、道中引纏立帰被

仰付候
同四月八日御供女中道中引纏被仰付候
同九月廿二日松栄院様為御代拝松高斧次郎殿被指越候ニ付、御用掛被仰付
同十亥十一月廿日此度格別之御省略被仰出候ニ付、御用掛り被仰付候

岡倉仁助

一切米八石弐人扶持
天保十三寅三月八日養父弥八義病気願之上御暇被下、諸下代之内へ被召抱、御充行如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付候
同五月十一日古物方下代へ
同九月十六日御広敷書役へ
同十二月七日利右衛門与名替
同十四卯正月十八日当春江戸詰被仰付
同五月十八日貞照院様御広敷勤中書役勘定掛被仰付候
同五月廿四日常盤橋御広敷書役勘定掛り兼被仰付候
同閏九月八日神田橋御住居勤へ
同十一月廿八日御趣意ニ付御住居御台所下代兼被仰付候
同十二月六日来々巳年迄詰越被仰付候
同十五辰五月十二日御住居御台所下代兼被仰付置候処、御免被成候
同十五辰八月廿四日来巳春迄詰越被仰付置候処、御趣意ニ付勝手次第詰帰被仰付、但当詰ニ御立被下候
弘化三午八月廿日山干飯領御代官肩下代被仰付候
嘉永二酉年七月廿六日殿下領御代官肩下代江組替
同四亥五月十七日南居領御代官肩下代へ組替
安政元寅十二月十九日山干飯領御代官肩下代へ
同二卯正月廿九日上領郡方肩下代江
同三辰二月廿五日出精相勤候ニ付小寄合格ニ被成下候、但席笹木長介次
同四巳六月廿九日御趣意方下代江
万延元申年十二月廿八日右之通名替

利右衛門事
岡倉弥八郎

文久元酉四月十八日石場畑方支配へ、但役米八俵ツ、被下置候事
同二戌閏八月廿日病気ニ付願之通御暇被下、養子恒吉与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

岡倉恒吉　弥八郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、野村治右衛門仮預り浮下代被仰付候
同年御陣屋詰
同三亥三月廿一日御前様御国江被為入候ニ付、御関札御用相勤帰着
同年六月三日農兵弾薬方下代へ
同四子正月廿五日御材木方炭薪方下代兼へ
元治元子十一月十一日仕出場書役へ
同年十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
慶応元丑七月十一日元勤中三ノ丸御座所御普請中格別出精相勤候ニ付、銀五拾匁被下置候
同年十月廿八日左之通改姓名

岡倉恒吉事
吉田綱太郎

同二寅四月十一日江戸詰出立、卯四月三日帰
明治元辰十二月十六日年中格別御用多之処出精相勤候ニ付、当年限米弐俵被下置候
同二巳十一月朔日今般御改革ニ付役義指免候事
但諸役所附送り之儀ハ追而御指図相待可申事
同年同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午正月十四日民政寮附属申付候事
同年九月八日引立方為御用武生出張中不埒至極之儀有之ニ付、立替之上謹慎申付候事、同廿八日指免
同年十月廿三日右跡式江被召抱

吉田祐之助　卒朝倉周平弟也　廿四歳
一米弐拾弐俵壱斗八合
同四未八月十三日都合之儀ニ付立替

吉田雪江　友市　西方村与十郎弟　養子　廿二歳
一米弐拾弐俵壱斗八合
同五申五月友市事雪江

吉田 7

沢崎円助

一切米八石弐人扶持
天保十四卯三月十一日御目付大関新五左衛門物書年来相勤候ニ付、諸下代之内江被召抱、御充行如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代江被仰付、但跡株御定之銀高半分上納之事
同五月十二日御台所方下代へ
同五月十六日当秋江戸詰被仰付
同十一月廿八日詰中御住居御台所下代、且又御趣意ニ付同御広敷書役勘定掛り兼被仰付候
同十五辰五月十二日御住居御広敷書役勘定役兼被仰付置候処御免被成、常盤橋御台所下代打込勤被仰付候
弘化二巳二月廿四日御代官大町次左衛門肩下代へ
同八月九日平井佐右衛門肩下代江組替
同三午十二月廿四日幾右衛門与名替
嘉永元申八月二日砂子坂領御代官肩下代へ組替
同二酉年七月廿六日広瀬領江組替
同三戌年二月廿四日品ケ瀬領御代官肩下代へ組替
同五子八月　三国領御代官方下代江組替
同六丑二月廿五日砂子坂領御代官方下代へ組替
安政四巳正月廿五日御趣意ニ付改而今庄広瀬領へ
同年三月廿五日殿下砂子坂領江組替
同六未八月五日三国山岸領江組替
文久元酉六月廿日浜坂運上会所下代へ
同二戌正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候
元治元子八月晦日年寄候ニ付御暇被下、跡諸下代之内江被召抱

同年十一月八日養子玉吉与申者諸下代之内へ被召抱

沢崎玉吉

一切米八石弐人扶持

如此被下置、池村半兵衛仮預り被仰付候

同年十二月賊徒一件、御留守御用相勤候ニ付十弐匁被下

慶応二寅三月廿一日御切米方御扶持方下代兼江

同三卯八月二日御金方下代江

同年十一月廿八日左之通改姓名

沢崎玉吉事

吉田珪蔵

同四辰六月廿六日会征出立、十二月七日帰、巳二月廿二日出張ニ付十両

被下候

明治卜改元、十二月廿二日仕出場書役江

同二巳六月廿一日名替

珪蔵事

吉田珪三

同年十一月朔日今般御改革ニ付役儀指免候事

同月十二日総会所附属申付候事

同月廿二日民政局筆者申付候事

但惣会所勤

同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合

同三午四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内金十両被下候

事

同年十月八日御用有之ニ付団野権少参事へ附添横浜江可罷越事、同十二

日出立

同年十二月十二日民政寮勤　惣会所筆者

但准十六等　未正月ゟ九俵

同四未二月廿八日団野権少参事同道横浜ゟ帰着

同年六月朔日御改正ニ付免職

同十四日任庁掌

但総会所振退勤

同年十二月廿日今般改正ニ付免職

同五申正月廿八日御用済ニ付不及出勤

同　修行願東京

同年七月廿五日勝手向之儀ニ付養子

吉田喜代治　実第二区伊藤和作次男

一米弐拾弐俵壱斗八合

吉田 8

吉田幸左衛門

一切米八石

文政五午十月十日御作事方下代へ被仰付、御充行並之通八石弐人扶持被

成下

同十三寅二月七日御本丸御普請御用掛り被仰付

同年十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下

天保九戌十二月十五日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下
同十四卯十二月数年出精ニ付米弐俵被下
弘化三午十二月十六日出精相勤候ニ付、米三俵ツヽ、当年ゟ年々被下置候
旨被仰付
嘉永二己酉年六月十二日年寄候ニ付御暇被下、養子他市与申者諸下代之
内へ被召抱、御充行並之通

吉田他市

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、御勝手役仮預り被仰付候、右同日御作事方下代へ
但幸左衛門年来相勤候ニ付、為御酒代銀拾匁被下置候
幸左衛門養子
吉田多市
一天保六未年御作事所帳前見習勤被仰付候
一同九戌年ゟ本役同様相勤候様被仰付、其後本役打込ニて年番等
年々相勤候
一弘化三午年年番相勤居候処、同年瑞源寺庫裏御再建ニ付御用掛
り被仰付、瑞源寺江詰切相勤申候
一嘉永二酉年年番相勤居候処、同年柳冠木御門御再建ニ付御用掛
り被仰付、相勤申候
一同年六月十二日養父幸左衛門儀年寄候ニ付御暇被下
幸左衛門養子多市事
吉田直右衛門
右立替被仰付、御作事方下代江被仰付、養父之通諸職人水役取
立方三役兼帯勤被仰付、御充行並之通
一切米八石弐人扶持
如斯被下置候
一嘉永四亥年江戸詰被仰付候
嘉永三戌年十月　来亥年江戸詰被仰付候
同五子正月十八日御住居御普請掛り被仰付候
同年四月廿五日右御用掛り出精ニ付銀四拾五匁被下置候
同年六月五日右同断出精相勤候ニ付米三俵被下置候
同年十一月十六日仕出場書役下代へ
同年同月十七日左之通名替
直右衛門事
吉田幸八郎
同六丑五月二日御奉行原平左衛門書役下代へ組替
同七寅二月十八日訳合有之ニ付小寄合格末席ニ被成下、御作事方下代被
仰付候
安政元寅十二月五日今般大橋御修覆出来ニ付、為御褒美銀拾五匁被下置
候、同日右同断之処格別出精ニ付別段銀拾匁被下置候
安政三辰四月廿日今度黄門様御遠忌ニ付、於運正寺御廟御造営被仰出候
処、讒之日数ニ而宜出来ニ付銀拾匁被下置候
同四巳正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格順席ニ被成下候
同六未八月十六日御預所御代官方下代江
万延元申十二月廿八日左之通名替
幸八郎事
吉田幸左衛門

元治元子十二月賊徒一件、御留守御用ニ付十弐夊被下
慶応元丑十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同三卯四月十一日病気願之上御暇被下、養子録蔵与申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

吉田録蔵

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付
同年十月晦日御蔵所下代江
同四辰二月廿六日左之通名替
録蔵事
吉田新一
同年七月十七日不束之儀有之ニ付伺之上慎、同廿四日被指免
明治二巳十一月朔日今般御改革ニ付役義被免候
同月四日御蔵方附属申付候事
但年給一俵被下候事
米弐拾弐俵壱斗八合
同年同月廿五日今般御改革ニ付、御充行如此
同三午七月廿日御蔵方附属指免候事
同月廿二日生兵修行指出候也

吉田 9

吉田吉之助　御出居番

一切米七石二口
明治元辰十一月十一日内願之趣も有之ニ付表御坊主ニ被仰付候、但御充行其儘、席長谷川真悦次
吉之助事
吉田喜伯
同二巳四月七日東京江出立
同年九月廿一日名替
喜伯事
吉田喜之介
同年十一月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾俵弐斗九升壱合被下
同年十二月廿三日表給仕指免候事
但軍務支配之事
一東京詰中是迄之通
同三午二月二日東京ゟ帰

吉田鏻太郎　表給仕喜伯倅

一口半
明治二巳三月三日小給仕御雇被申付、御雇中月俸如此被下置候、席梅津清也次
鏻太郎事
吉田鏻弥
同年九月十九日名替
鏻弥事
吉田鏻太郎

同年十二月廿四日為歳暮銀壱貫匁被下候事
同三午八月廿二日雇給六俵高ニ被成下候事
同四未十二月廿九日給仕雇差免候事

吉田 10

吉川友三郎　御出居番新右衛門倅　御帳認手伝

一切米八石弐人扶持
安政三辰三月十二日表御坊主ニ被召出、御充行如此被下置候
　但正金五十両上納被仰付候
同日左之通名替
　友三郎事
　吉川友三
文久元酉六月七日奥御坊主格被仰付候
同二戌四月五日御在国中御茶方奥御坊主助被仰付候
同年閏八月廿四日当分御時計役兼被仰付候
同三亥正月廿三日中将様御上京被遊候ニ付御供
文久三亥三月十八日京ゟ振りニ而江戸へ出立
同年六月十三日今般御国表江引越被仰付、着
同年十二月十二日困窮相勤候ニ付為御手当銀拾五匁被下置候
　此時御右筆部や不時助也
元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三拾五匁被下
慶応元丑八月廿六日、一昨廿四日晩立飛脚之節不念之儀有之ニ付伺之上
慎、九月朔日被指免
同二寅七月廿七日病身ニ付願之通御暇被下、養子運吉与申者表御坊主ニ
被召出、御充行並之通

吉川隆啓　運吉事

一切米八石弐人扶持
　如此被下置
同日名替
同三卯三月十日御上京御供出立、四月四日帰
同年四月十二日宰相様御上京御供出立、八月九日帰
同四辰正月廿九日不寝役被仰付候
明治卜改元、十二月十三日殿様御上京御供出立、年給壱俵半
同二巳四月廿日左之通改
　吉川事
　後藤隆啓
同年九月廿日左之通改
　隆啓事
　後藤啓介
同年十一月七日今般御改革ニ付奥給仕指免候事
　但表給仕勤
同日御家従附属申付候事
　但奥給仕勤
　一年給是迄之通
同月廿五日今般御改革、更ニ御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
同三午十月廿八日御家従附属指免候事

但御趣意也
一是迄太儀ニ付御酒代金三百疋被下置候
同年閏十月四日歩兵修行指出候也
同年十一月晦日明里御蔵所番江
同年十二月十八日改姓
後藤事
若林啓介
同四未三月二日元町組也吉田繁治ト給禄相対替願之通米弐拾俵弐斗九升
壱合
同年七月左之通改姓
若林事
吉田啓介

横井

横井孫兵衛
一切米拾石三人扶持
享保八卯四月廿二日明代小算被召出
同十一午三月九日果ル

横井門斎
一切米拾五石三人扶持
寛延三午七月五日御右筆部屋御坊主ゟ御帳付多部長太夫跡被仰付、切米
七石増、都合如是被下置
同日円右衛門与改名
明和元申九月廿五日御小姓目付被仰付
安永七戌九月五日御小人頭被仰付
同九子五月廿七日立替被仰付候

横井多次郎
一切米拾五石三人扶持
右同日親円右衛門立替被仰付、為跡目御充行如是被下置、御徒被仰付
天明四辰十二月円右衛門与改名
同五巳十月廿九日立替被仰付候

横井直作
一切米拾五石三人扶持
天明五巳十月廿九日親円右衛門立替被仰付、御充行如此被下置、御徒被
仰付
寛政四子十二月孫兵衛与改名
文化四卯十二月十四日押込、同廿八日被指免
同十三子七月廿日不埒至極之儀有之ニ付、立替被仰付候

横井鐇次郎
一切米拾弐石三人扶持
右同日倅小算被仰付、御充行如此被下置
文政三辰十二月廿五日円左衛門与名替
一切米拾五石三人扶持

同七申閏八月廿五日御徒ニ被仰付、御充行並之通如是被下置
同九月廿九日貝心掛候ニ付御貝御預被成候
同八酉年江戸御供詰
同十二丑四月廿九日不慎之趣相聞候ニ付遠慮被仰付、同五月十一日御免被成候
同十三寅年十月廿三日来卯御供詰
天保六未閏七月廿日支度出来次第江戸詰被仰付候
同九戌十月十六日果ル

横井由太郎

一切米拾石弐人扶持
天保九戌十一月廿日養父円左衛門及大病御暇相願候ニ付、無役平小算ニ被召出、御充行如此被下置候
同十亥七月廿四日小算勤役被仰付候
嘉永元申年十二月廿八日左之通名替

由太郎事
横井孫兵衛

同三戌年九月六日病気ニ付願之上御暇被下、養子佐十郎と申者諸下代之内江被召抱、御充行並之通

横井佐十郎

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、御勝手役仮預り被仰付候
同四亥五月十七日炭薪方御材木方下代兼江
同年十一月十六日御金方下代江
同七寅五月九日江戸詰出立
安政二卯五月廿六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
同年十月十一日仕出場書役被仰付、月番御奉行仮預り当時御預り所仕出場書役仮へ
同三辰正月廿一日勝木十蔵書役へ
同五午十一月十一日御預所元締役土屋十郎右衛門極方江
同年十二月十六日御奉行林作右衛門極方江
文久元酉三月廿一日江戸詰出立
同二戌四月十三日御陣屋御引払御普請出精相勤候ニ付、銀廿弐匁五分被下置候
同五月二日帰着
文久三亥十月十三日中将様御供ニ而上京
同四子正月十六日出精相勤候ニ付小算ニ被召出、御充行
一切米拾石三人扶持
如此被成下候
元治与改元、四月廿三日宰相様御供ニ而帰着
同年五月十一日在京中不行状之趣相聞押込、廿六日御免
同年十月長征、丑二月京都江着、同所ゟ殿様御供帰
慶応二寅三月十一日長崎表へ出立、卯六月十九日帰、同廿九日亦々長崎表へ出立、其後大坂表ニ罷在京都江も出、巳年東京江罷越
明治二巳十一月十四日御用有之ニ付帰藩申付候事
同月廿五日今般御改革ニ付、更ニ御充行米弐拾九俵五升六合被下
同三午二月廿三日東京ゟ帰

同月廿八日今般外国人手附金取引一件談判済相成候処、格別致心配候ニ付金三千疋被下候事
同日出精相勤候ニ付別段之御評議ヲ以給禄相増、都合
一米三拾壱俵三斗六升九合被下候事
同年三月八日下馬御門太鼓御門三ノ丸南御門当番申付候事
同年六月十一日御用有之ニ付早々出坂申付候事、翌十二日出立、同廿七日大坂ゟ異人同道帰
同年七月二日掌政堂附属申付候事
但勘定方
一中級
同年七月九日ルセー御雇入、途中致心配候ニ付金千疋被下候事
同年閏十月十八日掌政堂雑務方
同年十一月八日御雇教師ルセー横浜江罷越候節附添可罷越事、十二月五日出立
十一月廿八日居住罷在候持地拝地被下候、未六月廿日御取消
同年十二月十二日十六等ノ三等
同四未正月七日神奈川県江出仕
但非役卒
但同月廿五日右同所江出仕申付候段申来ル
同年五月十四日倅佐久治神奈川県江呼寄願之通
同年八月二日任神奈川県少属
同五申三月四日東京府十一等出仕

横山[1]

安川庄太夫

一切米八石弐人扶持
安永六酉年御切米方雇下代被仰付
同九子三月四日親織右衛門病気願之上立替被仰付、御代官方下代被召抱
天明五巳八月十一日御代官安本喜右衛門受込下代被仰付
寛政元酉九月十六日石場畑方村上丈右衛門相果候処、諸役被仰付候迄御取箇筋取扱被仰付
同七卯正月九日小寄合格ニ被成下
文化八未正月十六日年来出精相勤候ニ付年々俵数三俵ツ、被下置候、当時御代官柳下勘七受込下代勤
同十二亥五月十四日及老年其上病身罷成候ニ付、願之上出役勤被差免、今村伝兵衛組へ被指戻候処、即日立替願之上御暇被下

安川金五郎

一切米八石弐人扶持
右同日養父庄太夫跡諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如是被下置、御勝手役仮預り被仰付
同年八月四日御扶持方大谷順右衛門下代勤被仰付
同九月十四日敬助与名替
同十三子二月廿六日御雑用方青木理兵衛下代へ入替被仰付
文政元寅六月七日野村四郎左衛門下代江
同二卯三月朔日安川事小林与改姓

同四巳四月廿日不慎之趣相聞候ニ付押込、同廿九日押込被差免
同七月廿二日御預所御代官下代勤へ
同六未二月十日表御代官下代勤へ
同十亥四月廿一日嶋津右太夫下代勤へ
同年七月六日沢田助左衛門下代へ組替
同十二丑七月廿八日永田順右衛門下代へ
同十三寅二月五日上領郡方肩下代へ
同十一月廿六日浮下代被仰付、嶋崎伝太夫仮預り

横山文助　小林事

一切米八石弐人扶持
天保二卯七月廿一日養父敬助義病気願之上御暇被下置、諸下代之内へ被召抱、御充行並之通如此被下置、嶋崎伝太夫仮預り浮下代被仰付候
同四巳九月十七日御奉行川村文平書役下代被仰付、御充行壱石御増、都合
一切米九石弐人扶持
如是被下置
同十二月廿一日小林事横山与改姓
同五午十一月廿六日今立五郎太夫書役下代へ
同六未閏七月廿四日直助与改名
同年十二月廿四日来申年江戸詰被仰付候
同七申年正月廿一日当年江戸詰被仰付置候処、御免被成候
同廿二日大井長十郎書役下代へ
同年三月九日当分極方仮被仰付候
同四月晦日極方仮被仰付置候処、御免被成候
同年十月廿二日大井長十郎極方下代被仰付
同九戌正月廿日萩原長兵衛極方下代へ
同九戌七月廿五日飛脚御用取調方不参届趣相聞候ニ付急度御叱
同十亥二月朔日川村文平極方下代当亥年江戸詰被仰付
同年五月二日常盤橋御屋敷御屋形御普請御用懸り被仰付
同年十二月十一日御屋形御普請宜出来御用掛出精ニ付、銀五匁被下
一切米拾石弐人扶持
天保十二丑十一月廿九日小算被召出、御充行並之通如是被下置候
同十二丑十二月二日来寅年江戸詰被仰付候ニ付
同十三寅年四月廿六日光安院様麗照院様御在世中御賄惣御入用高、并麗照院様へ御附属人数等巨細ニ取調候様被仰出候ニ付、御用懸り被仰付
同四月六日御道中御台所目付仮兼帯被仰付候
嘉永二酉年正月十六日出精相勤候ニ付御扶持方壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
如斯被成下候
同四亥二月廿八日参会之節心得違之趣有之ニ付御奉行共存を以急度叱り、伺之上御用之外慎之処、三月五日指免候旨
安政元寅十二月十一日先達而大坂表江異国船渡来之節、諸事心配行届候ニ付為御褒美金三百疋被下置候
同四巳正月十六日別段之訳合も有之ニ付、一統格ニ被成下候
同年同月廿五日御札所受込差添清水要右衛門跡被仰付候
同年閏五月廿二日役前不念之儀有之ニ付伺之上慎、同廿五日被差免候
同五午七月廿五日左之通名替

直助事

横山吉左衛門

万延元申十二月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増

一切米拾弐石三人扶持

如此被成下候

文久元酉十二月三日役前不参届儀有之伺之上慎、五日御免

同十一日新札引替之節出精相勤候ニ付、桐御紋御上下一具被下置候

文久三亥十二月十六日出精相勤候ニ付、小役人格ニ被成下候

元治元子十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之銀三拾三匁被下置候

慶応元丑八月十六日御札所請込被仰付

同三卯五月廿日御広敷添役被仰付候

同年七月廿日先勤中御札所役所不取締之儀有之ニ付伺之上慎、同廿七日被指免

同四辰三月十二日今度御広敷女中京詰被仰付候ニ付詰被仰付、詰中勘定役書役兼被仰付

同年四月九日上京、九月廿一日帰

明治二巳正月出精相勤候ニ付、御足充行三石被下置候

同年六月十七日名替

吉左衛門事

横山直助

同年十一月廿五日今般御改革、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合被下

同三午正月十三日今般御改革ニ付役儀指免候事

但軍務寮支配之事

同年同月廿三日及老年候ニ付願之通倅鉄吉ト立替、御充行

横山鉄吉

一米三拾壱俵三斗六升九合

如此被下置、翌廿四日生兵修行指出候

無息中

一慶応三卯正月廿五日鳴物方御雇被仰付、御雇中年々銀壱貫匁ツ、被下置候

一同年三月十六日右壱貫匁被下置候処、迷惑之趣ニ付月々百五拾匁ツ、被下置候

一同年十二月十三日殿様御上京御供被仰付

一同四辰四月二日上京、閏四月十八日帰

一同年閏四月十一日鳴物方勤中一人半扶持被下置候

但是迄被下候銀之儀ハ已後不被下候

一明治二巳四月廿六日年給壱俵ツ、

一同年五月廿九日楽手御道具預り申付候事

〆

明治三午四月廿八日監正寮勤附属申付候事

但下級

十一月廿八日居住罷在候持地之内ニ而七十七坪拝地被下

同年十二月十二日監正寮勤

但十六等心得

同四未二月廿日徒刑方申付候事

但等級従前之通

同年六月朔日御改正ニ付被免

同五申六月廿三日租税課雇申付候事
同月名替
鉄吉事
横山敏雄（トシヲ）
同年八月廿三日地理誌編集方雇申付候事

横山 2

横山才助

一切米八石弐人扶持
寛政八辰九月　明里御蔵所雇下代被仰付
文化三寅八月廿日親利右衛門病気願之上立替被仰付、跡諸下代、並之通
八石弐人扶持被下置、同所早見兵右衛門下代被召抱
同五辰十一月廿日御擬作壱石御増、九石弐人扶持被成下、御奉行梶川半
兵衛下代被仰付
同八未十一月十一日月番預り極方下代被仰付
文化九申七月三日御奉行村田十太夫極方下代被仰付
同十酉二月廿日梶川半兵衛極方下代へ組替被仰付
同十一戌正月十六日中根新左衛門極方下代江組替被仰付候、当時其儘是
迄御奉行役小川次兵衛組ニ候処、御役御免ニ付御奉行中根新左衛門組へ
被割入
同十五寅二月十六日小算ニ被召出、御充行並之通
一切米拾石弐人扶持
如斯被成下候
文政元寅江戸詰
同二卯二月十三日伊勢八幡江御内御代参被仰付、夫ゟ直ニ詰帰ニ被仰付
候
天保二卯十一月廿五日此度御趣意を以山方役所手伝被仰付
同五午十二月十六日出精相勤候ニ付壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
被成下候
同七申五月朔日産物方被仰付候
同八酉正月十六日出精相勤候ニ付、跡目小算ニ被成下候

横山猶右衛門

一切米拾石弐人扶持
天保十一子七月五日養父才助病気ニ付願之上御暇被下、無役小算被召出、
御充行如此被下置候
同年九月四日小算勤役被仰付
弘化二巳二月五日役前不参届趣相聞候ニ付押込被仰付
弘化四未十月来申春江戸詰被仰付置候処、支度出来次第引揚罷越候様被
仰付、同十一月九日出立
嘉永二酉年十月十九日御上屋敷大奥向御普請御用掛り并表御建継御普請
等ニ付出精之段達御聴太儀ニ思召候、依之御目録金三百疋被下置候
同三戌年十二月十六日出精相勤候ニ付御扶持方壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
如此被成下候
安政元寅十二月廿八日左之通名替

猶右衛門事
横山才太夫

万延二酉正月十六日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下候
文久三亥正月十六日出精相勤候ニ付、一統格末席ニ被成下候
元治元子十二月賊徒ニ付御留守御用相勤、依之銀三拾三匁被下置候
慶応三卯十二月廿二日出精相勤候ニ付、一統格順席ニ被成下候
明治二巳六月十七日名替
才太夫事
横山才太

同年　御預所租税方手伝
同年十一月廿一日今般御改革ニ付役儀被免候事
同月廿五日右同断、更御充行米三拾壱俵三斗六升九合被下
同三午二月五日御金土蔵元切手御門口山里御門当番申付候事
同年四月三日会計寮附属検地方掛り申付候事
同年十二月十二日会計寮勤　検地方
但准十六等　未正月ゟ九俵
同年十一月廿八日居住罷在候持地拝地被下候

横山 3

横山忠太夫　忠左衛門事
一切米八石

文政八酉十一月六日出役浮下代勤被仰付、御充行並之通如此被成下、大谷武兵衛仮預り被仰付
同九戌二月五日斎藤多兵衛下代勤へ
同十一子八月十一日橋本作兵衛元方下代勤へ
同十三寅二月十一日堀江武右衛門元方下代へ
同年閏三月廿一日笹倉郡左衛門肩下代へ
天保二卯二月十六日御趣意ニ付浮下代嶋崎伝太夫仮預被仰付
同年四月廿六日表御代官安川弥三右衛門下代勤へ
同三辰十二月廿九日忠太夫事忠左衛門与名替
天保七申年三月廿四日福嶋忠兵衛肩下代へ
同八酉七月六日久野長右衛門下代へ組替
同九戌八月二日栗原作太夫下代へ
同十一子年九月廿九日跡部又八受込下代被仰付
同十二丑八月二日福嶋忠右衛門受込下代へ
同十四卯十二月出精相勤候ニ付、米弐俵被下
同十五辰十二月出精相勤候ニ付、小寄合格被成下
弘化四未四月十二日山干飯領御代官受込下代へ組替
同五申年正月廿四日御広敷書役勘定役兼被仰付候
嘉永二酉年六月廿六日御預所御代官肩下代へ、但役席受込次
同四亥九月二日同所御代官坂田助右衛門肩下代江組替
同年十月八日左之通名替
忠左衛門事
忠太夫

同五子七月廿日依願諸下代株ニ被成下候、但銀五貫匁上納可有之事

同六丑二月廿五日御預所御代官請込下代江
同七寅年五月九日病気願之上御暇被下、養子岩太郎与申者諸下代之内江
被召抱、御充行並之通

横山岩太郎

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、西村源左衛門仮預り浮下代被仰付候
安政六未二月廿日御切米方御扶持方下代兼へ
同七申正月十六日御材木方炭薪方下代兼へ
万延与改元、十一月五日御金方下代へ
同二酉二月十四日左之通名替
岩太郎事
横山高平
文久三亥二月六日御蔵所下代江
同年七月十七日仕出場書役下代江
元治元子六月廿七日支度出来次第上京被仰付、七月朔日出立、夫ゟ長征、
丑四月帰
同二丑二月廿日左之通名替
高平事
横山広平
慶応二寅四月廿四日、一昨子京都堺町騒乱一件ニ付、公辺ゟ被下配当金
五百疋被下置候
同三卯八月十五日京詰出立
同四辰三月十六日当秋迄詰延被仰付候、八月廿日帰
明治与改元、十二月十六日年中格別御用多之処出精相勤候ニ付、当年限
米弐俵被下置候
同二巳十一月朔日今般御改革ニ付役儀被免候事
同月廿八日軍務寮附属被仰付、製作場也
同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午十二月十二日軍務寮勤　製作場小銃器械
但准十六等　九俵
同四未六月朔日御改正ニ付被免
同五申五月十三日銃器類運送取調中武庫方雇申付候事
同廿七日大坂鎮台兵器返納御用ニ付出府申付候事
同年九月廿日帰

横山 4

林俊蔵

一切米八石弐人扶持
文政六未二月十一日出役大谷八十郎仮預り浮下代勤被仰付、即刻御預所
雇下代被仰付
同二月十三日俊蔵と名替
同四月廿六日追廻方下代江
同七申十二月廿四日御厩方下代勤被仰付
同八酉江戸詰被仰付候
同十亥年迄詰越
同十一子年江戸詰被仰付候

同十一子正月廿六日江戸詰御免被成候
天保三辰五月廿六日御雑用方下代炭薪方下代兼被仰付候
同年六月十二日御厩方下代被仰付、但元席
同五午年十月十七日来未年江戸詰被仰付候
同年十二月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格被成下候
同六未十一月七日今般御家督御引移無御滞被為済、御献上御馬御用相勤候ニ付銀五匁被下置候
同十二月十九日来々酉年迄詰越被仰付
天保九戌正月廿四日御札所御貸方下代被仰付候
同十三寅九月十六日御札所御趣向方下代へ被仰付候
同十三寅十二月十六日出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下候
同十四卯二月十七日御内用有之ニ付支度出来次第出坂被仰付候
嘉永元申年十二月十一日出精相勤候ニ付御充行弐石御増、都合
一切米拾石弐人扶持
如斯被成下候
同年十二月十七日裏判方并追廻方下代被仰付候
同二酉年五月四日山方下代江
同五子年七月五日依願諸下代株ニ被成下候
但銀六貫目上納可有之事
同七寅閏七月十二日御腰物御拵方江
安政四巳正月廿五日年寄候ニ付御暇被下、倅共之内諸下代之内へ被召抱、
御充行

林清次郎

一切米八石弐人扶持
安政四巳三月廿一日養父俊蔵儀先達而御暇被下候跡諸下代之内江被召抱、
御勝手役預り浮下代被仰付候
同年五月廿六日御切米方御扶持方兼下代江
同六未二月廿九日御蔵所下代へ、但御用宅へ引越
文久二戌五月廿日左之通改姓名
横山溪蔵
同三亥正月十六日出精相勤候ニ付、役席小寄合格ニ被成下候
元治元子九月十一日於役前心得違之趣有之ニ付御奉行存を以押込、同十八日被指免
同年十二月賊徒一件ニ付御留守御用相勤、依之拾弐匁被下
慶応元丑十二月廿七日弟正吉与申者御切米方勤中贋致手形不届至極ニ付、親清右衛門致手打、溪蔵恐入伺之上慎、元日被指免候
同三卯十二月廿二日出精相勤候ニ付、小寄合格順席ニ被成下候
同四辰三月三日御納戸方下代江
但当春京都詰被仰付
同年四月七日上京、巳三月廿九日帰
明治二巳四月廿日庶務方下代江
但御納戸御台所御雑用古物方掛り兼
月給米是迄之通、但壱俵也
同年十一月朔日今般御改革ニ付役義被免候事　決算掛
同月廿五日今般御改革ニ付、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午三月廿九日御用済ニ付決算掛指免候
同年四月五日歩兵修行指出候也

同年五月十五日民政寮附属申付候事
但引立方算者
一下級
同年十二月十二日右附属指免候事
同四未二月四日当分会計寮江出役申付候事、六月朔日被免
同五申九月十五日租税課雇申付候事

吉山

戸川作右衛門
一切米八石弐人扶持
宝暦十一巳年炭薪方下代被仰付
安永元辰年御代官津田久左衛門下代被仰付
同三午明里御蔵奉行片岡庄左衛門下代被仰付
同五申年御金奉行高田三五左衛門下代被仰付
同六酉年六月江戸詰被仰付罷越
同八亥年仕出場下代御奉行月番預り被仰付、御充行壱石御増、都合
一切米九石弐人扶持
如是被成下
同十四丑（マヽ）春浅見七十郎下代被仰付
同春浅見七十郎御内用有之出坂被仰付候ニ付被召連候
同八月江戸詰被仰付
天明五巳十月江戸詰
寛政元酉年江戸詰被仰付
同二戌二月十八日於江戸表小算ニ被召出、御充行並之通拾石三人扶持被
下置候処、其後病気ニ付願之上御国表江罷帰候道中於蒲原駅四月二日果
ル

戸川勘左衛門
一切米八石弐人扶持
同年四月十九日養父作右衛門病気願之上立替被仰付、跡諸下代之内江被
召抱、御勝手役仮預り被仰付
同廿三日御代官吉倉茂右衛門下代江
文化九申十月十二日御代官野村四郎左衛門請込下代被仰付
文政四巳年正月十六日出精相勤候ニ付、小寄合格被成下
同十一子年正月十六日年来出精相勤候ニ付、小算格ニ被成下
同年八月十一日年寄候ニ付出役勤被指免候、年来出精相勤候ニ付御目録
銀拾匁被下置候

戸川勘助
一切米八石弐人扶持
右同日出役堀江武右衛門元方下代勤被仰付
但文化六巳年十月八日仕出場留附御雇被仰付
同九申暮御貯方下代御咎中雇下代被仰付
同十二亥年八月十八日明里御蔵所雇下代被仰付、冬三ケ月八石
弐人扶持之割合を以被下置候
同十三子年御蔵奉行佐藤常右衛門御内御用取斗ニ付、摂州灘目
木屋文三郎手代久作并口入人共出福逗留中、夏ゟ秋迄右常右衛

門下代之趣ニ而御蔵所共兼役彼是心配相勤候ニ付、御目録銀七
匁被下置候
文政三辰年十一月十日仕出場留付以来年来実躰困窮相勤候ニ付、
下地割合被下米之外米弐俵ツ、年々被下置候
同七申年七月廿九日御趣意ニ付諸向御雇見習共一統被相止候節、
御雇御免被成候処、又々同年閏八月十日以前之通御雇被仰付候
同九戌年至而出精相勤候ニ付、御改革之折柄ニ候得共格別之御
評議を以別段銀弐拾匁被下置
同十亥年正月廿日年来出精相勤候ニ付、是迄被下置候銀米御扶
持方ニ御直シ被下、弐人扶持ニ被成下候
同十一子年八月十一日親勘左衛門年寄候ニ付出役勤被指免、跡
直様御蔵所下代元方勤上席へ被成下候ニ付、是迄被下置候弐人
扶持之分揚ル
同十三寅二月七日中村多左衛門下代被仰付
同月廿八日町役所下代被仰付、但役中御充行拾石三人扶持ニ被成下候
天保六未正月十六日出精相勤候ニ付、小算格被成下候
同十二丑八月廿九日役所締り方不参届趣相聞候ニ付押込被仰付
同十二丑九月三日押込被置候処被指免、御用之外慎
同十二丑九月十八日御用之外慎被置候処被差免候
弘化三午十二月十六日出精相勤候ニ付小算ニ被成下候、但席大村清右衛
門次
但当分勤向是迄之通
嘉永二酉十二月十一日吉崎浦両本願寺地所之儀ニ付、以前ゟ申分有之、
延宝年中公訴ニ相成、昨年も東本願寺ゟ再公訴ニ可及旨ニ付出役論所見
分之上分石相立、右地所以来争論無之筈ニ相極格別骨折穏便ニ取極出来
候ニ付、銀拾五匁被下置候
嘉永四亥年正月十六日出精相勤候ニ付跡目小算ニ被仰付、御足充行弐石
壱人扶持御増、都合
一切米拾石三人扶持
如斯被成下、御勘定所勤被仰付候

戸川量平

一切米拾石弐人扶持
嘉永四亥十二月五日親勘助病身ニ付願之上御暇被下、無役小算ニ被召出、
御充行如斯被下置候
同年同月十二日小算勤役被仰付候
同五子四月廿五日此度小算之者共以前へ被復御扶持方壱人扶持御増
一切米拾石三人扶持
如此被下置候
安政二卯年江戸御供詰被仰付、三月十九日出立
同四巳四月十二日今度明道館ニおゐて算科御端立相成候ニ付、御用途相
考同所へ相詰掛り之面々江相談致研究候様被仰付候
同年四月御供ニ而立帰江戸表へ出立、六月帰着
同年十月廿日算科局測量師被仰付、且又当分開方師兼勤被仰付
安政五午正月廿三日算科局勤向是迄之通、尚又引受へ申談修行引立方厚
致心配候様被仰付、御勘定所勤之儀ハ被指免候
同六未三月廿五日測量御用有之立帰出府被仰付、四月三日出立、九月三
日帰着

同年十二月十六日出精相勤候ニ付、別段之訳合を以御充行弐石御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如是被成下候
一同七申二月五日病気願之上御暇被下、養子幸三郎与申者諸下代之内へ被召抱、御充行並之通

戸川幸三郎

一切米八石弐人扶持
如此被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
但算科御端立以来格別御用弁ニ相成候処、病気差重り御暇相願不得止事願之通御暇被下候ニ付、出格之御慈評を以米七俵被下置候
万延二酉正月廿日御武具方下代へ
文久与改元、十一月十六日御札所奉行下代へ
元治元子二月十一日御雑用方下代江
同年十二月賊徒一件、御留守御用相勤候ニ付十弐匁被下
同二丑二月廿五日左之通改姓名

戸川幸三郎事
吉山平六

元治二丑三月七日京都詰出立、四月廿八日病気願之上帰
慶応卜改元、九月廿五日御趣意ニ付表御坊主江
但同日左之通名替

吉山栄三

同三卯十月廿七日御発駕前御用多ニ付、奥御坊主不時介並御留守中も同様被仰付
明治元辰十月十七日上京、巳三月西京ゟ東京江出立之処草津ゟ御呼返、御国へ帰
同二巳四月七日諸下代ニ被申付、予備組江被入候
同七日左之通名替

栄三事
吉山平八郎

同年九月五日小銃隊申付候事
但組伍長役之次江割入候事
一年給壱俵被下候事
同年十一月廿五日今般御改革之処、更ニ御充行米弐拾弐俵壱斗八合
同三午四月朔日東京詰出立、七月三日御人減ニ付帰着
同年十二月八日予備第六小隊江被入候
同四未四月七日右解隊被仰出候事

米沢

松田弥次右衛門

一切米八石弐人扶持
文化七午十二月廿五日養父小沢常右衛門病気願之上立替被仰付、跡嶋崎伝右衛門仮預り浮下代被召抱
同月廿一日仕出場留付被仰付
同八未三月六日若殿様御公領方雇下代被仰付

同月九日奥御納戸方御留守中仮被仰付候
同月十九日御広敷方下代仮被仰付
同年八月四日同所小林惣兵衛下代入替被仰付
同十二月廿八日小沢事松田与改性、当時同所野瀬勇助下代勤
同十二亥二月八日御趣意方藤田丈右衛門下代被仰付
同年八月四日梶川半兵衛下代勤被仰付
同十三子六月晦日宮北長左衛門下代被仰付
同十月十七日小宮山伝七極方下代被仰付候
同十四丑正月十六日宮北長左衛門極方下代へ
文政三辰正月十六日先達而江戸詰中霊岸島御台所御住居御普請御用掛り
出精ニ付、銀七匁五分被下置候
一切米拾石弐人扶持
同五午三月十六日仕出場下代ゟ小算被召出、御充行並之通如此被下置
同六未江戸詰
同年七月十三日此度若殿様表向御登城之節御用掛り被仰付候処、出精ニ
付銀三匁被下置候
同八酉四月廿一日浅姫君様御附御台所目付役兼帯被仰付置候処、此度御
国江罷帰候ニ付右仮役被指免、格別出精相勤候ニ付金五百疋被下置候
同十亥正月廿五日出精相勤候ニ付跡目小算被成下、御充行弐石壱人扶持
御増、都合
一切米拾弐石三人扶持
如此被成下
同十一子八月九日大坂詰被仰付候
同十三寅年二月十六日去丑年在坂中同所町奉行所江掛合筋之義在之節、
心配取斗候ニ付銀拾五匁為御酒代被下置候
天保六未年正月十六日出精相勤候ニ付、一統格ニ被成下

松田弥五八

一切米拾石弐人扶持
同年四月七日親弥次右衛門病気願之上御暇被下、無役小算被召出、御充
行並之通如此被下置
天保八酉八月四日小算勤役被仰付
弘化五申年二月廿九日病身ニ付願之上御暇被下、養子猪三郎と申者諸下
代之内江被召抱、御充行並之通

松田猪三郎

一切米八石弐人扶持
如斯被下置、御勝手役仮預り浮下代被仰付候
同年三月十七日御作事方下代被仰付候
同酉年江戸詰被仰付、三月十四日出立
嘉永元申年十二月十九日左之通改姓

松田事
池田猪三郎

同三戌年五月九日南居領御代官方肩下代被仰付候
同五子六月廿四日志比領御代官方肩下代へ組替
安政三辰四月五日東郷領御代官肩下代へ組替
同四巳正月廿五日御趣意ニ付改而今庄広瀬領へ
同年三月廿五日追廻方下代へ

同五午二月九日御作事方下代へ
万延元申五月十一日役前不届之致業有之ニ付急度も可被仰付処、大赦被
仰出候折柄格別之御憐愍を以役儀取揚之上押込、六月朔日御免、但西村
源左衛門仮預り浮下代
同二酉二月十二日与内方下代へ
文久二戌閏八月廿五日病気願之上御暇被下、養子万蔵与申者諸下代之内
江被召抱、御充行並之通

池田万蔵

一切米八石弐人扶持
如此被下置、野村治右衛門仮預り浮下代被仰付候
文久二戌九月十一日御趣意ニ付表御坊主へ
同日左之通名替

万蔵事
池田久益

同年十一月七日小坊主被仰付候
元治元子四月十二日長谷部作内組米沢喜右衛門上水穢候ニ付押込被仰付
候処、右喜右衛門実子ニ付伺之上慎、同十七日被指免候
同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当十弐匁被下
慶応元丑十二月廿八日左之通改姓

池田事
米沢久益

同三卯八月廿七日小坊主勤中困窮之訳合も有之ニ付、銀五拾匁被下置候
同四辰正月廿九日不寝役被仰付
明治卜改元、十二月十三日殿様御上京御供出立、巳二月帰　年給壱俵半
同二巳九月廿日名替

久益事
米沢象蔵

同年十一月七日今般御改革ニ付奥給仕指免候事

但表給仕勤

同日御家従附属申付候事

但奥給仕勤

一年給是迄之通

同月廿五日今般御改革、更御充行米弐拾弐俵壱斗八合被下
午十一月十日堀端ニ而地所埋立拝地願之通
同四未五月八日今般御改革ニ付役儀指免候事
同五申七月

象蔵事
米沢秋夫

写真1　伝・関戸由義
川嶋禾舟（右次）（1933年6月）「關戸由義氏事蹟一班」
神戸史談會『兵庫史談』2巻6号60頁より転載

解説

神戸市街造成と越前福井藩―福井藩人事関係資料から読み解く

松田裕之

はじめに

大阪湾内に巨大港を擁する国際都市神戸の原型は、慶応三年十二月七日（西暦一八六八年一月一日）の開港から明治十（一八七七）年頃までに粗方（あらかた）ができあがった。その青写真を描いたのが、越前福井出身の関戸由義（せきどよしつぐ）（**写真1**）である。

開港まもない神戸に私費で洋風小学校を建て、兵庫県官となってからは貿易行政に手腕を発揮するとともに、二大幹道である滝道筋（現フラワーロード）と栄町通（さかえまちどおり）を造成。山手高台の住宅地に碁盤状の街路を整備し、市民の憩いの場として諏訪山（すわやま）温泉郷を開発。さらには、地元の経済発展に資する人材を育成しようと神戸商業講習所の創設に尽力した。

これほどの実績を残しながら、関戸に関する検証は従来ほとんど為されてこなかった。「それでは」と調査を開始したが、残された記録が思いのほか少なく、しかもそれらの間には多くの空白があることを知った。

この窮地を救ってくれたのが松平文庫（二〇一九年十一月福井県立図書館寄託から福井県文書館に移管）に残された浩瀚（こうかん）な福井藩人事関係資料とその管理に携わる福井県立図書館・福井県文書館の方々なのである。

本稿では、関戸由義という謎多き人物の生涯を『港都神戸を造った男　《怪商》関戸由義の生涯』（風詠社　二〇一七年）と題する評伝にまとめた筆者自身の体験をもとに、福井藩人事関係資料の活用例と有用性を示し、今後、幕末維新史・地方史研究、あるいは家系・人物調査に携わる方々の参考に供したい。

写真２「新番格以下増補雑輩」表紙
松平文庫　福井県文書館保管

一、福井藩人事関係資料との出会い

まず、関戸の出自をめぐっては、「摂津三田藩士」説と「越前福井藩士」説が唱えられてきた。筆者は神戸市文書館より紹介された村野山人（関西屈指の鉄道事業家）宛の関戸書簡のなかに「生雲丹国元より持ち帰り」という一節を見つけ、「三田藩士」説を斥けた。摂津国内陸部に位置する三田（現・兵庫県三田市）で生雲丹を入手できるはずはない。

もっとも、関戸が「越前福井藩士」であることを裏付ける資料にたどり着くまでにはいささか時間を要した。導きとなったのは、関戸に論及した既存の諸研究にしばしば登場する福澤諭吉との親密な交流である。『福澤諭吉書簡集』（慶應義塾　二〇〇一年）を調べたところ、福澤が知人に宛てた書簡のなかに「私知人関戸良平と申人」（明治五年十一月七日付島津復生宛）や「旧越前藩之人」（明治二十二年十月十五日付田中不二麿宛）という記載を確認できた。右書簡に関連した論文（西澤直子「奥平家の資産運用と福澤諭吉―新資料・島津復生宛福澤諭吉書翰を中心として―」慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』第一一巻　一九九四年）には、松平文庫「新番格以下増補雑輩」（以下、「雑輩」）のことも記されていた。

早速、デジタルアーカイブ福井で「雑輩」（**写真２**）を閲覧すると、その最終丁に「横濱也輪違　関戸良平　一明治二巳十二月四日民部省通商少佑申付候事　一通商権大祐　一同三午十二月五日通商少佑儀被免、本官候条此段相達候事」という記載（**写真３**）があった。

「明治二巳十二月四日民部省通商少佑申付候事」という一節をもとに、『明治三年大蔵省官員録（筆写）』（早稲田大学図書館蔵『大隈文書』所蔵）を調べたところ、「通商司　少佑」項に「福井（朱書）　関戸良平」の記載を確認できた。この「関戸良平」が「関戸由義」と同一人物であることは、『明治初期官員録・職員録集成』第二～三巻（柏書房　一九八一年）に採録された明治三年二、四、五、六、八、十、十一各月の「大蔵省通商司少佑」項の「源　由義　関戸」という記載からも裏付けられる[1]。

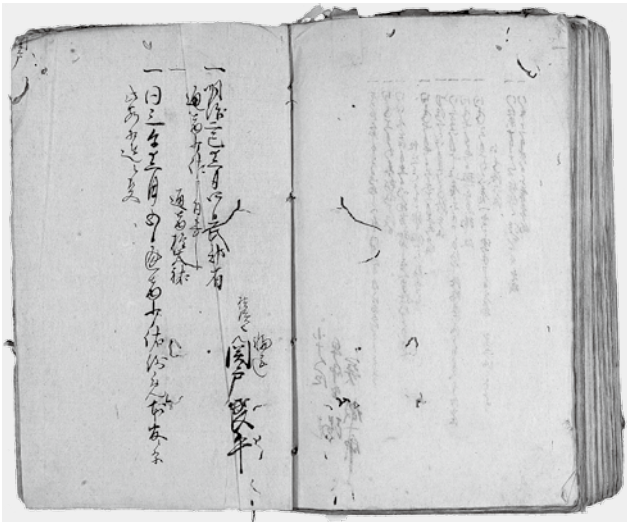


写真３「関戸良平」履歴
松平文庫　福井県文書館保管

とはいえ、関戸が「越前福井藩士」であるなら、藩政期の履歴も「雑輩」に記載されているはずだ。この点を長野栄俊氏（福井県文書館主任）にお訊ねしたところ、「民部省に出仕した関戸良平の名が「雑輩」に収録されたのは、本来ならば人事諸記録の採録対象となる藩士身分＝士分ではなく、また、そうした身分の者の子弟にも該当しなかったにもかかわらず、新政府の役人＝官員となったために、藩として改めて彼の名を把握しておく必要が生じたためと推測できる」旨の教示を頂いた。

確かに、関戸以外の「雑輩」収録者を眺めても、明治維新後に官員身分を得た者や医療の現場業務に就いた者が多く、彼等もまた藩政期の履歴がほとんどない。「雑輩」の記載と長野氏の説明から、筆者は関戸が「藩士」の範疇（カテゴリー）に含まれず、むしろ明治維新による封建的身分制の止揚を機に己が才覚を頼りとして社会階梯を登った、いわば下剋上型の成功者と理解した。

二、サンフランシスコ渡航をめぐって

明治四（一八七一）年三月二十四日に兵庫県外務局勧業課少属として神戸入りして以降の関戸の事績については、神戸市文書館、神戸市立中央図書館、兵庫県公館県政資料館、神戸大学附属図書館、神戸地方法務局に残る文献史料によって、比較的容易に追跡できる。

対照的に、それ以前の足取りとしては、明治維新前夜に混乱の極みにあった江戸市中で書画骨董・民芸品を安値で買い集め、サンフランシスコでそれらを売り捌（さば）いて巨利を得た、という「一攫千金」的な成功譚が伝えられているにすぎない。

筆者はしかし、そのなかで「サンフランシスコ渡航」に着目した。関戸が神戸近代化に果たした最大の貢献は、市街地整備計画の立案と幹道敷設・宅地造成事業の推進にほかならない。地勢とそれに適合した都市整備という観点から眺めれば、神戸市街はサンフランシスコ市街と共通する点が少なくはない。

関戸のサンフランシスコ渡航についても、長野氏から貴重な情報を頂いた。一八六八年五月十三、二十七日、六月十七日付『ハワイ王国官報（*The Hawaiian Gazette*, May 13, 27, June 17, 1868）』（以下『官報』）に「関戸氏（Dr. Sekido）率いる日本人一行がアイダホ号でハワイを訪問し、呉服反物を地元の資産家に販売した後、アイダホ号でサンフランシスコに渡った」ことを報じた一連の記事が掲載されているという。

当時、横浜からハワイを経てサンフランシスコに至る航海には、約三十日前後を要したと推測される。逆算すると、「関戸氏率いる日本人一行」を乗せたアイダホ号が横浜を出港したのは、一八六八年三月中旬―和暦では慶応四年二月末頃―のことになろうか。

右掲『官報』記事の日付と同じ時期にサンフランシスコで活動していた日本人を調べると、若き高橋是清（これきよ）の存在を確認できた。慶応三（一八六七）年八月、十六歳の時に仙台藩留学生としてサンフランシスコに到着している。その回想記『高橋是清自伝　上巻』（中公文庫　一九七六年）に「越前（えちぜん）の医者某というのが、維新の騒ぎに、いろいろの品物を二束三文に買倒して、それをアメリカに持って来て一儲（ひともう）けしようとかかった」という記述がある。後述するが、関戸は渡航直前まで江戸で医者を開業していた。

筆者は維新混乱期に関戸がサンフランシスコへ渡航したことを事実と認定しても問題ないと判断したが、手塚晃編『幕末 明治 海外渡航者総覧』第一～三巻（柏書房　一九九二年）を眺めても、留学または視察のために海外渡航した人物約四二〇〇名中に「関戸」姓の者が見当たらない。つまり、関戸のサンフランシスコ渡航は密航の可能性が高いのだ。

したがって、その実行に際しては信頼のおける協力者が必要となるが、そこには福井藩関係者の姿が見え隠れする。ひとりは、横浜で福井藩商館石川屋を差配していた岡倉覚右衛門（かくえもん）。明治期美術界を牽引した岡倉天心の実父としても知られるこの人物については、松平文庫「新番格以下」に「郡奉行井原次郎左衛門組　岡倉覚右衛門　坪田」とある。もうひとりは、日頃より石川屋に

出入りして岡倉とは親密であった外商のユージン・ヴァン・リード。

藩家老を務めた本多敬義（たかよし）―松平文庫「剝札」には「本多義（ヨロシ）　四郎右衛門　鋭次郎　修理　大藏　波釣月」と記載―がものした『越前藩幕末維新公用日記』（福井県郷土誌懇談会　一九七四年）によると、岡倉は福井藩探索方を務めていた。内外の事情に通じたヴァン・リードは大切な情報源であったはずだ。かたやハワイ総領事の肩書を持つヴァン・リードは日本人労働力のハワイ輸出事業を目論んでおり、慶応三年四月二十二日より二回にわたって神奈川奉行所から計三五〇名分の旅券発行を受けている。海外渡航希望者からすると、ヴァン・リードに依頼すれば、煩瑣な申請手続を経ずとも横浜発のチャーター船に乗り込むことができた(2)。関戸はこの両名に協力を仰ぎ、維新の混乱に乗じて密航を敢行したのではなかろうか。

また、『官報』記事には、関戸一行の通訳として〝Zangimoto〟あるいは〝Yangimotu〟なる人物も登場するが、これは福井藩士の柳本直太郎かもしれない。「新番格以下」には「柳本直太郎　直帰　久斎　直太郎」とある。小坊主・表坊主を務めた後、藩より江戸就学を命ぜられた。そして、幕府直轄の蕃書調所を経て、慶応二年二月に福澤諭吉の慶応義塾に入塾。翌三年四月、藩命を受けてアメリカに留学している。

〝Zangimoto〟あるいは〝Yangimotu〟がアメリカ留学中の柳本であったとすれば、岡倉がサンフランシスコに自邸を持つヴァン・リードを介して関戸の渡米を前以て柳本に通知し、現地で通訳として協力するように依頼したということになろうか。関戸の密航の裏では、福井藩関係者間の密かな連係がうかがえるのである。

三、「横濱也」と「輪違」が意味するもの

サンフランシスコより帰国した関戸は、横浜商人小西屋伝蔵のもとに身を寄せ、猟官運動を行ったようだ。そのことを示すのが『貨幣之儀ニ付奉申上候』（以下『貨幣之儀』）。「横濱本町四丁目

小西屋伝蔵厄介　関戸良平」が、「同弁天通五丁目門屋幸之助」との連署で民部省に提出した建白書（早稲田大学図書館蔵『大隈文書』所蔵）である。

これは明治新政府が慶応四年五月に発行した不換紙幣＝金札の不備による居留地貿易の混乱を指摘し、その是正方法を提示したものだ。明治二年十二月の民部省出仕は、この『貨幣之儀』を評価されてのことであろう。「雑輩」の「関戸良平」という記名の上に添えられた「横濱也」は、任官当時の関戸の居住地を示したものということになる。

なお、連署人の「門屋幸之助」の本名は伊東哲之助信保で、実父は将軍家主治医にして江戸に種痘所を創設した蘭方医学の泰斗伊東玄朴。穿った見方をすれば、関戸は密貿易で得た資金を活用し、門屋幸之助に建白書の代筆を依頼する一方で、横浜商人衆の人脈を介して任官工作を図った可能性もある。

関戸の謎多き前半生が少しずつあきらかとなるなか、筆者は神戸市街整備計画に関する一次史料を確認すべく三井文庫を訪ねた。三井組は滝道筋・栄町通敷設や山手住宅地造成に多額の融資を行っている。関連文書群のなかには、関戸の前半生を暴いた追号一六四二―四―一『關戸由義關戸左一郎戸籍写』（以下『戸籍』）・追号一六四二―四―二『關戸左一郎身分内密取調書』（以下『調書』）があった。

『戸籍』によって、関戸の生年月日は文政十二（一八二九）年十月二十五日であると判明。『調書』は「關戸左一郎」が明治十七（一八八四）年に貸金返済をめぐって西京三井銀行を訴えたことから、同行が裁判に備えて準備したものだ。ここでは紙数の都合上、『調書』添付の報告書「捜索原証」の内容を略記するにとどめたい。

「戸籍によると、関戸由義・左一郎の兄弟は福井藩医の第四代山本正伯（関彦輔）の次男・三男となっているが、これは詐称である。由義は福井城下呉服下町の薬種問屋輪違屋の分家で煎薬業を営む第四代平兵衛と、正伯の家に奉公していた乳母との間に生まれた。幼名を良平と称し、

正伯のもとで下男奉公していたが、父平兵衛の死去にともなって輪違分家を相続。しかし、本家筋の妻女と通じた廉で家財没収・越前追放の刑に処される。その後、良平は京都の按摩師山口家の食客となり、同家の子女フサと結婚。このフサの実弟が左一郎である。慶応年間、良平一家は京都を去り、江戸で医者を開業。この頃より、関戸姓をもちいて『由義』と名乗る。洋行後、官途に就くが、任官中に福井旧知事と相謀り、神戸で事業を起こすべく転属工作を行った。なお、詐称被害に遭った第五代山本正伯（山本正）は、由義と親密に交際している」

「雑輩」の「関戸良平」という記名の横に添えられた「輪違」は関戸の本姓であった。「雑輩」編纂者は「関戸良平」がかつての罪人＝輪違良平であることを把握していたことになる。

「捜索原証」のなかで鍵となる人物が、関戸に「実父」と詐称された山本正伯。松平文庫「御医師」に「山本　関彦輔」とある。長野氏からは松平文庫「姓名録　七　ムウノクヤ」収録「山本正伯　関彦輔」の筆耕が届けられた。それによると、山本家は代々「御目医師」、つまり眼科専門の藩医を務めている。

ここで筆者は輪違平兵衛が山本家に乳母奉公していた女性を妻に迎えた経緯に着目した。「捜索原証」に「事故アリ妻トナシ（事情があって妻に迎えた）」という奇妙な一節があったからだ。密偵は「事故」の具体的内容を記していないが、筆者はつぎのように推測した。

「事故（事情）」とは、正伯が奉公人の乳母を誤って懐妊させたことを指すのではないか。正伯は家名を守るために、妊娠中の乳母を輪違平兵衛に「引き取らせた」のではないか。山本家が邸を構える福井城下亀屋町（現福井市春山一丁目）と輪違屋の店舗がある呉服下町（現福井市春山二丁目）とは隣接しており、生業柄、両者の間には取引関係があったと推測される。平兵衛が「事故」処理を了承した見返りとして、正伯は平兵衛の子として生まれた自身の子＝良平を「下僕」という名目で手もとに置いて医師修行をさせ、将来に保証を与えようとしたのではないか。正伯はこのことを跡継ぎの山本正（良伯）にも打ち明け、異母弟を秘かに支援するよう託したので

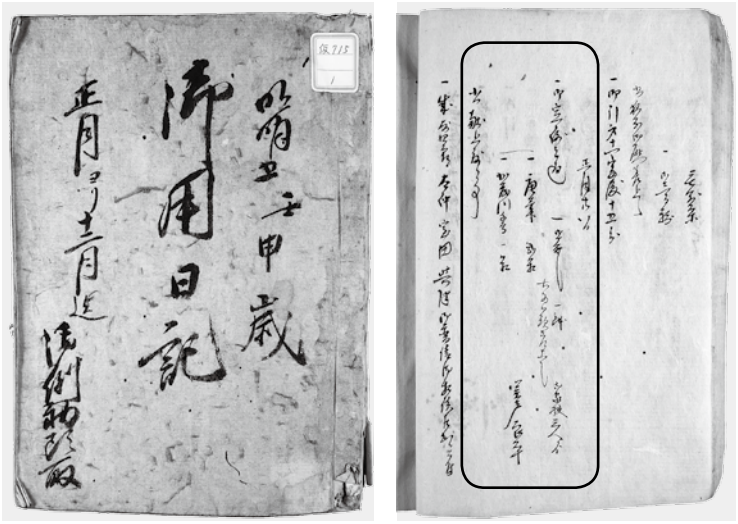


写真４「御用日記」明治五年正月二十八日の記載（丸枠部）

松平文庫　福井県文書館保管

はないか。関戸はおそらく越前追放に際して出生の秘密を山本父子から知らされたのではないか―

輪違良平が関戸由義として神戸近代史に名を刻む過程（プロセス）で訪れた幾つかの転機に照らせば、右推測の蓋然性（がいぜんせい）は低くない。この人物は人生の岐路に立つたびに、一介の町人では為し難い挙に打って出る。無論、本人の才覚もあったに違いないが、それらはいずれも福井藩の有力筋に繋がる人間の存在無くして実現が不可能なことであった。そこに藩医として松平家に仕えた山本正伯父子の存在が、おのずと浮かび上がる。

関戸が飛躍する契機となったサンフランシスコへの渡航には、関戸と岡倉を結びつける人物の存在が不可欠であろう。それ以上に興味をそそるのは、「捜索原証」に民部省出仕中の関戸が「福井旧知事と相謀り、神戸で事業を起こすべく転属工作を行った」旨の記述があること。ここで「福井旧知事」とは、松平慶永（春嶽）を指すと考えられる。

民部（大蔵）省通商司から県外務局勧業課への転属は、どちらも産業振興を管轄する部署であり、下級官吏の職歴形成という視点から眺めると、順当な流れではあるものの、関戸が神戸港を管轄する兵庫県庁に都合よく転属できたのは偶然ではあるまい。慶永は関戸が民部省に出仕する直前まで初代民部卿の座にあった。

関戸と慶永の交際は、松平文庫「御用日記」および慶永が綴った日誌『礫川文藻（れきせんもんそう）』坐右日簿（福井市立郷土歴史博物館蔵）によって確認できる。松平邸家従が付けた宿直簿である前者「明治五壬申歳正月ヨリ十二月迄」（**写真４**）の「明治五年正月二十八日」には「一唐筆　一箱　一賀茂川千鳥　一箱　関戸良平　右献上致候事」という記載があり、おそらくこれが現存する右掲ふたつの日録に関戸の名が登場した最初の箇所と考えられる。

なお、「御用日記」の閲覧には長野氏と宇佐美雅樹氏（福井県文書館主任）、『礫川文藻』の閲覧には印牧信明氏（福井市立郷土歴史博物館学芸員）のご尽力を賜った。

それにしても、かつて追放刑に処された町人身分の者が、四民平等の世になったからといって、

数年前までは雲上人であった旧藩主と親しく交流できるであろうか。慶永と関戸の間を取り持つ人間の存在無しには叶わない状況（シチュエーション）といえる。仲介者としては、山本正伯をはじめとして、岡倉や柳本の名も浮上するだろう。

あるいは士族授産を構想していた慶永が、右掲の人びとを介して、関戸が温めていた不動産投資と都市整備を連携させた事業計画に力を貸す決断を下した、とも推測できる。華士族の家禄・賞典禄の廃止も取り沙汰されていた明治九年五月、本多敬義が神戸の関戸邸隣接地に移住したのは、士族授産に関連しての動きであろうか。『兵庫縣人物列傳　第一編』（興信社出版部一九一〇年）によると、敬義は神戸元町通で質屋を開業している。娘・衣（きぬ）（幾奴）の婿養子に迎えられた小柳津精二（おやいづせいじ）（旧岡崎藩士）は、神戸市会議員、商業会議所議員等を歴任し、神戸の名士のひとりに数えられた。

右掲の人びと以外にも、松平文庫「士族」に履歴がある「瓜生三寅（ミトラ）」が明治五年から同七年まで初代神戸税関長を務め、柳本も明治十年から同十七年まで兵庫県御用掛、同県少書記官、同県大書記官を歴任している。いずれも関戸とは何らかの接触を持ったはずである。

このように、関戸をはじめとして越前福井出身者が開港地神戸で織りなした交流は、まことに興味が尽きぬ歴史模様と言わねばならない。

むすび

松平文庫の福井藩人事関係資料とその管理を担われる方々のお陰で、神戸近代史においてこれまで放置されてきた関戸由義の事績を検証することが叶った。越前福井藩は幕末維新期に数多（あまた）の人材を各界に輩出したが、そのなかに関戸のような異色の人物もいた事実をあきらかにしたことで、多少なりとも「恩返し」ができたのではなかろうか。

人物史や地方史・郷土史という「小文字の歴史」に刻まれた有名無名の人びとの営みの真意は、

一国全体、さらには世界規模での政治史・経済史・文化史、すなわち「大文字の歴史」と照合することで鮮明となろう。同時に、「大文字の歴史」として語られてきた史実は、「小文字の歴史」を読み解くことによって、その秘めたる実相を顕現するはずである。

『福井藩士履歴』として刊行が進む松平文庫の福井藩人事関係資料とそれに関連したレファレンスのさらなる充実が、今後の歴史研究を新たな地平へと導く頼もしい原動力になることを願ってやまない。

註

(1)但し、『官員録　官版　明治3年』（国立国会図書館デジタルコレクション）を見ると、「源　由義　関戸」は三十七丁「民部省通商司権大佑」項に記載されている。同官員録巻末には手書きで「改正年月日　明治三年六月七日から七月十日の間　佐久間調」とある。明治三年七月十日、太政官宣達によって、従来事実上の合併状態（「民部大蔵省」とも呼称）にあった民部・大蔵両省は分離され、通商司は大蔵省管轄になっている。

(2)岡倉については長野栄俊（二〇一三年）「岡倉天心の父親について」『生誕150年・没後100年記念　岡倉天心展』福井県立美術館　二一七～二一八頁「（二）福井藩探索方として」参照。また、ヴァン・リードについては渡辺礼三（一九八六年）『ハワイの日本人・日系人の歴史　上巻』ハワイ報知社　一五一～一六五頁「ヴァンリード略伝」参照。

参考資料

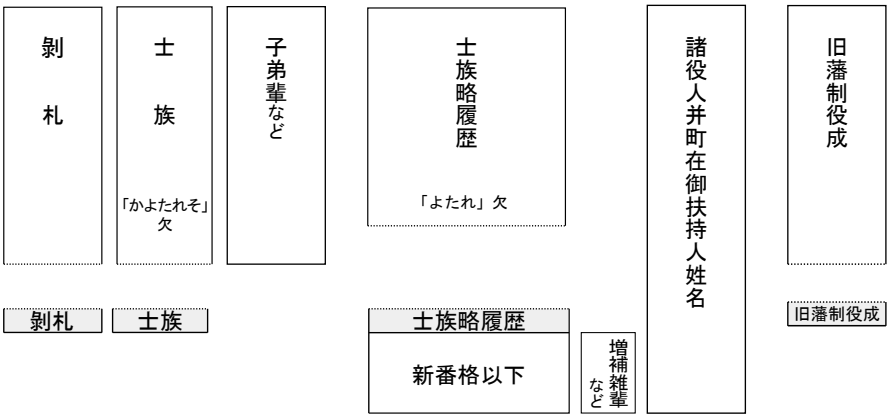
各資料と家格などとの関係

福井藩家臣団の家格別人数

（嘉永５年）

家　　格	人　数
本多家	1
高知席	16
高　家	2
寄合席	38
定座番外席	14
番士（役番外	106
番士（大番など	495
新番・新番格	81
医師・絵師など	49
士分合計	802
与力	39
小役人	84
一統目見席	87
小算・坊主・下代	347
諸組（足軽）	1,341
卒合計	1,898
家臣団総計	2,700

・荒子・中間等の小者973名を除く。
・舟澤茂樹氏「福井藩家臣団と藩士の昇進」『福井県地域史研究』創刊号 1970年による。



＊嘉永5年の表にある与力39名は、慶応2年10月22日までに全員が士分として召し出されたため、「剝札」「士族」「士族略履歴」に収載されている。
＊なお、嘉永5年の表に載っていないが、元武生家来（府中本多家家臣。ただし物頭以上）の29名も明治2年11月25日の改革で士分とされたため「剝札」「士族」に収載されている。

「新番格以下」及び「新番格以下増補雑輩」「雑輩之類剝札」に掲載されている家数・人数

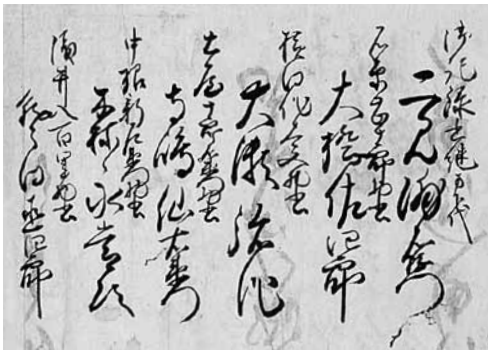
	新番格以下		増補雑輩	剝札
	家数	人数	人数	人数
イ	27	115	30	1
ハ	30	117	12	
ニ	6	31	4	
ホ	7	36	2	
ト	12	56	2	
チ			2	
リ	1	1		
ヲ	35	135	10	
ワ	13	66	3	
カ	19	80	13	1
ヨ	28	104	12	
タ	41	173	13	2
ツ	10	41	7	
ネ	1	3		
ナ	17	78	5	1
ム	9	43	3	
ウ	8	42	8	
ノ	17	67		
ク	10	40		1
ヤ	25	98		2
マ	25	103	14	
ケ			1	
フ	16	64	10	1
コ	11	43	4	2
エ	8	27		
テ	2	8		
ア	16	69	7	
サ	25	109	9	1
キ	8	36	2	
ミ	8	43		1
シ	16	75	6	2
ヒ	6	22	4	
モ	7	28	2	
セ	2	7		
ス	4	17	2	1
合計	470	1977	187	16

・点線は原本の区切り。
・家数・人数のイ～ヨは確定値。タ以下及び新番格以下増補雑輩・雑輩之類剝札は筆耕原稿などによる概数。
・新番格以下増補雑輩・雑輩之類剝札は家として管理されていないので人数のみ。

「書役」について

「新番格以下」１～７、および「雑輩之類剝札」の巻末にはそれぞれ以下の「書役」が記載されている。「新番格以下増補雑輩」には記されていない。

「書役」について詳しくは吉田健「幕末維新期の福井藩人事関係資料（松平文庫）について」『福井藩士履歴１　あ～え』解説を参照。



書役名	「新番格以下」にみえる記事
御記録書継方下代 二見浦右衛門	（弘化四年九月）同月十八日御目付御記録書継方下代被仰付候
石原甚十郎物書 大橋佐四郎	——
横田作太夫物書 大瀬弥作	（元治元）同年六月廿四日昨秋詰中御目付御記録書継被仰付、格別出精相勤候ニ付小寄合格ニ被成下、金五百疋被下置候
土屋十郎右衛門物書 寺嶋仙右衛門	天保六未年御目付大関新五左衛門組江被召抱 同十四卯年物書役被仰付
中根新左衛門物書 森永常次	御目付物書 森永儀兵衛（真柄）と同一人物か？
浅井八百里物書 鷲田直四郎	弘化四未年物書役被仰付 弘化四未年十月十九日江戸詰之処御呼返し、浅井八百里物書役被仰付

福井藩士履歴　9　新番格以下2　ヲ～ヨ
福井県文書館資料叢書17

令和三年三月十二日　発行
編集発行　福井県文書館
九一八－八一一三
福井県福井市下馬町五一－一一
電話〇七七六－三三－八八九〇

印　刷　創文堂印刷株式会社
九一八－八一三二
福井県福井市問屋町一－七
電話〇七七六－二二－一三二三（代）